

別府大学大学院 博士（文学）学位論文

2009年度

話し手の意図と言語表現に関する研究
——依頼表現を中心に——

日本語・日本文学専攻後期課程

楊 慧芳

別府大学大学院 文学研究科

目次

第1章 序論	1
1. はじめに	1
1.1. 問題提起	1
1.2. 研究の目的	2
2. 先行研究	2
2.1. 依頼表現の構文論的研究	2
2.2. 依頼表現の語用論的研究	3
3. 研究の対象	5
4. 研究の方法	6
5. 本研究の構成と内容	8
第2章 依頼形式の構文論による分類	11
1. 授受動詞による依頼形式	11
1.1. 「くれる」による依頼形式	11
1.1.1. 本動詞	11
1.1.2. 補助動詞	12
1.1.3. 複合述語	15
1.2. 「くださる」による依頼形式	15
1.2.1. 本動詞	15
1.2.2. 補助動詞	17
1.2.3. 複合述語	19
1.3. 「もらう」による依頼形式	20
1.3.1. 本動詞	20
1.3.2. 補助動詞	21
1.3.3. 複合述語	23
1.4. 「いただく」による依頼形式	23
1.4.1. 本動詞	23
1.4.2. 補助動詞	25
1.4.3. 複合述語	27
1.5. 「ちょうだいする」による依頼形式	27
1.5.1. 「ちょうだい」「ちょうだいする」	27
1.5.2. 「してちょうだい」	28
1.6. まとめ	28
2. 依頼動詞による依頼形式	30
2.1. 「願う」による依頼形式	30
2.1.1. 語彙的な用法	30
2.1.2. 名詞の用法	33
2.1.3. 文法的な用法	34
2.2. 「頼む」による依頼形式	34
2.2.1. 語彙的な用法	35
2.2.2. 名詞の用法	35
2.3. まとめ	36
3. 動詞のテ形による依頼形式	36
3.1. 「して」系による依頼形式	37
3.2. 「しないで」系による依頼形式	38
4. 希望の助動詞による依頼形式	38

4.1. 「したい」による依頼形式	38
4.2. 「してほしい」による依頼形式	41
5. 構文論による分類の問題点	42
第3章 依頼表現の新しい分類の提案	43
1. 話し手の意図と依頼表現	43
2. 依頼表現の4分類	43
2.1. 命令的依頼表現	45
2.2. 質問的依頼表現	46
2.3. 要望的依頼表現の表出型	47
2.4. 意志的依頼表現	48
3. 依頼表現の発想モデル	49
3.1. 依頼表現の表出	51
3.2. 依頼表現の前置き	52
3.3. 依頼表現の念押し	53
4. 依頼表現の語用論的条件	55
4.1. 性別や役割による差異	55
4.1.1. 性差の減少と表現効果	55
4.1.2. 役割による影響	58
4.2. 対人関係と依頼内容	59
4.3. 丁寧さと思いやり	61
4.4. 第三者に対する配慮	62
第4章 命令的依頼表現の構造と機能	65
1. 命令的依頼表現と命令表現	65
2. なわばり意識に関わる先行研究	66
2.1. 佐久間(1966)の「なわばり」	66
2.2. 神尾(1990)の「情報のなわ張り理論」	66
2.3. 「なわばり意識」と「情報のなわ張り理論」との差異	67
3. 「してください」系の構造と機能	67
3.1. 従来の研究	70
3.2. 話し手と聞き手	70
3.2.1. 対人関係	70
3.2.2. 依頼主と動作主	73
3.3. 「してください」となわばり意識	76
3.3.1. 「してください」と話し手のなわばり意識	76
3.3.2. 「してください」と聞き手のなわばり意識	80
3.4. 聞き手の言動に対する応答	82
3.4.1. 積極的な賛成を表す場合	82
3.4.2. 反対の意味を表す場合	83
3.4.2.1. 動詞の意味が否定である場合	83
3.4.2.2. 「しないでください」と「しないようにしてください」	83
3.4.3. 直接に反対しない場合	86
3.5. 尊敬語の用法	87
3.5.1. 「してくださいまし／ませ」	87
3.5.2. 「お／ご～ください」	88
3.5.3. 「お／ご～になってください」	89
3.6. 終助詞による表現効果	90
3.6.1. 「よ」の押し付け	90

3.6.2. 「ね」の期待と配慮	93
3.6.3. 「な」の勧めと懇願	96
3.6.4. 「な」「よ」「ね」の比較	97
3.7. 副詞による表現効果	98
3.7.1. 「どうぞ」の勧めと改まった感じ	99
3.7.2. 「どうか」のへりくだった感じ	101
3.7.3. 「ぜひ」の実現必要性	102
3.7.4. 「ちょっと」「少し」の配慮	104
4. 「してくれ」系の構造と機能	107
4.1. 従来の研究	107
4.2. 話し手と聞き手との関係	108
4.3. 「してくれ」系の構造と機能	110
4.4. 利益と負担	115
4.5. 終助詞と副詞による表現効果	117
4.5.1. 「してくれ」「しておくれ」につく終助詞	117
4.5.2. 「してくれ」と共起する副詞	119
5. 「してちょうだい」系の構造と機能	120
5.1. 「ちょうだい」「してちょうだい」の構造と機能	120
5.2. 「してちょうだい」による修辞法	122
6. 動詞テ形による依頼文の構造と機能	125
6.1. 話し手の対人関係	126
6.2. 文の意味と話し手の意図	126
6.3. 「して」となわばり意識	127
6.4. 性別による使い方の差異	128
6.5. 「おいで」「ごらん」の機能	129
7. その他	130
7.1. 「お+〈動詞の連用形〉」による依頼表現の機能	130
7.2. 尊敬語動詞の命令形による依頼表現の機能	131
8. まとめ	132
第5章 質問的依頼表現の意味・機能	135
1. 質問的依頼表現の範囲	135
1.1. 疑問文と質問的依頼文との関連	136
1.2. 擬似質問的依頼文	137
2. 「くれる」「してくれる」の意味・機能	139
2.1. 聞き手のなわばり意識に侵入する	139
2.2. 片寄りという傾向	141
2.3. 遠慮表現	143
2.3.1. 直接表現回避	143
2.3.2. 断定回避	144
2.3.3. 謝罪・慰め・配慮の意志表明	145
2.3.4. 「少し」「ちょっと」の表現効果	146
3. 「してくださる」の意味・機能	148
4. 「してもらえる」の意味・機能	150
5. 「していただける」の意味・機能	152
5.1. 遠慮表現	152
5.2. 敬意と距離	154
6. まとめ	155

第6章 意志的依頼表現の意味・機能	157
1. 勧誘文と意志的依頼文	157
2. 「もらおう」「してもらおう」の機能	160
2.1. 相手を特定する話者中心の意志伝達	160
2.2. メタファーとアドホック	162
2.3. 強い意志を和らげる手段	162
3. 「していただく」による話者中心と心的距離	164
4. 「頼もう」「願おう」「お願いしよう」の機能	165
4.1. 相手を特定しない話者中心の意志伝達	165
4.2. 依頼性の位置付け	166
5. 「してもらおう」と「してもらいたい」との比較	168
6. まとめ	170
第7章 要望的依頼表現の意味・機能	171
1. 要望的依頼表現の範疇	171
2. 表出型の意味・機能	172
2.1. 「したい」の機能	172
2.1.1. コンテキストによる相手の特定	172
2.1.2. 依頼の動機と理由	174
2.2. 「してほしい」による消極性	176
2.3. 「してもらいたい」「していただきたい」の機能	178
2.3.1. 話者中心の希望伝達	178
2.3.2. 丁寧さの表現	180
2.3.3. 不確定の希望伝達	181
2.3.4. 依頼性の補強	182
2.4. 依頼動詞による表出型	183
2.4.1. 「願う」「お願いする」「頼む」の構造と機能	183
2.4.2. 「依頼動詞+たい」の構造	187
3. 前置き型の意味・機能	188
3.1. 予告の機能	188
3.2. 前置き型のストラテジー	191
4. 念押し型の意味・機能	195
4.1. 「お願いする」系による念押し型	195
4.2. 「頼む」系による念押し型	200
5. まとめ	201
第8章 婉曲的依頼表現の機能とストラテジー	203
1. 婉曲的依頼表現とは	203
2. 間接的言語行為に関する分析	204
3. 婉曲的依頼表現の分類とストラテジー	206
3.1. 可能動詞による婉曲的依頼表現	206
3.2. 動詞疑問文による婉曲的依頼表現	208
3.3. 提案の形による婉曲的依頼表現	209
3.4. 許可求めの形による婉曲的依頼表現	210
3.5. 複合述語文による婉曲的依頼表現	212
3.6. 迂言的依頼表現	214
第9章 話し手の意図と言語表現	217
1. 発語内行為の伝達プロセス	217

2. 話し手の意図と依頼表現	217
2.1. 依頼表現の発想モデルと5分類	217
2.2. 各類型の形式機能とストラテジー	219
2.2.1. 命令的依頼表現の構造と形式機能	219
2.2.2. 質問的依頼表現の構造と形式機能	221
2.2.3. 意志的依頼表現の構造と形式機能	222
2.2.4. 要望的依頼表現の構造と形式機能	223
2.2.5. 婉曲的依頼表現のストラテジー	225
3. 依頼表現の流動性と連続性	226
3.1. 流動性	227
3.2. 連続性	229
4. 今後の課題	231
用例出典と略記	233
参考文献	236

第1章 序論

1. はじめに

1.1. 問題提起

Searle (1986 : p. 2) は、言語行為 (speech acts, linguistic acts, language acts) という概念を提案して、話し手の意図と言語表現の関係を解明しようとしている。Searle (1986 : p. 44) が説いている「完全な文」は、一語文に限られているものが多い¹。しかし、依頼表現を対象として話し手がどのように聞き手に自身の意図を伝達するのかを考察すると、一語文のみではなく、複数の文を用いて1つの意図を伝達する場合がよくあることが分かる。

- (1) 「五一一号室なんですが、患者の在室を確認させていただきますか」
「それは……」看護婦が言葉に詰まる。
「起こしません。のぞくだけです」
「でも、ナースコールがあったのならともかく……」
「じゃあ、看護婦さんがそっとドアを開けて在室を確認してください。重要なことなんです。お願いします」看護婦は口を真一文字にしてうつむいていたが、しばらく間をおいてから「わかりました」とうなずいた。(邪魔-上 : p. 232)
刑事→看護婦²
- (2) 「それで、僕の推定が合っているかどうか、調べてみたいのだ。一つ協力して欲しいが」
太市がいうと、新六はうなずいた。
「ええとも。是非やらせてくれ。わしの方が手が空いている」
「有難う」と太市は礼をいった。
「それじゃ、君は十日の夜、あの岸壁の沖にいた貨物船と汽船は何処の船で、誰にチャーターされたか調べてくれ。汽船といっても、小さなランチ程度だ」
「オーケー。そんなことは訳が無い。どうせ近所の船だろうから、この市の汽船会社を調べれば、訳は無い。もう無いか？」
「では、もう一つ頼む。山下があ晩、南課長と料理屋でめしを食っているな。たしか山下の送別会だった。そのとき、宴会は何時に済んだか。それはその時刻に済む予定だったか。南課長はどの程度に酔っていたか。それも調べて貰いたいな」
「わかった。あの宴会のあった料理屋なら、わしも知っているから気易くいつてくれるだろう」
「じゃ、たのみます。僕は別な方面を調べてみるから」
二人は一しょに陽道新報社を出て別れた。(張込み : p. 367-368)
男性社員→先輩

用例 (1) の場合、依頼表現は「させていただきますか」「してください」「お願いします」の3つがあり、1つの意図(「在室を確認すること」)を完成させている。それに対して、用例 (2) の場合、依頼表現は「してほしい」「してくれ」「頼む」「してもらいたい」「たのみます」の5つがあり、2つの意図を完成させている。1つ目は「十日の夜、あの岸壁の沖にいた貨物船と汽船は何処の船で、誰にチャーターされたか調べること」である。2つ目は「そのとき、宴会は何時に済んだか。それはその時刻に済む予定だったか。南課長はどの程度に酔っていたか。それも調べること」である。

話し手は一文、または複数の文を用いて聞き手に1つの依頼の意図を伝達するという表現

¹ 例えば、①Sam smokes habitually. (サムは習慣的に喫煙する) ②Does Sam smoke habitually? (サムは習慣的に喫煙するか) ③Sam, smoke habitually! (サムよ、習慣的に喫煙せよ) ④Would that Sam smoked habitually. (サムが習慣的に喫煙してくれたらなあ) Searle (1986 : p. 39-44)

² 実線で示される依頼文における話し手対聞き手である。

を、「一貫性 (coherence) のある依頼表現」と呼ぶことにする。一貫性のある依頼表現によって行われる行為は、「一貫性のある依頼行為」と呼ぶことにする。児玉 (2004 : p. 90) は、「一貫性は意味的なつながりを示す。一貫性は非言語的な現実世界での経験・知識などを利用しながら意味上談話にまとまりをもたせる」と論述している。用例 (1) (2) の話し手は、聞き手との関係、依頼内容、場面などに応じて、まとまりを持たせる一貫性のある依頼表現を用いるのである。

また、用例 (2) 「一つ協力してほしい」「頼む」は同じく依頼表現に属するが、他の説明や依頼表現と共に用いられれば単独で一貫性のある依頼行為を完成できない。このように、依頼表現は単独で用いられるか、他の説明や表現と共に用いられるか、或いは談話のどの部分に位置付けされるかによって、その機能³が異なる。したがって、話し手はどのように依頼表現を用いて自身の意図を表現するかを明らかにするためには、依頼表現の分類を再検討する必要があると考えられる。

1.2. 研究の目的

本研究の目的は次の通りである。

- ① 一貫性のある依頼行為におけるそれぞれの依頼表現の機能と関連を解明するため、新しい分類を提案する。
- ② 新しい分類によって、各類型における依頼表現の共通の機能、またはストラテジーを抽出する。
- ③ 一貫性のある依頼行為における話し手と聞き手との相互作用の中で、話し手は自身の意図をどのように遂行しているかを解明する。

依頼表現についての先行研究の多くは、一文に表現される依頼表現を分析している。一貫性のある依頼表現についての分析はあまりない。一貫性のある依頼表現を分析するためには、新しい分類を提案する必要がある。更に、新しい分類によって、各類型における依頼表現の共通の機能、またはストラテジーを抽出する必要がある。これらを達成することによって、話し手がどのように依頼表現を用いて聞き手に自身の意図を認識させるかが解明できる。

2. 先行研究

2.1. 依頼表現の構文論的研究

構文論における依頼表現の分類は、次の通りである。

表1 構文論における従来の分類

先行研究	類型	依頼形式
国立国語研究所 (1960 : p. 119-126)	積極的行為要求の表現	動詞の命令形、「してください」「してくれ」「してごらんない」「しなさい」「してちょうだい」、動詞テ形、「お+<動詞連用形>」など
	消極的行為要求の表現	「しましょう」「していただきます」「どうですか」「いかがですか」「してくれますか」「してもらえますか」「していただけますか」「しな

³ 機能とは、その形式の文中における働きのことである。高橋 (1975) の動詞の機能に対する定義を参照して定義した。高橋 (1975 : p. 11) は、動詞の機能について「その単語の文中におけるはたらきのことである」と定義している。

		いか」「お+＜連用形＞+ねがいます」「していただきたい」「してもらいたい」「おねがいます」など
上野 (1983 : p. 45-53)	直接的な命令のかたち	動詞の命令形と「～なさい」「お～なさい」「お～ください」
	直接的な依頼のかたち	「～てくれ」「～ないでくれ」「～てください」「～ないでください」「～てくださいませんか」「～てくださいませんか」「～していただけませんか」「～していただけませんか」
	間接的な命令依頼のかたち	文形式としては字面通りの疑問や平叙の文意を伝達するが、その機能としては、間接的に依頼や命令を表わす役割を果たすもの
益岡・田窪 (1989 : p. 107-108)	直接依頼形式	「～て」「～てくれ」「～て下さい」「～てちょうだい」「～てくれるか」「～てくれないか」「～てくれませんか」「～てもらえるか」「～てもらえますか」「～てもらえませんか」など
	間接依頼形式	「～てほしい」「～てもらいたい」「～てほしいんだけど」「～てくれると助かる」「～てくれるといいんだが」「～てくれるとありがたいんだけど」など

「依頼形」がないこと⁴から、依頼表現は命令表現に併せて分析する研究がよく見られる。例えば、国立国語研究所（1960）は依頼・命令表現を「命令的表現」と名づけ、「積極的の行為要求の表現」と「消極的の行為要求の表現」に分けている。上野（1983）は命令のかたちと依頼のかたちに分けている。上野の挙げている例を検討すると、「どうぞ、手をお上げください」を命令のかたちに、「窓を開けてください」を依頼のかたちに分類していることが分かる。小泉（1990 : p. 262）は「どうぞ」が依頼文を識別するテストとして役立つことになると指摘している。「お～ください」は「どうぞ」との共起によって、相手に命令する意味がやや薄くなって、依頼の意味が増えると考えられる。したがって、上野（1983）が「お～ください」を直接的な命令のかたちに、「～てください」を直接的な依頼のかたちに分類している基準は、研究者によって異なる。

一方、益岡・田窪（1989）は動詞の命令形と「～なさい」「お～なさい」を排除して、依頼形式のみを扱っている。益岡・田窪（1989）は、国立国語研究所（1960）・上野（1983）と分類の範疇と類型の名前が異なる。話し手が聞き手に直接に依頼を持ち出す場合に使われているものを「直接依頼形式」に、話し手が自身の希望を述べて間接に聞き手に依頼の意図を察させる場合に使われているものを「間接依頼形式」に分けている。

国立国語研究所（1960）の消極的・積極的表現、または上野（1983）・益岡・田窪（1989）の直接的・間接的形式という二分法は、用例（1）（2）のように複数の依頼表現が使われている会話文における各依頼表現の関連を説明することができない。そこで、新しい分類を提案する必要があると考えられる。

2.2. 依頼表現の語用論的研究

Austin（1978）は「発語内の力」（illocutionary forces）という理論を提出して、すべての発話を判定宣告型（Verdictives）、権限行使型（Exercitives）、行為拘束型（Commissives）、

⁴ 高橋は「して」「してください」（1974）、「してくれ」（1975）を「依頼形」として提案している。しかし、語形の変化による活用形ではないことから、「依頼形」という用語はまだ定着されていない。

態度表明型 (Behabitives)、言明解説型 (Expositives) 五種類に分類している。「権限行使型」の下位グループで命令の発語内行為 (illocutionary act)⁵が言及されているが、依頼については一言も触れていない。またSearle (1986 : p. 124) はAustinの分類を批判しながら、依頼表現を指令型 (directives) の下位分類にして、自身の理論を次のように主張している。

規則の種類：依頼 (Request)

命題内容規則：H⁶による将来の行為A

事前規則：1、HはAをする能力を持つ。SはHがAをする能力を持つと信じる。

2、SとHの両者にとって、通常の事態の進行においてHがAすることは自明ではない。

誠実性規則：Sは、HがAすることを欲する。

本質規則：HにAをさせる試みとして見なす。

備考：命令 (order, command) はさらに、SがHに対して権威のある地位にいるという事前規則を持っている。また、command は、聞き手の行動が自明ではないという「語用論的な」条件をおそらくはもっていない。さらにまた、命令においては、Hに対してSの権威が優越するということによって、HにAを行なわせるということとしてその発語が見なされるゆえに、この権威をもつという関係は本質規則に影響を与える。

「命題内容規則」「事前規則」「誠実性規則」「本質規則」は、確かに依頼表現における不可欠な規則である。しかし、Searleの依頼の規則は日本語の依頼表現のみではなく、「働きかけ文」⁷という範疇にも対応できると考えられる。

また、Leech (1986 : p. 123) は、例を挙げながら、依頼・命令文を次のように分析している。

たとえば、(sがhに対して何ら権威を持っていない場合) われわれは要請を取り扱っているのであり、また (権威を持っている場合) 命令を取り扱っているのかどうかを決めるのは常に可能なのだろうか、たとえば、次のものの間のどこに線を引くのか、

1. Sit down. (座りなさい。)
2. Will you sit down! (お座り下さい。)
3. Please sit down. (どうぞお座り下さい。)
4. Why don't you sit down? (座ったらどうですか。)
5. Would you kindly sit down? (どうぞお座りになって下さいませんか。) 等。

無論どこにも線を引くことはできない。なぜなら、権威というものは (社会的なもののみならず) 心理的なもののみならず、絶対的というよりはむしろ相対的な事柄だからである。

Leech が説いている「権威というものは、絶対的というよりはむしろ相対的な事柄だ」は、依頼表現における話し手と聞き手との関係を判明する重要な基準であると考えられる。

鈴木 (1987) はSearle (1986) の規則とGrice (1998) の「協調の原理」(Cooperative Principle) に依拠して、日本語の依頼行為を説明している。文字通りに解釈することと異なる発話行為を遂行するという「間接発話行為」(indirect speech act) について、鈴木 (1987) はSearleの分析が日本語に当てはめられないと指摘している。鈴木 (1987 : p. 42) は「日本語では直

⁵ 発語内行為は、陳述、質疑、命令、約束などを行なうことである。Searle (1986 : p. 41) を参照。

⁶ Hは聞き手、Sは話し手、Aは話し手が聞き手に依頼する行為である。

⁷ 寺村 (1982)、仁田 (1991) などを参照。「働きかけ」とは、話し手が相手たる聞き手に話し手自らの要求の実現を働きかけ訴えかけるといった発話・伝達の態度を表したものである。「命令」「依頼」「禁止」「誘いかけ」を含める。(仁田 1991 : p. 24)

接聞き手の意志や能力に言及することは失礼であるという考えがある」からであると主張している。例えば、「Can you open the window?」を日本語に訳せば、「*（あなたは）窓が開けられますか」⁸「*（あなたは）窓を開けますか」になって、不適切である。

小泉（1990）は日本語の命令・依頼文を英語の命令・依頼文と対照して、「I order/request you to open the window.（私はあなたに、窓を開けるように、命じる／お願いする）」を直接の〈命令もしくは依頼〉行為に、依頼動詞⁹のない依頼表現を間接発話行為に分類している。小泉（1990 : p. 261-267）は、間接依頼表現に授受動詞「くれる」「もらう」の敬語体「下さる」「いただく」を含むのが普通であり、丁寧さがこうした間接的表現を派生させる根源であると指摘している。

- a. 窓を開けて下さい。
- b. 窓を開けて下さいますか。
- c. 窓を開けていただきたい。
- d. 窓を開けていただければありがたい（のですが）。

要するに、小泉は依頼動詞や丁寧さの有無により、命令・依頼表現を直接と間接とに分類している。これに対して、宮地（1995）はコミュニケーションの観点から依頼表現を「消極的な行為要求を意味する」と定義して、希望・願望と重なる意味を持つ依頼形式から一般的依頼形式まで論じている。また山岡（2008）は「発話機能論」¹⁰と発話機能のメンバーとして《報告要求》《報告》《意志要求》《意志表明》《依頼》《協力》《感謝》などの「文機能」を提案している。山岡（2008 : p. 4）によると、文機能は、文末のモダリティ形式ではなく、命題内容条件群の束によって規定される文の機能を指す。この文機能に、発話の文脈や発話参与者（話者・聴者）の人間関係など語用論的条件を加味したものが、発話機能であると述べている。このように、山岡は命題内容などによって文機能と発話機能の関係を解明している。しかし、山岡の分析はやはり一文に限られるものが多く、複数の依頼表現が使われている依頼文における各依頼表現の関連を説明することができない。

3. 研究の対象

研究の対象は、主に1965年から2009年まで出版された176冊の現代小説の中にある会話文（登場人物のやりとりと地の文を含めるもの）である。現代小説の各作家の意図によって作られた会話文は、日常生活の中での生会話と異なっている。しかし、水谷（1985 : p. 12）は「伝達的手段だけで話しことばと書きことばを分けることはできない。音声を伝達手段とするものでも、ラジオのニュースなどは書きことば的要素が強く、書いたものでも個人的な手紙などには話しことば的要素が強い」と指摘している。現代小説での登場人物の会話は、水谷（1985 : p. 12）が述べているように、「特定の相手に対し、特定の場面で話すことば」と

⁸ 「*」は非文を指す。鈴木（1987 : p. 41-42）

⁹ Austin（1978）は、「願う」「頼む」「求める」「依頼する」「要請する」「要求する」「懇願する」などを「遂行動詞」（performative verb）と呼んでいる。本研究では国立国語研究所（2004 : p. 303）の「請求・依頼」の項目に依拠して、「依頼動詞」と呼ぶことにする。

¹⁰ 発話機能とは、「話者がある発話を行う際に、その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念化したもの」ということになる。山岡（2008 : p. 2）

いう特徴を有する。この特徴は、「話し手が発話時点に特定の相手に対し、特定の場面で何かを依頼する」という本研究に扱われている依頼表現の定義に相応することから、研究の対象として用いる。また、現代小説では各作家が様々な依頼表現に対応する場面や人間関係を設定している。その場面や人間関係の多様さは、依頼表現を研究する場合不可欠な要素である。したがって、小説の中で依頼表現が使われている部分を抜き出して依頼表現用例集を作成して分析の対象とした。

依頼表現に関わる構文論的研究であれ、語用論的研究であれ、多くは一文に表現される依頼表現を分析している。しかしながら、次の例に示すように一貫性のある会話として理解しないと誤解してしまう可能性がある。

- (3) 「おいこら、特命係の亀山、なんでおまえがここにいるんだよ」
一課の伊丹憲一が不倶戴天の敵の姿を見つけて吠えた。
「あれ、呼んだ？」
薫はあえて陽気に応じた。
「ふざけんな。どうやって、ここまで来た？」
「車でだよ。だって、桜田門からここまで歩いて来られる距離じゃないだろう」
伊丹は忌々しげに舌打ちし、「そんなことを訊いてんじゃないんだよ。どっから連絡を受けたんだ？」
「天の声、ってところかな」(相棒-1 : p. 162)
男性刑事→同僚 (男性刑事)

「どうやって、ここまで来た？」という質問には2つの意味が示される。1つ目は文字通りに表現されている意味である。つまり「どの交通手段によってここまで来たのか教えてください」である。2つ目は「どっから連絡を受けたんだ？」という話し手の発話によって、「どこから連絡を受けたのか教えてください」の意味であることが分かった。つまり話し手が聞きたいのは1つ目の意味ではなく、2つ目の意味である。しかし、聞き手は故意に1つ目の意味に解釈して話し手の質問に応じないのである。このように、一文のみを分析すれば、発話者の意図が誤解されたり、理解できなかつたりする可能性がある。したがって、本研究では、話し手が依頼の意図を表明しようとする時点から一貫性のある依頼行為を完成する時点までの依頼表現を分析する。そのため、少し長く用例を引用することもある。ただし、小説などでは、地の文で記述されることがある話し手の音調や身振り、態度などは、本研究の対象外にする。

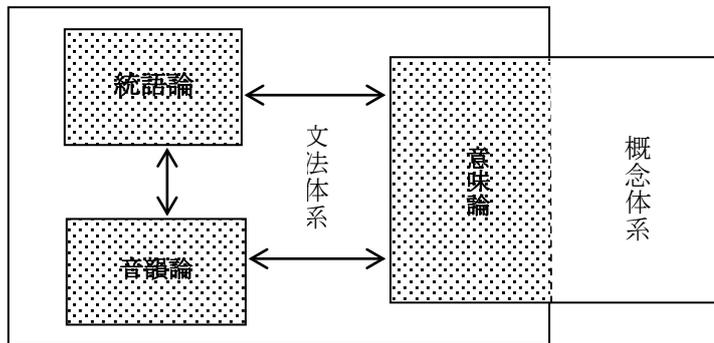
4. 研究の方法

Thomas (1998)、滝浦 (2008) などの研究者に指摘されているが、表現対象と表現形式の関係は、決して一対一ではない。一方、児玉 (2004 : p. 76) は、「形式は意味と無関係に存在するものではなく、むしろ意味を実現するために存在している」と主張している。本研究は児玉 (2004) の主張に賛同し、依頼表現を分析する場合、依頼形式を取り入れた。

中右 (1994 : p. 6) は普遍文法 (universal grammar) ¹¹を論じる際、「音韻論と意味論を両

¹¹ 普遍文法は、言語表現の音声と意味を表示するための、個別言語から独立した一般的な表示の仕方を整えるものでなければならない。普遍文法とは、要するに、すべての人間言語の文法が充足しなければならない条件の体系である。中右 (1994 : p. 5)

極とし、その連結媒体に統語論を擁する三位一体の図式を構成する」と述べている。普遍文法の基本構図を次のように示している。



統語論 (syntacticsまたはsyntax)¹²と音韻論と意味論の関係について、中右 (1994 : p. 6) は「統語論と音韻論が言語の形式的側面を分担するのに対し、意味論が言語の内容的側面を分担している。ただし、ここで意味論とは、いわゆる語用論 (pragmatics) をも含む広義の意味論を指している」と説明している。音韻論は本研究の対象外にするが、統語論から依頼文の従属節と主節¹³を論じる。統語論からの分析のみではなく、語用論からも各依頼表現の意味・機能や話し手の聞き手に対する働きかけ性 (便宜上、本研究は「依頼性」と呼ぶことにする) を分析する。

語用論の定義については、Levinson (1990 : p. 23) は「語用論は、言語理解にとって基本的な言語と文脈の関係の研究」であり、「語用論は、言語使用者の、文とそれにふさわしい文脈とを組み合わせる能力に関する研究」(p. 27) であると主張している。しかし、話し手の意図とそれが表現される文との関係については言及されていない。国立国語研究所 (1960 : p. 4) は、話し言葉を対象にして、話し手の表現意図¹⁴とそれが表われる文表現との関係进行分析して、次のように分類している。

- A 相手に対して、あらたに何かを表現しようとする意図
 - a 相手に対して求めるところのない表現意図
 - ① 詠嘆表現
 - ② 判叙表現 (判断既定の表現、判断未定の表現)
 - a' 相手に対して求めるところのある表現意図
 - ③ 要求表現 (質問的表現、命令的表現)
- B 相手のことばに対して、何かを表現しようとする意図
 - b 相手に対する受容対応の表現
 - ④ 応答表現

要するに、話し手の表現意図は文表現を分析する場合、最も重要な条件である。したがって、本研究では「語用論は、言語使用者の意図とそれが表現されている文との関係を解明す

¹² 統語論の定義について、C. W. Morris (1901-1979) が説いている「記号相互間の形式的結合関係」を研究する論説にする。Levinson (1990 : p. 1) からの再収録である。
¹³ 「従属節」とは、主節に対して従属的な関係で結びつくものをいう。「主節」は文末の述語を中心とした節であり、文全体をまとめる働きをする。益岡・田窪 (1989 : p. 5)
¹⁴ 表現意図とは、言語主体が文全体にこめるところの、いわゆる命令・質問・叙述・応答などの内容のことである。国立国語研究所 (1960 : p. 4)

ることに関する研究である」と定義する。

依頼の文表現について、宮地（1995：p.8）は次のように論述している。

依頼表現では、（というより依頼表現においても）待遇・受給・意志・疑問否定・可能などのいくつかの範疇的な意味と形式とが、しばしばかかわって文表現を多様多彩なものとする事ができるということであり、その微妙な使い分けは、言語的ベクトルにもとづく分類の下位分類を求めることにもなるし、現実のコミュニケーションのためにも、有用なものとなろう。それは当然、聞き手・受け手の理解・了解と応答のありかたにもかかわることである。

この主張は語用論から依頼表現の形式・意味・機能を研究すべきであると示唆している、と考えられる。

5. 本研究の構成と内容

本研究の構成は、第1章は序論であり、第2章は先行研究の要約である。第3章は新しい分類の提案であり、第4章から第8章までは、提案の5分類についての研究である。第9章は話し手の意図と依頼表現との関係である。

各章の詳しい内容は、次の通りである。

第1章 序論

研究の目的、先行研究、研究の対象と方法などを論じる。

第2章 構文論による依頼形式の分類

先行研究を参照し、形式によってよく使われる依頼表現を要約する。

第3章 依頼表現の新しい分類の提案

依頼表現の発想モデルを提案する。発想モデルによって依頼表現を分類する。また、依頼表現に関わる語用論的条件を論じる。

第4章 命令的依頼表現の構造と機能

「してください」「してくれ」「してちょうだい」、動詞テ形による依頼表現、「お＋〈動詞の連用形〉」による依頼表現、尊敬語の命令形による依頼表現を中心として、それぞれの構造と機能を解明する。

第5章 質問的依頼表現の意味・機能

「してくれる」「してくださる」「してもらえる」「していただける」の意味・機能を解明する。

第6章 意志的依頼表現の意味・機能

「してもらおう」「していただく」、及び「願おう」「お願いしよう」「頼もう」の意味・機能を解明する。

第7章 要望的依頼表現の意味・機能

要望的依頼表現を更に表出型・前置き型・念押し型に分け、それぞれの機能を解明する。

第8章 婉曲的依頼表現の機能とストラテジー

依頼形式の有無によって更に2類型に分け、それぞれの実行のストラテジーを解明する。

第9章 話し手の意図と言語表現

一貫性のある依頼行為において、話し手がどのように5分類に属する依頼表現を用いて聞き手に自身の意図を理解させるか、を明らかにする。

第2章 依頼形式の構文論による分類

依頼表現の形式（以下「依頼形式」と略称する）を構文論によって分類すると、次の4類型に分類できる。

1. 授受動詞による依頼形式
2. 依頼動詞による依頼形式
3. 動詞のテ形による依頼形式
4. 希望の助動詞による依頼形式

1. 授受動詞による依頼形式

授受動詞で「やる」系は話し手から聞き手や第三者に物事を与えており、依頼表現の誠実性規則（「Sは、HがAをすることを欲する」Searle1986）に合わず、依頼形式に属さない。「くれる」系と「もらう」系（以下「系」を省略する）は依頼表現の誠実性規則に合って、依頼表現に属する。小泉（1990：p. 151）は、「くれる」は二人称が一人称に、または三人称が二人称にものを与えることであり、「もらう」は一人称が二人称に、二人称が三人称に、あるいは三人称が二人称に、三人称が三人称にものを受け取ることである、と分析している。本研究で授受動詞による依頼形式は、二人称が一人称に何か与える「くれる」とその補助動詞「してくれる」、一人称が二人称に何か受け取る「もらう」とその補助動詞「してもらう」を指す。また、「くれる」の尊敬語「くださる」、「もらう」の謙譲語「いただく」、「ちょうだいする」とそれぞれの補助動詞も加えて分析する。

1.1. 「くれる」による依頼形式

1.1.1. 本動詞

「くれる」による依頼形式は、本動詞・補助動詞・複合述語に分けられる。まず、本動詞による用例を検討する。

- (4) 「お金くれる？」と美々はいいい、私は思わず美々の膝小僧から下、つまりいちばん痛いスネを蹴っ飛ばしてやった。
単純だから、いうことがあんまり対角線を突っ走って、ミもフタもない。
「そりゃ」とタアちゃんは喜色を浮かべて力強くいった。（言：p. 18-19）
女性→元彼氏
- (5) 「じゃあ、こっちが、依頼人の名を教えたら、それと交換に、情報をくれるかい？」
「差上げるような情報はないわよ。あなた、どうせ調べてしまっているのでしょうか？」（宿：p. 25）
探偵→女将
- (6) 「もらっておくわ。そのかわり、金はいったときでいいから、あと五十万円だけくれない」
「いいだろう。印鑑も抽出のなかにある。印鑑と通帳は銀行に預けておいてくれ」（梅：p. 116-117）
妻→夫
- (7) 村上 それはもちろん嬉しいですよ。だから、たとえば「フィンランド語に訳すんだけど、序文をくれないか」と言われたときに、なるべく忙しくても書くようにしているんですね。
柴田 フィンランドの読者に向けてですね。（翻訳：p. 34）
翻訳者→作家

このように、「くれる(か)?」「くれない(か)?」の用例がある。「くれる?」「くれない?」は男女とも用いるが、「か」のつく「くれるか?」「くれるかい?」「くれるかな?」「くれないか?」などは、普通男性しか使用しない。松下(1930, 1978)、森田(1977)が指摘しているように、「くれる」は二人称の聞き手から一人称の話し手への恩恵性を強調している。依頼内容について、用例(4)(6)に示される具体物、(5)に示される情報、(7)に示される序文の依頼などのように、様々なものがある。丁寧体として「くれます(か)?」「くれませんか(か)?」などの例も見られる。

1.1.2. 補助動詞

- (8) 「おい、ちょっと先へ行ってくれ」
「はあ……ですが、その……」
「ちょっと個人的な用事なんだ」
「はあ、ただ……」(名探:p. 20)
刑事→部下
- (9) 「山本検事。結城に、逮捕状を取ってくれたまえ」
「分かりました」山本検事が声をはずませて答えた。(波-下:p. 245)
主任検事→検事

(8)「ちょっと先へ行ってくれ」も、(9)「結城に、逮捕状を取ってくれたまえ」も、上司の部下に対する発話である。語形変化から考えると、「してくれ」は「してくれる・してくれない・してくれた・してくれれば」のように、活用する語幹「-te kure」の通常の命令形「してくれろ」ではない。尾形(1996)が指摘している通りに、「むしろ丁寧な形式『してください』に対応する非丁寧な形式とも言うべきものであろう」と考えられる。また、「してくれたまえ」は「してくれる」に動詞「たまう」の命令形「たまえ」がつく。この場合、依頼主は男性を中心とする話し手であり、動作主は原則として二人称の聞き手となる。しかしながら、使役動詞や授受動詞の補助動詞の働きにより、動作主は聞き手ではなく、話し手か話題人物である第三者となる例も見られる。

- (10) 「新聞を見せてくれ」今西は寢床から、音の聞こえている台所に声をかけた。
妻が手を拭きながら、新聞を持ってきた。(砂-上:p. 169)
夫→妻
- (11) 「あんた、行きたいところがあるんだろう。そこまで、俺を乗せてくれ」
「私は、一杯やるつもりで出てきたんだがね。事件のことで、喋っても構わないことを聞かせてくれないか。代りに、私が奢る」(約束:p. 41-42)
刑事→会社の社長
- (12) 百川「世間の事は嘘の凝結だネ、僕も最早他人に腰を折って月給に衣食するを好まんから何か自分の事業を遣りたいと思っている、とにかくも山住君に相談してみようか」酒山「ともかくもではいかん、是非必ずも、そこで箱根行の旅費は妻君に懇談して僕の分まで出させてくれたまえ」と唯一の頼みが束髪の妻君(酒:p. 290)
男性→親友

(10)「見せてくれ」、(11)「俺を乗せてくれ」は動作主が話し手である。2例とも聞き手に許可を求める形である。「見せてくれないか」「乗せてくれないか」などの疑問文を用いないことから、聞き手に対して「見せてくれ」「乗せてくれ」などの形式を用いる話し手の強い

依頼性が感じられる。(12)「(旅費を) 出させてくれたまえ」の対象、すなわち動作主は話題人物である聞き手の妻となる。

- (13) 「芳子、佐々木君としばらく相談ごとがあるから、牧さんには午後來て貰ってくれ。留さんでなく、きみが行った方がいい。ここはしばらく用事がないから。」
二人きりになった。どちらもちよっと口を開かなかった。(野上：p. 308-309)
夫→妻
- (14) 笹垣は古賀に、「電話をかけてきた人の連絡先をメモしたら、金庫を見せてもらってくれ」と命じ、靴を脱ぎ始めた。(白夜：p. 60)
刑事→後輩
- (15) 「意味がなくなはないぞ。彼女が自分の証言を警察に提供したがつているのなら、おまえが案内して墨東警察署に連れて行ってやってくれ」
「そこのところは彼女もはっきりしないのよ……。今さらこんなこと言い出しても、警察が相手にしてくれないんじゃないかって思ってるのかな。でも、真面目にとりあってくれるよね？」
「もちろんだ」(模倣-下：p. 484)
父(刑事)→娘
- (16) 鳥飼は、ちらと係長の顔を見た。係長は煙草の煙を吐いて、
「鳥飼君、君がこの前、何か意見を言っていたらう。あれを三原さんに僕がちょっと話したら、たいそう興味を持っておられるようだ。よく話してあげてくれ」と言った。
「そうなんです。佐山の情死に異論をおもちだと係長さんからうけたまわって、たいへんおもしろく思ったものですから、あなたのお帰りを待っていたのです」
三原のまるい目には愛嬌があった。係長は複雑な顔をしている。(点：p. 81)
刑事→部下(ベテランの刑事)

(13)「牧さんには午後來て貰ってくれ」の動作主は、二格による第三者の「牧さん」である。(14)「金庫を見せてもらってくれ」は「(さ)せてもらってくれ」の例で、動作主(金庫を見る人)が聞き手である。また、「してやってくれ」「してあげてくれ」による動作の方向性が、「してくれ」の方向性と同様であり、動作主が聞き手であるが、話し手と聞き手と話題人物である第三者との授受関係がやや複雑となる。(15)「おまえが案内して墨東警察署に連れて行ってやってくれ」は「してやってくれ」の例で、話し手が聞き手(娘)に第三者(彼女)を案内して警察に行ってくるようにと指示している。(16)「よく話してあげてくれ」は「してあげてくれ」の例で、話し手が、第三者(三原さん)に対してこの前の意見をもう一度言ってほしい、と聞き手(鳥飼君)に依頼している。(15)の聞き手は話し手の娘なので、「やる」を用いている。しかし、(16)の聞き手は話し手の部下ではあるが、ベテランの年配者であることから、「あげる」を用いている。

親しくない目上や対等な人に対して、話し手は「してくれ」より敬意の高い「しておくれ」を使用する。京都地域の方言「しておくれやす」も見られる。この場合、「しておくれ」は性差が見られないのに対して、「しておくれやす」は女性がよく使用する。いずれもやや古風な言い方である。

- (17) そして赤い空が薄紫色に変わった頃、手伝いのおじさんたちが引き上げていった。
「なんか必要なものがあつたらいつでも連絡しておくれ。新品というわけにはいかんが、村の中にあるもんならすぐに送るからー」
明るく言って笑っている。母は深々と頭を下げ、父は一人一人と握手した。(サウス-下：p. 38-39)
近所のおじさん→両親
- (18) 「それで、なんにも連絡がなかったら、わたくし、そちらに伺うわ」

「そうしておくれ、ほんとにわたしひとりでは、どうにもならないからね」(山 : p. 135)

母→娘

- (19) 「もしもし、榊原です」

「北大路の原田です」聞き慣れた原田の声だった。

「お忙しいとこ、すんまへんなあ。クニ代さん、いやはりますかいなあ」

「あ、はい、ちょっと待っておくれやす」

原田からだと美津子が告げると、クニ代は安堵した顔をして受話器を取った。(盗り : p. 275-276)

若い主婦→年配の男性

- (20) 「岩田先生、お盃をつがしておくれやす」

「うちも、お酌させておくれやす」(巨塔-1 : p. 95)

芸者たち→開業医

「してくれ」「しておくれ」の否定形として、「しないでくれ」「しないでおくれ」がある。問いかけの「してくれる(か)？」は、「してくれ」「してくれたまえ」より相手の意志を尊重している。

- (21) 「どこにいるんだ？」

「大学。あの——今から来てくれる？」

「もちろんさ」(殺人 : p. 237)

女子大生→彼氏

- (22) 「嫁さんからの話は、そろそろ聞き終わった頃やろ。笹やん、悪いけど、家まで送ってくれるか」

「わかりました」(白夜 : p. 16)

刑事→部下

- (23) 「悪いけどゴミ捨ててくれない」というと、

「はあい」と素直にゴミを集める。

「机の上を拭いて」

「もう雑巾洗っていいよ」(OL : p. 81-82)

会社の女性先輩→女性後輩

- (24) 「四日ほど前に検査を受け第一内科の小西きくの、血清検査票が、まだ外来へ廻ってないそうだが、ちょっと調べてくれないか——」

検査員は、面倒くさそうな顔をしたが、顔を上げ、第一内科の里見助教授であることを知ると、「おかしいですね、とっくに廻っているはずですが——」(巨塔-1 : p. 124)

助教授→検査員

(21)「してくれる？」は男女とも用いるのに対して、(22)のように「か」のつく「してくれるか？」は男性しか使用しない。また、肯定疑問文と同じく「か」のつかない「してくれない？」は男女とも用いるが、「か」のつく「してくれないか？」は男性しか使用しない。

(23)は「してくれない？」、(24)は「してくれないか」の例である。(23)のように「悪いけど」などと共起すれば、更に丁寧になる。

その他、独話の形式として「してくれるかしら」「してくれるかな」「してくれないかしら」「してくれないかな」がある。疑問と確認の意味を含む形式として、「してくれるかね」「してくれないかね」「してくれるね」「してくれないね」「してくれないの」などがある。「してくれないだろうか」の例も見られる。

丁寧体として「してくれます(か)？」「してくれません(か)？」が見られる。打ち消し形式の「してくれません(か)？」は、「してくれます(か)？」より聞き手の立場を配慮す

る表現である。

- (25) 「恐縮ですが、すぐに連れて帰りたいとおもいますので、あれを呼んでくれませんか」
「あら、そうですか。でも、もう汽車が無いでしょう？」(失踪：p. 137)
男性→大家
- (26) 「もう少しまっていてくれませんか。すぐにすみすから」
「俺にかまうことはない。仕事を続けてくれ」昌平は昔と変わらない鷹揚な態度でソファーに腰を下ろした。(愛：p. 5)
男性→昔の親友

(25)「あれを呼んでくれませんか」は「恐縮ですが」と共起している。(26)の話し手が聞き手に「もう少しまっていてくれませんか」と依頼した後、「すぐにすみすから」と聞き手の立場を配慮する話し手の気持ちが伝わる。

1.1.3. 複合述語

「してくれる」の假定形を使用して、話し手は聞き手に自身の依頼を受けられるかどうかという結果に対して、喜びや困るなどの気持ちを表すことによって、聞き手に自身の依頼の意図を感じさせる。

- (27) 「正直何とも言えないんだ。ある程度メドはついているが、確証が持てない。だから、もう少し自分一人で調べてみたいんだ。勝手なことを言うようだが、この事件に関しちゃあまり他人の干渉を受けたくないんでね。友だちのよしみで独断捜査を見逃してくれるとありがたいんだがね」
「勝手にするさ。俺はお前の上司じゃないからな。あれこれ指図はせんよ」(獲物：p. 200)
警部補→同僚の警官
- (28) 「何もしやせんからよ。ちょっと付き合ってくればいいんじゃない」
「いやです」(先生：p. 182)
不良の若い男→女の子
- (29) 「君のように、そうまともに謝られてしまうと、こちらの出ようがないよ、ともかく、どんな小さなことでも、第一外科の診療に関することで、外部と関連のあることは、すべて僕に相談してきめて貰いたい、何しろ、僕は、君を次期教授にと内々、思っているのだから、その点、大いに自重してくれなくては困る——」(巨塔-1：p. 20, 21)
教授→助教授
- (30) 「何かあるなら言ってくれなきゃ困るじゃないか」
まあまあ、と村野は市川がよくやるように、相手の胸をちょっと押さえた。薄い生地を通して、市川のごつごつした胸骨に触れた。市川が不快げに振り払ったが、村野は気にしなかった。
「実は市川さんと別れてから思い出したんですが、神田駅で変な男と擦れ違ったんです。乗り遅れまいとホームを走って行く途中で擦れ違っただけなんです、肩がぶつかったのに振り向きもしなかった」(灰：p. 131-132)
刑事→雑誌の編集者

「してくれるとありがたい」「してくれればいい」は話し手の感謝の気持ちを示しているのに対して、「してくれなくては困る」「してくれなきゃ困る」は聞き手に依頼を断られると話し手の困る気持ちを表している。

1.2. 「くださる」による依頼形式

1.2.1. 本動詞

「くださる」は「くれる」の尊敬語で、親しくない上位者や対等人によく使用する。「ください」は「くださる」の命令形で、聞き手にものを要求する場合、(31) (32) のように命令表現として使われている。

(31) プレミア付きだということで、Tシャツなのに四万円もした。

「これください」と私が言ったときの、店員や、周りにいた客の男の子たちのキョトンとした顔、思いだすと笑ってしまう。(スペース：p. 8)

女性客→店員

(32) 友彦はテーブルの上のメニューには手を伸ばさず、「コーヒーをください」といった。(白夜：p. 136)

男性客→喫茶店のマスター

しかし、ヲ格の目的語が具体物ではなくて、運動・状態などを表す抽象名詞（主に漢語名詞）である場合、「ください」の機能は具体物の授受から依頼行為の要請となる。したがって、「ください」は依頼表現に属する。

(33) 「そんなことをいわれる覚えは全くありません。そういう卑劣なことをする人にも心当たりはありません」

「そうですか」加賀は頷いた。「ではもし何かありましたら、連絡をください」(嘘：p. 183)

刑事→女性

(34) 「電話をください」

「あの、いつでもよろしいんでしょうか？」

「電話だけならね」

「なにしろ、いろいろと用事が多いので、電話をいただいても、すぐお目にかかれるかどうかわかりませんよ」(砂-上：p. 113-115)

音楽家→歌手

(33) 「連絡をください」は「連絡をしてください」、(34) 「電話をください」は具体物の電話機ではなく「電話で連絡してください」という意味である。「くださる」は元々聞き手から話し手への恩恵性を強調する表現であるが、(34) のように話し手が聞き手の要求に応じるために「電話をください」と言う場合、菊地（1997b）が指摘しているように、「恩恵の意を離れた定型的な表現」であると考えられる。

また、女性がよく使用する「くださる？」や、男女とも使用する「くださらない？」の例も見られる。

(35) 「煙草、もってる？」

「ああ」

「一本くださる？」

一行は、一瞬いぶかしげな表情になったが、黙ってボロシャツの胸のポケットから煙草を取り出した。

千尋は封を開けたばかりらしいショートホープの箱から一本を取り出してくわえると、バッグに入っていた使い捨てのライターで火をつけた。(花嫁：p. 86)

記憶のない女性→やや年上の男性

(36) 百川忽ち席上を見渡し「健次さん、まだ歌留多取りを始めたのか、一つ僕がお仲間入をしよう、ゲーupp、鈴子さん、失敬だがコップに水を一杯下らんか」と遠慮のなさ過ぎる親類交際、鈴子嬢ただ忌むしく浅ましく「水は差上げますがお家でもご心配でしょうから、早くお帰りなさい、歌留多はモーりました」と所望の水を勝手より持ち来る(酒：p. 46)

男性→妻の従妹

(37) 「悪いけど、おしぼり下さらない。埃がひどくて、手が気持悪いの」(午後-上：p. 160)

女性→元の義妹

これに対応する丁寧体として、「くださいます (か) ?」「くださいません (か) ?」の例も見られる。

- (38) 「もしもし」小野木は、送受器を握った手に力を入れた。
「今度は……」と、彼は言った。
「いつ、電話をくださいますか？」
会ってくれるか、とききたいのだったが、それは言えなかった。
「そうね」声が切れている間、電車の音が送受器を通過した。
「近いうちにします。では、さよなら、お元気でね」
「失礼しました」
小野木は仕方なしに言った。送受器を置かない前に、ことりと切れる音がした。(波-上 : p. 74)

男性→恋人

- (39) 「めしを食わせてくださいよ。昨日、あるパーティがあり、二人でおそくまでのんでしまい、僕のところに泊ったのですが、なにしろ鰹夫ぐらしじゃ、味噌汁いっぱいものめないし」
「いますぐ支度をさせますわ。おのみものは？」
「ブランデーを下さいますか」
千枝は台所に行き、昼食の用意を命じ、ブランデーグラスを運ばせた。(梅 : p. 203)

男性→女性

1. 2. 2. 補助動詞

「して下さる」は「してくれる」の尊敬語である。「してください」は動詞テ形に「くださる」の命令形「ください」がつくので、聞き手に対する話し手の押し付けがましさが強く感じられる。このことから、「してください」を用いる対象や場面に制限があると考えられる。しかし、日本語記述文法研究会編 (2003 : p. 71) では、「してください」は「使用者に関する制限が少ない。上位者が下位者に対して用いることもあれば、下位者が上位者に丁寧に頼みごとをすることもする。特に男女差はない」と書かれている。この考え方は若干一般化のしすぎであろう。

- (40) 「確かな病名というものは、一回や二回の診察で、簡単につけられませんよ」
「けど、今のところ、だいたい何病やということぐらひは、いっていただけだと思いますねんけどー」
「いや、ちょっと、疑問の点がありますから、今日、胃カメラと血清の検査をして下さい」(巨塔1 : p. 106)

医者→患者

- (41) 「どうしたの？」省一が眠そうに目をこすりながら起きてきた。
「患者さんが急変したらしいの。鍵をもって出ますから、寝ていてください」
身支度をしているうちに、表に車が止まる気配がした。省一はブスツとした顔で、それでも玄関まで妻を見送りに出る。(老人 : p. 187)

妻→夫

- (42) 「どうぞ上がってください」
「いや、おっちゃんらはここでええよ」
「そんなところで待ってられたら、近所の人から変に思われますから」
笹垣はまた古賀と顔を見合わせた。苦笑したいところだった我慢した。(白夜 : p. 39)

少女→刑事

(40) は上位者が下位者に、(41) は妻が夫に、(42) は上位者に対する下位者の依頼であ

る。(42)のように、話し手が上位者に「上がってください」と言っている場合、副詞「どうぞ」などと共起しなければ失礼となる可能性がある。

上位者に対して、やや古風である「してくださいませ」や、より丁寧である「お(ご)～ください」「お(ご)～くださいませ」「お(ご)～になってください」なども使用する。

- (43) 「……はい、お子様は雅子様お一人でございます。とても可愛い、優しいお嬢様で……。今、一体どうなさっているのかと思いますと……。一刻も早く誘拐犯人の手から取り戻してくださいませ！」(名探：p. 9)
被害者の女中→警視庁の警部
- (44) 「お車は、どうぞお好きなお乗り捨ててください」
走り出す前に幹事は言った。
「失礼します」(水：p. 72)
会社の幹事→講演者
- (45) レジ台から取り次がれた受話器に、おし殺したような男の声で、
「佐倉さんですね。すぐ店を出てください。表にカローラがお迎えに行ってます。私共の商売柄、事務所へお着きになるまで、目隠しをさせていただきますが、どうかご協力ください」(挫折：p. 122)
男性→見知らずの男性
- (46) 「ありがとうございます。あの、これはつまらないものですが、どうかお納めくださいませ」
彼女は小さな紙包みを差し出してきた。町谷、と書いた紙が貼ってある。
「あ、これはどうも」(手紙：p. 345)
女性→社宅の住人
- (47) 「今日はお天気がいいから、お散歩に行きましょう。奥さんはお休みになっていてください」
鮎子はたとえ一時間でも、介護人を寝かせてあげたいと思って言ったのに、操夫人は、「いいえ、まいりますとも」と元気よく答えた。(老人：p. 27)
訪問看護婦→患者の妻

「してください」の尊敬語としてさまざまな形式がある。「お<和語動詞>ください」と「ご<漢語動詞>ください」は、「してください」と同じく、上下を問わずに男女とも使用する。「お<和語動詞>ください」と「ご<漢語動詞>ください」は、よく副詞「どうぞ」「どうか」と共起する。「お(ご)～くださいませ」は「お(ご)～ください」より敬意が高い。問いかけの「してくださる?」「してくださらない?」は、女性がよく使用する。

- (48) 「先生、わたくし、どこかにお勤めに出ようかと思っていますの。探してくださる?」
声に親しみがこめられた。そのとたん、石につまずいて美枝子がよろけた。慎一郎はハッとして手を貸しかけたが、その手をとどめた。美枝子はよろめいて道に片ひざをついた。
「大丈夫ですか」突っ立ったまま、慎一郎は声をかけた。(自我：p. 77)
女性→夫の同僚
- (49) 「何だか、お腹がとても痛くて」
「医者へ行ってみるよ」
「あなたも一緒に行って下さない」
妻の目に切実な色があった。高本の仕事第一主義をよく知っていて、こんなことはめったに言い出さないみさである。
「おいおい子供じゃあるまいし」(挫折：p. 19)
妻→夫

丁寧体として「してくださいませか」「してくださいませんか」「してくださいませんでしようか」などがある。「してくださいませんでしようか」は推量形を使用して話し手の控え目

な態度を表すので、「していただけますか」「していただきませんか」より丁寧に感じられ、書き言葉としても用いられる。

- (50) 「あの、中谷さんのキイを、帰ってきたら渡して下さいますか?」と私は、さっきの札をいつてから、たのんだ。
「どうしますか、これから」
「ハイヤーが呼べますか」(言：p. 108)
女性→近所の男性
- (51) 「しかしね、鏡台のいちばん奥の宝石匣のなかから出てきたのですよ。宝石匣に二つに折ってしまってたのです。私が大阪からやった手紙など、紙屑籠に投げいれている女です。……その家庭教師の住所が判ればいいんですが……すみませんが、風間という人の家の電話番号を教えてくださいませんか」
「風間さんはいま東北を旅行中ですよ」(梅：p. 48)
男性→妻の親友
- (52) それから、これはおねがいですが、前に差しあげた二通の手紙、もしお手もとにございましたら、もう一度読みかえしていただきませんか。どこか狂っている個所はないか、発見して欲しいのです。(夢：p. 227)
手紙 読者→作家

場合によっては、上位者に対して「お・ご～くださいませんか?」が用いられる。

- (53) 「そうかも知れない。しかし学校の経営を任されている管理職としては、こういうのがひとり混じっていると、本校はまとまりがないと思われてならんのですよ」
生徒を品物のようにあつかう態度にかちんときた金八先生は思わず言い返した。
「お言葉ですが、生徒に対して“こういうのが”というような言い方はおやめくださいませんか」(炎：p. 108)
男性教諭→校長

1.2.3. 複合述語

話し手は、「して下さったら」「して下さると」「して下されば」などによる複合述語を用いて、聞き手に依頼の意図を伝える。

- (54) 「君のうちって、ご家族は?」啓介は、ちょっと当惑して尋ねた。
「わたし一人。うちは八王子で通勤に遠いから、会社に近い青山にいるの」
「いいのかなあ。お邪魔しても」
「来て下さったらうれしいわ。今夜は、あかりの消えている寒い部屋に一人で帰るの、寂しくて厭なの」(中略)
二人は店を出て、タクシーを捜した。(一匹：p. 171-172)
若い女性→やや年上の男性
- (55) 「わたしは失礼しますわ」千枝が言った。
「どうして?」
「だって、他人がいるんですもの」
「そこまでは気づかなかった」
「帰りに、たちよって下さると嬉しいんだけど」
「しかし、時間がおそいでしょ」(梅：p. 109)
女性→愛人
- (56) 「高井さん、どこでお目にかかりましょうか。ご都合のいい場所を指定して下されば、わたしはどこへでも飛んで行きますが」
「場所——どこが——いいでしょう?」
「今あなたのいらっしゃるところへ伺いましょうか」

「いいえ！ここはダメです。あの……このこと母には内緒なので」（模倣-下：p. 222）

ルポライター（女性）→被疑者の妹

(54)「来てくださったらうれしいわ」、(55)「帰りに、たちよってくださると嬉しいんだけど」は、話し手が聞き手に「来てほしい」「たちよってほしい」と頼んでいる。(56)「ご都合のいい場所を指定してくだされば、わたしはどこへでも飛んで行きますが」は、「ご都合のいい場所を指定してくださればうれしい」という話し手の嬉しい気持ちから、「わたしはどこへでも飛んで行きますが」という今後の行動への拡張である。依頼の目的を達成するため、話し手が用いるストラテジーの1つであると考えられる。

1.3. 「もらう」による依頼形式

1.3.1. 本動詞

「もらう」は「他人から与えられて自分のものとする」場合に使われている動詞である。例えば、「手紙をもらう」「写真をもらう」などである。「受ける」の意味もあり、「許可をもらう」「休みをもらう」のように使用する。ただし、依頼表現においては「もらう」の可能形「もらえる」を使用する。「もらう（か）？」は直接に相手の授受行為を訊ねるのに対して、「もらえる（か）？」は聞き手（二人称）の好意による話し手（一人称）がものを受け取る可能性を訊ねている。

(57) 春子と冬美が朝ご飯を食べていると、ようやく宗一郎がふらふらと起き出して来た。

「お早う」つらそうに頭を押さえている。

「あんた、二日酔いでしょ」春子が訊いた。

「もう、すごい何のって。あ、俺もコーヒーもらえる？」

「あいよ」（タイム：p. 176）

若い男性→姉

(58) 「冷たいジュースでももらえるかしら。冷蔵庫、開けるわよ」

その言葉を聞きつけて、葉月ちゃんは自分も欲しいと訴え始めた。

「わかったわよ、今あげる」と、恵美さんがなだめる。（隣人：p. 90）

女性→知り合ったばかりの少年

(59) 「ほかで聞いてください。オレ、そういうことは嫌いだから」

「そうじゃないんだ。実は、素行調査なんかじゃない」

やっと見つけた突破口のような人物だ。手放すわけにはいかない。

「いろいろ事情があって、話すとき長くなる。少し時間をもらえないかな。なんなら、あとで出なおしてもいい。私も、行方のわからない彰子さんを探してるんだよ」

三十分ほど、「本多モーターズ」の応接室で待たされた。（火車：p. 285）

刑事→失踪者の昔の同級生

問いかけの「もらえる（か）？」の他に、疑いの「もらえるかしら／かな」「もらえないかしら／かな」も見られる。「かしら」「かな」は、話し手の独り言の場合にはよく用いられるが、依頼表現の場合には話し手が聞き手に直接に問いかけることを避けて依頼の意図を察させる効果がある。「かしら」は女性がよく使用するのに対して、「かな」は男性がよく使用する。丁寧体として「もらえます（か）？」「もらえません（か）？」がある。

また、(60)のように、仮定形「もらえると」による複合述語文も見られる。

(60) 「クーラーを買い換えなきゃね」ふいに女が打診するように言った。「もう少しお小遣いがも

らえるといいんだけど」

「まあ、待ってろよ」綾瀬は自信満々に答えた。「俺のボスは気前がいいんだ。そのうちきつとボーナスをくれるはずだ」

「期待していいんだかどうか」(獲物：p. 228)

女性→愛人

話し手は、「もらいたい」によって自らの希望を述べて、聞き手に依頼する。

- (61) 「それは、信州の岡谷から毎年女工さんの募集に来る人で、夫婦っきりで淋しくて、小さい娘を養女に欲しいと思っていたのだから、是非貰いたい。女学校にもやる。稽古事も仕込むという話なので、父もその気になり、明けても暮れても妹のお守りをさせられていたわたしは、そんな町の子になって、女学校まであがれるなんて、夢みたいだと思いましたわ。」(野上：

p. 211)

女性の陳述

- (62) 「お茶を一杯もらいたいんだが」朔は妻がダイニングキッチンに入ってくると、そう言った。「コーヒーじゃなくてお茶でいいんですか？」朔が朝、濃く入れたドリップ式のコーヒーを好むのを知っているため、朝子が訊ね返した。「うん、熱い緑茶がいい」(一種：p. 143-144)

夫→別居中の妻

(62)「もらいたいんだが」は文末が省略されているので、(61)「もらいたい」より婉曲に感じられる。

1.3.2. 補助動詞

「してもらえる」系は話し手と聞き手の親疎関係や場面によって普通体と丁寧体に分けられる。前に述べたように、「もらえる(か)?」は話し手がものを受け取る可能性を尋ねているので、間接に話し手の依頼の意図が伝わる。補助動詞「してもらえる」は、「もらえる」による話し手のものを受け取る可能性から、依頼行為を実行する可能性へと機能を拡張する。「してもらえる?」は、聞き手に依頼行為を実行する可能性を尋ねているので、受益を明示する「してくれる」と異なる。「してもらえない(か)?」は「してもらえる(か)?」より丁寧である。

- (63) 「悪いけど、ほかでやってもらえない?受付カウンターとかで」

「あ、はい」

若い女性は机に広げていたものをまとめて、部屋を出て行った。(嘘：p. 11)

演出家補佐の女性→手伝い

- (64) 「そうか。ぼくは、おまえの感想をきいているんだ。その先生は、経済学にはくわしいんだろう」

「やはり大学の先生ですから」

「違いない。大学の先生は偉いわね。一度、おまえから、浅野先生にご都合をきいてもらえないか」

「変じゃございません?」(水：p. 50)

男性→妻

丁寧体として「してもらえます(か)?」「してもらえません(か)?」の例がある。

- (65) 「吉岡先生、少し付き合ってもらえますか」
周一郎は誠吾に笑いかけた。(先生：p. 192)

- (66) 校長→若い男性教師
 「海でのことは私にはようわかりません。もう一度網元さんにその辺をたしかめてもらえませんか」
 「ですから、ここに書いてきた条件でどうだろうかと網元さんは言うと言われるんで」
 「これは承知できません」(先生：p. 133)
女性→村の住人

「(さ) せてもらえます (か) ?」は聞き手の好意を前提にして、話し手が依頼行為をする許可をもらう可能性を訊ねる。「(さ) せてもらえません (か) ?」は、「(さ) せてもらえます (か) ?」より相手の立場を配慮している。

- (67) 「本間さんから土地を買った砂川という人の登記申請書を見れば、もっと詳しい登記原因がわかるかもしれませんね」
 事情があるらしいと見た係員が助け舟を出すように言った。
 「その申請書を見せてもらえますか」
 「閲覧を許される登記簿の中に登記申請書も含まれておりますから、所有者との利害関係を閲覧申請書に記載してください」
 「つまり、本間作造との続柄でよいわけですか」(凶：p. 265)
刑事→法務局熱海出張所の係員
- (68) 「そういうわけだ。なにか食わせてもらえませんか」
 「もう、おひるじゃないの。いままでなにも食べていないの？」
 「この雪だろう」(梅：p. 10)
弟→姉

聞き手に対して推量の「だろう」「でしょう」を用いると、話し手の遠慮が感じられる。「してもらえないだろうか」「してもらえないでしょうか」などの例が見られる。

- (69) 「すまないが、ぼくに紹介してもらえないだろうか。ちょっと、ききたいことがあるんです」
 「そう。いいですよ」(砂-下：p. 337)
刑事→同僚
- (70) 「あたしの友達で、スタイリストをしている女の子がいるんですけど、一度会ってもらえないでしょうか」
 「君の友達なら、どうせダサイ田舎娘なんだろう」
 「いいえ、違います。長井さんもあつたら驚きますよ。ものすごい感性の持ち主なんです」
 「君に感性なんかわかるのかい」(星：p. 75)
女性→元同僚 (男性)

「してもらいたい」「してもらいたいのだが」「してもらいたいことがあるのだ」などの例もある。

- (71) 「鞠子さんのことも他人事とは思えないとおっしゃった。それならば、今これから、古川家の人たちに取材をするのは控えてもらいたい。とてもじゃないが、あの人たちは今、それどころじゃないんですよ」
 滋子は目を伏せ、空になったコーヒーカップを見つめていた。坂木の言うことはよくわかった。
 (模倣-上：p. 113)
刑事→女性ルポ
- (72) 「もしそういうことなら、早めに連絡してもらわないとね。それから、万一そうなった時だけど、お兄さんを今の社宅に呼び寄せるようなことは遠慮してもらいたい。社宅の規則でも、両親、配偶者、子供以外は同居できないと決まっているから」
 そんな予定はないし、今後もそのつもりはないと直貴ははっきりと答えたが、相手はあまり納

得している様子ではなかった。(手紙：p. 366-367)

男性→同僚

- (73) 「これは気を悪くしないで聞いてもらいたいんだがね、今回の事件では警察としては、あらゆる方向から捜査をしていかねばならないと考えているんだ。」(手紙：p. 301)

刑事→店員

- (74) 「なにかあったんですか工場長」
「ちょっと君に教えてもらいたいことがあるんだよ」
「株の上場問題じゃないんですか」(人事：p. 58-59)

工場長→部下

話し手の強い意志を表す「してもらおう(か)」の例も見られる。

- (75) 「こうやって、あんたたちと食事をしていても意味はない。先に帰らしてもらおう」
「しかし……」(影：p. 450)

男性→昔の友達

- (76) 「とにかく、しばらく倉橋を張ってもらおうか」並んで歩いている香月に、中川がいった。
「はい」と香月は即座に頷く。
「あとで応援をさし向けるから」
「はい」(蒸発：p. 278)

刑事→部下

(75)「先に帰らしてもらおう」は動作主が話し手自身である。話し手の強い意志が感じられる。(76)「しばらく倉橋を張ってもらおうか」の「してもらおうか」は、「か」のつくことによって、話し手の意志表明を和らげる効果が見られる。

1.3.3. 複合述語

「してもらえると」「してもらえば」「してもらえないと」もしくは「もらわなくては」を用いて、話し手は気持ちを述べることにより、相手に対する依頼の意を伝える。

- (77) 「それと……悪いけど電話を貸してもらえると有り難いんだけども。うちにかけたいんだ」
遠慮がちなカズの申し出に、ピースは本当に残念そうな顔をした。
「ごめんよ、今、電話使えないんだ。なにしろ古い家だから、屋内の配線に問題があるらしくてさ。僕も困るから修理を頼んでるんだけど、ホラ、NTTはサービス悪いからね。来るのは明後日だって」(模倣-下：p. 30-31)

男性→親友(親しくない振りをしている)

- (78) 「僕の最新作です。遅くなってしまいました」
「いただけるんですか？」
「もちろんです。読んでもらえたら嬉しい」

ユカリはそっと本を取り上げた。砂と化して崩れゆく青い電気機関車の精緻なイラストが表紙で、中央に真っ赤な活字で『飛べない機関車・空知雅也』とある。いかにもセンスのいい装丁だった。

「どうもありがとうございます。今晚すぐ読ませていただきます」

「退屈しのぎになれば幸いです」(ミラー：p. 140)

男性→元彼女の妹

- (79) 「社長は、ぼんやりとしていないで、早く有効な対策を見つけなさい。そうしないことには、これは会館の危機にもつながりかねません。あなたはここだけの社長です。もっと真剣にとりくんでもらわないと困ります」

「真剣にとりくんでいるつもりですが」

「努力ですよ。あなたには努力も勉強も足りません」(空：p. 75)

会長である妻→養子婿である夫

- (80) それが大学病院における古くからある教室のしきたりだ、しきたりというものは守って貰わなくては困る
 「どうも申し訳ありません、つい、うっかりと行き届かず……」(巨塔 1 : p. 20-21)
 教授→助教授

1.4. 「いただく」による依頼形式

1.4.1. 本動詞

「いただく」は「もらう」の謙譲語である。話し手は、「いただくか」を用いて聞き手に自身の行動を問いかける。

- (81) 「あたし、少々のんでいても運転するのよ。ほんとは、すこし入っていた方が運転がスムーズに行くのよ」
 「それはそうだが、これから会社に出るのに、酒気を帯びていると具合わるい。そうだ、ちょっとだけ戴くか」(梅 : p. 214)
 男性→親しい女性

推量形「いただくか(か)」「いただきますしょう(か)」、可能形「いただける(か)？」「いただけない(か)？」「いただけますか」「いただけますかしら」「いただけますかな」「いただけませんか(か)？」などがある。

- (82) 「さてと、テグレートールをいただきますよか」
 男はカップをテーブルに戻すと、口を開いた。沈黙の重圧に耐えきれなくなっらしい。(凶 : p. 210)
 男性→親しくない男性
- (83) 「明子さん、申し訳ありませんね。私にもお茶を頂けますか」(午後-上 : p. 259)
 年配の女性→年下の女性
- (84) 「急にここにかがったんですけど、コーヒーをいただけますかしら？」
 老婆は頼子におじぎをした。
 中にはいると、すぐ横に小さなフロントがあった。老婆の息子らしい二十二、三歳の若者が、その中で本を読んでいた。左手に食堂がすぐ見えしたが、誰もいなかった。
 老婆は、頼子を食堂に案内した。(波-下 : p. 370)
 女性客→ユースホステルの事務員
- (85) 「あの……先生、いつか一度、ゆっくりお話をするお時間をいただけませんか？」
 「わかりました。一度ぼくも機会を作りたいと思っています」
 軽く一礼して、慎一郎は別れた。(自我 : p. 99)
 女性→夫の同僚
- (86) 「最後にひとつだけお願いします。そのパンフレットをいただけませんか？」
 口元の険しいしわを消さないまま、受付の女性は機械的な仕草でパンフレットを一部抜き出し、カウンターの上に滑らせた。
 「ありがとう」(火車 : p. 343)
 中年の男性→研修センターの受付

「いただけると」による複合述語文は、丁寧度が最も高い。

- (87) 「紙袋か段ボール箱のようなものをいただけると助かるんですが」
 すぐ用意しましょうと、ちか子は言った。(R : p. 173)
 女性→婦警
- (88) 「案内の葉書をいただけるとありがたいのですが」(電子辞書の例文)

「いただく」に希望の助動詞「たい」を後接する「いただきたいのですが」も見られる。

- (89) 「調べてみるつもりです。ただ、もう少し時間をいただきたいのですが」
「わかりました。お任せします。このファイルはいただいても？」(白夜：p. 585)
探偵→依頼主
- (90) 「そうでしたな」早川はうなずいて、「ところで、コップに水を一杯頂きたいのですが」
萩尾鋤山長の言いつけで賄婦がコップを運んでくると、それを口にふくみ傍若無人な音を立てて、何度もグツグツをしてはのみ込んで…… (悪霊：p. 17)
刑事→鋤山長

1.4.2. 補助動詞

普通体として「していただける(か)?」「していただけない(か)?」「していただけないかしら」、丁寧体として「していただけます(か)?」「していただけません(か)?」「していただけますかな」などの例がある。

- (91) 「なるほど。文書ならいいわけですね?必ず答えていただける?」
すると、相手は自信をなくしたらしい。ちょっと視線を泳がせてまばたきしたあと、「少しお待ちください」と言い置いて、受付カウンターを離れた。広いロビーを横切り、奥のドアを開けて姿を消した。
カウンターにもたれて、本間はため息をついた。(火車：p. 340)
中年の男性→研修センターの受付
- (92) 「公演が終わってからにしていられないかしら」
「お願いします」加賀は頭を下げた。「もしきいていただけないとなると、我々は令状を取ることとなります。そういう大げさなことはしたくないのです」
令状といわれ、美千代の心は揺れた。この男の目的は何だろう。(嘘：p. 36)
女性→刑事
- (93) 「その方の住所が、渋谷の××町にあるということは分かっています。でも、それ以外のことは全然不明なんだそうです。それだけの手がかりでしらべていただけます?」
「なんとかなるでしょう」(波-上：p. 295)
女性→男性の新聞記者
- (94) 藪田は驚いた表情も見せず、冷静にきいた。「その根拠を示していただけますかな」
「いいですとも」降居は一呼吸置いてから、説明を始めた。(獲物：p. 205)
警官→心理学者のキャスター

「お(ご)～いただける」は「していただける」の謙譲語である。丁寧体として「お(ご)～いただけます(か)?」などがある。

- (95) 「あんたにはかなわんな」柳田は精々洗面を作って言った。
「えっ、それじゃお越しいただけますか?」
「はっきりと約束は出けへんが、とにかく五時に正面玄関へ車を廻しといてや、行けるか行けへんか、そんな時になってみると分からんわ」(挫折：p. 155)
男性→全農協の専務
- (96) 「私でかまわないのですか」意外な申し出に降居はつい声を張り上げた。
「あなたでなければだめなのです。できればホームへお越しいただけませんか」
わかりました。降居は力強く答えた。ぜひ伺いましょう。私にとっても今あなたに会うことがどうしても必要なのです。(獲物：p. 219-220)
十億円チャリティの元締め(年配の男性)→心理学者のキャスター

否定の「お越しいただけませんか」は、肯定の「お越しいただけますか」より相手の意向

を尊重する。(96)のように、「できれば」と共起する場合、配慮の意が伝わる。

「だろう(か)」の丁寧体「でしょう(か)」は、安達(2002:p.189)が説いているように、丁寧な質問という機能がある。「していただけるでしょう(か)」は「していただけるだろう(か)」より丁寧である。「お(ご)～いただけますでしょうか」の例も見られる。

- (97) この手紙を読んだ時の衝撃をわかっていただけでしょうか。弟に縁を切られたことがショックだったのではありません。長年にわたって私の存在が彼を苦しめ続けてきた、という事実震撼したのです。(手紙:p.417-418)
手紙 犯人→被害者の遺族
- (98) 「現実には、農薬が検出され、慌てて基準値を設定したことも過去にあります。ただとは言いません。サンプルを分けていただけないでしょうか
「お断りします」(連鎖:p.62-63)
輸入食品検査センターの副所長→食品会社の社長
- (99) 「うちのほうの権限でサンプルを採取してみます。お手数かもしれませんが、先生のところで検査していただけますでしょうか」一同の視線を集めて、篠田はしばし俯いた。
「不謹慎かもしれませんが……」思い切ったように篠田が言って、顔を上げた。その頬に、小さな笑みが浮かんでいた。「警察の捜査に協力できるなんて、めったにない経験ですからね。——喜んで引き受けさせてもらいます」(連鎖:p.52-53)
検疫所の所長→輸入食品検査センターの副所長
- (100) 「まあ、年寄りというものは、仕方がないものでございますね。何より大事な老眼鏡を、忘れてまいりました。先生、これからひとつ走り行って、眼鏡を取ってまいりますね。ちょっとお待ちいただけますでしょうか
「いや、どうぞお持ちください」
「えっ?お貸しいただけるんでございますか、ありがとうございます。ありがとうございます」
(自我:p.157-158)
女性→息子の同僚

また、問いかげの終助詞「か」を使用せず、確認や期待の意味を含んでいる終助詞「な」¹⁵を用いて相手を誘っている例も見られる。

- (101) 「最終審査は七月三十日に行われるのですが、これにはいらしていただけるのでしょうな」
「もちろん、来るなど言われても押しかけていくつもりです。TVカメラをかついでね」(獲物:p.46-47)
十億円チャリティの元締め(年配の男性)→心理学者のキャスター

「していただく」に希望の助動詞「たい」を後接する「していただきたい」「していただきたいです」「していただきたいのですが(けど)」「していただきたいことがあるのです」なども見られる。

- (102) 「息子さんのことで坂本先生もクラス全体に目がとどかないのはわかります。しかし、女は女らしく、男は男らしく、二度とこういう騒ぎは起こさないように、担任としてしっかり監督していただきたい」
「申しわけございません」(炎:p.105)
校長→教諭
- (103) 「卒業後、全くどこにも就職しなかったということとも違うようだし」
「話さなければいけませんか?」
「ぜひ、話して頂きたいですね」

¹⁵ 金田一・池田(1980:p.1431)を参照。

「ちょうだい」は女性や子供がよく用いて、親しみが伝わる形式である。

- (111) 「ママァ、クッキーもう一つちょうだい」哲彦が鼻を鳴らした。
 「駄目よ。お菓子ばかり食べると晩ご飯がはいらなくなるの。それより、飛行機の絵描いてよ。テッチン、とっても上手じゃない？」
 こういうとき、航空機マニアは便利である。
 「うん。描いてあげるね」(三日：p.169)

息子→母

- (112) キッチンでは、冬美と春子がとっくに朝ご飯を食べ始めていた。春子が作り方を伝授しているところに、夏樹がドドドドッと駆け込んで来た。
 「ああっ、いい匂い。神様は私に遅刻しろと言っているのね。一杯頂戴」
 そこに、宗一郎も走ってやって来た。「俺も」(タイム：p.89)

女性→ルームメートの女性

「ちょうだいいたします」「ちょうだいいたしましよ」などの例も見られる。

- (113) 「汚ねえ家だね、この家てなないね。この家の色をごらん、佃煮だまるで……おい床の間ごらん床の間ッ、ええ？床の間の掛け物をごらんよ、応挙の虎。偽物ですッ？あたりまえだよ、本物を掛けるわけがねえじゃアねえか。第一、『丑寅の人は鰻を食わない』てえくらいのもんだよ君。虎の掛け物をかけて君、鰻屋で君、喜んで君……勘定はいくらだい君、勘定は。払うから、勘定はいくらだよッ」
 「ありがとうございます、九円七十五銭頂戴いたします」(文楽：p.88)

鰻屋の主人→男性客

- (114) この時金尾謀席を立ちて先ず酒山の前に来り「お一つ頂戴致しましよ」と盃の献酬を始めた、それに続いて十余人の事務員一々立ちて二客へ盃を貰いに来る(酒：p.319)

工場の主人→出資の男性

1.5.2. 「してちょうだい」

補助動詞「してちょうだい」は、主に女性と子供が用いる。

- (115) 「あたし」と、やっとな声を出していった。
 「あたしはこんなことやってない。信じてちょうだい」
 昭二は無言だ。息づかいばかりが荒くて、見上げると、その顔はまだ紅潮している。
 「これはデタラメよ、昭二さん」滋子はあらたまった呼びかけ方で夫を呼んだ。「何から何までデタラメなの」(模倣-下：p.358)

妻→夫

- (116) 「みなこちゃん、ノートかえしてちょうだい」(兎：p.152)

男の子→クラスメート

1.6. まとめ

以上授受動詞による依頼表現をまとめると、次の表2になる。

表2 授受動詞による依頼形式

依頼形式	機能	普通体	丁寧体
	本動詞	くれる。くれるか。くれるかい。 くれるかな。くれない。くれないか など	くれます。くれますか。くれません。くれませんか など
		してくれ。してくれたまえ。しておくれ。	X

「くれる」による依頼形式	補助動詞	してくれる。してくれるか。してくれるかしら。してくれるかな。してくれるね。してくれるの。してくれない。してくれないか。してくれないかな など してくれないだろうか など	してくれます。してくれますか。してくれませんか。してくれませんか など してくれないでしょうか など
	複合述語	してくれるとありがたい。してくれると助かる。してくれればいい。してくれなくては困る。してくれなきゃ困るじゃないかな など	してくれるとありがたいのですが。してくれると助かるのですが など
「くださる」による依頼形式	本動詞	くださる。くださらない。くださらないかな など	くださいます。くださいますか。くださいません。くださいませんかな など
	補助動詞	くださる。くださるかしら。くださらない など	してください。してくださいませ。お~ください。お~くださいませ。お~になってください など くださいます。くださいますか。くださいませんか。くださいませんでしょうか。お~くださいませんかな など くださいますでしょうか。くださるでしょう など
	複合述語	くださったらうれしい。くださるとうれしい。くださらないと困る など	くださるとうれしいです。くださらないと困ります など
	補助動詞	くださる。くださるかしら。くださらない など	くださいます。くださいますか。くださいません。くださいませんかな など
「もらう」による依頼形式	本動詞	もらえる。もらえるかしら。もらえないかな など もらえるといい など もらいたい。もらいたいのだが など	もらえます。もらえますか。もらえません。もらえませんかな など もらえるといいです など もらいたいです。もらいたいのですが など
	補助動詞	してもらえない。してもらえないか してもらえないだろうか など してもらいたい。してもらいたいのだが。してもらいたいことがあるのだ など してもらおう。してもらおうかな など	してもらえますか。してもらえませんか してもらえないでしょうか など してもらいたいです。してもらいたいのですが。してもらいたいことがあるのです など してもらいましょう。してもらいましょうかな など
	複合述語	してもらえるとありがたい。してもらえたらうれしい。してもらわなくては困る など	してもらえるとありがたいです。してもらえたらうれしいです。してもらわないと困ります など
	補助動詞	くださる。くださるかしら。くださらない など	くださいます。くださいますか。くださいません。くださいませんかな など
「いただく」による依頼形式	本動詞	いただこうか など いただける。いただけない など いただけないだろうか など いただけると助かる など いただきたい	いただきましょうか など いただけますか。いただけますかしら。いただけません。いただけませんか など いただけないでしょうか など いただけると助かるのですが。いただけるとありがたいのですが いただきたいのですが など
	補助動詞	していただける。していただけないかしら など していただこう。していただけるだろうか など	していただけます。していただけますか。お~いただけますか。お~いただけますか など していただきましょうか。していただけるでしょうか。していただけないでしょうか。していただけますでしょうか。お~いただけますでしょうか。していただけるのでしょうか など

		していただきたい など	していただきたいです。していただきたいのですが。していただきたいことがあります。お～いただきたいのです など
	複合述語	していただけるとうれしい など	していただけたら助かります。していただければありがたいです。していただけるとありがたいのですが。お～いただければ幸いです など
「ちょうだいする」による依頼形式	ちょうだい ちょうだい ちょうだい する	ちょうだい	
		ちょうだいする	ちょうだいします。ちょうだいいたします など
		ちょうだいしよう など	ちょうだいしましょう。ちょうだいいたしましょう など
	してちょうだい		

2. 依頼動詞による依頼形式

語彙的な依頼形式として、「求める」「依頼する」「懇願する」「要請する」「要求する」などの依頼動詞が挙げられる。

- (117) 「お嬢さんを見て、改めてうちの息子のしでかしたことの重大さを思い知りました。私共が頭を下げたところで、武島さんの気が済むはずのないことは十分に承知しております。私でよければ、殴るなり蹴るなり、どうかお好きなようにしてください」そういうと彼は畳に額がつくほどに腰を折った。隣では夫人がすすり泣きを始めた。

「頭をあげてください」由実子が横からいった。「そんなことをされても……ねえ」と直貴に同意を求めてくる。彼も頷いた。(手紙：p. 383-384)

妻→夫

- (118) 「じゃあ、千葉大学の小山教授に依頼しましょう、こちらの鑑定人をあの人にしておけば、あの人に対抗できるぐらい名の通った人は、ほかにちょっと見当らないから、原告側に心理的な打撃を与えることになりますよ」(巨塔-3：p. 218)

弁護士→医学部長

- (119) 「ああ、それなら大丈夫です。保険金は出ますよ」店員は即座にいった。「保険金を請求するのに必要なのは、破損があった場所の証明書と、折れたクラブの写真、それから修理代金の請求書だったと思います。そのクラブが本人のものかどうかなんてことは証明できませんものね。うちのほうで必要な書類は揃えますから、高宮さんは保険屋さんに連絡しておいてください」

「よろしくお願いします。あの、それで修理には何日ぐらいかかりますか」(白夜：p. 523-524)

店員→男性客

(117)「求める」は地の文に用いられている。(118)「依頼しましょう」は聞き手に対する依頼ではなく、第三者(千葉大学の小山教授)に対する依頼である。(119)「請求する」は連体修飾詞のような用法である。このように、「求める」「依頼する」「請求する」などは、「話し手が発話時点に特定の相手に対し、特定の場面で依頼する」という本研究に扱われている依頼表現の定義に合わないことから、本研究の対象外にする。

また、話し手の希望を述べる場合に使われている希望動詞「望む」の例もある。

- (120) 「ナイン、科学アカデミーの許可がなければ何も話せない、あなたに対し、直ちにこの研究所から退去することを望みます」(巨塔-3：p. 48)

ドイツの教授→日本の教授

- (120)「あなたに対し、直ちにこの研究所から退去することを望みます」は「直ちにこの

研究所から退去してください」の婉曲的な言い方である。しかし、「望む」は依頼表現に使われる慣用の依頼動詞ではないので、本研究の対象外にする。

2.1. 「願う」による依頼形式

慣用の依頼動詞には、「願う」系と「頼む」系がある。「願う」系には「お／ご～願います」「お／ご～願いたいです」「お／ご～願えますか」「お／ご～願えませんか」など、助動詞に近い形式があるが、「頼む」系にはない。

2.1.1. 語彙的な用法

「願う」系には、普通体の「願う」「お願いする」と丁寧体の「願います」「お願いします」「お願い致します」「お願い申し上げます」などを含める。

- (121) 「只今の船尾教授の研究報告は、大へん興味深いものでありまして、研究、診療に多忙を極められている船尾教授が、このように地味な研究を続けておられることに感銘致しましたが、私のような小児科医の立場としましては、さらに小児の真性腹部腫瘍と、小児期に多い肝臓、脾臓などの腫大を伴う疾患との初期の鑑別法について、臨床的な研究も加えて戴きたいと願う次第です」

質問というより依頼のような形で云い終ると、続いて今日の最後の研究報告者である金沢大学の病理学教室から『ごく稀にみるシ小児の胃癌の剖検例』として、五歳の女兒についての研究報告が行なわれた。(巨塔1：p.178-179)

医者→同業

- (122) われわれは、無力、無策な、首相をはじめとする当局者を無視して、人質自身に、身を守るチャンスを与えることにした。

そのために、この八つのテープを貴社に送り、その公表をお願いする。(誘拐：p.168-169)

犯人→新聞社の記者たち

- (123) 「あっさり白状したのだから、自分もあっさり態度をきめればよいよ。それを、ああでもないこうでもない、とねちねちした態度で絡んでくるでしょう。あたし、はじめから大阪人って嫌いでしょうがなかったのに、なんであんな男といっしょになったのかしら。とにかく、困ったときには賭けこんでくるから、そのときにはおねがいするわ」

亮子はこれだけ言うと帰って行った。(梅：p.77)

女性→親友

(121) のように研究会議などの公的な場で、「願う」は「頼む」に置き換えられない。(122) 「お願いする」は男女とも使用するが、男性より女性の方がよく用いる。男性の場合、「お願いする」を使うときは「頼む」を使うときより改まった感じがある。(123) 「おねがいするわ」の「わ」は、女性の話し手が聞き手との親しい関係、くだけた発話場面が表われている。

丁寧体として「願います」「お願いします」「お願い致します」「お願い申し上げます」などの例が見られる。

- (124) 「裁判長！只今の原告代理人の尋問は、誘導尋問でありますから、取消しを願います、また被告を法廷において非難するような発言は好ましくありません！裁判長からご注意を願いたい」

(巨塔3：p.186)

弁護士→裁判長

- (125) 三日後というのも、明日とあさっては児童館の世話役の当番だと恭子が言ったからで、向こうは一刻も早く会いたがっている様子だった。

恭子は念のために連絡先を聞こうと思ったが、それより先に自分から電話番号を明かした。常識はあるのだな、と少しだけ安堵した。

女は最後に、「店側にだけはお内密にお願いします」と言った。たぶん、パート仲間に話してしまうのは仕方がないと思ったのだろう。(邪魔-上 : p. 128)

女性活動家→パートの女性

(126) 「ああ、財前だ——」

「中央手術室からでございますが、患者は間もなく手術可能な麻酔状態に入りますので、教授のご用意をお願い致します」(巨塔 4 : p. 347)

婦長→教授

(127) 「杉並署警邏課の淵上美紀恵巡查です」淵上巡查は踵を鳴らして敬礼した。

「淵上です。よろしくご指導をお願い申しあげます」(R : p. 9)

婦警→上司

「お願い致します」は「お願いします」より敬意が高いが、「お願い申し上げます」は「お願い致します」より更に敬意が高い。

「願いたい」は話し手が希望を述べることによって、間接に聞き手に依頼の意図を認識させる。「願いたい」「願いたいです」「お願いしたいです」などの例がある。

(128) 「裁判長！只今の原告代理人の尋問は、誘導尋問でありますから、取消しを願います、また被告を法廷において非難するような発言は好ましくありません！裁判長からご注意を願いたい」(巨塔 3 : p. 186)

弁護士→裁判長

(129) 「まあ奥さんとしちゃこんなところ見られては、われわれがどんなひどいことをしたと思われましようが、自分一人で騒ぎだされたんですから、誤解のないように願いたいです。実際われわれも迷惑してます。」(おと : p. 123)

医局員→患者の妻

(130) 「ぜひ、そうお願いしたいです。いや、また今西さんと組になったら、これは勉強になりますからね」

「何を言う、もうだめだよ。第一、この事件で最初からぼくの見込みが違ったじゃないか」(砂-上 : p. 214)

刑事→先輩

次に「お願いできる」による例である。

(131) 「じゃあ、アケミちゃんのうちで預かるわよ。うちなら哲彦たちがいて、アケミちゃんも退屈しないわ。あなたは阿津見さんにお世話になれば？」

「ありがたいわ。お願いできる？」(猫 : p. 162)

女性→近所の女性

(132) 「じゃあ、お願いできますか」彼は訊いた。

「いいよ、今、車を出すから」孝文は先に歩きだした。(手紙 : p. 226)

男性→彼女の従兄

(133) 「しかし、わが学園からスターが出ましたな。さっそく息子からサインをせがまれました。多田先生、昔のよしみでひとつお願いできませんか」

「それは無理ですよ。高見沢は多田先生のこと毛嫌いしてるらしいですよ」(井戸 : p. 264)

教諭(女性)→同僚

(131)「お願いできる」は「お願いする」の可能形であり、「願える」より丁寧である。(133)「お願いできませんか」は(132)「お願いできますか」より相手の意向を尊重する。

「お願いできますでしょうか」「お願いできませんでしょうか」は、「願う」系の中で最も丁寧な形式である。「でしょうか」によって、話し手の控え目な態度が察される。

- (134) 「それを、検疫所でやれと？」
 田所が表情を曇らせ言った。誰でも厄介事を背負いたくはない。
 「お願いできますでしょうか」(連鎖：p. 52)
 刑事→検疫所の所長
- (135) 「君子さんのお体のことについては、父の病院の産婦人科で万全を期して、そんな不時のことが起らぬように致しますから、何とか証人をお願い出来ませんか」(巨塔4：p. 297)
 教授の娘→看護婦

意志形「願おう」「お願いしよう」の用例もある。

- (136) 「栗田と申します。所属は本部警務課です」
 「警務課のどこだ？留置管理係か」
 「いえ……人事係です」
 「だったら退席願おう。君が立ち会うべき場所ではない」
 梶の監視役であると最初からわかっていた。(半落ち：p. 88)
 検事→若い警官
- (137) 「みごとです。これからは山中さんにすべて願ひしようかな」
 「こつちはちつとも構ひませんよ。今のところはブラブラしてをりますから」
 「それはありがたい。ではガリ版と鉄筆はお預けしておきます」(東京：p. 31)
 隣組長→隣の住民

2.1.2. 名詞の用法

「お願い」「お願いです」は、女性がよく用いる。「お願いがある」は予告のかたちで、話し手が聞き手に依頼する。「お願いがある」「お願いがあつて」の後に、具体的な依頼行為が明示される。

- (138) 断続的におくびがこみ上げてきた。心臓は百メートル走でもしたかのように激しく鼓動を打っている。和美が背中をさすってくれた。収まるのに十分も要した。
 「お願い。わたしが予約の電話入れておくから……」
 「……わかった」誠司は渋々、和美の願いを聞き入れることにした。(空中：p. 71)
 女性→内縁の夫
- (139) 「皆さん、お願いです。もう静かになさってください。実は、藤島は自殺したのです」
 一瞬、座は静まった。が次の瞬間、
 「自殺だって!？」(自我：p. 241)
 女性→夫の画家仲間
- (140) 「(略) ところで願ひがある。宮永町へジープ乗り付けるのは遠慮してくれないか。隣近所への聞えといふものがある。わかるだらう」(東京：p. 422)
 叔父→女性
- (141) 「それと、少々願ひがあつて」
 やっぴりかと、金八先生は昌代を招き入れた。チューは本当に幸作のことが心配だったのでろうが、母親の思惑は別のところにあつたらしい。
 「実はこのごろ、どうも財布の中の勘定があわないもんだから」(炎：p. 132)
 生徒の母→担任教師
- (142) 「別段、冷たくしているつもりはありませんがねえ。なんです、話というのは」
 「あの、先生に願ひがあります。姑は義妹と一緒に暮らすといひますし、わたくしが京都に参りますと、この家は空いてしまいますでしょう。勝手申してすみませんけれど、もし、先生がお住みくだされば……」(自我：p. 116-117)
 女性→夫の同僚

更に「お願いしたいことがあるのですが」などの例も見られる。

- (143) 「辻村さん。一つ、お願いしたいことがあるんですが
「何でしょうか」身を乗り出すようにして、潤子は言った。
「いや、いいです」グラスを持ち上げ、峰岸は首を横に振った。(盗り：p. 182-183)
プロパー (男性) → 看護師 (女性)
- (144) 「そうですか。そこで降居さんに折入ってお願いしたいことがあるのですが
「何でしょうか」(獲物：p. 46-47)
十億円チャリティの元締め (年配の男性) → 心理学者のキャスター (若い男性)

「お願いというのは～」という平叙文による依頼表現もある。

- (145) 「それは何よりです。で、お願いというのは、その際降居さんに最終審査の立会人になっていただきたいんです
「え？何ですって」(獲物：p. 46-47)
十億円チャリティの元締め (年配の男性) → 心理学者のキャスター
- (146) 「あのひと、あなたのどんな姿を見ても、それで気持が褪せていくような人じゃありません。それが信じられなくて、主人を突き放されたんでしょうけど、お願いというのは、今日主人に仰言ったことを取り消して、彼をこの部屋に入れてやって欲しいんです。恋愛って、恰好いい部分だけではないでしょう。きれいな景色だけ写真に撮って、思い出にするってものでもないでしょう。それは、耕介に対しても、妻の私に対しても、不誠実なことだわ」和歌子の目がゆらゆらと揺れ、涙が溢れて盛り上がった。
「……私は、ほんのいつとき、耕介さんの人生に間借りしたつもりでした」八重は、口をしつかりと開き、一語一語丁寧に言った。(霧：p. 265-266)
女性 → 夫の愛人

2.1.3. 文法的な用法

「お（ご）～願います」「お（ご）～願えますか」「お（ご）～願えませんか」「お（ご）～願えないでしょうか」「お（ご）～願えませんでしょうか」などが挙げられる。

- (147) 「関口先生にお目にかかりたいのですが、大阪綿布協同組合の顧問弁護士の八木先生からの紹介状を戴いて参った佐々木よし江と信平と、お伝え願います」(巨塔3：p. 108)
客 → 事務員
- (148) 扉の開閉にご注意下さい。お子様をお連れの保護者様は特にご注意願います。(ほっともつとの掲示)
- (149) 「なんの用です。ここで話して下さい。僕は逃げ隠れしませんよ」
社長は少し顔をしかめたが、
「お耳をお貸し願えますか」
「はあ……」(井戸：p. 251)
タレント事務所の社長 → 同年配の男性
- (150) 「状況からご説明願えますか」(頬-上：p. 114)
警官 → 男性
- (151) 「会長さんも毎日ご多忙でございましょうから、常務さんからぼくの希望をちょっとお伝え願えませんか。ご都合のよろしい日と時間とをご指定くだされば、飛んでまいりたいと思います」
「そうですか」(水：p. 291)
銀行の副頭取 → 得意先の常務
- (152) 「ただ、先ほど受付でお渡しした写真をお返し願えないでしょうか」
若草色スーツの女性は、咎めるような目で受付嬢を見た。彼女は首を締めた。
「もらってきます」また、急ぎ足で奥に向かう。(火車：p. 350)
中年の男性 → 通信販売会社の受付
- (153) 「先生、そのおかたにご紹介願えませんでしょうか？いや、私の方としては、何とかその事実を調べてみたいことがあるんです」

「そうですか。いや、こうなったら、ぼくも責任がありますからな。ご紹介しましょう。その男は村山といって××新聞社の学芸部にいる男です」(砂-上：p. 308)

刑事→教授

2.2. 「頼む」による依頼形式

森山 (1991) の考察によると、「頼む」という語は、もともとの「人を信頼し、頼りにする」という意味から、「人に委ねる」という意味を経て、「人に事を依頼する」という意味へと語彙変化を起こしたものである。「頼む」系は、公的な場面でよく用いられて、話し手と聞き手の相対関係や待遇関係を配慮する「願う」系と異なる。「頼む」はくだけた場面で用いられて聞き手に対する話し手の親しみと熱意が感じられる。文法化がないという点でも「願う」とは異なる。「頼む」系は、男女とも用いるが、男性の方が女性よりよく用いる。

2.2.1. 語彙的な用法

「頼む」は親しい間柄における下位者や対等人に対して用いる。丁寧体「頼みます」は、男性である話し手が親しみを込めて聞き手に依頼する場合に用いる。

(154) 「マスター、勘定を頼む」

マスターは尋ね顔で、彼等のテーブルを指し、大きく丸を書いた。

「ああ、そうや。三人分まとめてだ」(白夜：p. 143)

少年→喫茶店のマスター

(155) 古澤の主人が、「離れに晝餉が支度してあります」とねぎらつてくれた。

清は、そのときはもうリアカーの梶棒をあげてゐて、

「絹子の弟の清です。姉を頼みます」(東京：p. 36)

青年→姉の義父

「頼みたい」は、希望形で「頼みがある」より婉曲である。

(156) 「教室のことだけではなく、もちろん診療面における怠慢や事故も、一切、僕の責任になるから、さっき云った分担で留守中の管理を頼みたい、万一、事故が起った場合は、はっきり責任を取って貰うから、そのつもりで頼む、いいかね」(巨塔2：p. 353-354)

教授→医局員

可能形「頼める(か)?」は、聞き手の能力を訊くものではなく、話し手が聞き手に物事を頼む可能性の有無を訊ねる。

(157) 「ベッシー・スミスのレコード、三枚ばかり見つかりました。みんな古くてノイズがひどいんですけど、よろしかったらテープに落としましょうか」

「頼めるかな」(約束：p. 24)

男性客→クラブのママ

(158) 「うん。でも、内部でいろいろ嗅ぎまわるとうるさいことになるからね。頼めるかな」

「お易い御用ですよ。でも……」(雨：p. 214)

刑事→親しい新聞記者

(157) 「頼めるかな」は話し手の遠慮が伝わる。話し手は聞き手に対する負担を考えて、「頼める」に「かな」をつけて押し付けがましさを避ける。(158) も同様である。

「頼む」系の可能推量形「頼めるだろうか」、「頼めるでしょうか」の用例は見つからない。

「頼もう」「頼もうかしら」の例が見られる。

- (159) 「ええ、まあ、やってみるだけやってみますよ。わたしの車に乗ってくれたのも、他生の縁でしょうから……」
 「じゃあ、頼もう。とにかく、尾行されたりするのは、気持のいいことじゃない」(影：p. 361)
 男性→タクシーの運転手
- (160) 「それに内子のローソクも頼もうかしら。須美ちゃんには、そうね、伊予緋のお財布なんかがいいわよ」(坊っちゃん：p. 10)
 母→息子

2.2.2. 名詞の用法

「頼み」「頼みがある」は名詞である。話し手が聞き手に依頼内容を持ち出す前に、聞き手に心の用意を与えるために用いられる依頼形式である。コトで名詞化された「頼みたいことがある」は「頼みがある」と同じく、依頼内容を予告するという機能を有する。

- (161) 「頼み、あるんだけどな」
 「何だい」
 「墓参りをするか、緒方さんの家に行くか、どっちかしてほしいんだ」
 「ああ……」意味はすぐにわかった。「線香、あげてくるんだな」(手紙：p. 81-82)
 兄→弟
- (162) 「ところで、枝理子。少し君に頼みたいことがあるんだがな」
 「なあに？」
 「君と結婚すると言ったな」
 「そうよ。あら、ひとごとみたいね。そんなに熱意がないのかしら？」
 「熱意があるから、君にも協力してもらいたいんだ」
 「なんだか知らないけれど、いいわ」(水：p. 88-89)
 男性→不倫の相手

2.3. まとめ

「願う」と「頼む」の用法をまとめると、次の表3になる¹⁶。

表3 「願う」と「頼む」による依頼形式

	本動詞	希望形	可能形	可能推量形	意志形	名詞系
普通体	願う お願いする お願い致す お願い申し上げます	願いたい お願いしたい お願いしたいのだ お願いしたいことがあるのだ	願えるか お願いできる？	願えるだろうか か お願いできるだろうか	願おうか お願いしよう (かな)	願い お願い お願いがある お願いがあるのだ
丁寧体	願います お願いします お願い致します お願い申し上げます	願いたいです お願いしたいのです お願いしたいので す お願いしたいこと があるのです	願えますか 願えませんか お願いできますか お願いできませんか	願えるでしょうか か お願いできますでしょうか か お願いできませんでしょうか	願いましょうか か お願いしましょうか	願いです お願いです お願いがあります お願いがあるのです
普通体	頼む	頼みたい 頼みたいことがあるのだ	頼めるかな	頼めるだろうか か	頼もう(かしら)	頼み 頼みがある 頼みがあるのだ

¹⁶ 手元の用例数によって多いものから「本動詞」→「希望形」→「可能形」→「可能推量形」→「意志形」→「名詞系」という順番で扱う。

丁寧体	頼みます	頼みたいですが 頼みたいことがあります	頼めますか	頼めるでしょうか	頼みましょうか	頼みます 頼みがあります 頼みがあるのです
-----	------	------------------------	-------	----------	---------	-----------------------------

「願う」系は普通体より丁寧体の方をよく使用するが、「頼む」系は普通体の方が馴染んでいる。「願う」系の中で最も用いられる形式は、「お願いします」であり、次に「お願い」である。「頼む」系に最も使用される形式は「頼む」である。

3. 動詞テ形による依頼形式

動詞テ形は高橋（2005：p.62）が「第2なかどめ」を名付けて、普通体として「よんで」、「よまないで（よまなくて）」に、丁寧体として「よみまして」、「よみませんで（して）」に分類している。動詞テ形によって、従属節や主節にある動作や出来事が継起し、並列的な関係を表す。

- ①毎朝ご飯を食べて学校へ来ます。（継起）
 ②おじいさんは山へ柴刈りに行って、おばあさんは河へ洗濯に行きました。（並列）

一方、「して」は「してください」や「してくれ」などの省略形式である¹⁷とされている。本研究では、省略形式「して」による依頼表現を扱う。

3.1. 「して」系による依頼形式

「して」は話し手が下位者や対等人に対して用いる。女性がよく用いるが、男性でも使用する。くだけた会話でよく「して」が見られる。

- (163) 「ごめんなさいね。私の顔を立てて火曜日の午後ちよっぴり時間をあけて下さいよね。三十越すと男は結婚も億劫になっちゃうのよねえ。分るけど、うっかり私お調子者で先方へ逢うっていっちゃったの。結果はどうでもいいのよ。忙しけりゃ二、三分でいいの。二、三分だけ、おばさん助けて。お願い」（君：p.90）
 近所のおばさん→章二
- (164) 「おばちゃん、一枚焼いて」笹垣は声をかけた。
 中年女はあわてて新聞を閉じた。「ああ、はいはい」（白夜：p.8）
 男性客→駄菓子屋の女将

「助けて」は「助けてください」、「焼いて」は「焼いてくれ」の省略であると考えられる。しかし、(164)「焼いて」のように、「して」は「してくれ」ほど依頼性が強くない場合がある。

「お～になって」は「して」の尊敬語である。話し手は上位者や対等人に対して使用する。(167)「連れていらして」は「連れてきて」の尊敬語であり、(168)「しゃべって」は「言って」の尊敬語である。

- (165) 「お話はそれだけです。結構なお話を断わって、申し訳ありませんが、これで失礼します。お発ちになる時は、お知らせください」
 慎一郎は軽く一礼して立ち上がった。
 「お待ちになって！」
 美枝子が畳に片手をついて、必死になって慎一郎を見上げた。

¹⁷ 「して（くれ）」は高橋（1975：p.12）、「して（ください）」は柏崎（1993）を参照。

- 「何かご用ですか」(自我：p. 117-118)
 女性→夫の同僚
- (166) 「どうぞ、お入りになって、まだ掃除もしていないけど」
 「突然でごめんなさい。でも、突然でない、と、会って頂けそうになかったの」(霧：p. 205)
 女性→愛人の妻
- (167) 要するに、あの小説家の書くものは面白くない、というのであった。
 「そいつは面白い話だ。こんどあいつに伝えておこう」
 「風間先生、また更級先生を連れていらして」亮子が言った。
 「あいつはバーと女が嫌いですよ」(梅：p. 167)
 クラブのママ→男性客
- (168) 「香子。妹がびっくりしちゃうから、私にしゃべってよ」
 「失礼いたしました。——いえね、私、犯人の背の高さを知りたかったんですの」(名探：p. 327)
 少女→親友(お嬢さん)

3.2. 「しないで」系による依頼形式

「して」形の否定として「しないで」と「しなくて」がある。「しなくて」は理由や並列という機能を有するが、依頼の意味がないことから、本研究の対象外にする。「しないで」は依頼形式に属する。尊敬語の用法も見られる。

- (169) 銃を向けられ、清水くんの顔が恐怖に歪んだ。
 「撃たないで！」(スペース：p. 31)
 銀行員→強盗
- (170) 「並んで、並んで！はい、中へ入ったら、止まらずに歩いて下さい！立ち止まらないで！」と係員が声をからしている。(名探：p. 210)
 係員→展示会場の客
- (171) 「まだまだお若いんですよ、奥さんは。どんな人とでも結婚できるじゃありませんか」
 「先生！どうぞそんなことはおっしゃらないで。一人で生きて行けて、おっしゃってください」
 「……」(自我：p. 118-119)
 女性→夫の同僚
- (172) 「八重さんは、いつか耕介の前から姿を消す人なのよ。こんなこと、永遠には続かないんだわ。だから、思いのまま振る舞って下さい。同情じゃないんです。かなえられなかった夢を八重さんの中にも耕介の中にも、残さないで下さい。いえ、耕介の中に、絶対に残さないで。そんな残酷なこと、私になさらないでね。私、これから何十年も、あの人と生きていかなくちゃならないんですから」
 和歌子は玄関で振り向き、
 「これから何十年も、私、あの人と生きていけるかしら」と言った。
 八重は、黙って俯くことしか出来なかった。(霧：p. 210)
 女性→夫の愛人

「撃たれないで」「立ち止らないで」「おっしゃらないで」「なさらないで(ね)」のように、話し手は聞き手の言動に対して反対の意見を述べている。

4. 希望の助動詞による依頼形式

4.1. 「したい」による依頼形式

「したい」は、話し手が自身の希望を表す形式である。「したい」によって、話し手は聞き手に依頼行為を実行してほしいと述べている。「願いたい」「お願いしたい」「頼みたい」や、「してもらいたい」「していただきたい」などもあるが、第2章の第1、2節で既に論述して

おり、ここでは省略する。本節では〈一般動詞＋「したい」〉を論じる。

- (173) お昼頃、警察の人が、「事件について聞きたい」とやって来た。わたしは、ありのままのことを話した上で、
「でも、原島紀美子さんて、とてもやさしい、かわいい方なんですよ。意識的にあんな恐ろしいことができるような方じゃありませんわ」と一生けんめい言い添えた。(猫：p. 168)
刑事→女性
- (174) お父さんのこと、知っていますか？大至急会いたい。(R：p. 100)
母→娘

くだけた場面で下位者や対等人に対して普通体を使用する。「したくない」は「したい」の打ち消し形式である。

- (175) 「このあたり、もう食事のできる店なんかないわよ」
「新宿ならタクシーで二十分もあれば着く」
「遠くには行きたくない。疲れてるの」
「そうか。それなら仕方がないな」男は両手を小さく上げた。「またそのうちってことにしよう」(白夜：p. 639)
薬剤師→知り合ったばかりの男性
- (176) はじめ、散歩に行きましょう、と鮎子が言い出したとき、
「こんな夫の姿を世間にさらしたくない」
と猛烈に拒否したのは操夫人だった。(老人：p. 27)
訪問看護婦→患者の奥さん

「したい」に「のだ」のつく文は、話し手が聞き手に情報の提供を要請する場合によく用いる。「したい」に「けど」「が」を後接すれば、語気を和らげる効果がある。

- (177) 「ひとつだけ聞きたいんだ」
「なに」
「僕は、その淡路新一郎に似てる？」
「似てるわ」
「どんなところが」(霧：p. 169)
十代後半の男の子→母の親友
- (178) 「渦電流探傷という項目で、これまでにどういう出願があったか調べたいんだけど」
「うずでんりゅう？」
「こういう字を書くんだ」誠は持っていた書類のタイトルを彼女に見せた。(白夜：p. 351)
男子社員→派遣社員

「したいことがある」は「したいのだ」と大体同じく、予告の機能を有する。「したいことがあるのだ」は「したいことがある」より婉曲で、「けど」をつけると、語気を和らげる効果がある。

- (179) 「君に打ち明けたいことがある」彼がいうと、千都留は顔を上げた。その目は少し潤んで見えた。
「三年ほど前、僕は結婚した。だけどじつは結婚式の前日、僕はある重大な決心をして、ある場所に行ったんだ」(白夜：p. 503)
男性→好きな女性
- (180) 「ちょっとちょっと。聞きたいことがあるんだ」コーヒーが、中学生を階段の下まで呼び出した。
「松下さんのこと？どんな人って、とってもいい人だよ。アンパイアの資格もってて、野球の

ことならよく教えてくれるよ」(一匹：p. 47)

小学生→知っている中学生

- (181) 「弥生。ちょっとききたいことがあるんだけど……」と母が横顔のまま私の名をしっかりと呼んだ。

何だろう、と私は母を見た。母は少しとまどったような目をして私を見つめた。ひとり何か心配ごとを抱えている時の顔だった。哲生に初めて彼女ができた時も、私に初めて生理が来た時も、父が過労で倒れた時も、母はこういう表情で私の名を呼んだ。その度に私はいつでも、何も隠しごとのできないような、妙に心細い気持ちになった。音もなく続いてきた家族の歴史に吸い込まれるような心地で、私は母の次の言葉を待った。(予感：p. 30)

母→娘

丁寧体として「したいです」「したいのですが」「したいことがあります」「したいことがあるのです」などが見られる。

- (182) 「その理由について、一つ思いついたことがあるんです」

「何ですか。是非聞きたいですね」(白夜：p. 586)

依頼人→探偵

- (183) 「すみませんが、これからちょっと早川さんの部屋まで行きたいのですが」

「彼女の部屋へ？何のために？」

「確認したいことがあるんです。すぐに終わります」

「これは……」

「それはお持ちになってください」

いい終えると加賀は歩きだした。仕方なく美千代は若い刑事と共に、彼の後を追った。(嘘：p. 43)

刑事→女性

- (184) 「それをお話する前に確認しておきたいことがあります。『アラビアンナイト』のことです。

あの作品は弓削バレエ団による創作バレエということになっていますね」

「おっしゃるとおりです」(嘘：p. 28)

刑事→女性

- (185) 彼等の姿が消えてから、笹垣はカウンターに近づいた。「松浦さんにもお訊きしたいことがあるんですわ」

「何でしょう」松浦は愛想笑いをしながらも身構えた。(白夜：p. 56)

刑事→質屋の店長

謙譲語の用法としては、「伺いたいですね」「お目にかかりたいのです」が見られる。

- (186) 「だったらまずあなたのご意見を伺いたいですね。犯罪捜査の専門家として」

「私に言わせれば、そいつはまったく思慮分別のない大馬鹿野郎ですな」一言のもとに薮田は言い放った。(獲物：p. 108)

心理学者のキャスター→刑事

- (187) 「奥さまは、きょうは、ご気分が悪くて……。あのう、どちら様でしょうか？」

「戸村と言いますが……。ちょっとでいいから、お目にかかりたいのです」

「戸村さん？じゃあ、保ちゃんの？」(誘拐：p. 143)

男性→手伝いの少女

「お<和語動詞>したいです」「ご<漢語動詞>したいです」などの用法も見られる。

- (188) 「笹垣さん、あなたのおっしゃっていることは半分は当たっています。でも残りの半分は的外れです」

「まず的外れというところからお聞きしたいですな」(白夜：p. 681)

刑事→男性

- (189) 「今度は私が先生にご質問したいのですが」
「どんなことでしょうか」当惑気味に降居は答えた。
「実はあの桶狭間権兵衛というチャリティの元締めのことなんです」藪田は眉間に皺を寄せて言った。(獲物：p. 106)
刑事→心理学者のキャスター
- (190) 「この十日ばかりいろいろ思い悩みましたが、もはやチャリティは私の手に負えないところまでできたようです。そろそろすべてを明らかにするときかもしれません。ついでに降居さんにご相談したいのですが——」
「私でかまわないのですか」意外な申し出に降居はつい声を張り上げた。(獲物：p. 219-220)
十億円チャリティの元締め(年配の男性)→心理学者のキャスター

「お(ご)～したいことがありますて」は「お(ご)～したいことがあります」の中止形で、断定の語気を和らげる効果がある。「お(ご)～したいことがございまして」は更に丁寧になる。

- (191) 「ずっと待っておられたんですか」
「いえ、つい先程来たところです。二、三、お尋ねしたいことがありますて」
「そうですか。じゃ、まあどうぞ」洋次は鍵を出しながら門扉を開けた。(嘘：p. 77)
刑事→被害者の夫
- (192) 「突然、お邪魔いたしました。遠野と申します。実は、室沢さんのことでちょっとおうかがいしたいことがございまして」男はおずおずと言った。
「それでは、警察の方ですか」
「いや、警察ではないのですが……」(凶：p. 158)
男性→初対面の女性

4.2. 「してほしい」による依頼形式

「してほしい」は「したい」と違って、動作主が話し手でなく聞き手である。話し手は、直接に聞き手に実行してほしい事柄を述べる。くだけた場面で、または下位者や対等人に普通体を使用する。

- (193) 「どこで誰と会うのかだけ、教えてほしい。心の準備が必要やから」
「そんなものは必要ないんやけどな」(白夜：p. 142)
中学校男子生徒→クラスメート
- (194) 「じつは彼女の髪を切ってやってほしいんだ」一成は江利子のほうに掌を向けた。
「似合う髪形に」
「なるほど」(白夜：p. 272-273)
客→美容院のマスター

「してほしい」「してほしいのだ」なども見られる。ただし、(194)「じつは彼女の髪を切ってやってほしいんだ」のように、「してほしいのだ」は「じつは」と繋がる場合、依頼というより理由説明という機能が読み取られやすい。

- (195) 「篠塚さん、その写真の顔と、この名前を、どうか頭に叩き込んでください。そうして、もしもどこかで見かけることがあったら、どういう時であっても、すぐに私に連絡してほしいんです」
「そうおっしゃられても、一体どこにいるんですか、この男は。それがわからなければ、単なる指名手配と同じですよ」一成は小さく両手を広げた。(白夜：p. 686)
刑事→男性

「篠塚さん、その写真の顔と、この名前を、どうか頭に叩き込んでください」は、話し手からの最初の依頼である。「もしもどこかで見かけることがあったら、どういう時であっても、すぐに私に連絡してほしいんです」は、命題内容が前の命題内容と異なることから、理由説明ではなく、依頼表現である。

丁寧体として「してほしいです」「してほしいのです」「してほしいことがあります」などが見られる。

(196) 追伸 実紀ちゃんの写真、できればもっと送ってほしいです。(手紙：p. 339)

手紙 兄→弟

(197) 「では、一つ教えてほしいことがあります」

「何ですか」

「名前です。その男の名前を教えてください。それから最後に住んでいた場所の住所も」(白夜：p. 618)

探偵→刑事

本章で述べた依頼形式以外、場面や文脈による依頼表現もある。しかし、定まった形式もなく、語用論の推論を通じなければ話し手の依頼の意図が見逃される可能性もあることから、このような依頼表現を婉曲的依頼表現と呼ぶことにして、第8章では詳しく論じる。

5. 構文論による分類の問題点

構文論から依頼表現を分析する研究は、一文に限られている研究が多い。依頼文に用いられている動詞の語彙的な意味に依存していることによって、依頼表現の意味・機能が変わる。因って、動詞の機能か、または依頼形式の機能かは、区別できなくなる¹⁸。動的な依頼表現は、話し手と聞き手とのコミュニケーションの中で生み出されたものである。Thomas (1998)、滝浦 (2008) などの研究者に指摘されているように、表現形式と話し手の意図(「発語内の力」や「発話の目標」とも言われている¹⁹)は、決して一対一ではない。したがって、一貫性のある依頼表現を分析しなければ、話し手の意図を誤解したり、依頼表現の全貌を見逃したりする可能性がある。

¹⁸ 例えば、佐藤 (1992) が「してください」を分析する研究である。第3章で詳しく論じる。

¹⁹ Searle (1986)、Thomas (1998) などを参照。

第3章 依頼表現の新しい分類の提案

1. 話し手の意図と依頼表現

第1章で述べたように、国立国語研究所（1960）は話し言葉を対象にして、話し手の表現意図とそれが表われる文表現との関係を解明している。依頼表現は国立国語研究所（1960）の分類によると、命令的表現に属している。依頼表現と話し手の意図との関係を明らかにするため、国立国語研究所（1960：p. 4）の分類を再掲する。

- A 相手に対して、あらたに何かを表現しようとする意図
 - a 相手に対して求めるところのない表現意図
 - ⑤ 詠嘆表現
 - ⑥ 判叙表現（判断既定の表現、判断未定の表現）
 - a' 相手に対して求めるところのある表現意図
 - ⑦ 要求表現（質問的表現、命令的表現）
- B 相手のことばに対して、何かを表現しようとする意図
 - b 相手に対する受容対応の表現
 - ⑧ 応答表現

この分類によって、命令的表現は質問的表現と同じく、③要求表現の下位分類に属している。「相手に対して求めるところのある表現意図」という分類の基準に基づくものである。

Searle（2006：p. 21-22）は、「発語内の目標」「適合の方向」「誠実性条件」「命題内容」の4つの角度から、次の通りに指令型発語内行為（directives illocution）を分析している。

発語内の目標：話し手が当の行為によって聞き手に何かを行わせようと試みるという事実のうちにある。

適合の方向：《世界を言葉へ》である。

誠実性条件：欲求（want, desire）や願望（wish）である。

命題内容：どの場合においても、聞き手HがAという或る未来の行為を行うということである。

Searle（2006）は「発語内の目標」と「誠実性条件」によって、国立国語研究所の「相手に対して求めるところのある表現意図」をもっと詳しく分析している。即ち、指令型発語内行為における話し手の意図とは、聞き手に自身の欲求や願望を実行させようとすることである。本研究では、話し手がどのように依頼表現を用いて聞き手に自分の意図を認識させるかを解明するため、新しい分類法を提案する。

2. 依頼表現の4分類²⁰

本節では176冊の現代小説に使われている会話文（登場人物のやりとりと地の文を含めるもの）から、依頼表現に関する用例を考察する。第1章で述べたように、依頼表現についての先行研究は、依頼形式や依頼性を分類基準にしている。しかし、動詞の語彙的な意味に依存していることによって、依頼表現の意味機能が変わる。そして、動詞に基づく命題内容（propositional content）²¹を依頼形式の機能と混同する研究が見られる。例えば、「してく

²⁰ この章の一部は、『別府大学国語国文学』第50号（2008）に掲載されたものである。

²¹ 命題内容とは、話者が切りとった現実世界の状況（出来事、状態、行為、過程など）を表現したものである。中右（1979：p. 223）

ださい」の意味・機能について、佐藤（1992：p. 144）は、次の通りに指摘している。

意志的な具体動作をさししめす動詞が、「してください」のかたちをとって、述語にすえられるとき、その文は、／相手に動作の遂行をおねがいする／という意味になる。この意味を土台として、さまざまな動詞がつかわれるとき、それぞれの文は、discourse のなかで《懇願》《すすめ・提案・案内》《さしず・忠告・助言・はげまし》《叱責・警告》《謝罪》《許可・許容》《同意》のような、意味的なニュアンス、臨時の機能をになってあらわれてくる。

しかし、佐藤（1992）が説いている「意味的なニュアンス、臨時の機能」は、動詞の語彙的な意味による機能であり、「してください」のみの機能ではないと考えられる。佐藤（1992：p. 141）が挙げている例を用いて詳しく説明する。

208) 鈴江があわただしく網棚から鞆をおろすと、古橋は、「私も引き返す。」と言った。鈴江はおしとどめ、「これは私の仕事です。局長は予定どおりこのまま北海道へ行ってください。詳細は、ご報告いたします。」と答え、足ばやにホームにおりた。（破獄 345）

実線を引いた「局長は予定どおりこのまま北海道へ行ってください」の「行ってください」を取り出して、動詞「行く」を異なる動詞と入れ換えれば、次の通りになる。

- (198) a. 行ってください。 ⇒指示・助言
b. 食べてください。 ⇒勧め・指示
c. 助けてください。 ⇒依頼・懇願

この、(198) a b cは全て「してください」の例である。aが「指示・助言」であるのに対して、bは「勧め・指示」、cは「依頼・懇願」というように機能が変わる。これは依頼表現が「行く」「食べる」「助ける」という動詞の語彙的な意味に依存していることによる結果だと考えられる。しかし、

- (199) a. 行ってくれ。 ⇒指示・助言
b. 行って。 ⇒指示・助言

このように、(198) a「行ってください」を(199) a「行ってくれ」、b「行って」に入れ換えれば、それぞれ話し手と聞き手の属性、話し手と聞き手の関係、依頼内容、場面などの語用論的条件が変わる。しかし、依頼形式「してください」「してくれ」「して」の3つの「指示・助言」といった機能はあまり変わらない。

一方、(198) a「行ってください」を(200)に入れ換えれば、次の通りになる。

- (200) a. 行ってくれる？ ⇒依頼、問いかけ
b. 行ってらおう。 ⇒依頼、意志表明
c. 行ってほしい。 ⇒依頼、希望

a b c 3つの形式は、「依頼」の機能を持つことが共通する。異なるところは、aが「問いかけ」、bが「意志表明」、cが「希望」の機能も併せ持つことである。このように、「してください」は「してくれ」「して」と共通の機能を持つが、「してくれる？」「行ってらおう」「してほしい」と共通の機能は持たないことが分かる。要するに、「してください」「してくれ」

「して」などの依頼形式は、従来、「話し手の発話時点における心的態度」²²と定義されるモダリティ (modality) に属しているが、話し手の理解 (understanding)²³で共通の機能を持つと考えられる。本研究では、この共通の機能を「形式機能」と呼ぶことにする。

2.1. 命令的依頼表現

用例数が最も多い「してください」「してくれ」「して」などによる依頼文から検討する。

- (201) 面会室まで、彼女は係員に誘導された。
「面会時間は五分間です。どうぞ、そのおつもりで、大事な話から先に話してください」
その注意に、頼子は黙ってうなずいた。(波-下 : p. 332-333)
拘置所の面会室の係員→女性
- (202) 小野木は、先輩検事の机の前に立った。
「やあ、ひどい目にあつたらしいな。まあそこに腰かけてくれ」
小野木は、まっすぐに立った。
「おそくなりました。汽車が不通だったので、今、やっと帰ってまいりました」(波-上 : p. 236)
男性検事→後輩 (若い男性)
- (203) 「じゃあ今度、サイン本を何冊かあげるね。みんなで分けて」
「はあ、どっちでもいいですけどお」
そういうときは、お世辞でもいいから「ありがとうございます」って言うものだろう。(空中 : p. 252-253)
女性患者→看護婦
- (204) 「ユミちゃん、ユミちゃん、勝木のおばちゃんだよ、開けてちょうだい」
窓をほとほと叩く音と、呼びかける声を聞いたときには、眠れないままにぼんやりとしていた頭がいっぺんに冴えて、由美子は階下まで文字通り飛んで行った。戸を開けて、宏枝がフード付けのコートにすっぽりと身を包み、寒そうに立っているのを見つけて、ああ本当に間違いなく勝木のおばさんだと判ると、とたんに泣けてきてしまった。(模倣-下 : p. 227)
五十代の女性→幼なじみの娘
- (205) 「新聞社の者ですが」
「どこの？」
「陽道新報です」
太市は仕方なしにいった。昔は、大新聞の名を胸を張っていったものだ。
「陽道新報だと？そうか、じゃ、お待ち」
老人は二階の障子をしめた。かれは戸口から現れた。(張込み : p. 369)
老人→新聞記者 (三十代の男性)
- (206) 「おかあさんには断って来たの？」とお祖母ちゃん。
「ううん」と二人でかぶりを振る。
「じゃあいいのよ、それでも、これからも内緒でいらっしやい」(サウス-上 : p. 218)
お祖母ちゃん→孫たち

用例 (201)「どうぞ、そのおつもりで、大事な話から先に話してください」は、拘置所の面会室の係員である話し手が自分の仕事に基づいて相手にアドバイスを与えている。(202)「そこに腰かけてくれ」は話し手が部下に座ろうと勧めている。柏崎 (1993 : p. 76) は、用例が少ないという理由で「してくれ」が「勧め機能をあまり持たないということが言える」

²² 〈話し手〉とは発話主体のことであり、〈心的態度〉とは人間の知情意を包括するあらゆる心理作用のことであり、また〈発話時点〉とは厳密に〈瞬間的現在時〉の意味に解釈されなければならない。中右 (1994 : p. 20) を参照。

²³ Searle (1986 : p. 83) は、「意味するという行為に特徴的な意図された効果は、理解である」と定義している。本研究では、話し手が発話する表現を用いる際、その表現に含まれている機能と意図された効果を結合させていることに対する認知は、理解であるとする。

と指摘している。しかし、(202)「そこに腰かけてくれ」に示されるように、話し手は聞き手より上位なので命令に近い意味が読み取られるが、話し手が好意を込めて「そこに腰かけてくれ」と提案するという視点²⁴から見ると、勧めの機能も感じられる。(203)「みんなで分けて」は、話し手が聞き手に自分の本を他の人に分けてほしいと頼んでいる。(204)「開けてちょうだい」は、話し手が親しい近所の娘にドアを開けてほしいと頼んでいる。

また、(202)「してくれ」は男性がよく用いるが、(203)「して」、(204)「してちょうだい」は女性がよく用いる。(205)「お待ち」は「お+<連用形>」の例で、話し手が聞き手に待つてほしいと頼んでいる。(206)「これからも内緒でいらっしやい」の「いらっしやい」によって、話し手が親しい下位者に歓迎の意を表している。このように、聞き手の視点から依頼を切り出す「してください」「してくれ」「して」「してちょうだい」「お+<連用形>」、尊敬語動詞の命令形などによって、話し手の聞き手に対する強い依頼性が伝わる。しかし、用例(203)のように、話し手は必ずしも「聴者に対する行為遂行の強制²⁵」という権利を持つには限らない。話し手が聞き手に応答の余地があまり与えないことから考えると、命令に近い感じがあることを否めない。したがって、「してください」「してくれ」「して」「してちょうだい」「お+<連用形>」、尊敬語動詞の命令形などの依頼表現を「命令的依頼表現」と呼ぶことにする。

2.2. 質問的依頼表現

次に、「してくれる(か)?」「してくれない(か)?」「してもらえる(か)?」「してもらえない(か)?」を論じる。

(207) そのとき、ドアにノックの音がした。

「お兄ちゃん、新聞屋さんが集金にきたの。出てくれる?」

僕は舌打ちした。叔父さんは暗がりから小声で「行ってやれよ……懐中電灯でしるしを見つければいいんだから、簡単さ」

僕はうなずいて部屋を出た。妹に見えないように素早くドアを閉め、

「へんだな。いつもは日曜日に集金にくるはずじゃないか」(隣人：p. 37)

女の子→兄

(208) ゴム引きのレインコートを着た警官が人だかりを整理しているのが見えた。村野は人込みを掻き分けて前に進んだ。

「何か起きたのか教えてくれないか。俺は『週刊ダンロン』の記者だ」

「おや」と警官は眉を上げて村野を見た。「『ダンロン』の記者さんが刺されたんですよ」(灰：p. 361)

週刊誌の男性記者→警官

(209) 「……会社には連絡しないって、約束してもらえます?」

「ええ、約束します」(サウス-上：p. 200)

男性探偵→訪問先の若い男性

(210) 「本当に、そんないいですから。あたしがびつくりさせてしまうたから、いかんかったんで

²⁴ 視点とは、依頼文において話し手が何処に焦点を置いて、聞き手に対する依頼行為を描写するかということである。大江(1975：p. 33)の「視線の軸」(「授受動詞が描写する授受のできごとを、その当事者として内部から主観的に眺める人の位置」を表す)と久野(1978：p. 129)の「カメラ・アングル」(話し手が何処にカメラを置いて、この出来事を描写しているかのことである)を参照して定義した。

²⁵ これは、山岡(2008：p. 7)の命令に対する定義である。

す。すみません」

「でも、買っていただいた分はお返しいたしますから」

「いいんです。そのかわり、と言うてはなんですけど、あとでお買物に付き合うてもらえませんか。ベビー用品で、どんなん揃えておかんなんのか、ようわからへんし」

「わかりました。この子がミルク飲み終わったら、一緒に見にいきましょう」(盗り：p. 242)

若い女性→初対面の若い主婦

(207) (208) の下線部は聞き手の視点から、(209) (210) の下線部は話し手の視点から聞き手に対する依頼行為を描写するものである。「してくれる (か)」「してくれない (か)」の尊敬語「して下さる (か)」「して下さらない (か)」と、「してもらえる (か)」「してもらえない (か)」の謙讓語「していただける (か)」「していただけない (か)」の例も見られるが、ここでは省略する。「してくれる」系と「してもらえる」系による依頼表現は、問いかけという一次機能と依頼という二次機能を持つことから、「質問的依頼表現」²⁶と呼ぶことにする。

2.3. 要望的依頼表現の表出型

(211) 「たまには会いたい」電話で鼻声を出したら、尻尾を振って駆けつけてきた。

「うれしいよなあ。広美がおれのこと、誘ってくれるなんて」

愚か者め。何も知らないで。(プール：p. 158)

若い女性→親しいカメラマン (男性)

(212) 「どこで誰と会うのかだけ、教えてほしい。心の準備が必要やから」

「そんなものは必要ないんやけどな」(白夜：p. 142)

中学校男子生徒→クラスメート

(213) 「越智君。坊城の町から引きあげてくれ。今夜は福岡市内にでも泊って、明日は針江に行くのだ」

「はあ」

「針江にいる下坂の細君の叔母夫婦に会ってね、結婚してから下坂が叔母の家に来たかどうかを聞いてもらいたい。その叔母のつれあいはどういう仕事をしているのか？漁業か、それとも農業か」(場面：p. 226)

警官→他署の警官 (下位者)

(214) 「おたずね致します。峠さまとお待合わせの方、いらっしゃいましたら、カウンターまでお越しを願います」

呼び出しの放送は、二回繰返して行なわれた。(影：p. 374)

呼び出しの放送 (女性)

(215) 「僕も飛入りの仲間入りをさせていただきたいのです。新郎新婦、寛容な御許可をおねがいます。御媒酌、御両親がた、司会の方、それに来賓の方々、どうぞお許し下さい。もとより御許しがなければ失礼をお詫して引きさがります、いかがでしょうか？」(おと：p. 186)

男性→披露宴の客

(216) 「裁判長！只今の原告代理人の尋問は、誘導尋問でありますから、取消しを願います、また被告を法廷において非難するような発言は好ましくありません！裁判長からご注意を願いたい」(巨塔-3：p. 186)

弁護士→裁判長

(217) 「串田医師に、家族はいないのですか？」

「広島にご両親と、弟さんが居られますが、そちらにも、何の連絡もないそうです。今までお

²⁶ 「してくれる」系・「してもらえる」系以外の疑問文や動詞の可能形による依頼表現は、推論を通じなければ話し手の依頼の意図を見失う可能性があることから、「婉曲的依頼表現」と呼ぶことにする。また、「疑問」という言葉は「疑い」と間違えるおそれがあるので、南 (1985) の用語「質問文」を参照して「質問的依頼表現」と呼ぶことにする。

話したことは、くれぐれも、内密にお願いしたいのですが」

「わかっています」(誘拐：p. 160)

病院の事務長→探偵

- (218) 「教室のことだけではなく、もちろん診療面における怠慢や事故も、一切、僕の責任になるから、さっき云った分担で留守中の管理を頼みたい、万一、事故が起った場合は、はっきり責任を取って貰うから、そのつもりで頼む、いいかね」(巨塔2：p. 353-354)

教授→医局員

- (219) そこへ、高野を欠き、現在は書籍コーナーの事実上のチーフになっている女史がやって来た。
「ごくろうさま。交代するからお昼にしてね。午後からは倉庫で検品をお願い
「阿弥陀様、お助けを」を、佐藤が言った。(魔術：p. 234)

女性→職場の男性部下

(211) ~ (219) の下線部は話し手の視点から聞き手に対する依頼行為を描写するものである。話し手は「したい」「してほしい」「してもらいたい」「願う」「お願いする」「願いたい」「お願いしたい」「頼みたい」「お願い」などを用いて希望を述べることによって、聞き手に自身の依頼の意図を推測させる。希望表明という一次機能と依頼という二次機能を持つことから、「要望的依頼表現」と呼ぶことにする。また、話し手は聞き手に対する依頼内容を具体的に表出することから、「要望的依頼表現」の下位分類「表出型」に属することにする。

2.4. 意志的依頼表現

- (220) 「その電話がかかったと称するころ、丹野氏はすでに殺されていたのか」

「そうだったと思います……」

「君たちの犯行計画を、もう一度、できるだけ詳しく話してもらおう」

「はい……」ユリ枝はもう淡々とした口調になっていた。(蒸発：p. 330)

刑事→女性犯人

- (221) 「これを分解したり複合したりして調子を整えました。うまくいったかどうか、一つ聞いていただきますでしょうか」

和賀はテープをまわした。

一種異様な音が出はじめた。(砂-下：p. 49)

男性→婚約者

- (222) 「君、所属と氏名は？」

佐瀬の鋭い視線に刺され、人形顔に生身の緊張が走った。

「栗田と申します。所属は本部警務課です」

「警務課のどこだ？留置管理係か」

「いえ……人事係です」

「だったら退席願おう。君が立ち会うべき場所ではない」

梶の監視役であると最初からわかっていた。(半落ち：p. 88)

検事→若い警官

- (223) 「みごとです。これからは山中さんにすべてお願いしようかな」

「こつちはちつとも構ひませんよ。今のところはブラブラしてをりますから」

「それはありがたい。ではガリ版と鉄筆はお預けしておきます」(東京：p. 31)

隣組長→隣の住民

- (224) 嬉しさまぎれに、ついうっかりおふくろに「松山みやげは何がいいですか」と訊くと「タルトがいいわ。タルトにもいろいろあるけれど、一六タルトにかぎるわよ」と、一六タルトの社長が喜びそうなことを言った。

タルトといっても、おふくろの言うのはいま風のフランス菓子ではなく、ずっと昔から四国松山で生まれ育まれた、カステラであんこを巻いたような、和洋折衷の名物菓子のことである。

「それに内子のローソクも頼もうかしら。須美ちゃんには、そうね、伊予絣のお財布なんか

いいわよ」

「とんでもございません」と須美子はびっくりして手を振った。「私は坊っちゃんまがご無事でお帰りになれば、それで十分です」(坊っちゃん：p. 9-10)

母→息子

(220)「できるだけ詳しく話してもらおう」、(221)「一つ聞いていただきましょうか」は「してもらおう」「していただく」による依頼表現である。(222)「退席願おう」、(223)「これからは山中さんにすべてお願いひようかな」、(224)「それに内子のローソクも頼もうかしら」は「願おう」「お願いしよう」「頼もう」による依頼表現である。「願おう」「お願いしよう」「頼もう」は「願う」「お願いする」「頼む」に動詞の意向形「う・よう」を後接するものである。用例(223)のように「かな」、(224)のように「かしら」をつけて疑いの機能を表す。このように、話し手が意志表明の形で聞き手に何か依頼するということから、「意志的依頼表現」と呼ぶことにする。

話し手の視点か聞き手の視点が命令的依頼表現、質問的依頼表現、要望的依頼表現の表出型、意志的依頼表現といった4分類との関連は、次の通りである。

表4 視点と4分類

依頼表現における視点	4分類
聞き手	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 命令的依頼表現：してください。してくれ。して。してちょうだい。お+<連用形>。尊敬語動詞の命令形 など ◆ 質問的依頼表現：してくれる(か)。してくれない(か)。してくださる(か)。してくださらない(か) など
話し手	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 質問的依頼表現：してもらえる(か)。してもらえない(か)。していただける(か)。していただけない(か) など ◆ 要望的依頼表現の表出型：したい。してほしい。してもらいたい。していただきたい。～願いたい。お(ご)～願う。お願いする。お願いしたい。頼みたい。お願い など ◆ 意志的依頼表現：してもらおう。いていただく。願おう。お願いしよう。頼もう など

3. 依頼表現の発想モデル

依頼表現の用例を考察すると、話し手が聞き手に対して依頼の意図が生じた時点から、一貫性のある依頼行為を完成する時点まで、幾つかの段階を持つことが分かった。Lakoff (1993 : p. 79) は「人が理想認知モデル (idealized cognitive model, 略して ICM) を用いて知識を組織化して、カテゴリーの構造ならびにプロトタイプ効果はそうした組織化から生じる副産物だ」と考えている。例えば、見ることについての ICM は次の通りである。

1. 何かが見えるとき、そのものはあるがままに見えている。
2. 見えるものは意識されている。
3. 見えるものは目の前に存在している。

Lakoff (1993 : p. 157)

また、Lakoff (1993 : p. 487) は怒りに関するプロトタイプの ICM を論じる時、「このモデルは時間の次元を持ち、幾つかの段階を内に含んだシナリオとして考えることができる。われわれはこれを『プロトタイプ・シナリオ』と呼ぶこと」にし、怒りの条件と5つの段階を述べている。

プロトタイプの怒りのシナリオ：

条件

被害者=S
報復の行為者=S
怒りの標的=W
怒りの直接的原因=怒りを引き起こす出来事
怒りの振舞い=報復

第一段階：怒りを引き起こす出来事
第二段階：怒り
第三段階：怒りを制御する試み
第四段階：制御の失敗
第五段階：報復

Lakoff (1993 : p. 491-492)

5つの段階に対応する怒りの短文はプロトタイプであるが、「満たされることがない怒り」(例：His anger lingered on. →彼の怒りはいつまでも消えなかった)、「欲求不満の怒り」(例：He was climbing the walls. →彼は逆上していた)、「八つ当りの怒り」(例：When I lose my temper, I kick the cat. →かんしゃくを起こすと私は猫を蹴る)、「度の過ぎた反応」(例：Why jump down my throat? →どうしてそんなに食ってかかるんだ) などのような表現は非プロトタイプである、と Lakoff (1993) は主張している。

依頼表現も Lakoff が説いている「怒り」のように、話し手が聞き手に対して依頼の意図が生じた時点から一貫性のある依頼行為を完成する時点まで、幾つかの段階があると考えられる。Lakoff を踏襲して、「依頼表現の発想モデル」を提案する。依頼表現の発想モデルとは、話し手の依頼の意図が生じた時点から、一貫性のある依頼行為を完成するまで話し手の思考と実行のストラテジーを指す。

(I) 依頼表現の発想モデル：

- a. 話し手が何か不足を感じている。
- b. 話し手は自身の不足を聞き手の力によって解決できていると思っている。
- c-1. 話し手は自身の希望・意志を述べて、聞き手に協力してほしい気持ちを伝える。
- c-2. 話し手は聞き手の協力を依頼する。

(I) a・bは言葉に表われない話し手の思考、つまり依頼の意図である。第1章で述べたように、Searle (1986) は依頼の事前規則(「1. H²⁷はAをする能力を持つ。SはHがAをする能力を持つと信じる。2. SとHの両者にとって、通常の事態の進行においてHがAすることは自明ではない」と誠実性規則(「Sは、HがAすることを欲する」)を提案しているが、聞き手に対する依頼の動機を言及しない。しかし、日本語の依頼表現を考察する場合、a「話し手が何か不足を感じている」はまさに話し手が希望を述べる形や要請する形などを選択する動機である。つまり、話し手の「不足」で持たされた依頼行為は、話し手と聞き手とどちらのなわばりに属するかによって、話し手の依頼形式の選択を変更するのである。

何か不足を感じているというのは、何かほしい、何かをしたいという意欲でもある。森田 (1980 : p. 427) は「ほしい」の対象を論じる際に、次の通りに述べている。

²⁷ Hは聞き手、Sは話し手、Aは話し手が聞き手に依頼する行為である。

- ①それが自分に欠けていると思うので手に入れたい。
 - ②それが不足していると思うので、もっとたくさんにしたい。
 - ③その対象に関心・興味・欲望などを感じて、自己の所有としたい。
- このうち①は主に事柄、②は物、事柄、③は人、物が対象となることが多い。

依頼内容は通常「それがあるはずだと思うが、欠けていること」も「現状よりもっとたくさんしてほしいこと」も含める。したがって、本研究では、「欠如」と「不足」と2つの代表として「不足」を用いる。

また、依頼表現の発想モデルb「話し手は自身の不足を聞き手の力によって解決できている」とも不可欠である。これはSearle（前掲）の「事前規則」に対応する以外、Lakoff（1993）の「語用論的前提」²⁸にも対応できると考えられる。

3.1. 依頼表現の表出

命令的依頼表現と質問的依頼表現は、依頼表現の発想モデル（I）c-2「話し手は聞き手の協力を依頼する」に基づくものである。意志的依頼表現と要望的依頼表現の表出型は、依頼表現の発想モデル（I）c-1「話し手は自身の希望・意志を述べて、聞き手に協力してほしい気持ちを伝える」に基づくものである。命令的依頼表現と質問的依頼表現による例は、意志的依頼表現と要望的依頼表現の表出型による例より多い。話し手は依頼表現の4分類に属する依頼表現（つまり命令的依頼表現、質問的依頼表現、意志的依頼表現、要望的依頼表現の表出型）を用いて、聞き手に自らの依頼の意図を表出する。この4分類は依頼表現の発想モデルにおける表出の段階に属する。

前に挙げた用例は、話し手が一文を用いて自身の依頼の意図を明示するものである。しかし、第1章の巻頭に挙げた用例のように、複数の依頼文によって、一貫性のある依頼行為を完成する場合もある。例えば、話し手と聞き手との関係が親しくない場合や、依頼行為が聞き手にとって負担が大きい場合である。そこで、話し手は聞き手に自身の依頼を受け入れさせるため、依頼内容を明示する前に聞き手の都合や依頼の可能性などのことを訊ねるようになる。聞き手の意向を打診したり、話し手自身の依頼行為を予告したりする場合に使われる依頼表現は、依頼表現の前置き²⁹という段階に属する。また、話し手が聞き手に粘り強く依頼する気持ちを強調する場合もある。話し手の依頼の気持ちを強調する場合に使われる依頼表現は、依頼表現の念押し³⁰という段階に属する。

依頼表現の前置きと念押しの段階に使われる依頼表現は、殆ど依頼動詞・名詞（頼む・頼み、願う・願ひする・願ひ）、希望の助動詞（たい、ほしい）によって組み合わせるものである。「願ひする」「頼む」は単独に用いる場合もあるが、通常「よろしく願ひします」「よろしく頼みます」のように慣用的な用法³¹と呼ばれる。依頼表現における「願ひする」「頼む」

²⁸ 語用論的前提とは、話し手がSを述べる際に常にPという想定に立って述べているならば、Pは文Sの前提である。Lakoff（1993：p. 161）

²⁹ 浅松（2003：p. 109）などの用語である。

³⁰ 宮地（1995：p. 5）などの用語である。

³¹ ※たった十メートルほど先の、小峰課長の席が遠く感じられた。

「よろしく願ひします」軽く一礼して、植村は指定日時を記した用紙を出した。（半落ち：p. 243）

男性弁護士→警察官

は、必ず他の説明や依頼表現と共起する。

3.2. 依頼表現の前置き

- (225) 「あなたが呼んでください。それと和泉さん、一つお願いがあります」
「うむ？」
「彼を、両親の目の前で手錠をかけてしょっぴくことだけは、して欲しくないのです³²」(猫：
p. 282)
記者→刑事
- (226) 「千織、一つ頼みがある——弾いてほしい曲があるんだ」こくん、と千織が頷いた。
「僕の代わりに、真理子の——お姉ちゃんのために」(四日：p. 478)
保護者(男性)→少女
- (227) 「そうだろうな。ところで、君に頼みたいことがあるんだ。いいかな」
「もちろんです。僕は村野さんの命令なら何でもやりますから」
「社外の仕事だからこっそりやってくれ。これだ」と村野は葬式の日、弓削からもらった封筒
を出した。小林はそれを読んで驚いたように顔を上げた。
「このことは誰も掴んでませんね。あれだけ警察やマスコミが動いたのにどうしてだろう」
(灰：p. 408)
週刊誌の男性記者→男性後輩
- (228) 「じつは妙なことをお願いしたいんです」
「ここに来られる方は大抵、自分の依頼は妙なものだと思っておられるようです。どういった
ことですか」
「ある女性のことで」と篠塚はいった。「ある一人の女性について調べていただきたいので
す」(白夜：p. 530)
依頼人→探偵

(225)「和泉さん、一つお願いがあります」の「お願い」は、「彼を、両親の目の前で手錠をかけてしょっぴくことだけは、して欲しくないこと」である。(226)「千織、一つ頼みがある」の「頼み」は、「弾いてほしい曲があること」である。(227)「君に頼みたいことがあるのだ」の「頼みたいこと」は封筒の中にある。(228)「じつは妙なことをお願いしたいんです」のお願いしたい「妙なこと」は、「ある一人の女性について調べていただきたいこと」である。

「お願いがある」「頼みがある」「頼みたいこと」「お願いしたいこと」などの依頼表現によって、話し手は聞き手に自身の依頼の意図を認識させたが、具体的な依頼内容を言及していない。依頼内容を明らかにするため、他の説明が必要である。「お願いがある」「頼みがある」「頼みたいこと」「お願いしたいこと」などの依頼表現は、一貫性のある依頼行為における最初の段階に用いられ、具体的な依頼内容を予告するという機能がある。そして、「お願い」「頼み」「お願いしたい」「頼みたい」などの依頼表現は要望的依頼表現という類型に属する。更にその機能を考えると、要望的依頼表現の下位分類である前置き型に分類できる。依頼表現の前置きの機能は、依頼表現の発想モデル（Ⅰ）に加えると、次の通りである。

(Ⅱ) 依頼表現の発想モデル：

- a. 話し手が何か不足を感じている。
- b. 話し手は自身の不足を聞き手の力によって解決できていると思っている。
- c. 話し手は自身の不足の解決が聞き手にかける負担を考えて、聞き手に依頼したいことを予告する。

このように、「よろしくお願いします」は依頼の意味が薄れて挨拶表現として使われる。

³² 波線で表現される文は、実線で表現される依頼表現を補足するものである。

- d-1. 話し手は自身の希望・意志を述べて、聞き手に協力してほしい気持ちを伝える。
 d-2. 話し手は聞き手の協力を依頼する。

双線部の c が新しく増えたものである。d-1「話し手は自身の希望・意志を述べて、聞き手に協力してほしい気持ちを伝える」、または d-2「話し手は聞き手の協力を依頼する」といった依頼行為を予告する。

3.3. 依頼表現の念押し

- (229) 「先生、少しでもお話をさせて下さい——。絹江さんが戻る前には帰ります」
 鶉飼は、小さな瞳を開き、眼鏡を外し、忌ま忌ましように柘植を見据えた。
 「何が言いたい？」
 「十分だけお話を——。お願いします」
 「……」
 「先生——」
 「上がれ」
 柘植は深々と頭を下げ、鶉飼の背を追ってリビングルームに入った。(陰：p. 231)
 警官→議員 (男性)
- (230) 姉が間に割って入った。青ざめた顔でバッグを取り返そうとした。
 「川谷さん、お願いします」
 「離せ。おまえらにわたしの気持ちがわかってたまるか」(最悪：p. 590)
 女性→中年の男性
- (231) 山本は震える手で通帳を突き出した。印鑑が足元に転げ落ちた。
 「頼む。これは持っていてくれないか」
 「……」
 「頼む——頼むから……」
 宙をキッと睨み、小さな溜め息を漏らして静江は通帳に手を伸ばした。(動機：p. 183-184)
 女性→元の夫
- (232) 「先生、頼みます。一緒に行ってください」誠司は身を乗り出していた。「一切口を利かず、隣に座っているだけでいいです」
 「えー。マジで？」
 「どうか、頼みます」深々と頭を下げた。
 諍いごとは、結局のところ頭数だ。数的優位に立つ方が勝つ。二人でどうにかなるものではなくとも、一人よりはました。おまけに伊良部は巨体だ。(空中：p. 105)
 やくざ (患者) → 男性医者

(229)「お願いします」は「先生、少しでもお話をさせて下さい」という話し手の依頼の意を強調するものである。(230)「お願いします」は話し手が聞き手からバッグを取り戻そうとする依頼行為に対する念押しである。(231)「頼む」、(232)「頼みます」は、聞き手に対する依頼性を増加しようとしている話し手の意図が伝わる。したがって、依頼表現の念押しの段階に分類する。「お願い」「願う」「お願いする」「頼む」など依頼表現の念押しの段階に使われる依頼表現は、要望的依頼表現に属して、本研究では要望的依頼表現の念押し型と呼ぶことにする。依頼表現の念押しの機能は、依頼表現の発想モデル(Ⅱ)に加えると、次の通りである。

(Ⅲ) 依頼表現の発想モデル：

- a. 話し手が何か不足を感じている。
- b. 話し手は自身の不足を聞き手の力によって解決できていると思っている。

- c. 話し手は自身の不足の解決が聞き手にかける負担を考えて、聞き手に依頼したいことを予告する。
- d-1. 話し手は自身の希望・意志を述べて、聞き手に協力してほしい気持ちを伝える。
- d-2. 話し手は聞き手の協力を依頼する。
- e. 依頼の目的を達成するため、話し手は聞き手に粘り強く依頼する。

e が新しく増えた部分である。「お願いする」「お願い」「頼む」などの依頼表現は、聞き手に対する依頼性を強調し、一貫性のある依頼行為を締めくくる効果があるが、発話現場にいないければ、誰が誰に何を依頼するかは分からない。前置き段階における依頼表現と違って、念押し段階における依頼表現は話し手の視点に立って、聞き手に対する強い依頼性を表す。

依頼表現の発想モデル (Ⅲ) は、(Ⅰ) (Ⅱ) より依頼のステップが多く、シナリオも長い。話し手は依頼の場面や内容によって、適切な発想モデルを選ぶ。しかし、3つの発想モデルは同一なものに見なされてもいいと考えられる。念押し段階における依頼表現は必ずしも前置き段階における依頼表現と同時に用いられない。実際の状況に応じて、念押し段階における依頼表現は様々な表出段階における依頼表現と組み合わせることができる。

前述した前置き段階・表出段階・念押し段階における依頼表現の機能を表にすれば、次の通りである。

表5 依頼表現の発想モデルと4分類と視点

依頼の段階	依頼表現の発想モデル	依頼表現の類型	視点
話し手の意図	a. 話し手が何か不足を感じている。	X	X
	b. 話し手は自身の不足を聞き手の力によって解決できると思っている。		
前置き段階	c. 話し手は自身の不足の解決が聞き手にかける負担を考えて、聞き手に依頼したいことを予告する。	◆ 要望的依頼表現の前置き型：お願いしたい。お願いしたいことがある。頼みたい。頼みたいことがある。お願いがある。頼みがある 等	◆ 要望的依頼表現の前置き型→話し手
表出段階	d-1. 話し手は自身の希望・意志を述べて、聞き手に協力してほしい気持ちを伝える。	◆ 要望的依頼表現の表出型：したい。してほしい。してもらいたい。していただきたい。～願いたい。お～願う。お願いする。お願いしたい。お願い。頼む。頼みたい 等 ◆ 意志的依頼表現：してもらおう(か)。していただく(か) 等	◆ 要望的依頼表現の表出型→話し手 ◆ 意志的依頼表現→話し手
	d-2. 話し手は聞き手の協力を依頼する。	◆ 命令的依頼表現：してください。してくれ。して。してちょうだい。お+〈連用形〉。尊敬語動詞の命令形 等 ◆ 質問的依頼表現：してくれる(か)。してくれない(か)。してくださる(か)。してくださらない(か)。してもらえる(か)。してもらえない(か)。していただける(か)。していただけない(か) 等	◆ 命令的依頼表現→聞き手 ◆ 質問的依頼表現：「してくれる」系、「してくださる」系→聞き手/「してもらえる」系。「していただける」系→話し手
念押し段階	e. 依頼の目的を達成するため、話し手は聞き手	◆ 要望的依頼表現の念押し型：お願いする。お願い。頼む 等	◆ 要望的依頼表現の念押し型→話し手

	に粘り強く依頼する。		
--	------------	--	--

注：以上のような依頼文以外の疑問文や平叙文を用いて推意を通じて、聞き手に話し手の依頼の意図が伝わるといふ婉曲的依頼表現もある。しかし、婉曲的依頼表現は、上述した依頼の段階と異なるので、この表の対象外にする。

依頼表現の発想モデルにおいて、各段階に異なる機能がある。前置き段階では、話し手の依頼の意図が感じられるが、具体的な依頼内容が明確ではない。表出段階には話し手が希望や意志を述べることによって、聞き手に自身の依頼が伝わるものと、直接に聞き手に依頼を持ち出すものが見られる。いずれも話し手の聞き手に対する依頼内容が明示されている。念押し段階では、話し手の依頼の気持ちが強く伝わるが、誰が依頼主かまたは動作主かは明確ではない。

このように、各段階の機能が分かれば、各段階に使われる依頼形式の機能も正確に分析することができると考えられる。最も依頼しやすい場合には依頼表現の表出段階で済むが、依頼しにくい場合には表出段階だけではなく、前置き段階か念押し段階も見られる。また、一貫性のある依頼行為の中で、各依頼表現がどこに配置されるかによって、聞き手に対する依頼性が微妙に増減したり、機能が変わったりする。

4. 依頼表現の語用論的条件

依頼表現の語用論的条件とは、依頼表現に大きな影響を与える次の4つの要因を指す。

- ① 話し手と聞き手との属性（性、役割など）
- ② 話し手と聞き手との関係（親疎、上下関係）
- ③ 依頼内容（負担の大きい依頼、負担の小さい依頼）
- ④ 場面（くだけた場面、改まった場面）

4.1. 性別や役割による差異

話し手と聞き手との属性、つまり話し手と聞き手との性別や社会における役割は、常に依頼表現の選択を左右する。

4.1.1. 性差の減少と表現効果

まず、依頼表現における性差を論述する。益岡・田窪（1989：p.202）は、「してくださる」は女性的表現であるが、「してくれ」「してもらいたい」のような命令に近い意味あいを持つものは男性的表現になる、と指摘している。しかし、年配の女性が「してもらいたい」を用いる例が見られる。

(233) 「入費はいくらかかっても構わんから毎日宮城野の方へ行って山住さんとその女の張番をしていて進退ならない証拠を見付けてもらいたい、きつと見付けておくれ、向うで何と言訳しても直ぐに取って押えられるような確な証拠を見付けておくれ、実はこの子も外から好い口が出て来て山住さんへ遣っておくより其方へ遣った方が当人の任せだけれども自分の我儘で山住家を出るようになるとこの子の為めにならん、山住さんが外の女を拵えてこの子を追出したという証拠が挙がれば何処へ遣るにもこの子の明りが立つ、和女がその証拠を見付けたら直ぐにその廉を以て山住さんに掛合って立派な離縁を取って早速新屋の息子へ嫁に遣ろうという手筈だ、何卒一とつ骨を折っておくれ、旨く行けばお礼も沢山するよ、私たちは明日にも煤が谷へ帰って和女の返事を待っているからきつと手証を見届けておくれ」と大層込み入った風

変わりの頼み、狸々芸者も驚きて思案に窮せり「奥さん、外の事ならどんなお頼みでも引受ますがそのお役目は私の柄にありませんネー」(酒：p. 277)

年配の女性→芸者

年配の女性は「してもらいたい」を使用して親しい芸者に婿の監視役を頼んでいる。「してもらいたい」は要請的依頼表現に属し、特定の相手に対して話し手の希望を表す機能がある。「してもらいたい」によって、話し手の高慢な態度や聞き手に対する支配力が伝わる。

鈴木 (1997b : p. 61-62) が挙げている女性の使えない語形式を、次の通りに要約する。

- a. 動詞・補助動詞の命令形、禁止の「な」
- b. 文末の疑問を表す助詞「か」「かい」「だい」
- c. 話し手の意志を表す助動詞「う・よう」「まい」
- d. 話し手の推量を表す助動詞「だろう」「まい」
- e. 断定の助動詞「だ」

(中略) 女性が a~e に対応する丁寧体を用いる時には制限はないが、普通体の会話ではこれらの語形式を使うことが制限される。

このような制限は依頼表現においても見られる。しかも男女の性が文末の疑問を表す形式に与える影響は、b「文末の疑問を表す助詞『か』『かい』『だい』」のみには限られない。中島 (1999 : p. 63) は疑問表現を更に詳しく研究して、次の通りに性差があることを指摘している。

女性的疑問表現

直接疑問形式：「かしら (ね) ↑」「名詞+ね↑」「わね↑」「わよね↑」「のよね↑」「(な) の↑」「のね↑」「ないの↑」

間接疑問形式：「じゃないの↑」

男性的疑問表現：

直接疑問形式：「だな↑」「だよな↑」「かね↑」「かな↑」「だよね↑」

間接疑問形式：「だろ↑」「じゃないよな↑」

「してくれる」系と「してもらえる」系による疑問表現は、「中立的疑問表現」「女性的疑問表現」「男性的疑問表現」に分けて、表をすれば次の通りである。

表6 「してくれる」系と「してもらえる」系による疑問表現

質問的依頼表現	文体	中立的疑問表現	女性的疑問表現	男性的疑問表現
「してくれる」系	普通体	◆してくれる？／ してくれるね？／ ◆してくれるの？／ してくれる <u>のか</u>	◆してくれる <u>かし</u> <u>ら</u> ／してくれる <u>よ</u> <u>ね</u> ／してくれる <u>わ</u> <u>ね</u> ／してくれる <u>わ</u> <u>よね</u>	◆してくれる <u>か</u> ／してくれ る <u>かい</u> ／してくれ <u>る</u> <u>かね</u> ／ してくれ <u>る</u> <u>かな</u> <u>あ</u> ／し てくれる <u>だね</u> ／してくれ <u>る</u> <u>な</u> ／してくれ <u>る</u> <u>よな</u> ◆してくれる <u>だろ</u> ／してく れる <u>だろう</u> <u>なあ</u> ◆してくれ <u>る</u> <u>のだな</u> ／して くれる <u>の</u> <u>だろう</u> <u>な</u>
	丁寧体	◆してくれます？／ してくれます <u>か</u> ／◆ してくれます <u>ね</u> ◆してくれ <u>る</u> <u>でしょ</u> <u>う</u> ◆してくれ <u>る</u> <u>のです</u> <u>か</u>		◆してくれます <u>かね</u>
		◆してもらえる？／	◆してもらえる <u>か</u>	◆してもらえる <u>かね</u> ／して

「してもらえ る」系	普通 体	してもらえる <u>かな</u>	<u>しら</u>	もらえる <u>な</u> ◆してもらえるの <u>かな</u> ／し てもらえるの <u>だろう</u> ね
	丁寧 体	◆してもらえます？ ／してもらえます <u>か</u> ◆してもらえない <u>で</u> <u>しょうか</u> ◆してもらえないの <u>ですか</u>	◆してもらえます <u>よね</u>	◆してもらえない <u>ですか</u> ね ／してもらえ <u>ませんか</u> ね

このように、質問的依頼表現の文末には様々な疑問形式がつく。考察した結果が中島の研究と異なるのが、「してくれるの?」「してくれるね?」「してくれますね?」の3つの形式は、女性のみならず男性も用いることである。また、「してもらえるかな?」は男性のみならず女性も使用していることである。ただし、中島の研究は職場で使われる改まった話し言葉を対象としている。本研究では小説の会話文を対象とする。

(234) やがて、ゆっくりと眼鏡をかけると、島崎は僕の方へ向き直った。

「友よ」と、にやっと笑った。「よくぞ決心した」

僕も一緒に笑った。「手伝ってくれるね?」(今夜：p. 81)

少年→親友

(235) 愛しい気持ちが湧き上がった。永嶋はスーパーの袋に目を向けて言った。

「今日は晩飯も作ってくれるの?」

あや子の瞳が揺れた。

「いいの?」

「何が?」

「夜までいて」

「いいさ」(臨場：p. 318)

男性→彼女

(236) 「ああ、そうだ。貴女も約束してくれますね?」

矢部警部にきかれて、史子も、堅い表情になって、「ええ」と肯いた。(誘拐：p. 13)

警部→探偵(女性)

(237) 「一緒に生活した時期もあったし、一年も二年も、消息さえわからない時期もあった。おかしな関係だったけれど、わたしはそれで満足だった。束縛しあうのは嫌だったのよ。わかってもらえるかな」

島崎が言った。「わかります。あなたは、生きものを閉じこめるのは嫌いだと言ったから」(今夜：p. 258)

中年の婦人→少年たち

(234) のように、話し手が子供か少年である場合、(235) (236) のように聞き手が女性である場合、女性的疑問表現を用いる可能性がある。(234) 「手伝ってくれるね?」の「ね」、(235) 「今日は晩飯も作ってくれるの?」の「の」によって、依頼の意味というより確認の意味合いが強い。(236) 「貴女も約束してくれますね?」も同じく、女性に対する男性の発話である。一方、中年の女性は年の離れた男の子に対して(237) のように男性の言葉遣い(「してもらえるかな」の「かな」)を用いることも見られる。鈴木(1997b：p. 79-80)は、女性教師が生徒に対して話す場合には男性的表現を使うこともあり、男性が女性に話すときには女性的な疑問表現を使う傾向にあると指摘している。しかし、いずれにしても親しい間柄の相手に対して使用することが多く、疎遠の相手に対してはほとんど使用されていない。

表6によると、依頼表現における性差が減っていく傾向が見られる。普通体における性差

が丁寧体における性差より多く、男性の疑問形式が女性の疑問形式より多いことが分かる。この結果は、中島（1999）が指摘している職場の疑問表現における性差の実態調査の結果³³と大体一致である。

一方、性差があるこそ特別な効果を示すことができる。例えば、

(238) 「リンゴジュースくれ」風呂上りの旦那が言った。どうぞ自由に。飲みたいなら自分で用意して飲みなさい。

毎度おなじみの台詞を言って、その場を立ち去ろうとしたら、背後から怪しい声が……

「ねえ～、ママ～、リンゴジュースちょちょ～だい」

気味悪いな、何だよそれ？

「いやあ、母性本能に訴えれば用意して頂けるかと思ってさあ」（奥様：p. 65）

夫→妻

標準語で話し手が聞き手に何かねだる場合、通常男性は「くれる」などを使用するが、女性と子供は「ちょうだいする」などを使用する。(238)のように、男性の話し手は故意に「ちょうだい」を使って聞き手の母性本能を引き起こそうと狙っている。

4.1.2. 役割による影響

井出（1992）は井出他（1986）が行った調査³⁴を分析して「相手を待遇する丁寧度」という図を作成している。その図によると、相手に対する丁寧さは、教授、医者、警官、大学の若い先生、デパートの店員、ウェイター、ウェイトレス、アルバイト仲間、顔見知りの学生、兄、姉、恋人、母、弟、妹、親友という順番に従って徐々に減っていく³⁵。現代社会では絶対的な社会地位はあまりないが、大学教授、医者などの専門知識を持つ人は一般の人より社会的地位が高い。社会の役割や個人の教養などは、言葉遣いに影響を与えている。この影響は依頼表現にも見られる。

(239) 質問者 I 二人の先生に一つずつ質問させていただきたいんですけども、まず柴田先生は他人の翻訳のチェックもなさっているということなのですが、それこそ逐次チェックをなさるといことが、実際に翻訳してしまうのに近いものであるのか、それともチェックというのは、全く別個の作業であるのか、それをお聞きしたいと思います。

それから村上先生には、その趣味であることを重ねることで、たとえば、水泳をやればやるほどタイムがあがるように、その、伸びていくという感じが実感としておありになるんでしょうか。それとも、最初の頃からあまり変わらないのか、そういうところをおうかがいしたいんですが。

柴田 僕からでいいですか。（翻訳：p. 94-95）

大学生→柴田・村上

(240) 「その相馬という人は、パーキンソン病の患者だったんじゃないかと、私も思います。自殺の理由も、あなたがおっしゃるとおりでしょう」

鳥羽はほっとした。「そうですか。じゃあ、このことを、東洋精機の人たちに話してあげてく

³³ 中島（1999：p. 81）は、「男女のことばの性差は年々縮まる傾向にあるといわれるが、こうした実態調査の結果は職場の疑問表現においても性差の縮小傾向を顕著に示すものとなっている」と指摘している。用例調査で性差の縮小傾向がはっきり見られないが、依頼表現における性差は昔より少なくなることに疑う余地はないであろう。

³⁴ 井出祥子他（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂。井出（1992：p. 44）からの再収録である。

³⁵ 井出（1992：p. 46）

「だいさいませんか。私からも言うつもりではありますが、やはりお医者さんの言葉の方が信頼度が高い。あの二人がヒステリーを起こしたのも、問題の応接室に、井坂という青年の幽霊が出るなんていう思い込みがあったせいなんですから」(残 : p. 198)

男性→医者

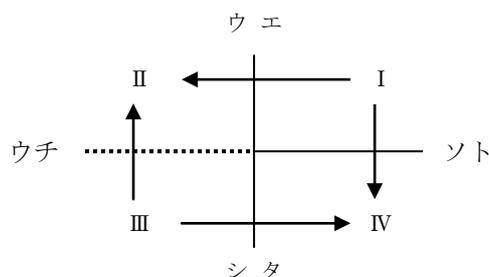
(239) は東京大学で行われた座談会での対話である。質問者は東京大学の学生で、東京大学の柴田先生と作家の村上春樹に質問している。「質問させていただきたいんですけども」、「お聞きしたいと思います」、「おうかがいしたいんですが」など、丁寧な言葉を使用して先生たちに敬意を表わしている。(240) の話し手は聞き手に第三者に対して事情説明を頼んでいる。聞き手が医者であることから、話し手は丁寧さの高い「してくだいませんか」を用いている。

4.2. 対人関係と依頼内容

依頼表現の使い分けは待遇表現の使用意識に基づく。待遇表現は敬語と異なり、水谷(1985 : p. 182) は次のように述べている。

「敬語」は、(中略) 敬意を表わすものを中心とするが、一方「待遇表現」は、ひろく人間関係に影響される言語表現をさす。「待遇表現」の中には、「敬語」のほか、軽卑語(ののしる語、一め、一やがる、など)、尊大語(俺、やってやる、など、自己を上位におく、いわばマイナスの敬語)、親愛語なども含まれる。

待遇表現の使い分けは、社会的要因と心理的要因によって左右される。社会的要因として挙げられるのは、4.1 節で述べた社会的地位、性、個人の教養などである。心理的要因は主に親疎関係と上下関係を指す。窪田(1990 : p. 84-85) は文化庁(1976 : p. 22) の親疎・上下関係に関わる図を参考して、次の通りに提案している。



まず、ウチとソトが太い実線で分割され、ウチにおける上・下は細い点線で、ソトにおける上・下は細い実線で区別される。したがって、敬語使用との関係は次のことを意味する。

ウチ：上下関係無視と敬語無使用が原則

ソト：上下関係配慮と敬語使用が原則

(中略) また、人間関係を第Ⅰ象限と第Ⅲ象限のみで処理できるならば絶対敬語的であろうが、第Ⅱ象限と第Ⅳ象限の存在が敬語使用を複雑にしている。

Ⅱ (ウチ+上)：敬語無使用が原則で状況により敬語使用

Ⅳ (ソト+下)：敬語使用が原則で状況により敬語無使用

しかし、用例集における話し手の対人関係を考察すると、境界線がなく曖昧なところが多いことが分かる。柏崎(1993 : p. 130) は命令的依頼表現の「してください」が、「ソトの世界では上下に関係なく使用され、ウチの世界では対上位者に使用されている」と指摘してい

る。しかし、ソトの世界では対上位者に使用される場合にもっと丁寧な言葉と共起しなければ、失礼になることが多い。上位者と対等な人との境界線を設定するのは困難である。対等な人と下位者との境界線も同様である。更に、親しい友達はウチのような関係に、遠い親戚はソトのような関係になることも少なくない。ウチとソトの境界線が明らかではない。

また、Thomas (1998) や、滝浦 (2008) が指摘している通り、表現対象と表現形式の関係は、決して一対一ではない。

- (241) 「静かにしろ！」と淳一は遮って、「今説明する」
「ええ、説明していただけますでしょうか！」
「大きな声出すなよ。軽い脳震盪を起こしてるんだ」
淳一はガウンをはおって居間へ来ると、「いいか、話してやるから驚くなよ」
「覚悟を決めて話してちょうだい」(名探：p. 206)

妻→夫

- (242) 撮影が終わると記者がやってきた。
「名前と年齢、スリーサイズを教えてくださいかな」軽いノリで聞いてくる。
広美は年齢を二つごまかし、スリーサイズは上下を多め、真ん中を少なめに答えた。(プール：p. 138)

記者(男性)→コンパニオン

(241) は夫婦げんかの場面であるが、「説明していただけますでしょうか」「覚悟を決めて話してちょうだい」という妻の発話は、普段夫に対する口のきき方と違うであろう。「説明していただけますでしょうか」は「説明してもらおうか」の謙譲語であるが、「！」によって妻の怒りや命令の語気が感じられる。そして「覚悟を決めて話してちょうだい」の「ちょうだい」は「もらおう」の謙譲語である。「してちょうだい」は敬語を用いて相手との心理的距離を遠ざけるところに高圧な態度が示される。これに対して、(242) のように話し手は聞き手と初対面であるが、聞き手の個人情報を知りたいため、故意に親しみを込める普通体を使用して聞き手との距離を縮めて依頼の目的を達成しようとしている。

- (243) 「はい注目」これが南先生の口癖だ。パンパンと手も叩く。
「都合の悪い家は遠慮なく言ってね。調整をつけます。それから、おかあさんも仕事を持っている家は、希望する日時を二つ書いて提出してください。夜でも土日でも構いません。先生、いつでもうかがいます」
今日は家庭訪問の連絡だった。ホームルームのとき、「お知らせ」が個別に配られた。
「飲み物は出さなくていいから、家の人に言っておいてね。いちいち飲んでたら、おなかがタプタブになっちゃうし、トイレも近くなるから」(サウス-上：p. 21)

小学校の女性担任教師→生徒たち

- (244) そのとき、車のエンジン音がした。誰だろうと思って砂浜から丘に駆け上がると、コブ山の二つほど向こうの狭い道で、軽自動車が立ち往生していた。
「おい、おまえの先生だぞ」七恵に教えてやる。
「自分の先生になるかもしれないのに」七恵が口をとがらせ丘を登ってきた。
「ねえ、みんな。押してくれない？行けると思った先生が甘かった」
二郎たち三人で駆け寄る。フロントを押して、バックでなんとか元の道に戻れた。(サウス-下：p. 93)

小学校の女性教師→生徒たち

(243) も (244) も生徒たちに対する小学校の女性教師の発話である。(243) の下線部に示される「してね」「してください」などは、小学校の女性教師の児童に対する依頼表現であ

る。これに対して、(244) の女性教師は児童たちに自身の軽自動車を押してほしいと頼んでいる。軽自動車を押すのは児童の義務を超えていることから、「押してくれない？」を使用して児童の意見を訊ねている。

- (245) 「ごめんなさいね。私の顔を立てて火曜日の午後ちよっぴり時間をあけて下さいよね。三十越すと男は結婚も億劫になっちゃうのよねえ。分るけど、うっかり私お調子者で先方へ逢うっていっちゃったの。結果はどうでもいいのよ。忙しけりゃ二、三分でいいの。二、三分だけ、おばさん助けて。お願い」普段は「して頂戴」という人が、こういう時は、「して下さい」と簡単にきりかえてします。(君：p. 90)

近所のおばさん→三十代の男性

話し手は聞き手の近所の伯母さんである。普段聞き手に対して「してちょうだい」を使用している。しかし、話し手は聞き手の了承をもらう前に見合いを手配しておいたことから、「してください」「お願い」などを使用して聞き手に懇願している。

4.3. 丁寧さと思いやり

話し手は聞き手に何かを依頼する場合、常に丁寧さを考える。Leech (1987 : p. 190) は次のように「丁寧さの原則」を述べている。

- I. 気配りの原則 : a. 他者に対する負担を最小限にせよ。 b. 他者に対する利益を最大限にせよ。
- II. 寛大性の原則 : a. 自己に対する利益を最小限にせよ。 b. 自己に対する負担を最大限にせよ。

Leech によれば、I と II は二極に分かれた尺度であり、いずれの原則においても、副原則 bの方が、副原則 a よりも重要性が低いとされる。直接に依頼表現に関連する原則は、気配りの原則であろう。また、Leech (1987 : p. 194) は次のように例をあげている。

- ①Could I borrow this electric drill?
- ②Could you lend me this electric drill?
- ③I wouldn't mind a cup of coffee.
- ④Could you spare me a cup of coffee?

①は②より、③は④より些細ではあるがより丁寧であると主張している。①③は聞き手への負担を直接に言及しないからである。日本語の依頼表現を考察すれば、Leech が指摘しているように話し手の視点に立っている依頼表現（例：要望的依頼表現、意志的依頼表現）は聞き手の視点に立っている依頼表現（例：命令的依頼表現）より丁寧に感じられる。しかし、語用論的条件を付加すれば、丁寧さが感じられない場合もある。例えば、

- (246) 「いいんだ。とにかく降ろしてもらおう。降ろさなければ、どんなことになったって知らんぞ」「ええ？」運転手は鼻白んだらしく、振り返った。しかし、まともに喧嘩する相手ではないと思っただのか、ちょうど、次に車が停まったとき、「じゃあ、気をつけて降りて下さいよ」と、ドアを開けた。(影：p. 245-246)

男性客→タクシーの運転手

- (247) 「ちょっと、とめてくれ」結城は、運転手に言った。運転手が予定として聞いていた行先は、番町のある代議士の家だった。命令を受けて、運転手は急いで車をとめた。結城は自動車から降りた。すぐそばに公衆電話のボックスがある。彼は、その中にはいった。金を入れてダイヤルを回した。(波-下：p. 42)

男性客→タクシーの運転手

(246) も (247) も男性客のタクシーの運転手に対する発話である。(246)「とにかく降ろしてもらおう」は話し手の視点に立っている依頼であるが、(247)「ちょっと、とめてくれ」は聞き手の視点に立っている依頼である。しかし、コンテキストによって話し手の視点に立っている (246) は聞き手の視点に立っている (247) より丁寧とは言えないであろう。

姫野 (1992 : p. 52) は前述した Leech (1987) の主張に対し、「日本語では、聞き手に負担をかける場合、その事実に言及したほうがむしろ丁寧に感じられる」と反論している。更に実質的な負担のみを「負担」とし、精神的な負担は「負債」として提案している。実質的な「負担」に関する丁寧さの原則は、Leech の気配りの原則と寛大性の原則に尽くされている。精神的・心理的な「負債」について、姫野 (1992 : p. 50) は「思いやりの原則」が必要であると主張している。

思いやりの原則 : a. 他者の負債を最小限にせよ。b. 自己の負債を最大限にせよ。

この「思いやりの原則」は、依頼表現にも見られる。

(248) 「これで一応、解決ということにさせていただきますが、もちろん奥さまのことは、これからもずっと面倒を見させていただきます」

「お願いします」高伸が頭を下げると、院長は軽く上体を近付けた。

「ご承知かと思いますが、今回のことは、わたし達とあなたとのあいだだけのこととして、内々に……」

そのことは野中医師からもよくきいている。高伸がうなずくと、院長は安心したのか、ゆっくりと席を立つ。(麻酔 : p. 331)

患者の夫→病院の男性院長

(248)「お願いします」は、医療過誤を犯した病院の院長に対して話し手の依頼である。医療過誤失を犯した病院が話し手の妻の世話を見るのが当然なことであるが、話し手は「思いやりの原則」の b「他者の負債を最小限にせよ」に基づき、「お願いします」と言っている。

4.4. 第三者に対する配慮

発話の場面はくだけた場面と改まった場面に分けられる。話し手の発話時点で発話現場に話し手と聞き手以外の第三者や他人が居れば、依頼表現の使い方が通常と異なる場合がある。

(249) 「わたし、泰子です」

「ああ、あなたか。益子に行ったのか」

「そうです。いま、上野駅にありますが……」

「帝国ホテルのロビーにいらしていただきませんか。私もまっすぐここに来たので、これから行くところです」

これだけで電話がきれた。怒っている様子ではなかった。丁寧な返答はそばに他人がいたからにちがいない。(夢 : p. 43)

男性→不倫の相手

(250) 丹野怜子は、目を伏せて聞いていたが、やがて促されると、カメラに向かって顔をあげた。ひたむきな眼差しをいつとき宙に凝らし、心を落ち着けてから口を開いた。

「お兄さん。どんな事情があるのか知りませんが、一日も早く居場所を知らせてください。――もし、会社の方には都合の悪いことがあるのでしたら、せめて私にだけ、連絡をとってください。ご無事でいらっしやるのなら、必ず連絡してください。お願いします」

丹野怜子の呼びかけは、先に東京や札幌から放送された家族たちのとは、かなり印象がちがっていた。(蒸発：p. 110)

妹→兄 (テレビ放送)

(249) の話し手は聞き手と親しい関係である。話し手が聞き手に電話している時、聞き手の丁寧な返答（「帝国ホテルのロビーにいらしていただきませんか」）によって、話し手はその側に他人がいると推測している。(250) の下線部は妹がテレビ放送を通じて行方不明の兄に呼びかけている。テレビ放送なので、相手が身内にもかかわらず、話し手は「してください」「お願いします」などを用いている。

第4章 命令的依頼表現の構造・機能

本章で命令的依頼表現の根底に潜んでいる概念、つまり話し手がどの基準に基づいて命令的依頼表現を用いるのかを解明する。用例に示されている話し手と聞き手との関係、依頼内容、場面などの語用論的条件を考察して、「なわばり意識」が命令的依頼文に与える影響を分析する。

1. 命令的依頼表現と命令表現

Searle (1986 : p. 124) は、「命令においては、H³⁶に対してSの権威が優越するということによって、HにAを行なわせるということ」と主張している。また、仁田 (1991 : p. 230) も「命令成立の一つの要件は、話し手が相手に命令できる立場にあるということである。命令は、命ずれば、話し手の欲求に沿った動きが実現することを前提にしているのに対して、依頼は、依頼することと相手のそれに応ずる意志・好意が相まって、話し手の欲求に沿った動きが引き起こされるのである」と指摘している。「話し手が相手に命令できる立場にある」は、話し手の立場が聞き手の立場より上位や対等にある場合を指すであろう。

- (251) 梅村教諭が隣に来て、直貴が今まで見ていたものに目を向けた。教諭は小さく唸った後、吐息をついた。直貴の肩に手を置いた。
「武島、ちょっと一緒に来い」
教諭は歩き出した。直貴は仕方なく後をついていった。(手紙 : p. 55)
高校教諭 (男性) → 教え子
- (252) 「山口！」と警官が叫んだ。
革ジャンパーを着たその男が走り出した。手錠を外してしまっている。
「待て！止まれ！」警官は起き上がると拳銃を抜いて、空へ向けて撃った。(名探 : p. 87)
警察官 → 犯人
- (253) 「お母さんと代る？」
「今から帰る。そう言っとけ」
「はい」(怪談 : p. 28)
父 → 娘
- (254) 「ちょっと待て。最後に一言。きみは、もう、女優はやめた方がいいよ。まっとうな大根ならいいが、きみのは鬆が通った大根だ。見込みはない。いい人が見つかったら再婚したまえ。なんなら、再婚先を世話してやってもよい」(梅 : p. 117)
夫 → 妻

(251) (252) の話し手は職業によって聞き手より優位な立場に立っている。(253) の話し手は身内関係における上位者である。(254) の話し手は聞き手である夫と対等な立場であるが、用例の本が出版された年 (1979 年) に夫が妻よりやや上位と考えられている。このように、話し手は役割や職務による優位な立場に立ち、動詞の命令形を用いて聞き手に要求している。押し付けがましさが感じられる。しかし、話し手は授受動詞の補助動詞や尊敬語を用いて、相手に受益の意味を伝えたり、敬意を表したりすることから、命令の意味が薄れるようになる。例えば、「してください」「してくれ」「してちょうだい」、動詞テ形、尊敬語動詞の命令形(「いらっしゃい」「召し上がれ」など)、及び「お+〈動詞連用形〉」である。本研

³⁶ Hは聞き手、Sは話し手、Aは話し手が聞き手に依頼する行為である。

究ではこれらの依頼表現を「命令的依頼表現」と呼ぶことにする。

命令的依頼表現は、命令表現ほど押し付けがましくない³⁷が、聞き手の意志の如何を視野の外に置くことが多い。しかし、これは聞き手を無視することではなく話し手の意図を中心にすると考えられる。それでは、話し手はどうして命令的依頼表現を選ぶのであろうか。

2. なわばり意識に関わる先行研究

なわばり意識は佐久間（1966）の「なわばり」という研究から出発し、神尾（1990）の「情報のなわ張り理論」を通じて発展してきた概念である。

2.1. 佐久間（1966）の「なわばり」

佐久間（1966：p. 34-35）は、コソア指示体系を考察する際、「なわばり」という概念を主張している。

話し手とその相手との相対して立つところに、現実のはなしの場ができます。その場は、まず話し手と相手との両極によって分節して、いわば「なわばり」ができ、その分界も自然にきまってくる。

しかし、佐久間の「なわばり」は現場指示として使用されている概念である。服部（1968）も類似した仮説「話し手の勢力範囲」³⁸を主張している。

2.2. 神尾（1990）の「情報のなわ張り理論」

神尾（1990）は佐久間（1966）と服部（1968）の研究をふまえて更に一般化した「情報のなわ張り理論」に発展させている。神尾（1990）は終助詞の「ね」の用法を検討しながら、情報のなわ張り関係には、以下の通りにA～Dの4つの場合があること、そしてそれぞれの場合に適切な文型が定められていることを示している。

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手のなわ張り	外	A 直接形	D 間接形
	内	B 直接ね形	C 間接ね形

神尾（1990：p. 32）

³⁷ 例えば、次の例に示すように、依頼動詞「頼む」は命令表現「しろ」より依頼表現「してくれ」と共起しやすい。

※「座れ」

慎司は従わなかった。

「座ってくれ。頼むよ」

それようやく、くちびるをぶるぶる震わせながら腰をおろした。（龍：p. 157）

男性記者→青年

³⁸ 服部（1968：p. 71-80）

この表は縦2列に情報が話し手のなわ張りに属する場合と属さない場合とを表し、横2行に情報が聞き手のなわ張りに属さない場合と属する場合とを表している。

また、命令・依頼表現に関して、神尾（1990：p. 136-137）はLeechにあげられた例を分析する際、次の通りに述べている。

a. I order you to stand up.
（お前に立てと命令する）

b. Stand up.
（立て）

（中略）(a) の様な遂行文 (performative sentence) では、それが表現する情報が話し手のなわ張り内にあり、聞き手のなわ張り内にはない。したがって、Aの場合が成立し、それ故に(a) の様に直接形を取る。聞き手の立場から見ると、まず、「お前に立てと命令する」という情報が話し手のなわ張り内にもみあるものとして与えられる。

（神尾 1990 の例 81. 下線は本研究による）

神尾は依頼文ではなくて命令文を分析しているが、依頼文が「情報のなわ張り理論」との関連も示唆していると考えられている。更に、「情報のなわ張り」の情報の内容を厳密に分析するため、神尾（1998：p. 30-31）は自身の前掲論文（1990）の考察内容を補足して、以下のように情報がなわ張りに入るための4つの条件を設けている。

◆ 情報が話し手または聞き手のなわ張りに入るための条件

- a. 情報が話し手または聞き手の内的直接体験によって得られたものであること。
- b. 情報が話し手または聞き手の外的直接体験によって得られたものであること。
- c. 情報が話し手または聞き手の専門的領域またはその他の熟達した領域に関わるものであること。
- d. 情報が話し手または聞き手にとってきわめて個人的な事柄に関するものであること。話し手または聞き手自身に関する事柄をも含む。

このように、神尾は情報のなわ張りが直接形・間接形に与える影響に焦点を置いて分析している。

2.3. 「なわばり意識」と「情報のなわ張り理論」との差異

「情報伝達」が神尾の仮説の中心であることに対し、本研究では、依頼表現における「情報要請」や「行為要請」が話し手と聞き手とどちらのなわばりに属するかという意識（以下「なわばり意識」と略称する）についての分析を中心とする。なわばり意識は神尾の「情報のなわ張り理論」の条件に依拠し、話し手の依頼内容が自身と聞き手とどちらのなわばりに属するかに対する認知や予想などの心的活動を指す。

3. 「してください」系の構造と機能³⁹

用例の中で最も多い依頼表現は、「してください」による文（以下「してください」と略称する）である。「してください」は動詞テ形に授受動詞「くださる」の命令形「ください」（「してく

³⁹ 内容の一部は 2009 年に西日本国語国文学会会報に載せられた「命令的依頼文の構造・機能—『してください』を中心に—」である。

だされ」は現代では使われない⁴⁰⁾がつくという点で、命令表現だと思われる場合がよくある。金水(2000)は「遂行分析」(performative analysis)という方法を用い、その隠れた命令の機能を明らかにしている⁴¹⁾。用例を考察すれば、確かに命令と感じられる用例がある。

- (255) 「石岡さん、あんた京都に行ってください」
彼はちょうど命令でもするような、勢いこんだ調子で言った。
「この手紙の指定どおりに行ってください」
「しかし、部長さん、私はその男の顔を見ても、覚えているという自信はありませんよ」
おれはそう答えた。が、彼は、
「いや、あんがいそうでもないかもしれん、本人の顔を見たら思いだすかもしれん。ま、それはその時じゃ。とにかく、京都に行ってください。こちらから刑事を二名つけてやる」と言う。
「しかし、警察のほうは、本人を見たくて手紙に書いてありますが」
「いや、いいのだ。こちらにも考えがあるからね。あんたはこの手紙の梅谷利一という人の顔をよく見てくれ。刑事はわからぬよう隠しておくから」(張込み：p. 82-83)
刑事部長(男性) → 犯人の目撃者(男性)
- (256) 坂西は庫裡に歩いて行き、粗末な造りのガラス戸をあけ、奥の庭を拝見したいのですが、と声をかけた。すると高校生くらいの女の子が顔をだし、
「この注意書をよく読んでください」とひどく横柄な調子で言った。
みると、壁に、庭を汚すなどかの注意書の紙がはりつけてあった。
「はい、わかりました。拝観料はおいくらでしょうか」
すると、こんどは中年の女が顔をだし、
「注意書をちゃんと読んでください」と高圧的な調子で言った。
「読みましたよ」と坂西が答えたら、
「うちではどんな人でも、注意書をちゃんと読まない人には見せられません」と中年女が言った。
坂西は、これはまたひどい寺だな、と不愉快になり、出しかけた財布をもどし、外に出てきた。
(雪：p. 230-231)
寺の人(女の子と中年女) → 男性客

(255)「石岡さん、あんた京都に行ってください」は、地の文から命令の意味があることが分かる。(256)「この注意書をよく読んでください」「注意書をちゃんと読んでください」は、話し手の横柄で高圧的な態度から命令に近い意味が伝わって、聞き手の不快感を引き起こしている。これに対して、命令と違う意味が感じられる場合もある。

- (257) 「気になるかも知れませんが、すぐに慣れます。しばらくは、硬いものや、ガムとかキャラメルのように粘着性のあるものを食べるのは避けてください」
初めて差し歯を入れた美津子に、医師はそう説明した。(盗り：p. 23)
医師(男性) → 三十代の女性患者
- (258) 「ま、ともかく、警察の方がきてからだ。死因がわからないと病名のつけようもないですから」
「それでは、お家の方、診察室の外で待ってください」
すかさず言う若い看護婦の態度は、あまりにも事務的だった。(老人：p. 79)
看護婦 → 死者の家族
- (259) 「私は、警察から居場所どころか、存在すら知られたくないのです。そのためにあなたと会う場所は、絶対の安全が保障されていなければならない」
「どうすればいいのです」
「いまからすぐに家を出てください。そして新宿三越裏にある『白十字』という喫茶店で待っていてください。必ずテグレートールをもってくるように」

⁴⁰⁾ 佐久間(1966：p. 198)

⁴¹⁾ 金水・今仁(2000：p. 135-136)

それだけ指示すると、こちらの返事も待たずに電話は切られた。(凶：p. 202-203)

男性→見知らずの男性

(257)「しばらくは、硬いものや、ガムとかキャラメルのように粘着性のあるものを食べるのは避けてください」、(258)「お家の方、診察室の外で待っててください」は、話し手の職務に基づいている発話なので、「してください」によって話し手の説明や事務的な態度が感じられる。(259)「いまからすぐに家を出てください。そして新宿三越裏にある『白十字』という喫茶店で待っていてください。必ずテグレトールをもってくるように」は、話し手が相手に待ち合わせる場所を説明し、自分の言った通りに行動することを促している。発話の内容は話し手の職業に関係がないが、話し手からの「指示」の意味が伝わる。

(260)「あなたは、畑山家からウチへお入りになったからわからないでしょうが、山内家は堅実なんです。祖父の代から事業は拓げても、そのための合理的な投資はするけど、ほかのことは儉約主義でした。前後のみさかいいもなくお金を派手に使うのが大嫌いでした。わが家ではそれを家憲としています。あなたもよく心得ておいてください」

「……………」

これは弱い夫に対する母性愛からではなく、養子婿に与えるきびしい訓戒であった。(空：p. 50-51)

妻→養子婿である夫

(261) そんな金八先生の目を覚まさせようとでもするかのように、本田先生は力をこめて激励した。「がんばってください。一番身近な人がまず負けるもんか！という信念を持てば、病人も絶対病気に勝つぞという気迫が持てるんですから」

「そうですね……そうでした……」(炎：p. 85)

女性教師→親しい男性教師

(262)「おばさんだって趣味で飼ってるわけじゃあないのよ。ただかわいそうだと思ってえさをやっていたら、こんなに増えちゃったのよ。お隣りがお社だから、ご近所迷惑にならないで遊べるので助かってるけど。あとからあと持ってきてもいいなんて思われちゃ困るわ」

「だけど、ほっといたら死んでしまうと思うんです。月曜日に学校の校内放送で誰かもらってくれないかって頼みますから、それまでおいてください」僕は一生懸命に頼んだ。

「そこまで考えてるの。感心ね。じゃ、月曜日までよ。あら、わりといいネコじゃない」(一匹：p. 23-24)

男の子→初対面のネコおばさん

(263)「金森洋子というホステスの店、わかったかい」

「わかりました」と小林は嬉しそうに言った。「ええと、銀座の『カリン』だそうです」

「『カリン』か。それは高いな……」と村野は唸った。「『週刊ダンロン』の名前で取材するから、何かあったら頼むぞ」

「だったら僕も連れていってください」と小林が手を合わせて懇願するのを笑って、村野は自分の机に戻った。(灰：p. 221)

二十代の男性→会社の先輩(男性)

(264) 徳太郎は、野上法律事務所のダイヤルを廻した。

「わたしです」と、電話口に出た野上に、徳太郎は、嘆願する調子でいった。

「わたしを助けて下さい」

「日本を離れるまで、私に電話はかけないという約束でしたよ」(誘拐：p. 338)

年配の男性→弁護士(やや年下の男性)

(260) ~ (264) のように、訓戒や激励、話し手の要請や、更に懇願までの意味が地の文から伝わる。要するに「してください」は、話し手と聞き手との関係、コンテキストや話し

手の態度・音調⁴²により、色々な意味が感じられる。(260)～(264)はAustin(1978:p.121)が説いている「原初的な遂行的発言」(primary performative)に相当する。「原初的な遂行的発言」は依頼動詞「願う」「頼む」「依頼する」「要請する」「懇願する」などによる依頼表現と異なっている。鈴木(1972:p.39)は「してください」が「動作を話し手あるいは話し手のがわに属する人(話し手の身うちのものなど)のためにおこなうことをあらわす」と指摘している。「話し手のがわに属する人のため」とは、受益者が話し手(のがわに属する人も含める)という意味である。故に、本研究では、話し手の好意に基づいて聞き手のためになる「勧め」「誘い」「励まし」などは依頼表現の変容⁴³と捉える。

3.1. 従来の研究

森田(1985:p.63)は「してください」を“依頼表現”、「お～ください」を“許容表現”に分け、「相手自身の得にもためにもなり得ない行為には、この『お～ください』形式が使えない」と指摘している。また、森田・松木(1989:p.278-282)は、「してください」を「お～ください」「お～願います」と比較し、動詞の対人関係の有無や恩恵の受け手(受益者)の立場から、「してください」「お～ください」「お～願います」の3つの形式の用法の異同を明らかにしている。

前田(1990:p.51)は森田(1985)の研究の妥当性を維持するためには「〈依頼〉の中から、(i)公的立場、あるいは、やむをえない事情等から生じた力を背景に〈命令・指示〉を丁寧に行う場合、(ii)下位者が優位者に、実現が相手の好意に依存する度合の強い行為の〈懇願〉を行う場合が除かれる必要がある」と主張している。これに対して、尾形(1996)は話し手が聞き手に話し手自身のためになるような行為を「お願い」する場合に、「してください」と「お～になってください」との置き換えは不可能であり、そうではないような行為を聞き手に「指示」する場合に「してください」と「お～になってください」との置き換えは可能である、と指摘している。

柏崎(1993)はSearle(1986)の「行為指示型表現」とLeech(1987)の「気配りの原則」に依拠し、「してください」の機能を「依頼」「懇願」「命令・指示」「勧め」「激励」に分けて考察している⁴⁴。柏崎(1993)の分類によると、話し手が受益者であり、聞き手の選択可能性が極めて高い場合は「懇願」となるが、そうでない場合は「依頼」となる。「命令・指示」は上位者から下位者への丁寧な表現である。聞き手が受益者である場合、「勧め」「激励」となる。「激励」は「頑張ってください」のような慣用的に定着している表現を指している。柏崎(1993)は利益負担・選択性という尺度によって「してください」を分析している。しかし、利益負担・選択性の判断の基準が明らかにされていない。

本節では、なわばり意識が「してください」に与える影響を分析して、話し手が「してください」を使用する意図を明らかにする。

3.2. 話し手と聞き手

⁴² 話し手の態度・音調については、井上(1993)、森山(1999)を参照。本研究の対象外にする。

⁴³ これは高橋(2005:p.179)の用語である。

⁴⁴ 「してください」の分類は柏崎(1991)『『て)ください』について—行動要求表現における機能分析—東京外国語大学日本語学科年報13による再整理である。柏崎(1993:p.29-30)

3.2.1. 対人関係

「してください」は、親しい相手より親しくない相手に対してよく使用されている。「してください」には「使用者に関する制限が少ない。上位者が下位者に対して用いることもあれば、下位者が上位者に丁寧に頼みごとをすることもする。特に男女差はない」という研究⁴⁵も見られる。用例を考察すると、仕事関係や職場で「してください」を用いる依頼表現が圧倒的に多いことが分かる。話し手と聞き手との関係には、会社における同僚、会社の後輩と先輩、わが社と他社との人、刑事と事件の関係者、店の主人と客、編集者と作家、主人と使用人などが含まれる。

- (265) 「いいですか、これを読んでください」
香春課長は、芝田署での第二回供述書を開いた。そのとき鈴木はまだ被疑者の立場であった。鈴木供述の「三」とある箇所を香春は指で示して本部長に読ませた。(場面：p. 150)
警官→上司
- (266) 「もうそろそろですね」
「ええ。次の角を左折してください。すぐそこです」
車はスムーズに角を曲がり、やがてわたしの家の前に停まった。(人質：p. 77)
若い女性→中年の運転手
- (267) 「もっと、ほかば探してください」
「これほどよか条件の物件は、ほかにちょっとなかですよ。どこが気に入りませんか？」
「どこということもなかですが、なんかあんまり気のすすまんごとありませんなア。とにかく、ほかば見つけてください」不動産屋は、どうも分らん、という顔をした。(場面：p. 68)
若い男性→不動産屋(男性)
- (268) 「付き添いの方、カーテンのなかに入ってください」
看護婦に呼ばれて、フラフラ入って行くと、
「ご臨終です」医師は冷たく言い放った。(老人：p. 78)
看護婦→患者の家族
- (269) 「はい、こんどは道子ちゃん読んでください」
「はい。『わたしはりんごだとおもいました。まるいものがしんぶんしにつつんであるからりんごだとおもいました。なぜ、なつみかんじゃないかといったら、せんせいのめをみていると、せんせいがかうそをついていることがわかるからです』……」(兎：p. 258)
女性教師→生徒

「してください」は初対面や見ず知らずの他人に対しても、よく用いられる。

- (270) 姑が横から、「他人様にまでついていってもらうことないよ。和明さん、一人で行けばいい」と口を出す。
「いや、ご迷惑でなかったら、どうぞ来てください。あなたが、あの子を見かけられた最後の人もかもしれないから」おとなしそうな顔立ちに似ず、その口調はきっぱりしていた。何が何でも子供を探し出そうとする気魄のようなものを、杉子は感じた。(一匹：p. 76)
男性→初対面の若い女性
- (271) 二十二、三の女性が後ろから近づいて、啓介の横に並んだ。明るいグリーンのコートを着て、チェックのマフラーをしている。娘は、手にしていた物を彼の目の前に差出して、
「これ、もらってください」と、消え入るような声で言った。
金色のリボンで結んだ、小さな紙包だった。「これを——僕に」
娘はうなずいた。それから、また、小声で、「チョコレートなんです」(一匹：p. 169)
若い女性→初対面のやや年上の男性

⁴⁵ 日本語記述文法研究会編 (2003 : p. 71)

(270)「ご迷惑でなかったら、どうぞ来てください」、(271)「これ、もらってください」は、初対面の相手に依頼する例である。相手が今まで会ったこともなく、知らない人であることから、話し手はあまり上下関係という意識を持たないであろう。しかし、依頼表現において、話し手は聞き手に自分の希望を実現してほしいという弱い立場に立っている。相手に失礼にならないように気を遣いながら、「相手側から自分側への恩恵⁴⁶」を強調したほうが社会・文化の期待に合致するであろう。相手に敬意を払う言葉、例えば「どうぞ」などとの共起も不可欠である。

これに対して「相手側から自分側への恩恵」が表われない例もある。

(272) 「犯人からの電話だ。やはり誠弥と間違えて、ほかの子を誘拐したらしい。あんた、ちょっと出てください

言われるまでもなく、深見が電話にとびついた。

「青いTシャツで、頭の横に傷痕が?——雄一だ。雄一をどうする気だ!」(一匹：p. 82)

中年の男性→初対面の年下の男性

(273) 「あら、尻尾もごさいますの」

「これも絶妙な味です。豚はどこがいちばんおいしいかという、こういう部品の部分です。ちょっと待ってください。あそこにいるのは、どこかでお目にかかったことのある御婦人だな。はて、誰だったかな……。そうだ、おもいだした。別居中の妻だ。いっしょにいる男は同じ劇団の二枚目だな。むこうから声をかけられる前に敬意を表してこよう。ちょっと失礼」風間は席を起って行った。(梅：p. 55-56)

男性→知り合った間もなくの女性

(274) 「ごめんなさい、はずしてください」

わたしは彼女に、馬鹿丁寧に言った。蒔子は探るような目で兄を見上げたが、彼が、「エンジンをかけておいてくれよ」と言って、ポケットから出したキーを渡すと、渋々受け取った。

「早くしてね。一平がお昼寝から覚めると、あなたを探して泣くでしょうから」

そう言い置いて、彼女は店を出ていった。(残：p. 105)

女性→初対面の嫂

(272)「犯人からの電話だ。やはり誠弥と間違えて、ほかの子を誘拐したらしい。あんた、ちょっと出てください」では、「してください」が普通体の文と繋がって、話し手が相手のことを「あんた」と呼んでいることから、話し手の感謝や受益の気持ちがないことが伝わる。

(273)「ちょっと待ってください」は、「豚はどこがいちばんおいしいかという、こういう部品の部分です」と「あそこにいるのは、どこかでお目にかかったことのある御婦人だな」と2つの命題の切れ目になるという効果がある。つまり話し手は「ちょっと待ってください」を言う前に、「です」体で聞き手に豚の食べ方を教えているが、「ちょっと待ってください」を言った後で、普通体で独り言のようなことを言っている。(274)「ごめんなさい、はずしてください」は、話し手が初対面の義姉にわざとよそよそしい態度を取っている。こういう場合には、井出(2006：p. 73)の「わきまえ」という概念が思い出される。

わきまえとは、(中略)話し手の意志によるポライトネスではなく、こういう場ではこのようにするものだという社会的に共通に認識されているものに従って使わねばならないものである。

井出の主張に従えば、他人の家に入るとき、「お邪魔します」と言うのも「わきまえ」の一

⁴⁶ 菊地(1997)を参照。

例であろう。本研究では (272) ~ (274) の「してください」の根底にもこのような「わきまえ」が潜んでいると捉える。しかし、「わきまえ」は、話し手が「してください」を選択する主な原因ではない。また親しくない相手だけではなく、親しい家族、友人の間にも「してください」が用いられる。ただし、下位者から上位者、また対等人への発話が多い傾向が見られる。

3.2.2. 依頼主と動作主

「してください」の依頼主は一人称の話し手で、動作主は常に二人称の聞き手であるが、動詞や使役動詞によって話し手になる場合もある。依頼表現の主語は一人称と二人称の2つに分けられる。一人称主語の省略については、工藤 (1982 : p. 58) は、「平叙文の一種としての希望や希求といった擬似叙法とは異なり、はたらきかけ (命令) 文の一種である依頼の叙法として機能するためには、話し手自身を対象化して一人称主語とすることが許されない———というか、対象化すれば平叙文となってしまう———のだ」と主張している。

二人称主語の省略については、三上 (1963 : p. 34) は「命令文などという対格型の文では、『だれが』を決して言い表さないが、この制限を少しゆるめて、『だれが』を言い表さなくてもよい場合もある」と指摘している。Leech (1987 : p. 35) は「大半の場合において、(命令文というのは勧誘的な機能を有しているものだから) you (あなた) が諒解された主語であり、したがってそれを省いても失なうところはないと予測を立てることができるから」だと解釈している。山岡 (2008 : p. 148) は「当該の発話状況において会話参与者 (話者、聴者) が誰であるかは、当の会話参与者自身にとっては自明であることが前提となっており、語彙的な特定を必要としないから」だと分析している。

したがって、依頼主も動作主も省略される例が最も多い。命令的依頼表現では、主に二人称主語であるが、呼びかけという形で動作主を表す例も少なくない。そして「が」や「は」「も」によって動作主を表す例が最も少ない。

では、「が」や「は」「も」によって動作主を表す「してください」の機能を検討する。まず、「が」による動作主が聞き手である例を分析する。

- (275) 「彰純をここへ呼んでくれ、吉村君」
「あなたが呼んでください。それと和泉さん、一つお願いがあります」
「うむ？」(猫 : p. 282)

男性記者→刑事

- (276) 「皆さんの前ですが誰でも娘を嫁に遣れば折々その家へ遊びに行つて婿を相手に一杯飲むのが楽しみでしょう、ところで此方の婿さんはお流義違いで相手にならん、山住さんの代りに貴君方が一つ飲んで下さい、娘も少し位はお助けが出来ますよ」(酒 : p. 137)

年配の男性→婿の友人

このように、「が」による動作主は、奥田 (1996) が主張している「指定・強調」の効果があると見られる。

- (277) 「泉三郎、泉三郎。」
老人が息子を呼ぶのであった。けれども彼は隔ての板戸を開けて此方に来ようとはしなかったし、息子も行かなかった。息子は大きな声を張り上げて板戸越しに父に答えた。
「お父さんは黙っていて下さい。私の女房のことは私が自由に所置をつけます。——私は、お

父さんに義理を立てるの、村の人たちに面目ないのといつてこんなことをいう訳では決してないのですから、その点は誤解しないで下さい。すべて私の一存でやることです。何んにも御心配はいりません。」(野上：p. 74)

息子→父

- (278) 「わたしは、調理室を見て来なければ、浅田さんはこの場にいてください」
園長先生は、一同の中でいちばん落着いているのはわたしであることを見てとって、名指しで言った。わたしは、あわててかむりを振った。
「あつちはわたし見て来ます。園長先生は、ここにいてくださらないと、皆さん不安ですから」
(一匹：p. 122)

園長(女性)→園児の母

- (279) 権兵衛はその手を握り返して、笑いかけた。
「大丈夫、ちょっと疲れただけですから、横になっていけばじき元気になります。あなたはお部屋の方に戻っててください」
川本君がためらっているのを見ると、権兵衛は茶目っ気たつぷりに、「ほら、何かが焦げているような臭いがします」そう言って、二〇五号室の方を指さした。(獲物：p. 202-203)

老人→同老人ホームの老人

用例(277)～(279)は「は」によって動作主を表している。(277)「お父さんは黙っててください」の動作主は「お父さん」である。(278)「浅田さんはこの場にいてください」の動作主は「浅田さん」である。(279)「あなたはお部屋の方に戻っててください」の動作主は「あなた」である。それぞれ話し手と聞き手との「対比」の機能が見られる。

「も」によって動作主を表す例も見られる。(280)「浅見さんも了解してください」、(281)「圭子や義男もお母さんをいたわって、しっかり支えてあげてください」のように、「も」によって動作主が複数になることが分かる。

- (280) 「とにかく、やるだけのことはやってみます。結果として何も出なくても仕方がない。そのときは浅見さんも了解してください」
「もちろんです」(坊っちゃん：p. 225)

刑事→探偵

- (281) 「無理には頼めませんが、できれば警察などに連絡しないでください。私は大丈夫です。いつかきつとみんなの前に元気な姿を現します。信じてください。
いつも佳代や子供たちの幸福を願っています。みんな大切な家族ですからね。
追伸——佳代、神経痛の薬をきちんと飲んでいますか。油断せずに体を大切にしてください。
圭子や義男もお母さんをいたわって、しっかり支えてあげてください」(獲物：p. 222-223)

中年の男性から妻と子供への手紙

一人の依頼主が一人の動作主にある事柄を頼むのは典型的な依頼表現だと言え、発話現場に複数の聞き手がいる場合、動作主を特定する必要がある。

- (282) 「くつつきましたって、威張ってちゃアしようがねえじゃねえか、どうなるんだい？」
「そのねエ、貴方がたねエ、その、がみがみおっしゃいますがねエ、なかなか舟なんてえものア自由に……貴方漕いでごらんなさい、(命令的に) 貴方…その蝙蝠傘を持ってる旦那、蝙蝠傘を持ってる旦那、あのねエ、石垣をちょいと突いてください」
「こんな用の多い舟てえのァねえや……石垣突くのかい？突くよ、そらッ」(文楽：p. 111-112)

船頭→男性客

- (283) 「立っちゃだめですよ、だしぬけに立っちゃ危いですよ…立たないでくださいよ、大丈夫ですから……よッ(中略) 太った旦那、太った旦那、貴方もう少しこっちィ来てください。もう少し胴の間のほうへ来てくださいよ…その、太ってて前へでちゃアしようがねえや、素人はこれだから困っちゃう、わからねえんだから……」(文楽：p. 110)

船頭→男性客

用例 (282) (283) では、複数の客がいるので、話し手は「その蝙蝠傘を持ってる旦那」「太った旦那」と相手の特徴・属性を取り上げて、動作主を特定している。

- (284) 「義太夫はおしまいだ、みなさんがお寝みんなったら、お前がお爛をつけたりなんかしてお起こし申すのがあたりまえでしょう……皆さんもう帰ってください、帰れ帰れ、あたしどもは木賃宿じゃないんだ」(文楽 255)

旦那→客たち

- (285) 「では始めます。ランプは、そっちの隅にやっただけ暗くしておいてください。実験は隣の部屋でやりますから、皆さんは廊下で、障子を見ていてください。あ、それから誰か一人助手になってくれないかな。君、来てくれない？」
手招きされたのはポストマンだった。(猫 127)

男性→民宿のほかの客

- (286) 「これよりお昼の休憩に入ります。午後の競技は一時十五分からです。午後の最初の競技、ダルマ競走に出場の方は、一時十分に入場門の所に集まってください」と告げてから、「——捜査一課の吉田警部、課長の席までおいでください」(名探 93)

運動会のアナウンス

(284) 「皆さんもう帰ってください」は店の客全員を、(285) 「皆さんは廊下で、障子を見ていてください」は話し手以外の客全員を「してください」の動作主としている。(286) の動作主は「午後の最初の競技、ダルマ競走に出場の方」である。(284) ～ (286) のように、依頼主が複数であるが、一人と見なす傾向が見られる。

- (287) 私は斉藤了介といって、ボケ老人です。強い徘徊グセがあり、いつも家族を困らせています。外で見つけた方は、ぜひ下記のところまで連絡してください。(獲物：p. 4)

背中に縫いつけてあるメッセージ

しかし、(287) のように、老人の背中にあるメッセージを見た時点が話し手の発話時点と見なされている。因って、そのメッセージを見ている人が依頼される動作主になる。

更に、「疑問詞+か」などの不定代名詞によって、動作主が未定になる例も見られる。

- (288) 「とめて！誰かその人をとめてください！」
時間が止まった。ガードレールをまたぐその女性の白いふくらはぎが目に映った。黒いコートの裾がひるがえった。人だかりに飛び込むと無数の拳で一度に殴りつけられたような衝撃が返ってきた。勢い余って守はよろめいた。
別の誰かが人だかりをものがくようにして抜け出してきた。今度は若い男で、驚きで凍りついた顔のまま必死に走ってくる。走って、彼の手が女性の黒いコートの裾をとらえたとき、守もガードレールに走り寄った。二人がかりで女性を引き戻すと、いっしょに倒れるようにして尻餅をついた。(魔術：p. 328)

少年からの発話

- (289) 「ああ、答えられないね。答える必要のないことだ。くだらない」
「なにいっ！くだらん？くだらんとは」
いきなり慎一郎の胸ぐらをつかんで、乱暴にゆさぶった。
「やめてください。どなたか、とめてください」
いつの間にはいつて来たのか、由紀がおろおろと哀願した。
「ね、美枝子さん、とめてよ、あなた」
由紀は美枝子の肩をゆすった。だが美枝子は、うつむいたまま身じろぎもしない。(自我：p. 238)

女性→夫の画家仲間

「誰かその人をとめてください」「どなたか、とめてください」のように、複数や特定でない相手に依頼できるのは、「してください」の機能だと考えられる。

また、「唄わす」「帰す」「降ろす」「まかす」などの動詞によって、動作主が話し手になる例も見られる。

- (290) どうしようかと思案にくれて、わきのめし屋かなんかをみるてえと、そこで歌を唄っている奴がいるんで、あたしやそこへ行っちゃって、
「ひとつ都々逸を唄わして下さい」
「うん、唄いねえ」
二つばかり唄ったら、そこの女中が
「いくらかおやんなさいよ、東京の芸人らしいじゃないの……」とって十銭くれた。(なめくじ：p. 64)

嘶家→めし屋

- (291) 「お前は、どうしても、ここではたらくのはいやなのか？」
「エエ、いやなんです。早く東京へ帰して下さい。帰してくれなきゃ、あたしは死んじゃうんだから」(なめくじ：p. 38)

少年→社長

- (292) 「湧き水ですよ、降りてみますか？とてもおいしい水ですよ、冷たくて。」
「はい、ちょっと降ろして下さい。」(予感：p. 155)

少女→タクシーの運転手

- (293) 「わからないわよ。あの人、すっかり変わってしまったんだから」
「いいよ。とにかく、まかして下さい」(影：p. 327)

男性→元彼女

(290)「ひとつ都々逸を唄わして下さい」、(291)「早く東京へ帰して下さい」、(292)「ちょっと降ろして下さい」、(293)「まかして下さい」では、動作主が全て話し手である。

3.3. 「してください」となわばり意識

3.3.1. 「してください」と話し手のなわばり意識

話し手は「してください」を用いて、聞き手に何かをしてほしいと頼んでいる。テ形の本動詞について、三上（1972）の動詞の分類に依拠して説明する。三上の研究によれば、依頼表現に表す動詞には、「所動詞で自動詞」（例えば、ある、できる、要る、見える、聞こえるなど主として物事の状態を表す動詞）は含まれないが、「能動詞で自動詞」（例えば、いる、行く、来る、泣く、立つ、座る、死ぬ）、「能動詞で他動詞」（例えば、殺す、打つ、聞く、見る、ほめる、叱る）が含まれている。「能動詞で自動詞」と「能動詞で他動詞」は、人の意志を表す動詞である。他人にある事柄を要請する依頼表現においては、「能動詞」を用いるのが当然である。

国立国語研究所（1960）の「相手に対して、あらたに何かを表現しようとする意図」がある依頼表現を中心として検討する。神尾（1998）のなわばり条件「c. 情報が話し手または聞き手の専門的領域またはその他の熟達した領域に関わるものであること」を満たす場合、「してください」がよく使用される傾向が見られる。これは前に述べた「仕事関係や職場で『してください』を用いる依頼表現が圧倒的に多い」という結果に裏付ける。

- (294) 「はい、それでは開廷します。被告人、立ってください」
三人が、腰をあげた。背中を丸めて、俯いている。
「順番に、本籍、住所、職業、氏名を述べてください。まず、左端の方から」
「ええと……本籍は、神奈川県横浜市、港北区、日吉本町一丁目××番×号。住所は、東京都文京区、本郷三丁目××番×号、サンライズコーポ三〇二、大学生です。名前は、橋本雅巳」
(松子-下：p. 372)

裁判官→被告人

- (295) 「高尾プロデューサーとは、何時のお約束ですか」美人の方が、手元のメモを見ながらすまして事務的に言う。時間の約束などしていない、来てもいいと言ってくれただけだ、と言うと、「そのエレベーターで二階に上がって右へ行くと、第8スタジオがあります。そこで尋ねて下さい」と通してくれた。(霧：p. 77)

放送局の受付→男子高生

(294)「被告人、立ってください」「順番に、本籍、住所、職業、氏名を述べてください」は、法廷で裁判官が自分のなわばりによって被告人に指示している。(295)「そこで尋ねて下さい」も同様である。このように、依頼内容が話し手の職務に基づいているので、相手に感謝する意味が薄れて、話し手にとって「あたりまえ」という感じになる。

また、「d. 情報が話し手または聞き手にとってきわめて個人的な事柄に関するものであること。話し手または聞き手自身に関する事柄をも含む」という条件を満たす場合にも、「してください」を用いる。

- (296) 「なんで、勝手に由梨を渡したんですか」潤子は激怒した。
「お迎えの保護者の欄には、わたしの名前が書いてあるじゃないですか。それなのにどうして、勝手に他人に由梨を渡したんですか。説明してください」抗議する潤子に、園長は困惑した顔で「いや、そうなんですがね」と頷いた。
「もちろん、まったくの他人にお子さんをお渡しすることはありません。ですが、実の父親が迎えにきてはるのですから」(盗り：p. 137-138)

園児の母→園長

- (297) はじめ宗吉を外に呼びだして、不実をなじった。「このまま捨てるつもりでしょう。そうはいきませんよ。そんな約束であなたの世話になったのではありませんからね。とにかく今夜は、わたしら四人の生活のたつようにしてください」菊代はワンピースに下駄をはき、二つになる庄二を背中に負っていた。七つの利一と四つの良子は母親の傍らに両方からくっついていた。「そんなことを今、言ってくるでも困る。明日行って話すから、今夜は帰ってくれ」宗吉は汗を出して必死に菊代をなだめたが、彼女はきかなかつた。あんたが来る来るといふのは、あてにならないと言ふのだ。(張込み：p. 236-237)

女性→愛人

(296)「説明してください」は、話し手が保護者の立場に立って幼稚園の園長を詰問している。(297)「今夜は、わたしら四人の生活のたつようにしてください」は、話し手が相手に親子四人の生活を世話してほしいと要請している。ここでのなわばり条件「話し手または聞き手自身に関する事柄」は、恐らく仕事ではなく、「話し手の立場や話し手と聞き手との約束に基づく権利」を指すのであろう。(296)も(297)も話し手のなわばり意識に基づく依頼である。

また、必要な条件ではないが、話し手のなわばり意識に基づいている「してください」には、「から」の理由節と共起する傾向がある。理由節は「ので」節と「から」節に分けられる

が、依頼文においては「ので」より「から」の方がより自然である⁴⁷。例えば、(298)～(300)のように、「してください」による依頼が話し手の立場や職務に基づいたものである。

- (298) 「確かな病名というものは、一回や二回の診察で、簡単につけられませんよ」
「けど、今のところ、だいたい何病やということぐらいは、いっていただけだと思いますねんけどー」
「いや、ちょっと、疑問の点がありますから、今日、胃カメラと血清の検査をして下さい」(巨塔-1 : p. 106)
医者→患者
- (299) 「我々は着々と準備を進めてますからご心配なく。今回はもう外が暗くなって、夕起也さんにモニターで確認してもらおうような映像は入ってきませんから、外の空気でも吸って下さい。何かあったら呼びますよ」すぐには夕起也も動かなかった。巻島は言葉を足した。
「正直申し上げて捜査に差し障りますから、花火でも見て下さい」(犯人 : p. 36)
刑事→誘拐された子供の父親
- (300) 「朝御飯が出来てますから、早く下りてきてください。これからは遅刻しそうになっても、もう車で送っていったりはしないとおとうさまはおっしゃってますから」ふん、と美佳は鼻を鳴らす。「それもきつとあいつの差し金なんだ」(白夜 : p. 759)
家政婦→お嬢さん

話し手は発話時点に自分の考え方や状況を説明しながら、「してください」を使用することにより、相手に指示や助言を行う。更に、理由節に示される条件が主節の依頼を補強する例もある。

- (301) 「お金のことはいいですから、母がみじめにならないような立派なものにしてください」と雪穂はいついた。今日の前にある祭壇がふつうのものとうどう違うのか、一成にはわからなかった。(白夜 : p. 719)
喪主→葬儀屋
- (302) 「どこでも結構ですから、なるべく小さくて静かな家へ案内してください」
運転手は小首を傾げていたが、見当がついたらしく速力を出した。(山 : p. 282)
女性客→タクシーの運転手

(301)「お金のことはいいですから」によって、話し手が説いている「母がみじめにならないような立派な葬儀」は、「お金のかかる葬儀」であると推察される。これに対して、(302)「どこでも結構ですから」は、条件の規制がゆるいが、「なるべく小さくて静かな家」によって修正(modify)されている。理由節に示されることが主節の依頼よりルーズ(loose)である。

また、話し手は今後の自分の行動を説明しながら、聞き手に次の行動を指示したり、助言したりする例も見られる。

- (303) 「薬を飲ませろよ、薬を」
「ええ、探してきますから、あなた、お父さんの様子を見て下さい」(恍惚 : p. 47)
妻→夫
- (304) 「なんとかしなきゃいけないわね」
「いえ、僕がやりますからお義母さんは安心して下さい。ローンだって月々六万ですから、僕はどこかに一間借りたってやっていけますから」
「あなた、そんなこと考えてたの」(井戸 : p. 109)

⁴⁷ 南(1993 : p. 202)を参照。

男性→義理の母

(303)「探してきます」、(304)「やります」は、話し手が今後の行動に対する説明である。このように、理由節には、発話時点における話し手の考え方や認識、依頼内容の補強や修正、依頼後話し手の行動などが含まれている。理由節に示されることが話し手のなわばり意識に基づいて、「してください」と共起すれば、次のような構造が見られる。



次に、聞き手のために、話し手のなわばりに基づいた「してください」を用いる場合、「勧め」の意味が感じられる。益岡 (2001 : p. 28) は、「授受の対象が通常好ましいものであるという特徴は事態の授受を表す補助動詞構文にもそのまま引き継がれる。授受の対象である事態が好ましいものであるということは、その事態が当事者にとって恩恵的であるということに他ならない」と指摘している。次の例に示されているように、好ましいものは話し手の好意によるものである。

- (305) 一冊を終えると、福山は眼奥に疼くようなものをおぼえた。石井の手前、強がって見せたが、やはり齢かもしれないとおもった。
「ないなあ、こちらには、遠野の消息を伝えるようなものはなにもない」福山は、眉間をもみながら言った。
「こちらにもありませんでした。最後の一冊は私が引き受けますから、福山さんは休んでいてください」石井は、疲れも見せず、『交通事故の保険』に取りかかっている。しかし、せっかくの着眼にもかかわらず、遠野の消息を伝えるようなものはなにもなかった。(凶 : p. 82)

刑事→先輩

- (306) 「どうしたの？」省一が眠そうに目をこすりながら起きてきた。
「患者さんが急変したらしいの。鍵をもって出ますから、寝ていてください」
身支度をしているうちに、表に車が止まる気配がした。省一はブスツとした顔で、それでも玄関まで妻を見送りに出る。(老人 : p. 187)

妻→夫

(305)「福山さんは休んでいてください」の受益者は、聞き手である。(306)も同様である。話し手は夜中、患者の家に行かなければならないが、聞き手のために「寝ていてください」と勧めている。この場合には、次のような構造になる。



「好ましい、好ましくない」の他に、「よい、わるい」「快、不快」などの判断は、聞き手の「価値判断」⁴⁸に属している。この「価値判断」は、依頼表現における受益者を判明する基

⁴⁸ 毛利 (1980 : p. 42-44)

準であろう。そして、「してください」による話し手の積極的な対人関係も感じられる。

3.3.2. 「してください」と聞き手のなわばり意識

神尾（1990）の「なわばり文形」⁴⁹の分類によると、話し手のなわばりの外で聞き手のなわばりの内に属する情報は「間接ね形」を使用するのである。「ね」との共起は後述するが、「してください」では話し手の知りたいことが聞き手のなわばりに属する場合、「間接形」を使用せず、仮定節により表現する。

(307) 「もしも辛くて今日はすべての遺品を見ることができないようでしたら、そのときは遠慮なくわたしを呼んでください」

「わかりました、ええ、でも大丈夫です」(R : p. 71)

婦警→女性

(308) 「では尋ねます。朗読された公訴事実に、間違いはありませんか？何か異議があれば、述べてください。まず、橋本さん」

「あのう……殺すつもりは、ありませんでした。死ぬなんて、思わなかったんです。ただ、遊びの延長のつもりで、みんなで盛りあがっていたから、ついでにちょっと、からかってやろうと思っただけで……。軽い気持ちだったんです。ほんとうに、あんなことで死ぬなんて……でも、申し訳ないことをしたとは、思っています」(松子-下 : p. 374)

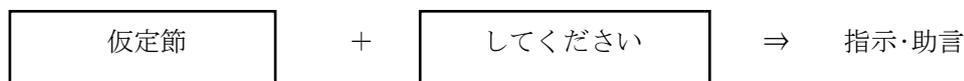
裁判官→被告人

(309) 「ねえ彼女、どっかに所属してるの」と名刺を出してくる。思わず浩介は、「私、この娘の教師なんです。用があるなら僕に言って下さい」とにらみつけていた。少し得意だった。(井戸 : p. 80)

男性教師→スカウトマン

(307) ~ (309) の仮定節の内容は聞き手のなわばりに属しているが、既にある「旧情報」⁵⁰ではなく、今後聞き手の行動や意見などの「新情報」である。このような場合、「してください」は話し手の職務による権限、つまり話し手のなわばり意識に基づいて、相手に指示や助言を与える。(307) のように、話し手の好意や善意が感じられる例もあれば、(308) のように、事務的であったり、または(309) のように、善意どころか、やや対立、衝突が感じられる例もある。このように、仮定節の内容が聞き手のなわばりに属している「新情報」になる場合、「してください」では(Ⅲ) のような構造が成り立つと考えられる。

(Ⅲ)



聞き手のなわばり (新情報) 話し手にとって「あたりまえ」

(310) 「他に方法がありますか？あつたら教えて下さい」

「まあ、興奮しないで。会って相談しませんか」(誘拐 : p. 339)

年配の男性→弁護士

(311) 「まさか、取材とか」

「まあ、そんなようなことです」

「ごめんなさい、余計なことを言って」早重は口を手で押さえ、自制するように目を伏せた。だが自制が似合わない生き生きした表情は隠せなかった。

「いや、いいですよ」村野は早重が三年前に会った時とは別人のように明るいのに驚いた。「ご

⁴⁹ 神尾（1990）の用語である。

⁵⁰ 「旧情報」、「新情報」についての研究は、Levinson（1990）、神尾（1990）を参照。

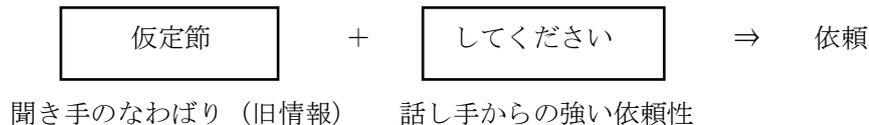
存じでしたら教えてください。ブザーを押したのですが、どなたもお出にならないのです。裏口はありますか」

「坂出さんのお宅ですか」早重はそう言うと、そのままつかつかと門の横に来て、くぐり戸をとんと押し開けた。「中に入って行って構わないんじゃないやありません？こちらのお宅には皆さんそうしてらっしゃるようですよ」（灰：p. 83-84）

男性→昔の知り合い（女性）

(310) (311) は話し手が聞き手のなわばりに属する情報を知りたいので、「たら」の仮定節を使用して相手に頼んでいる。話し手が発話する前に、聞き手がすでに知っている情報なので、「旧情報」に属する。また、理由節の内容が話し手のなわばりに属する場合、話し手は自分の行動や考え方に確信を持っている。これに対して、仮定節の内容が聞き手のなわばりに属する場合、話し手は相手の行動や考え方が分からない不確定性を持っている。しかし、(311)「ご存じでしたら」は、形式化している丁寧な言い方である。話し手は聞き手に対する押し付けがましさを避けようとしている。「教えてください」と言わず、他の依頼形式、例えば「教えていただきたいのですが」「教えてくださいませんか」に置き換えればもっと丁寧になる。このように、「してください」は他の依頼表現と置き換えることができることから、命令表現と異なる証拠だと考えられる⁵¹。因って、話し手は「教えてください」を用いて、聞き手に対する強い依頼性や要望を伝えようとしている。そこで、次のような構造になる。

(IV)



以上、話し手と聞き手とのなわばり意識によって、国立国語研究所（1960）が説いている「相手に対して、あらたに何かを表現しようとする意図」のある「してください」を分析してきた。分析の結果は、次の通りである。

(V) 「してください」においては、

a. 話し手のなわばり意識に属する場合

① 理由節（話し手のなわばり）＋「してください」（話し手にとってあたりまえ）
⇒指示・助言

② 理由節（話し手のなわばり）＋「してください」（聞き手にとって好ましい）
⇒勧め

b. 聞き手のなわばり意識に属する場合

① 仮定節（聞き手のなわばり：新情報）＋「してください」（話し手にとってあたりまえ）
⇒指示・助言

② 仮定節（聞き手のなわばり：旧情報）＋「してください」（話し手からの強い依頼性）
⇒依頼

3.4. 聞き手の言動に対する応答

本節では、話し手があらたに聞き手に何かを依頼するものではなく、相手の言動に対する応答を考察する。相手に対する応答として使われる「してください」でもなわばり意識が働いている。慣用的な用法も見られる。「してください」の慣用的な用法には、話し手が今後聞

⁵¹ 吉井（2000）は、「してください」を「してくださいませんか」と比較する際、「してください」による依頼が聞き手の意志に委ねて実現される、と指摘している。

き手との人間関係を維持したい意図が見られる。つまり、聞き手に失礼にならないように、話し手はポライトネス・ストラテジー を取る。ポライトネスについて、宇佐美（2002：p. 100-101）は、次のように指摘している。

「ポライトネス」は、「対人コミュニケーション」における「言葉遣いというツールそのものの丁寧度」を扱うのではなく、その相手とのコミュニケーションが「心地よいかどうか」という、「言葉遣いというツール」の使用効果を問題とする。

このように、コミュニケーションの中でどうやって聞き手と心地よい会話ができるかは、重要な課題である。

3.4.1. 積極的な賛成を表す場合

積極的な賛成の意味を表す「してください」は、相手の発話内容やこれからの計画・行動に関する返答なので、「こ、そ、あ」の指示体系において聞き手のなわばりに関わる「そ」と共に使用する傾向がある。例えば、

(312) 「聞いてないなあ。それに関する報告書は、私のところに回してくれましたか」康晴は自分のファイルを開いた。こんなふうに、自分のファイルを会議に持ち込む取締役は少ない。というより、一成の知る限りでは康晴だけだった。

小柄な男は焦った様子で隣の男や発表者と何やらひそひそ言葉を交わした後、常務のほうを向いた。

「すぐ関連資料をお届けします」

「そうしてください。大至急」康晴はまた自分のファイルに目を落とした。（白夜：p. 644）

常務→社員

(313) 「ぼくには、確かに一つの考えがあります」吉木ははっきりと言った。

「では、どうぞ、それを教えてください。わたくし、わからないことがいっぱいあるんです」

（山：p. 297）

女性→夫の友達

(312) 「そうしてください」は、部下に対する応答である。「はい、分かりました」という返答より、積極的に聞き手の行動や考え方を認めるとい話し手の意図が感じられる。これはBrown & Levinson (1987) が提案している「Exaggerate (interest, approval, sympathy with H)」(聞き手に対する興味、賛同、共感を強調する)⁵²というポジティブ・ポライトネス・ストラテジーに相当すると考えられる。文脈にある「そ」について、三上 (1970) が説いている「文脈承前 (anaphoric)」⁵³という機能が見られる。(312) 「そうしてください」の「そう」は「すぐ関連資料を届けること」を指している。(313) 「どうぞ、それを教えてください」は(312) と異なり、親しくない夫の友達に対する応答である。「どうぞ」によってBrown & Levinson (1987) の「Give deference」(敬意を表す)⁵⁴というネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを使用して、聞き手に控え目な好意を伝えている。「それを教えてください」の「それ」は「一つの考え」を示している。

⁵² 日本語訳は吉岡 (2008：p. 51) による。

⁵³ Sperber & Wilson (1999) の「指示付与」(reference assignment) が類似している仮説である。

⁵⁴ 日本語訳は吉岡 (2008：p. 52) による。

3.4.2. 反対の意味を表す場合

3.4.2.1. 動詞の意味が否定である場合

動詞の意味によって、話し手は聞き手に反対の意見を述べている。

(314) 「ところがそれから間もなく、僕の実家の父は破産を——」

「あなた！よして下さい、そんなこと。」(おと：p.187)

妻→夫

(315) 「ええ。義理堅いをひっくり返して片桐っていうぐらいですから。それとも年明けに行ったカラオケナックで祝杯をあげます？」

「また桑田桂祐になりきって歌うの？」

「はい。なりきりの片桐と呼んで下さい」

「駄洒落はやめて下さい。二十一世紀も近いんやから。——それにしても退社時間になったら元気が湧いてくる人やなあ。こっちはこれから晩飯食って仕事ですよ」(ミラー：p.74)

作家(男性)→親しい編集者(男性)

(316) 「いい加減にしてください。ここへ電話をかけてこられるだけでも迷惑なんです。もう切りますから」

「待ってください。では僕の質問に答えてください。あなたはまだあの男性と同棲しているのですか」(白夜：p.748)

女性→知り合いの男性

(314)「よして下さい」は話し手が相手の話に割り込んで止めている。(315)「駄洒落はやめて下さい」は相手の発話を止めるだけではなく、その発話を否定する意も見られる。(316)「いい加減にしてください」は慣用的な用法である。話し手が相手の発話や行動を止めようとしているだけではなく、相手をたしなめる意図も伝わる。話し手は自身のなわばり意識によって、相手の言動を止めるべきだと思っている。

3.4.2.2. 「しないでください」と「しないようにしてください」

話し手は「しないでください」を使用して、相手の言動を否定する意見を示す。話し手の発話時点を基準として、聞き手の行為・状態を否定する依頼が、次の通りである。

A. 過去の行為・状態に対する否定の依頼：話し手が発話する前に、その発話内容に関わる相手の言動が既に終わっている。

(317) 電話を間違えて掛けた時、刑務所だとか火葬場だとか税務署だとか気持のよくない場所をでたらめに言う悪戯には、朝子は慣れているはずなのだが、このときは少し腹が立ったので、

「失礼ね。火葬場なものですか。つまらぬことは言わないでください」と言いかえした。すると相手は、

「悪かったな。だが、真夜中にあんまり間違った電話をかけるなよ。それに……」(張込み：p.104)

若い女の子(電話交換手)→見ず知らずの男性

(318) 「申しわけない。つい小遣い銭に困って。——恥かしいことをしてしまった」

神保は、どぎまぎと言った。一瞬真っ赤になった顔が、蒼白に変わっていた。

「ごまかさないでください。神保さんが小銭にまで困っているかどうか、かりに困ったとしても枕探しをやる人かどうか、一週間同じ部屋にいたらわかりますよ」(猫：p.70)

中年の男性→同病室の年配の男性

(317) の相手は「ここは火葬場だ」と言ったので、話し手は「つまらぬことは言わないでください」と答えている。(318)「ごまかさないでください」では話し手が相手の発話(小遣

い銭に困って盗んだこと)を信じられなくて本当のことを言ってほしいと言っている。(317)
 (318)の話し手は相手の発話に反対してたしなめている。聞き手の言動が話し手の発話時点の前に終わっている。図にすれば、次の通りになる。

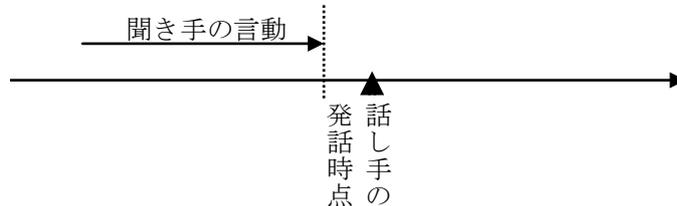


図1 過去の行為・状態に対する否定の依頼

B. 現在の行為・状態に対する否定の依頼：話し手が発話する前から、しかも発話時点にも、命題内容に関わる相手の状態が続いている。こういう場合には、相手の表情や身振りなど生理の状態、または精神・心理に関する勧めが多く見られる。

- (319) 「そんな怖い顔しないでください」梨恵子は言って、河野を見あげた。
 「やっぱり発作が起こったんです。とっても怖かった。なんだか変な音が聞こえるようになったんです。どうしていいかわからなくて、結局はここにくるしかなくて……」
 河野はじっと梨恵子を見ている。髪が乱れているのだと思って、梨恵子は手をあげて撫で付けた。
 少し疲れたような顔でため息をつくとき、河野はドアを開けて梨恵子を促した。
 「とにかくお入りなさない。話を聞きましょう」(残：p. 313-314)

女性客→探偵

- (320) 「まあまあ、そんなに固くならないでください。ここは学校ではありません。ともに列車の旅を、楽しもうではありませんか」
 田所校長が、笑みを浮かべたまま、わたしの肩に手を置く。肩から全身に、緊張の波紋が広がった。(松子-上：p. 25)

校長(男性)→女性教師

- (321) 「わたしたちが一美さんの証言に期待していることは間違いありませんが、仮に今日の試みがうまくいかなかったとしても、それで捜査が行き詰まるわけではないんですよ。ですから、心配しないでください」
 「呼ばれた人たちに、一美は直に会うわけじゃないんですよ？恨まれたりしませんわね？」
 (R：p. 66)

婦警→女性

- (322) 「すみませんね。お待たせしちゃって。文化祭の準備なんか、適当に抜け出してくればいいと思うんですけど」礼子は再び詫びた。余程申し訳なく思っているようだ。
 「いや、僕のことなら結構です。気にしないでください。それに友達同士の付き合いというのも大切ですから」正晴はいった。大人ぶったつもりだった。
 「あの子もそういつてました。それに文化祭の準備といっても、クラスでの催し物ではなくて、サークルのほうらしいんです。それで三年生の先輩が目を光らせているので、なかなか抜けられないといっておりました」(白夜：p. 209)

家庭教師→生徒の母

(319)は相手の表情、(320)は相手の身振り、(321)(322)は相手の心理・精神の状態に関して、話し手が反対の意見を表わしている。図に表せば次の通りになる。

聞き手の状態

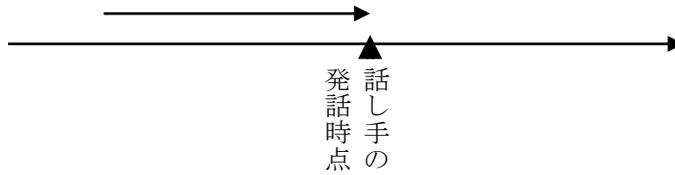


図2 現在の行為・状態に対する否定の依頼

C. 未来の行為・状態に対する否定の依頼：話し手は今後相手の言動を推測しながら、反対する意見を表しておく。このような場合には、話し手が自分のなわばり意識に基づく指示・助言が多い。

- (323) 「とにかく、話し合いの準備を向こうの弁護士とも相談して進めていきましょう。時間はかかるでしょうが、今のところそれしか方法はありません。絶対に早まったことはしないでください。勝手にお嬢さんを連れ出したりしたら、今後の話し合いの余地もなくなってしまいますから」(盗り：p. 145)

弁護士→依頼人

- (324) 「もう起きてお帰りになっても大丈夫ですよ。一週間お風呂に入らないでください。それから、なかに、たんぼが詰めてありますから、お帰りになったら、適当な時間にそれをとってください。先に紐がついていますから、引いたらとれます」
「ここに夕方までいさせてください」(夢：p. 96)

看護婦→患者

- (325) 「しかし、僕の名前はあくまで内密に願いますよ、舞鶴へ出られてしまった今となつては、もう医学者としての将来は諦め、親爺の後を継ぐ決心をしていますけど……でもやっぱり、名前は出さないで下さい」
「わかりました、その点は十分に気をつけ、ご迷惑はかけないように致します、しかし、その抄読会記録は、出来れば明日にでも持ち出して下さいませんか、財前側に先に押さえられてもしたら、水の泡ですから」(巨塔-5：p. 273)

医者→弁護士

(323)「絶対に早まったことはしないでください」は、話し手が聞き手に何もしないほうがいと勧めている。(324)「一週間お風呂に入らないでください」は、話し手が聞き手に一週間お風呂に入らないほうがいと助言している。いずれも相手のためである。これに対して、(325)「名前は出さないで下さい」は、話し手が相手に自分の名前を出さないように頼んでいる。このように、相手がまだ何もしていないが、話し手は自身のなわばり意識に基づいて、相手に指示したり、助言したりする。図にすれば、次の通りになる。

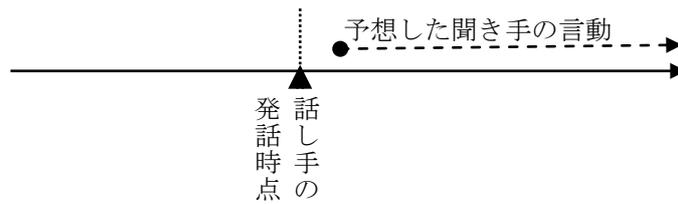


図3 未来の行為・状態に対する否定の依頼

「しないようにしてください」は、話し手が聞き手に「ように」の前に述べた事柄をしないでほしいということであり、「しないでください」より更に婉曲である。

(326) 彼は署長にも司法主任にも言った。

「この事件はこの土地の新聞記者には絶対に勘づかれないようにしてください。その女は石井とは関係のない人妻です。女にとっては、今どき石井に来られるのは災難なんです。もし新聞に書きたてられて、せつかくの家庭が滅茶滅茶になっては気の毒ですからね」女の夫は何も知ってない。女も夫に告白したことはないだろう。それはそれでいいのだ。(張込み：p. 13)

東京の警官→地方の警察署長と主任

(327) 「丸山さん、麻薬があったことは大騒ぎにはしないようにしてください。ただ、しばらくは、刑事さんが彼女の家を絶えず見張ってくださるといいのですが」(坊っちゃん：p. 226)

探偵→刑事

(328) 「以後、女房に手紙をよこさないようにしてください、家庭が破壊されますから」

「家庭が破壊される？ちょっとお待ちください。御馳走になったお礼の手紙を差しあげたのに、それがあなたの家庭を破壊してしまったのですか」

「とにかく、女房に手紙をよこさないでください」

「それは御親切な忠告をまことに有難うございます。いちど、御主人の顔を拝見したいものですね、はっはは」とわらい声がして電話が切れた。(梅：p. 49-50)

男性→妻の知り合ったロシア文学者

(326)「この事件はこの土地の新聞記者には絶対に勘づかれないようにしてください」は、話し手が事件のことで地方の警察に協力を頼んでいる。直接の上下関係ではないので、話し手のなわばりに属さないことから、「しないでください」より間接の「しないようにしてください」を選択している。(327)「丸山さん、麻薬があったことは大騒ぎにはしないようにしてください」は「は」があるので更に婉曲となり、ちょっとした騒ぎはやむをえないと判断している感じもする。(328)「以後、女房に手紙をよこさないようにしてください」も同じく間接である。このように、「しないようにしてください」は話し手が聞き手と親しい関係ではない場合、或いは直接に聞き手に指示する立場ではない場合使う。「ように」という婉曲表現によって、話し手の控え目な態度から聞き手に対する助言の意味が感じられる。

3.4.3. 直接に反対しない場合

聞き手の言動に対して異なる意見を持ち、聞き手のなわばり意識と衝突する場合、話し手は直接に聞き手に反対しないで、助言や勧めのようなストラテジーを使用する傾向が見られる。

(329) 「時間はそんなにとらせません。二、三質問に答えてくれはったらええんです」

「目を改めてください。本当に急いでるんです」

「そのわりには喫茶店で呑気に新聞を読んではりましたな」男は口元の端を曲げた。

「私が私の時間をどう使おうとあなたには関係ないはずだ。帰ってください」今枝はドアを閉めようとした。(白夜：p. 607-608)

探偵→刑事

- (330) 「それは結構やけど、僕、美々に聞いたところでは、君は旦那がいないという話やけど」
美々のおしゃべりめ。
「いいえ、います。区役所に届けてないけど、一人、います。そりゃもう、インチキな所全然、なしよ」
剛はインチキという言葉はどうまちがえたか、
「バイキン」ときいた。
「僕かて、バイキンはないよ。完全無欠、無菌状態です」
「ともかく、今日のところは、そのへんの人をさそって下さい」と電話を切った。(言：p. 76)

女性→男性

(329)「目を改めてください」は「二、三質問に答えてくれはったらええんです」に対する返答である。直接に聞き手の要請を断る場合、後文のように、「私の時間をどう使用しようかあなたと関係ないはずだ。帰ってください」になるであろう。(330)「そのへんの人をさそって下さい」は、話し手が聞き手のナンパを断っている。いずれも慣用的な言い方であるが、依頼の意味はあまり感じられない。これは Leech (1987) が説いている「他者の非難を最小限にせよ」の実現だと考えられる。

3.5. 尊敬語の用法

「してください」の尊敬語の用法には、「してくださいまし／ませ」「お／ご～ください」「お／ご～になってください」「尊敬語＋してください」がある。

3.5.1. 「してくださいまし／ませ」

「してくださいまし／ませ」はやや古風な用法である。1960年代頃の小説には「してくださいまし／ませ」の例が見られる。用例の中にある話し手は、聞き手とすべて親しくない関係であり、上位者や対等な人に対して使用する。

教授の娘→助教授；教授夫人→助教授；女中→男性客；女性→夫の男性客；中年の女性→来客；中年の女性→若い男性；老人→刑事；被害者の女中→警視庁の警部；女性→男性（ロシア文学者）

「してくださいまし／ませ」を用いる女性が多い。話し手のなわばり意識に基づいて、相手に勧めるような例が多い。尊敬動詞と共起する場合、更に丁寧になる。

- (331) 「まあ、きちゃんないことをしちよいますが、どうぞこっちへ上がってくださいませ」
「ごやっかいをかけます」(砂-上：p. 288)

老人→刑事

- (332) 「何のおかまいも出来ませんが、どうぞ、久しぶりにごゆっくり遊ばして下さいまし、父が喜ぶますから」(巨塔-4：p. 381)

教授の娘→助教授

- (333) 「『え、うちの親父てえものは三度の食事よりも酒が好きなン……その子としてあたくしは…不思議と一滴もいただきません』『あら、あんなことをおっしゃって…年増のお酌でお気に召しますまいけども、まア…まんざら毒も入ってないんですから召しあがってくださいまし』なんてんで、まア…勧め上手というものは仕様がないもんだねエ」(文楽：p. 431)

女中→男性

(331)「どうぞこっちへ上がってくださいませ」は、話し手が相手に自分の家に入ってほしいと勧めている。(332)「どうぞ、久しぶりにごゆっくり遊ばして下さいませ」の「ご～あそばす」は、堀川・林編著(1969:p.29)が説いているように、「動詞の尊敬化形式では、最も敬意が強くと見られるが、しだいに使用されなくなっている。婦人どうしの会話で使用されることが多く、男性に対して使用する場合は、非常に身分が高い人に限られる」のである。(333)「召しあがってくださいませ」の「召し上がる」は「食べる」の尊敬語である。(331)～(333)は、話し手のなわばり意識に基づいて相手に勧めている。

これに対して、自分のためではなく第三者のため、聞き手にそのなわばりに属する物事を頼んでいる例も見られる。

(334)「……はい、お子様は雅子様お一人でございます。とても可愛い、優しいお嬢様で……。今、一体どうなさっているのかと思いますと……。一刻も早く誘拐犯人の手から取り戻してくださいませ！」(名探:p.9)

被害者の女中→警視庁の警部

(335)「今夜はお揃いで、どんなご用でございますの？もし例の医事裁判のことでございましたら、東を巻き込まないようにして下さいませ、ご承知のように東が近畿労災病院長になるにはいろいろといきさつがありまして、すんなりとなれたわけではございませんから、その辺のところをとくとお含み戴きたいものですわ」(巨塔-4:p.105)

教授夫人→助教授

(334)の誘拐された女の子は、話し手の娘ではなく、勤め先の娘である。話し手は女中で直接の受益者ではない。(335)も同様で、話し手は夫のため聞き手に頼んでおり、直接の受益者ではないが、受益者が夫なので間接に恩恵を受けている。

3.5.2. 「お／ご～ください」

「お／ご～ください」は、主に和語動詞の場合は「お～ください」、漢語動詞の場合は「ご～ください」となる。「お／ご～ください」は、「してください」と依頼対象の範疇が重なっているが、「してください」より丁寧である。依頼内容について、森田(1985:p.61-66)が指摘しているように、「わかってくださいよ」「ぜひ私に売ってください」「(タクシーで)ここで止めてください」「私の名まえも覚えてください」「お国のために死んでください」のように、相手自身の得にならない行為に対しては「お／ご～ください」形式は使用できない。前田(1990:p.51)は森田説の妥当性を疑いながら、「話し手が聞き手が望まないことを命令、指示するのに相応の力を立場上備えており、発話が本質的に〈命令〉として働く場合」「聞き手より優位な立場からでなく、実現が聞き手の好意に依存する度合が大きく、依頼してもあまり失礼とならない行為を、優位な立場の者に〈懇願〉する場合」にも「お／ご～ください」を用いると補充している。

森田(1985)と前田(1990)の研究を要約すると、「お／ご～ください」も「してください」のように、「勧め」「指示・助言」「依頼」の機能を有することが分かる。また、前田(1990)が指摘しているように、「依頼」の度合が強くなり、相手の好意に依存度が大きい「懇願」の場合、次の例のように、「してください」を用いて、「お／ご～ください」と置き換えることはできない。

- (336) 「金森洋子とうホステスの店、わかったかい」
「わかりました」と小林は嬉しそうに言った。「ええと、銀座の『カリン』だそうです」
「『カリン』か。それは高いな……」と村野は唸った。「『週刊ダンロン』の名前で取材するから、何かあったら頼むぞ」
「だったら僕も連れていってください」と小林が手を合わせて懇願するのを笑って、村野は自分の机に戻った。(灰：p. 221)

二十代の男性→会社の先輩 (男性)

【再掲】

- (337) 徳太郎は、野上法律事務所のダイヤルを廻した。
「わたしです」と、電話口に出た野上に、徳太郎は、嘆願する調子でいった。
「わたしを助けて下さい」
「日本を離れるまで、私に電話はかけないという約束でしたよ」(誘拐：p. 338)

年配の男性→弁護士 (やや年下の男性)

【再掲】

これだけではなく、「指示・助言」の度合が強くなり、「叱責」の意味がある場合、次の例のように、「お／ご～ください」とは置き換えられない。

- (338) 「あなたは、畑山家からウチへお入りになったからわからないでしょうが、山内家は堅実なんです。祖父の代から事業は拵けても、そのための合理的な投資はするけど、ほかのことは儉約主義でした。前後のみさかいいもなくお金を派手に使うのが大嫌いでした。わが家ではそれを家憲としています。あなたもよく心得ておいてください」

「……………」

これは弱い夫に対する母性愛からではなく、養子婿に与えるきびしい訓戒であった。(空 50-51)

妻→養子婿である夫

【再掲】

要するに、聞き手にとって好ましくないことは「お／ご～ください」が用いられない。逆に、話し手にとって好ましくないことは「お／ご～ください」が用いられる。

- (339) 「奥さんを殺した後、今度はあなたが狂言を演じたわけだ」
「馬鹿げたことです。自分でもそう思います」洋次は苦笑した。それはポーズではなかった。
「お笑いください。私はね、二度目に家に帰った時、実際に美枝子の名前を呼んで、探し回るふりをしたんですよ。外にいる誰かが声を聞くかもしれない、窓から誰かが覗いているかもしれないと思ってね。ご丁寧に、美枝子の死体を見つけた時には、腰を抜かすふりまでしたんですよ」(嘘：p. 101)

男性容疑者→刑事

- (340) 俊鋭の尊台と違い、小生はおいぼれの駑馬で、とるに足らぬ愚見を長々と申しあげて汗顔のいたりでございます。御憫笑ください。なお、福岡方面のことで、小生でも役に立つようなことがございましたら、いつでも御用をおおせつけ願います。できうるかぎり御協力いたします。
(点：p. 210)

手紙 所轄の警官→警視庁の刑事

(339)「お笑いください」は(340)「御憫笑ください」と意味がほぼ同様であるが、後者の方が手紙などの文章にも用いられるものである。話し手は「お笑いください」「御憫笑ください」を用いて自分をあざけている。

3.5.3. 「お／ご～になってください」

「お／ご～になってください」は「お／ご～ください」より丁寧である。話し手のなわばりに基づいて、相手に何かを勧める場合に用いる。

- (341) 「本当なんです。あ、それより何か冷たい物をお持ちしましょうか。アイスコーヒーとかアイ

スティーとか。もちろん温かい物もございますけど」
「そうですか。ではコーヒーをいただきます。温かいほうを」
「かしこまりました。ではあちらでお待ちになってください。すぐにお持ちいたします」
雪穂はソファやテーブルの置かれた一面を掌で示しながらいった。(白夜：p. 543-544)

ブティックの経営者(女性)→男性客

- (342) 「今日はお天気がいいから、お散歩に行きましょう。奥さんはお休みになってください」
鮎子はたとえ一時間でも、介護人を寝かせてあげたいと思って言ったのに、操夫人は、
「いいえ、まいりますとも」と元気よく答えた。(老人：p. 27)

訪問看護婦→患者の妻

このように、依頼内容が聞き手にとって好ましいことであるが、依頼が実現できるかどうかは聞き手の好意に頼っている。尾形(1996)は「お／ご～になってください」を「してください」「お／ご～ください」と比較して、次のような例をあげている⁵⁵。

- a. よろしければその資料、もう一部〔分けてください／お分けください／×お分けになってください〕。
- b. 披露宴には私もぜひ〔招待してください／ご招待ください／×ご招待になってください〕
- c. 先生、今後ともよろしく〔指導してください／ご指導ください／×ご指導になってください〕

「お／ご～になってください」の用法は、話し手のためになってはいけない。もう少し例を挙げて考察する。

- (343) 「終わりましたよ」といって彼女は微笑んだ。
「どんなふうになつた？」と彼は訊いた。
「それは御自分の目で、おたしかめになってください」助手の女性は、意味ありげな目をしていった。

江利子は一番端の椅子に座らされていた。一成はゆっくりと近づいていった。鏡に映った彼女の顔を見て、彼は思わず息をのんだ。(白夜：p. 276)

美容院の助手→男性客

- (344) 今朝、共同配給所の徳山さんが回ってきて、
「山中さんところは朝日と讀賣でしたね」といった。自分が、
「去年までは朝毎讀の三紙だったが、この正月、一紙減らしてくれといふから、毎日新聞を諦めた。それが何かいけなかったのですか」と問い返すと、徳山さんがいふにはかうである。
「明日の各新聞に一斉に社告が出ると思ひますが、五月から新聞はどちらさまも一紙限り、といふことになったんですよ。朝日でも讀賣でも、どちらでも構ひませんが、とにかくどちらかをおやめになってください」(東京：p. 15-16)

新聞配給所の人員→男性客

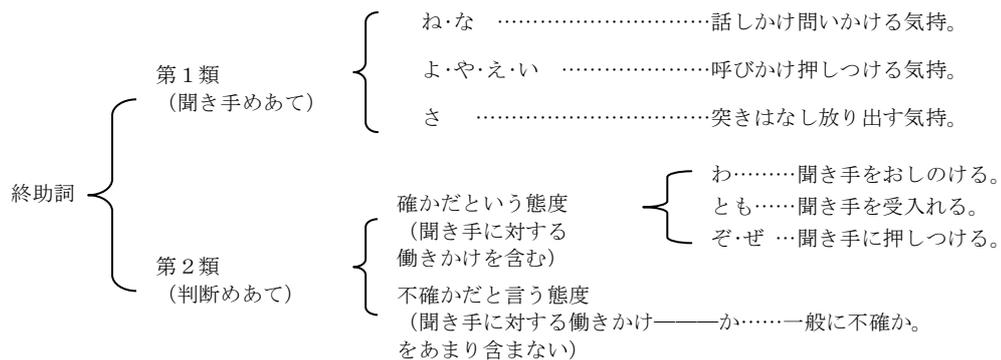
(343)「それは御自分の目で、おたしかめになってください」、(344)「朝日でも讀賣でも、どちらでも構ひませんが、とにかくどちらかをおやめになってください」のように、受益者が話し手ではない。「お～になってください」を用いて上位者や対等な人に勧める場合、受益者が話し手になってはいけない。また、聞き手が話し手の依頼内容を実行するかどうかは、話し手の権限外になる。

3.6. 終助詞による表現効果

Searle (1986) は、発話行為を「発語行為」(utterance act)、「命題行為」(propositional

⁵⁵ 尾形(1996)が10例をあげているが、ここではその代表の3例だけを引用する。

act)、「発語内行為」(illocutionary act)、「発語媒介行為」(perlocutionary act) の4つに分類している。発語行為は音声的行為と形式的行為、命題行為は意味的行為を指している。発語内行為と発語媒介行為は Austin の分類に準じるもので、遂行動詞によって表われる行為及びその結果を表す。「してください」は、くだけた場面で終助詞「よ」「ね」「な」と共起することが多い。佐治 (1991 : p. 24) は、「終助詞の機能は、話し手が文を聞き手に伝達する際に、そこに表されている判断に話し手がどのような責任を持つか、また、それをどのような気持で、聞き手に伝えるかを表すものだと言うことができよう」と述べ、次の表で要約している。



この表によると、終助詞「よ」「ね」「な」は話し手の気持を表すが、命題行為に影響を与えないことが分かる。要するに、「してください」に「よ」「ね」「な」は後接しなくても、依頼の意味が伝わる。そこで、「してください」に「よ」「ね」「な」を後接する場合、どのような発語媒介行為（本研究では「表現効果」⁵⁶と呼ぶことにする）を表すのであろうか。

3.6.1. 「よ」の押し付け

陳 (1987 : p. 95) は、次のように「よ」を分析している。

「よ」は命令、禁止、希求など、ひろい意味ではたらきかける文にもつくが、このばあいも、話し手と聞き手の間に認識のギャップがあって、話し手は、そのギャップをうめるために発言している。

すなわち、話し手が聞き手にある行為をする必要性を認識させる場合、「よ」を用いる。

(345) 「お湯がわいてますか？お湯はたくさんわかしといてくださいよ、いや上戸のほうにはお爛をする、下戸のほうにはまた…お茶アいれて出す」(文楽 : p. 236)

旦那→家人

(346) 「じゃあ、ご近所からでも、できるだけ情報を仕入れておいてくださいよ」
宇部さんは、立上って帰って行った。(一匹 : p. 129)

記者→同僚

(345)「お湯はたくさんわかしといてくださいよ」は、話し手が聞き手にお湯をたくさん沸かすと指示している。(346)「できるだけ情報を仕入れておいてくださいよ」は、話し手が同僚である聞き手に情報を仕入れておくことを指示している。「してください」だけならば、

⁵⁶ この用語は益岡 (1991)、宇佐美 (1999) による。

(345) (346) のように、指示や助言の意味が伝わるが、「よ」のつくことによって、話し手は、自分のなわばり意識に基づいて、強く聞き手に働きかけている。佐治 (1991 : p. 21) が説いているように、「よ」は「話し手の聞き手に対する『押しつける』ような気持ち」が感じられる。

また、話し手と聞き手の間にある認識のギャップを埋めるため、「よ」は副詞と共起する例も見られる。

(347) 「どうもうちの人ア不思議だね、エえ？こういうことってえと早く手が廻るんだからね、こういうことは言いだしてから一時間ぐらい待つもんですよ。すぐ仕度をさしてくださいよ……」
(文楽 : p. 250)

旦那→家人

(348) 「うん。九月九日によ、急行十和田から百万投げろ、と言ってきたのさ。だから出勤はまだまだよ」

「何ですって。もっと詳しく教えてくださいよ」

渡辺はにやっと笑ってハイライトをくわえた。机の上の大箱のマッチで火をつけると、隅のソファに村野と小林を誘った。

「吉永小百合の家から今日電話があつてな。草加次郎から脅迫状が来てるって言ってきたんだ。昨日の消印で今日の昼に届いたらしい。いつもなら届けるのも少し考えたりするんだろうが、昨日の地下鉄爆発事件のニュースを聞いて怖くなったんだろうな」(灰 : p. 58)

男性→大学時代の先輩

(349) 「とにかく、今はその話はよしませう。早く階下に来てくださいよ」

母は、タオルを持って、階段を降りていった。(水 : p. 25)

母→息子

このように、「よ」は「すぐ」「もっと詳しく」「早く」などの副詞と共起している。相手の言動を指摘したり、反対の意見を表したりするのである。益岡 (1991 : p. 101) は、次のように分析している。

「よ」が付加されることが依頼の表現力を強めることにつながるのは、「よ」という形式を表す、話し手の意向が聞き手の意向に対立するという判断から帰結する事柄である。意向の対立が想定されるにもかかわらず敢えて相手に行為を依頼する場合、その依頼は強い調子のものになるのが自然であろう。

また、話し手は副詞を用いなくて、自分の要望をありのままに述べる例も見られる。

(350) 「現在のところ骨にも関節にも筋肉にも異常は認められない。さらに検査中だが、見通しは明るいを書いてやってくださいよ。それを読めば、佐久間君もまた治療に来る気を起こすかもしれない」

「球団のフロントも、だだをこねて投げようとしなない投手を、いつまでも大事にかばってくれるほど甘くはないですからな」(残 : p. 132)

医者→記者

(351) 「いいんだ。とにかく降ろしてもらおう。降ろさなければ、どんなことになったって知らんぞ」「ええ？」

運転手は鼻白んだらしく、振り返った。しかし、まともに喧嘩する相手ではないと思ったのか、ちょうど、次に車が停まったとき、

「じゃあ、気をつけて降りて下さいよ」と、ドアを開けた。(影 : p. 245-246)

タクシーの運転手→男性客

(352) 「あたし、行って来て来ます。——おばあちゃん、もし、一郎がうちに帰って来たら、絶対外に出さないように。あたしが戻るまで引きとめといてくださいよ。いいですか」

耳もとでどなると、どうやら通じたらしく、トヨはうんうんとうなずいた。(三日：p. 11)

中年の女性→義理の母

(350)「見通しは明るいと書いてやってくださいよ」は、話し手が聞き手に第三者の病気を「見通しは明るい」と書いてほしいと頼んでいる。(351)「気をつけて降りて下さいよ」は、話し手が威張っている乗客に気をつけて降りてほしいと依頼している。聞き手と喧嘩したくない話し手の意図が伝わる。(352)「あたしが戻るまで引きとめていてくださいよ」は、話し手がおばあさんに自分の帰りまで孫を引きとめておいてほしいと依頼している。

「よ」について、白川(1993)は「その発話が確実に聞き手の耳に入るように聞き手の注意を喚起する」という機能があると分析している。井上(1993)は、聞き手が依頼を実現したくない場合、「よ」を下降イントネーションで発音することによって、押し付ける言い方になると主張している。森山(2000：p. 143)も「よ」によって「強い命令や強い促し」が感じられると指摘している。

(353)「志ん生さん、あんたはお酒が好物だときいている。こいつはものはいいですよ。さあ、遠慮なく、どんどんやって下さいよ……」と、すすめてくれるし、奥さんはまたニコニコと笑顔をつくって、

「さあさあ、どうぞ、どっさり召しあがって下さいませよ、お肉の方も……ひとつお酌をさせていただきますましょう……」と、下にもおかんもてなしぶり……奥さんにしてみりゃ、あくまでもその肉はあたしの手土産を思いこんでいるんだから、しきりにすすめてくれるんです。(なめくじ：p. 263)

男性→男性客

(354)「体、大丈夫ですか」明子を見ると、このところ、必ずいう言葉を口にして、「無理はしないで下さいよ」明子の妊娠を知っている男であった。「おかげさまで、とても順調なんです」開店前の準備を終えて、明子は時計をみた。(午後-下：p. 315)

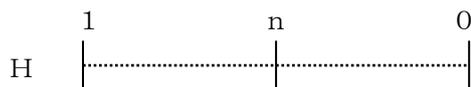
男性→友達(女性)

(353)「遠慮なく、どんどんやって下さいよ」は、話し手が聞き手にお酒を勧めている。(354)「無理はしないで下さいよ」は、話し手が聞き手の身体を心配している。このように、「よ」の「押しつける」というマイナスのイメージは、聞き手にその好ましいことを勧める場合、話し手の誠意を最大限にするというプラスのイメージに変える表現効果がある。

3.6.2. 「ね」の期待と配慮

「ね」は「よ」ほど聞き手に強く働きかけない。陳(1987：p. 100)が指摘しているように、「ね」には「話し手が聞き手に同意をえられることを期待して発言している」という機能がある。したがって、「ね」は聞き手の同意が得られるかどうかの不確定であることを表す表現とは共起しにくい。益岡(1991：p. 100)は「『ね』の付加がこのような表現効果をもたらすのは、『ね』が基本的に話し手と聞き手の意向が一致するとの判断を表す形式であることに起因するもの」と考えている。神尾(1998)は更に詳しく「ね」の用法を分析している。神尾(1998：p. 16)は次のような尺度を設定し、「ね」を「必須のね」「強調のね」「任意・疑問のね」「任意のね」に分けている。

s |-----|-----|



また、神尾（1998：p. 47-48）は例を挙げながら、「必須のね」「強調のね」「任意・疑問のね」「任意のね」を説明している。

- | | |
|----------------------|-----------|
| a. よく降るねえ。 | 【必須のね】 |
| b. 君は胃が悪いそうだね。 | 【必須のね】 |
| c. いい絵だろ，ね？ | 【強調のね】 |
| d. 雨来ますかね？ | 【任意・疑問のね】 |
| e. えーと，それは 500 円ですね。 | 【任意のね】 |

次に、神尾（1998：p. 48-49）は「ね」とそれが出現する発話形を定義している。

「ね」とそれが出現する発話形の定義	
必須のね	$H = 1$
強調のね	$H > n \ \& \ S > n$
任意・疑問のね	$H > n \ \& \ S < n$
任意のね	$H < n \ \& \ S \geq H$

神尾（1998：p. 50）は、「ね」が「 $H > n$ の場合に用いられる要素である⁵⁷」という仮説を立て、「 $H > n$ が成り立っていない場面においても、 $H > n$ が成り立っているかのように仮定することにより、『ね』を用い、それにより発話に友好的な親しみのある感じを持たせることができる」と述べている。依頼表現における「ね」は必ずしも必要ではないので、神尾の「任意のね」に属すると考えられる。したがって、依頼表現における「ね」も、「 $H < n \ \& \ S \geq H$ 」という定義に符合する。

(355) 上原君たちの世代が大人になったら、どうか、正しいことを言った人間が損をしない社会をつくってくださいね。協調性も大事ですが、悪いことに協調しては意味がありません。先生もこれからはもう少し抵抗してみます。旅行会社にいやみぐらいは言ってやろうかと思っています。（サウス-下：p. 129）

前の担任先生からの手紙

(356) 「如月さん、そういうことですから、着替えだけさせてあげて待って下さい。十分ぐらいたらまた来ます。散歩の後、食事まで時間ありますから、洗顔なんかはその時で。どうせみんな眠そうな顔ですから目立ちませんよ。だけど——念のためですけど、その格好でお散歩は絶対風邪ひきますから、如月さんもきちんと着替えて下さいね」（四日：p. 187）

女性→演奏者の保護者

(355)「上原君たちの世代が大人になったら、どうか、正しいことを言った人間が損をしない社会をつくってくださいね」は、話し手が自身の知識に基づいて聞き手に対する要望を表している。(356)「念のためですけど、その格好でお散歩は絶対風邪ひきますから、如月さんもきちんと着替えて下さいね」のように、話し手は自身の体験により聞き手にアドバイスを与えている。依頼内容はいずれも話し手の知識や体験に関わり、話し手のなわばりに属す

⁵⁷ Sは話し手で、Hは聞き手である。nは情報の認識の尺度上に定められた点であり、この点を境にして、話し手または聞き手の情報のなわばりに属する情報とそれではない情報とが区別される。

るので、「 $H < n \& S \geq H$ 」に符合する。しかし、本章 3.3.1 節で「してください」と話し手のなわばり意識との関連を検討した結果は、「してください」も神尾の定義「 $H < n \& S \geq H$ 」に符合していることが分かった。したがって、「 $H < n \& S \geq H$ 」は「ね」のみの機能なのかどうかは明らかではない。「してくださいね」について、神尾の「ね」の仮説はまた検討する余地があると考えられる。

話し手のため「ね」のつくことによって、森山（2000：p. 143-144）は、「相手の同意だけ得られればよいとき（すぐに相手が動作をしなくてもよいような場合もある）、相手の同意をうながした言い方」になると指摘している。

- (357) 君子は、はつとしたように佐枝子を見上げ、
「お嬢さまのそのお気持、女の私にはよく解りますわ」
佐枝子の心の中を汲み取るように云い、暫く口を噤んだが、
「でも、やはり私が証言することだけは、お許し下さい」君子は動かぬ語調で云った。
「じゃあ、今日はこれで失礼しますわ、でも、また伺いますから考え直して下さいね」
佐枝子は、証人を引き受けて貰えるまで何度でも足を運ぶように云った。（巨塔-4：p. 238）
教授の娘→看護婦

- (358) 「いつ発売の号に載るんですか。大きく扱ってくださいね!」甘い声を出し、記者の腕を揺すった。
記者が照れている。ゴミみてえな写真スペースなら承知しねえぞ。腹の中で言っていた。（プール：p. 138）
コンパニオン（二十代の女性）→記者（男性）

確かに（357）「また伺いますから考え直して下さいね」のように、話し手は聞き手に証人を引き受けようと説得する場合、（358）「大きく扱ってくださいね」のように、話し手が聞き手に甘えるように頼む場合、「ね」がつきやすい。また、聞き手が知っており、承諾した事柄を再確認し、念を押す例も見られる。

- (359) 「どんなに急なこと云われても、私がいなく時の手術は断ってくださいね」と付添に念を押して立ちあがった。（おと：p. 125）
患者の妻→看護婦
- (360) 「あたしがこんな話をしたことは、誰にもいわないでくださいね」
「いいません。大丈夫です」（白夜：p. 562）
女性→雑誌の編集者

このように、「ね」は説得、懇願、念押しなどの場合に使用しても、「よ」ほどの押し付けがましさが感じられない。聞き手より上位ではなくても、話し手は「ね」を用いることができる。

また、聞き手のため、聞き手にとって好ましいことを勧めたり、励ましたりする場合にも「ね」を使用する。

- (361) 胸の名札に「八木あかね」とある。今度父の担当になったと葉書をくれた娘だ。たまには面会に来て下さい。そう書けば済むものを、押しつけがましくなってはいけないと考えたのだろう、
「お忙しいとは思いますが」が三度も出てくる微笑ましい文面だった。
「ゆっくりしてってくださいね!」
あかねはもう嬉しくて仕方がないといったふうだ。畳に両膝で滑り込み、蠟のように白い父の手をとって上下に揺すった。
「よかったですね。息子さん、来てくれて」（動機：p. 11）

若い看護婦→患者の息子

- (362) 「何ですか、これは」
「カンパっていうの。せめてもの気持ちなんで」
「ありがとうございます。喜んで戴きます」
カスミは礼を言って素直に受け取った。以前は寄付を頑な拒んでいたが、子供を探し続けることは、現実には金が要ることだった。カスミが躊躇いなく受け取ったので、大塚は拍子抜けしたらしい。急に冷たい素振りになった。
「じゃ、頑張ってくださいね」引っ込もうとする。(頼-上 : p. 304)

女性→親しくない女性

(361) の勧め、(362) の励ましにも「ね」が用いられる。「ね」は、「よ」ほど相手に強く働きかけないので、「ね」がつくと、(361) の波線で表現したような話し手の配慮の気持ちも、(362) のように聞き手のことをあまり関与したくない話し手の気持ちも伝わる。このように、「聞き手に強要したくない」という話し手の配慮が感じられ、「自分の行為は聞き手のフェイスを脅かすことになるということを理解しているということ（気持ち）を、聞き手に言葉で表現して伝える」⁵⁸というポライトネスのストラテジーによる表現効果があると考えられる。

3.6.3. 「な」の勧めと懇願

「な」について、佐久間（1952 : p. 96）は、次のように述べている。

「な」に二種の別があって、一つは動詞（動詞をあらわす）の基本形（「連體形」）に接續して禁止命令の態度を示すのに用いられるし、他の一つは同じように動詞につくが、その造語形（「連用形」）に接續して勧告の態度をあらわすのに用いられることは、よく知られています。

また、佐久間（1952 : p. 100）は、「な」が「ナサイがナハイ、ナイを経て単音節にまで約まったもの」であると論述している。「してください」につく「な」はどのような表現効果があるかを明らかにする。

- (363) 「金持ちがそんなに偉いか？」
「お父さん、和明にからんでどうするんです」文子は夫に腹が立ってきた。「少し余計なことを言わないで黙っててくださいな」
怒るかと思えば、伸勝は出し抜けにぬうと立ち上がり、部屋を出ていこうとする。
「どこへ行くんです？」
「トイレだよ」(模倣-上 : p. 391)

妻→夫

- (364) 「主人とは、どういう契約をしておられるんですか？」
「契約？」
「ええ、そうです。主人に頼まれて、離婚話を切り出すために、こうしておいでになったんでしょ？わたしの独身時代に関係のある大切な話だなんて、デタラメはもう言わないでくださいな。わかっておりますから」
前川先生は、細い目を大きく開けた。「奥さん、それはどういう——」(今夜 : p. 19-20)

女性→弁護士（中年の男性）

このように、「な」は「ね」と同じく、聞き手に働きかける力が「よ」ほど強くない。話し手は聞き手の言動を制御する立場ではないことから、勧告の意味が感じられる。しかし、「ね」に比べると、「な」は「改まった感じや、念を押ししたり勧告したりする感じは弱く、懇願する

⁵⁸ Brown & Levinson (1987)、高原他 (2002) を参照。

感じがある」⁵⁹という指摘も見られる。

- (365) 小せんが、「旦那、噺を一席やらして下さいな」というんで、音羽屋が、
「ああ、やってくれよ」(なめくじ：p. 151)

噺家→音羽屋

- (366) 狸々芸者不思議にも辞して受けず「先生、私はモー酒を飲みません、実は今日もその事で伺ったのですが先日向島で飲み過ぎて既んでの事で死に損こないました、それから今日まで大病人、死にはしないかと思って心配しているのです、何卒一つ診て下さいな」と此方は一生懸命の願い、されども医者には嘲笑し「アハハ流石の狸々も少し驚いたと見える、然し決して心配するに及ばん酒を廃めたければ段々酒量を減らしてそれから廃めるがいい、急に廃めたからそれで身体の調子が変わったのだ」(酒：p. 260)

芸者→医者

このように、話し手が親しくない聞き手に懇願する場合、「な」が付きやすい。この傾向について、飯野(2007：p. 231-232)は、次のように詳しく分析している。

日本語の言い回しにかぎっていえば、語尾の終助詞の微妙な変換が、そのへんのニュアンスをがらりと変えることがある。

a. ファスナー、閉めたほうがいいよ。

b. ファスナー、閉めたほうがいいな。

前者が聞き手にとって望ましい事態を提示するのにたいし、後者はむしろ話し手にとって望ましい事態——見苦しいから閉めてくれよというニュアンス——を打ち出している。

「よ」が話し手が聞き手との間にある認識のキャップを埋めるためならば、「な」は話し手が一方的に自身の要望を述べて聞き手に感じさせるために使われる。聞き手に対する話し手の要望を強調する場合、副詞「どうぞ」「どうか」と共起して、懇願の意味が更に強まる。

- (367) 「信吉小父様が一番、弱いのは、明子小母様でしょう。私、考えあぐねてお願いに来たんです。
どうぞ、私を助けてと思って、お口添えをして下さいな
ねっとり三時間近くも口説かれて、人のいい明子は結局、
「話すだけは……」といわざるを得なくなってしまった。(午後-下：p. 228)

甥の妻→小母

- (368) 「信吉のことは水に流して、どうか太郎の門出を祝ってやって下さいな」(午後-下：p. 299)

女性→弟の元妻

(367)「どうぞ、私を助けてと思って、お口添えをして下さいな」、(368)「どうか太郎の門出を祝ってやって下さいな」のように、聞き手を説得する場合、「な」を用いる。

3.6.4. 「な」「よ」「ね」の比較

「してください」の「な」は「よ」「ね」と比較して、三者の機能を更に明らかにする。

- (369) 「主人とは、どういう契約をしておられるんですか？」
「契約？」
「ええ、そうです。主人に頼まれて、離婚話を切り出すために、こうしておいでになったんでしょ？わたしの独身時代に関係のある大切な話だなんて、デタラメはもう言わないでくださいな。わかっておりますから」
前川先生は、細い目を大きく開けた。「奥さん、それはどういう——」(今夜：p. 19-20)

⁵⁹ 金田一・池田編(1980：p. 1431)

女性→弁護士（中年の男性）

- (370) 「最初からタレントならともかく……」
「そうよね。勝ち馬に乗るのがあんたらの商売だから」
「意地悪を言わないでくださいよ。平社員なんて何の権限もないんですから」
「わたしの担当も、上から命令されてなった、と」
「いえ、そんなことは……」一瞬、返事に間があった。（空中：p. 272）

男性編集者→女性作家

- (371) 二度の失敗は生まれて初めてだった。下から内田をにらみつける。ブランコで逆さになりながらにらみ返してきた気がした。怒りで顔が熱くなった。
舞台監督の丹羽が副調整室でNGを出したらしく、「目隠し飛行」は中止になった。MCが「お金を返せなんて言わないでくださいね」と観客を笑わせた。（空中：p. 12）

アナウンサー→観客たち

(369) 「わたしの独身時代に関係のある大切な話だなんて、デタラメはもう言わないでくださいな」は、話し手が自身の考えを述べることにより、親しくない聞き手に自身の希望を感じて、その発話を止めてほしい。(370) 「意地悪を言わないでくださいよ」は、話し手が自身のなわばり意識により、聞き手に反対の意見を述べている。(371) 「お金を返せなんて言わないでくださいね」は、話し手が聞き手⁶⁰の考えを推測しながら自身の意見を言うことにより、聞き手の同意を求めている。したがって、観客たちである聞き手はまるで話し手に自身の行動が見透かされたかのように笑ってしまう。因って、もう一つの対照組を見る。

- (372) 「それじゃ、やっぱり犯人は君なんだね」チューは半泣きになっておびえている。やんちゃで人なつこいふだんのチューをよく知っているトキ江は、いたたまれなくなって口をはさんだ。
「ちょっと待ってくださいな。暗かったし、突然だったから、わたし」
「しかし、この子は昨夜も獲物をねらっているところを大森巡査に職務質問されてるんですよ」(炎：p. 136)

近所のおばさん→中学校の校長

- (373) 「奥さん、ちょっと待ってくださいよ。そりゃねえ、奥さんが、こいつをかばう気持ちもわかるよ。しかしねえ、自殺なんぞといっちゃ、藤島がかわいそうだ。あいつは、金輪際自殺なんかできる男じゃないんだ」黒セーターの男が、美枝子の前に来て、どっかтусわった。
「いいえ、実は、藤島の遺書が、六月になってパリから届いたんです」
美枝子は必死だった。その美枝子の表情に、慎一郎は以前的美枝子を見た。
「パリ？奥さん、しっかりしてくださいよ。藤島はパリには行きたいとは、いっていましたがね。しかし、パリに行っていたことはないんですよ」(自我：p. 241-242)

男性→仲間の妻

- (374) 「すみません。向井君を呼んでください。沖縄の公衆電話からかけているんです」
「あら、沖縄？それはまた遠くから。ご苦労さんなことで」
じれったいほどゆっくりした口調だった。いいから早く。心の中で二郎が叫ぶ。
「とにかく、向井君を」
「はいはい、ちょっと待ってくださいね」

やっとのことと呼びに行ってくれた。（サウス-下：p. 101）

お祖母さん→孫の同級生（男子小学生）

(372) 「ちょっと待ってくださいな」は、話し手が犯人を指名する証言をしたが、あまり自信がなく、改まった態度で聞き手の指摘を止めている。(373) 「ちょっと待ってくださいよ」は、話し手が相当な自信を持って聞き手の言い方に反対している。これに対して、(374) 「ち

⁶⁰ このような場合、複数の人であるが、同質性（皆観客であるから）を持つので、同一の聞き手と見なすことができると考えられる。

よっと待ってくださいね」は、話し手が聞き手の依頼に応じ、好意を込めて行動するので、その間待ってほしいと頼んでいる。

以上、まとめてみると、「な」と「よ」は話し手の立場に立って発話するのに対して、「ね」は聞き手の立場を配慮しながら発話する。「な」と「よ」は同じく話し手の立場からであるが、「な」は「どうぞ」「どうか」とも共起しうるということから考えると、聞き手に対する懇願や話し手なりの願望表出にも用いられるので、「ね」と「よ」の真ん中に位置付けてもよい。これに対して、「よ」は話し手が自身のなわばり意識により、聞き手に強く意見を表す表現効果がある。他方、「ね」は常に相手の立場を配慮し、好意を込めて聞き手に反感を起ささないように気をつける表現効果があると考えられる。

3.7. 副詞による表現効果

「してください」は、「どうぞ」「どうか」「ぜひ」「とにかく／ともかく」「ちょっと」などの副詞と共起して用いられる。工藤（1982）の分類によると、「どうぞ」「どうか」「ぜひ」「とにかく／ともかく」は叙法副詞に属する。工藤（1982：p. 52-53）は、叙法副詞が「必要に応じて、述語の叙法の程度を強調・限定したり、文の叙法性を明確化したりするものであり、構造上必須のものではないという意味では、語彙的な表現手段」であると指摘している。「ちょっと」「少し」などは程度副詞に属する。

また、野田（2006：p. 192）は副詞的成分の順序を述語成分の内部の語の順序と比べ、次のように述べている。

- a. モダリティの副詞的成分—テンスの副詞的成分—アスペクトの副詞的成分—動作者の副詞的成分—対象物の副詞的成分—述語の語幹
- b. 述語の語幹—ボイス—アスペクト—否定—テンス—モダリティ

a b の方向は逆であるが、野田（2006：p. 192）は「述語の語幹と同じようにできごとの客観的な内容を述べるものほど、述語の語幹の近くにおき、できごとに対する話し手の主観的態度や聞き手に対する伝えかたを示すものほど、述語の語幹から遠くにおくという動機は同じである」と指摘している。したがって、野田の分類によると、「どうぞ」「どうか」「ぜひ」「とにかく／ともかく」などの叙法副詞も、「ちょっと」「少し」などの程度副詞も、モダリティの副詞的成分に属している。

3.7.1. 「どうぞ」の勧めと改まった感じ

木村（1987）は、聞き手にとって好ましいことを勧める場合、「してください」がよく「どうぞ」と共起すると指摘している。

- (375) 「どうぞお好きなだけ打ってください。私はウッドを練習しますから」
「そうですか。ありがとうございます」（白夜：p. 512）

初対面の男性同士

- (376) 「あなたのお仕事も楽ではありませんね。いろいろと調べなければならいわけですね」
「平穏な言い方だったが、三原の耳には多少皮肉に聞こえた。
「お気を悪くしないでください。ただ、われわれの気やすめに、うけたまわっただけですから」
「いやいや、そんな気持は少しもありませんよ。また、どうぞなんでも聞きに来てください」
「おいそがしいことを失礼しました」（点：p. 131-132）

警察官→事件の関係者 (男性)

(377) 「ぶらぶらいらしているうちにお仲間が出来るんじゃないですか。いつでも、どうぞお出かけ下さい。あちらにお風呂があるんですよ。どうぞ見て下さい、構いません、お婆ちゃんばかり入るところですから。二時から四時までが入浴時間なんですけど、どうしても五時前まで片付きません。中は広いんですよ。構いませんよ、どうぞ」

すすめられるままに昭子は敬老会館の浴場なるものの扉を開けて覗いてみたが、裸の老婆たちはなかなか肉体美が揃っていて、賑やかにさざめきながら背中を流しあったりしている。(恍惚 : p. 191)

敬老会館の事務員→中年の女性

(375) 「どうぞお好きなだけ打ってください」は、話し手が聞き手にゴルフのクラブを貸す時の発話である。(376) 「どうぞなんでも聞きに来てください」は、警官が事件の関係者の質問に答える時の発話である。(377) 「どうぞ見て下さい」は、敬老会館の事務員が来訪者に会館を案内する時の発話である。いずれも話し手が好意を込めて聞き手に対応しているので、勧めの意味が伝わる。簡単な動作と合わせて勧めの意味が一目瞭然である場合、「して下さい」を省略して「どうぞ」だけを使用しても意味は変わらない。

(378) 恐る恐るドアをノックすると、中から「いらっしゃーい」という甲高い声が聞こえた。なんだか長嶋監督みたいだ。和雄は診察室へ足を踏み入れた。顔を上げる。四十代前半と思われる太った医師が、一人掛けのソファに深々と腰をおろしていた。部屋の隅の机では茶髪の若い看護婦が、和雄には目もくれないで週刊誌を読んでいる。

「どうぞどうぞ」医師が相好をくずし、椅子を勧めた。

和雄はスツールに腰かけ、医師の胸の名札に目をやる。(プール : p. 8)

医師 (四十代前半の男性) →患者 (三十代の男性)

(379) 帰るときに、浅井夫人はまた深々とお辞儀をし、菓子折を差し出した。ビニールコートされた包み紙に、フランス語で——たぶん——店名だが品名だかが書いてある。

「つまらないものですがけれども、ほんのおしるしでございます。お嬢ちゃまとお坊っちゃまに、どうぞ」(人質 : p. 293)

中年の女性→近所の主婦

(378) 「どうぞ」は「どうぞかけてください」の意味、(379) 「どうぞ」は「どうぞ受け取ってください」の意味を示している。話し手が「どうぞ」と言いながら聞き手に勧める身振りをして、聞き手は話し手の言いたい意味が理解できる。これは「どうぞ」が既に勧めの用法に定着されて慣用的な表現になる証拠であると考えられる。しかし、(376) 「どうぞなんでも聞きに来てください」のように、簡単な身振りで説明できない場合、「して下さい」を省略すれば話し手の意味が分からない可能性もある。

(380) 昼すぎて、店の中は客で一ぱいだった。席を探していると、女の子が、「こちらへどうぞ」と誘った。若い女が、ぼつんと一人ですわって紅茶を飲んでいて。そのテーブルの前だけが空いていた。知らない女客の前に相客となるのは、なんとなく具合が悪い。三原は椅子に半分尻をすえたまえ、落ちつかない気持でコーヒーを飲んでいて。(点 : p. 211)

女性→見ず知らずの男性

(381) 「結城さん」と、アナウンスがあった。

頼子は椅子を立ちかけた。一列に横に並んでいる人が、彼女の方をいっせいに向いたようだった。

制服を着た係員がはいってきた。椅子から立っている頼子を見て近づき、

「どうぞ」と、うながした。面会室まで、彼女は係員に誘導された。(波-下 : p. 332-333)

拘置所の面会室の係員→女性

(380)「こちらへどうぞ」は、話し手が席を探している聞き手のため「どうぞ」と誘っている。(381)「どうぞ」は、話し手が「どうぞ」と言って面会室まで案内するが、時間があまりないので促しの意味が感じられる。このように、「どうぞ」の「勧め」という基本的な意味から、誘いや促しなどの高次的な意味に拡張してきた。

そして、「どうぞ」は依頼の意味にも用いられる。

- (382) 姑が横から、
「他人様にまでついていってもらえないよ。和明さん、一人で行けばいい」と口を出す。
「いや、ご迷惑でなかったら、どうぞ来てください。あなたが、あの子を見かけられた最後の人もかもしれないから」
おとなしそうな顔立ちに似ず、その口調はきっぱりしていた。何が何でも子供を探し出そうとする気魄のようなものを、杉子は感じた。(一匹：p. 76)
男性→初対面の若い女性
- (383) 「とにかく、わたくしは、何も言わないのですから」瞬間に、カメラが閃光を発した。
「どうぞ、帰ってください」昌子は、声をふるわせて叫んだ。(山：p. 153)
女性→新聞社の記者たち

(382)「ご迷惑でなかったら、どうぞ来てください」は、話し手が誘拐された子供を見た女性と一緒に探しに行こうと頼んでいる。(383)「どうぞ、帰ってください」は、話し手が記者たちに帰ってほしいと言っている。いずれも初対面の相手に対する発話であることから、話し手は「どうぞ」を使用して丁寧に相手に依頼している。また、「な」をつけることができる。

- (384) 「信吉小父様が一番、弱いのは、明子小母様でしょう。私、考えあぐねてお願いに来たんです。
どうぞ、私を助けてと思って、お口添えをして下さいな」
ねっとり三時間近くも口説かれて、人のいい明子は結局、
「話すだけは……」といわざるを得なくなってしまった。(午後-下：p. 228)
甥の妻→小母
- (385) 「どうぞ、おあがりになってくださいな」そう言ったところへ、
「ただいまあ」と、哲彦が幼稚園から帰って来た。(三日：p. 168)
女性→来訪者(女性)

(384) (385) のように、「どうぞ」は「お口添えをして下さい」、「おあがりになってください」に「な」をつけることができる。そして、「どうぞ」という丁寧語は相手を見下す場合に用いられる例も見られる。

- (386) 「警察を呼びますよ」支配人が威嚇する。
「どうぞ呼んでください。ここであなたたちのやってることは、どう考えたっておかしい。これは事情聴取でも説諭でも何でも無い。ただのいじめだ。そのあたりのことを警察がどう考えるか、僕も訊いてみたい」
「生意気な若僧だ」
「よろしいのですか？—〇番しますよ」
「ええ、どうぞやってください」
警備主任と網川が睨みあう。由美子は頭がガンガンしてきて、目が回り、倒れないように机の端に手をつけて自分を支えた。(摸倣-下：p. 324)
男性→ホテルの支配人
- (387) 「え？なんですか？ああ、笑ってるんですね。いいですよ、どうぞ笑ってください。この続き

を聞いたなら、そうそう笑ってはいられないでしょうから」(雨：p. 106)

男性→電話魔

(386) は話し手が聞き手の威嚇に対して怖くない姿勢を示して、「どうぞ呼んでください」「どうぞやってください」と言い、「警察を呼んでもかまいません」、「一一〇番してもかまいません」の意味が伝わる。(387)「どうぞ笑ってください」は「今笑っても、後で笑ってはいられないでしょう」の意味が含まれている。このように、話し手は「どうぞ」の改まった感じを上手に使用して聞き手との距離を保っている。

3.7.2. 「どうか」のへりくだった感じ

「どうか」は「どうぞ」と異なり、聞き手に対する勧めの意味があまり感じられない。しかし、聞き手に対する要望が強く感じられて「懇願」の意味を示している。これは森本(1994：p. 159)が指摘しているように、「話し手が自分ではそこで何もできず、聞き手の決定に全面的に依存するような状況で自然となる」からである。

(388) 「柳原さん、どうか会ってあげて下さい、そして、今度こそ、控訴審では真実を語ると、云って上げて下さい」関口は深く頭を下げた。

「今度こそって、僕は今までも真実を語っています、妙な云いがかりは迷惑です」(巨塔-4：p. 67-68)

弁護士→医者

(389) 「お嬢さんを見て、改めてうちの息子のしでかしたことの重大さを思い知りました。私共が頭を下げたところで、武島さんの気が済むはずのないことは十分に承知しております。私でよければ、殴るなり蹴るなり、どうかお好きなようにしてください」そういうと彼は畳に額がつくほどに腰を折った。隣では夫人がすすり泣きを始めた。

「頭をあげてください」由実子が横からいった。「そんなことをされても……ねえ」と直貴に同意を求めてくる。彼も頷いた。(手紙：p. 383-384)

加害者の父→被害者の両親

例文に示されているように、話し手はへりくだった態度で「どうか」を用いて聞き手に依頼している。因って、「どうか」に話し手の要望を強調する機能が見られる。また、「どうか」は「な」「ね」と共起することができるが、「よ」と共起する例はあまりない。

(390) 「信吉のことは水に流して、どうか太郎の門出を祝ってやって下さいな」(午後-下：p. 299)

女性→弟の元妻

【再掲】

(391) 上原君たちの世代が大人になったら、どうか、正しいことを言った人間が損をしない社会をつくってくださいね。協調性も大事ですが、悪いことに協調しては意味がありません。先生もこれからはもう少し抵抗してみます。旅行会社にいやみぐらいは言ってやろうかと思っています。(サウス-下：p. 129)

昔の担任先生からの手紙

【再掲】

(390)「どうか太郎の門出を祝ってやって下さいな」のように、「どうか」は「な」と呼応して話し手の懇願の気持ちを表している。(391)「上原君たちの世代が大人になったら、どうか、正しいことを言った人間が損をしない社会をつくってくださいね」は、昔の教え子に対する担任先生からの要望である。聞き手に対する押し付けがましさを避けるため「ね」を使用して、話し手の切々たる願いを示すため「どうか」を使用するのであろう。

3.7.3. 「ぜひ」の実現必要性

「ぜひ」は「どうぞ」、「どうか」に比べて共起制限はかなりゆるいが、無制限ではない。工藤（1982：p. 61）の指摘によると、「ぜひ」は「依頼／してください etc.／命令／しろ etc.／勧誘・意志／しよう・する；するつもりだ etc.／希求／してほしい・してもらいたい etc.／希望／したい／当為／しなければならない・するといい・必要だ etc.」と共起して用いられる。更に「ぜひ」という単語の意味の「統一的な把握」のため、工藤（2000：p. 201-202）は「ぜひ」と共起しうる依頼・決意・願望等々の述語の叙法性を、次のように分析している。

依頼「してくれ」＝〔実現の必要性〕＋〔話し手の聞き手への要求〕

決意「しよう」＝〔実現の必要性〕＋〔話し手の自らへの要求〕

願望「したい」＝〔実現の必要性〕＋〔有情主体の自らへの要求〕

といった具合に「成分分析 (componential analysis)」ができたでしょう、すると、「ぜひ」はその述語に含まれる〔実現の必要性〕という副次叙法的な意味特性（もしくは、それを有する形式）と呼応する副詞だ、ということになるだろう。

また、「ぜひ」は「してください」と共起する場合、〔話し手の聞き手への要求〕を表すので、「どうか」の用法と似ている。

- (392) 「相続申告の督促状が居所不明で差し戻されて、現在、本人の行方を捜しているところです——まだ、決定による公的送達の段階にも行ってないわけですね——
「そうです。ですからもし警察のほうで彼の行方がわかりましたら、われわれにも報らせてもらえると、たすかります」
——居所を突き止めたら必ず連絡します。しかし、われわれより前に税務署がつかまえましたらぜひおしえてください——（凶：p. 68）
税務署の官僚→警察の捜査員
- (393) 「七月十九日の午後九時から十二時までですか。そんなこと急に聞かれたっておもいだせませんよ」
——ぜひおもいだしてください。この日時に、田原さんが死んだのです。曖昧な死に方でね——
「だから、私は田原とかいう人をまったく知らないと言ってるじゃありませんか。赤の他人が生きようと死のうと私の知ったことじゃあない」（凶：p. 95）
刑事→容疑者
- (394) 「供述の中に息子さんの万引きのことが出てきますが……」
「構いません。お願いします」稲森は頷き、書類を手にした。
「では、お話しします。どうか、気持ちを落ちつけて聞いて下さい」
落ちつけ。その意味はすぐにわかった。
「まずは犯行前のことです。息子さんは友人と二人でいたようです」（真相：p. 54）
警察署長→死者の父
- (395) 「植村さん、あなたには守りたい人がいませんか」
刹那、頭が真っ白になった。
誰の顔も名も浮かばず、植村は狼狽した。
梶の背後のドアが開いた。今度は看守とともに小峰も入ってきた。問答無用の表情だ。
「どうか、そっとしておいて下さい」そう言い残して、梶は接見室から出ていった。（半落ち：p. 250）
男性被疑者→男性弁護士

「ぜひ」は (392) 「われわれより前に税務署がつかまえましたらぜひおしえてください」、(393) 「ぜひおもいだしてください」のように、主に話し手の希望を表すのに対し、「どうか」は (394) 「どうか、気持ちを落ちつけて聞いて下さい」のように、聞き手の気持ち（息子の

万引きのことに對する父親の気持ち)を察して慰めるような機能や、(395)「どうか、そっとしておいて下さい」のように、話し手が聞き手のなわばり意識(警官が事件の真相を知る権利)に侵入することを知りながら、自身のため(妻を殺した後の二日の行動を告白したくないから)聞き手に懇願する機能も見られる。

- (396) 「是非また来て下さい」淳蔵は黙ってうなずいた。
「本当ですよ。約束を破ったら承知しませんからね」(愛 : p. 55)

男性→元の若旦那

- (397) あたしはすぐその息子さんに会って、
「実はあんたの御両親は大連のこういうところに居られます。いずれ引き揚げて来られるでしょう。あたしは死にそうになってるところを、あんたのお父さんに助けてもらって、そのうえ言うに言われぬお世話になりました。だから、なんかあったら是非あたしのところへ相談に来て下さい……」

といて、その頃のはなしをして親御さんの健在のことをお知らせしたわけですが、それから間もなくそのお父さんたちが大連から引き揚げて来たんですが、家が見つからない。(なめくじ : p. 282-283)

噺家→世話になった人の息子

「ぜひ」は話し手の精一杯の気持ちを表すことができるので、(396)「是非また来て下さい」、(397)「なんかあったら是非あたしのところへ相談に来て下さい」のように、聞き手に対する好意を最大限にする表現効果があると見られる。

- (398) 「そうですか。仕事なので、恐縮ですがこれで失礼します。今度ぜひお子さん連れて遊びに来てくださいよ。なんにもおもしろいものはないが、家だけはだだっぴろいし、庭も広くて遊べるから」

英三さんは、にこやかに言って立ちあがった。(三日 : p. 199)

若い男性→姉の友だち

- (399) 「ふーん、ずいぶんと汚いことをするね」
「でしょう？もう腹が立って——。お客さん、それをぜひ書いて下さいよ」
「ああ、書かせてもらうよ」(名探 : p. 218)

旅館のおかみさん→記者

このように、「ぜひ」が「よ」と共起すると、(398)「今度ぜひお子さん連れて遊びに来てくださいよ」のように、話し手の好意以外、聞き手に親近したい話し手の気持ちも示される。また、(399)「お客さん、それをぜひ書いて下さいよ」のように、話し手の希望を強く表す例も見られる。

3.7.4. 「ちょっと」「少し」の配慮

「ちょっと」「少し」は「属性(質)や状態が帯びている程度性」⁶¹を持つので、程度副詞に属する。例えば、「ちょっと痛い」「ちょっとまずい」「少し詳しい」「少し早い」などである。依頼表現では、「ちょっと」「少し」の機能は元の「属性(質)や状態が帯びている程度性」から拡張して、相手にかかる負担の程度を少なめに表現したい話し手の気持ちを表す⁶²。

まず、「ちょっと」の例を検討する。

⁶¹ 仁田(2002 : p. 181-182)

⁶² 馬場・盧(1992)を参照。

- (400) 「じゃあ、刑事さんなんですか？」
「そうです。お手間はとらせません。ちょっと付合ってください」
「はあ……」(影：p. 259)

刑事→女性

- (401) 「ははあ、おかしいな。すみませんが、ちょっと待ってください」
彼は、デスクの上のメモ帳に、『ヨシモト』と書いた。
「あ、どうも済みません、こちらの帳簿の見間違いでした。本当にとんだご迷惑をかけてしま
って……」(影：p. 136)

電話局員(男性)→女性

このように、話し手は聞き手の立場を配慮して、「ちょっと」を使用している。(401)「すみませんが、ちょっと待ってください」のように、「ちょっと」は「すみませんが」と共起すれば、聞き手に迷惑をかけることに対して話し手の謝りたい気持ちが更に明らかになる。

また、「ちょっと待ってください」は、「話し手が聞き手に短い間待ってほしい」以外の意味・機能も見られる。

- (402) 「男がふらついている中野さんを引き寄せようとしたとき、何か変わった様子はみられません
でしたか。両手でしっかりと中野さんの体を支えたんですか」
「いえ、ええと、ちょっと待ってください……。死んだ人は線路を背にして男の左側に立っ
ていたんです。で、男はあの人の体に近い方の手を伸ばしたんだから、左です。左手であの人の
体を支えたんです。まちがいありません」(獲物：p. 129)

男性→ニュース番組のスタッフ

- (403) 「不登校宣言？ちょっと待ってください。あの桜中学校にかぎって、転校生をそうそうに不登
校にするようなことは……」
「原因は校長先生のいじめだと娘は申しております」(炎：p. 114)

教育長→高校生の母

- (404) 「あら、尻尾もございますの」
「これも絶妙な味です。豚はどこがいちばんおいしいかという、こういう部品の部分です。
ちょっと待ってください。あそこにいるのは、どこかでお目にかかったことのある御婦人だな。
はて、誰だったかな……。そうだ、おもいだした。別居中の妻だ。いっしょにいる男は同じ劇
団の二枚目だな。むこうから声をかけられる前に敬意を表してこよう。ちょっと失礼」風間は
席を起って行った。(梅：p. 55-56)

男性→知り合った間もなくの女性

【前掲】

(402)「ちょっと待ってください」は、話し手自身を待ってほしいというより、話し手の
思慮の整理を待ってほしい意味である。(403)は話し手が問い返し疑問(echo question)⁶³を
使用して、「ちょっと待ってください」により聞き手の話を遮って、今聞いた話を確認してい
る。話し手の問い返し疑問は、南(1985：p. 69)が主張している「①問題の表現の直前に、
相手のなんらかの発話があること、②話し手(質問者)は、相手の、そのことばを、そのま
まか、それに近い形でくりかえすことによって、相手にそれを纏めるものであること」とい
う2つの条件に符合している。「ちょっと待ってください」の前に、「不登校宣言？」はただ
の繰り返しであるが、後接する「あの桜中学校にかぎって、転校生をそうそうに不登校にす
るようなことは……」は、繰り返しだけではなく、聞き手の意味を確認したい話し手の意図
も伝わる。(404)「ちょっと待ってください」は話し手の2つの命題内容(豚足のおいしさと
妻の存在が気付いたこと)の切れ目として使用する表現効果があると見られる。

⁶³ この用語は安達(1989, p. 31)による。

このように、「ちょっと待ってください」は「相手に短い間待ってほしい」というの基本的な意味から、(402)「話し手自身の思慮の整理を待ってほしい」や、(403)「聞き手の話を遮ってその真意を確認したい」、(404)「今の話題を中止して、別の話題が割り込んでくる前の切れ目にしたい」という機能まで拡張した。したがって、「ちょっと待ってください」は「発話時点の直前まで進行している聞き手の言動や話し手自身の言動を即刻に止める」という機能があると考えられる。

- (405) スツールを持ちあげ、壁に叩きつけた。
「何をするんですか」
続いて診察台を横倒しにした。戸棚に当たり、ガラスが割れる。鉗子類が甲高い金属音とともに床に散乱した。
「ちょっと、やめてください」
「うるせえ。怪我したくなかったらどいてろ」(プール：p. 119)
医師(男性)→患者(男性)
- (406) 「お姉さんによろしくってどういう意味なんです？」
「うるさい編集者め、殺す！」空知は片桐の首を絞めた。
「やめて、くすぐりたい。ちょっと、やめて下さい」
エレベーターホールでふざける男二人を、気味悪そうに老夫婦が避けて通り過ぎた。(ミラー：p. 24)
編集者(男性)→親しい作家(やや年下の男性)

(405) (406) の「ちょっと」と「やめてください」との間に読点「、」が入っている。「ちょっと」は「ちょっと待ってください」の短縮と見なされる。そして、話し手が「ちょっと」と言うと、発話時点の直前まで進行している聞き手の言動を即刻に止めた表現効果があると見られる。更に「やめてください」が付加されると、話し手が聞き手に今までの行動もこれ以上の行動も止めてほしい意味が伝わる。

「少し」も「ちょっと」と同じく、聞き手の立場を配慮する機能が見られる。

- (407) 「僕は藤本さんから真理子さんの容態聞いてるけど、みんなには言ってません。だから如月さんも、それだけ少し、気をつけて下さい」
頷くと、萩原君はぎこちなく笑った。(四日：p. 412)
男性スタッフ→男性客
- (408) 「好物はオムライスなんですけど、でもなんでも食べますよ」
「なんだ、そんなの楽ですよ。じゃあ、向こうで二人分差し入れ作って、毛布と着替えとまとめて持って来ます。急ぎますから、少しだけ辛抱して下さい」(四日：p. 240)
男性→患者の保護者

(407)「如月さんも、それだけ少し、気をつけて下さい」のように、聞き手の立場を配慮する話し手の意図が伝わる。特に(408)「急ぎますから、少しだけ辛抱して下さい」の「少しだけ」は、「少し」のみではなく、「だけ」をつけることによって「辛抱する」程度を減少しようとする話し手の意図が伝わる。「少し」は話し手が聞き手に説教したり文句を言ったりする場合にも用いる。

- (409) 「おとうさん」母がたしなめる。
「息子の担任がいらっしゃってるんだから、少しは行儀よくして下さい」
「おおそうか、じゃあ正座でもするか」父は冗談めかして居住まいを正した。「出身大学は？」
「あのう……」南先生が戸惑っている。

「あんたの出身大学だ」(サウス-上 : p. 42)

女性→夫

(410) 「あの——」タイミングを計っていたかのように智子が口を開いた。

「聞くばかりでなく、私たちにも少しは教えて下さい」

高嶋は面食らった様子で、気まずそうに一つ咳払いをした。

「何をです？」

「亡くなった夫人の死亡推定時刻です」

高嶋が鼻で笑った。(臨場 : p. 81)

女性→検視官

(409) 「少しは行儀よくしてください」のように、聞き手の悪い行儀を指摘している場合、(410) 「聞くばかりでなく、私たちにも少しは教えて下さい」のように、話し手が不満を表す場合にも「少し」を用いる。「少し」に「は」をつけると、「少しでもいいから」の意味を含む。したがって、話し手の配慮の気持ちが伝わる。しかし、「もう少し」にすれば、配慮の意味が減り、「少し」の基本的な意味に戻る。

(411) 「可能です。ですが、たった四分間ですよ」

「四分間？」

三原は目をむいた。心が急に騒いだ。

「それを、もう少し詳しく教えてください」

「つまりですね」と、助役に説明しだした。(点 : p. 103)

警察官→駅員

(412) 頼子は小野木の膝に、うとうと眠っては、じきに目をあけた。交替にしようという約束だったが、頼子は、すぐに起きあがった。

「いいんですよ。もう少し、眠ってください」

「いいえ、寝つかないんですの、起きてたほうが楽ですわ」(波-上 : p. 207-208)

男性→不倫の相手

(413) 「ある事件の関係者が、四月一日にこの白鳥に大阪から酒田まで乗ったと証言しています。本人は矢野さんのことを覚えていて、検札を受けたのも矢野さんだったし、敦賀や新潟あたりでも口をきくことがあったと言っています」

「はあ。そうおっしゃられても、それだけではピンときませんよ」

矢野がせっかちに言うのを仁科は押し止めた。

「もう少し話を聞いて下さい。——まずその男性は大阪を出てすぐの検札の際、食堂車は何号車か矢野さんに尋ねたと言っています。連結されていないと聞くと、彼は『冗談みたいな特急やな』と驚いた」

「はいはい、いらっしゃいました。最近耳にした言葉です」(ミラー : p. 116-117)

警官→車掌 (事件調査)

(411) 「それを、もう少し詳しく教えてください」は、話し手がその四分間のことをもっと知りたいと依頼している。(412) 「もう少し、眠ってください」は、話し手が聞き手にもっと休んでほしいと頼んでいる。(413) 「もう少し話を聞いて下さい」は、話し手が聞き手のせっかちな態度を止めて自身の話をもっと聞いてほしいと頼んでいる。このように、「もう少し」は話し手が聞き手の言動が欠如だと思っている。聞き手にその欠如を補足してほしいと依頼している。

4. 「してくれ」系の構造と機能

4.1. 従来の研究

「してくれ」は「してくれる」の命令形であるが、「しろ」のように直接に聞き手を命ずることを避け、聞き手からの恩恵に焦点を置いて、前の動詞の方向性を変える機能が見られる。「してくれ」は動詞テ形に授受動詞「くれる」の命令形「くれ」がつくものであり。(414)のような「してくれる」の例も見られるが、現代ではあまり用いられない⁶⁴。

(414) (今度も、印刷屋に払う金が足りない。金ば貸してくれろ)

会うと、下坂は信子にたのんだ。

貸してくれというだけで、下坂がこれまで金を返してくれたためしはなかった。貸せというのも強制的だった。女の身体を自分のものにしてしている男の特権からだろう、返済ははじめから考えてないようだった。(場面：p. 27)

若い男性→恋人

松下(1978)は「してくれる」「くださる」を「他行自利態」と名付け、「大抵他人の労を多しとする感謝の意を持つて居る」ことを明らかにしている。それ以来、「話し手が恩恵・利益を受けることを表す」は、「してくれ」系を研究する場合、主な論説の一つである。大江(1975)、寺村(1982)は、更に「してくれ」と動詞との接続を分析している。

(415) 「なんで、あたしが……」

咄嗟に、明子は反撥した。

「お前しか、頼りになるのが、いないんだよ。すまないが、すぐ来てくれ。俺一人じゃ、どうしようもないんだ」信吉がいう病院の名前をきいて、再び、明子は頭をなぐられたようなショックを受けた。(午後-上：p. 76)

男性→元の妻

(416) 「沙生！」息も切れていたし感情も迫っていた。「沙生、沙生。ぼく、こわいんだ。恐ろしくていやなんだ。沙生、どうかしてくれ沙生」

「どうしたんですか」(おと：p. 122)

夫→妻

(417) 「それをつけたいから、つまらないことをほじくっているのだ。……枝理子、協力してくれ」
「今までも、ずっと協力したわ」(水：p. 307)

男性→不倫の相手

(415)「すぐ来てくれ」の「来る」のような方向性⁶⁵を持つ移動動詞、或いは(416)「どうかしてくれ」の「する」、(417)「枝理子、協力してくれ」の「協力する」のような方向性を持たない意志動詞や相互動詞に接続する「してくれ」は、主に話し手の受ける恩恵・利益を表す。これに対して、久野(1978)は視点から「してくれ」を論じている。久野(1978：p. 146)は「発話当事者の視点ハイアラーキー」によって、「話し手は、常に自分の視点をとらなければならない、自分より他人寄りの視点をとることができない」と主張している。

(418) 「そんなことを言ってるひまに子供を返してくれ。ただのサラリーマンに、そんな大金ができるわけがないことぐらい、わかるだろう」

「しかし、こっちだって金がいるんだ。あんたからも菱谷の親父に頼んで、なんとか金を出させるよ。子供の命がかかっているんだ。本気になって頼め。また電話する」(一匹：p. 95)

男性→誘拐犯

(419) 「長洲さん、話があるんだ！きいてくれ」

周二は戸を叩いた。しかし、スリッパの音は遠ざかって行った。(剣：p. 223-224)

⁶⁴ 佐久間(1966：p. 197)を参照。

⁶⁵ 方向性の動詞については、山田(2000b)を参照。

男性→知り合いの医者

(420) 「いや。まだ払ってない。しかし、すぐ払う。ワッペンを胸につける。だから、『ひかり9号』のどこに爆弾を仕掛けたか教えてくれ」

「さて、話を元に戻そう。よく覚えておいて、事実を、警察や、新聞記者に話すんだ。わかったかね？」(誘拐：p. 229)

国鉄の男性職員→犯人

(418) ～ (420) のような「返す」「聞く」「教える」などの方向性を持つ動詞が主に話し手の動作を指す。したがって、「返す」「聞く」「教える」などの方向性を持つ動詞は、「してくれ」と接続すれば、話し手の動作から聞き手の動作に変える機能がある。こういう場合、「してくれ」は階層が2つあると考えられる。1つ目は動詞の方向性を変える段階であるが、2つ目は聞き手からの恩恵を示しながら、依頼の意味を表す段階である。

4.2. 話し手と聞き手との関係

日常生活の中で、女性が親しい人に「してくれ」を用いるのがしばしば見られるが、「してくれ」の話し手は主に男性である。用例における「してくれ」を用いる話し手と聞き手との関係は、「職務関係」「主客関係」「事件関係」「学校関係」「友人関係」「身内関係」「地縁関係」「他人関係」に分けられる。次の通りである。

◆職務関係：男性上司→部下⁶⁶、男性社長→社員、男性医者→女性看護師、男性コーチ→ピッチャー、やくざ→仲間、男性→昔の同僚、主人→使用人、男性教師→教え子、男性→後輩、男性→捜査隊の仲間、男性製造業者→市役所職員、男性作家→編集者、男性検事→調査官、男性刑事→検視官、男性刑事→探偵、警官→他署の警官、男性→上司の息子、警官→犯人、警官→記者、男性教授→記者、男性記者→警官 など

主客関係：中年男性客→女子行員、男性客→旅館のお手伝い、男性客→クラブのママ、男性客→店の主人、男性→宅配便業者、男性患者→医者、男性弁護士→老人ホームの職員 など

事件関係：警官→被疑者、強盗→被害者、少年→家族を殺害した人の娘、警官→証人、被害者の父→加害者、男性→誘拐犯、男性→強盗、男性記者→誘拐犯 など

学校関係：男性→昔の同級生、男の子→クラスメート、男の子→隣のクラスの生徒、男性→昔のクラブの後輩 など

友人関係：男性→友達、男子大学生→彼女の友達 など

身内関係：夫→妻、男性→愛人、父→子供、兄→妹、弟→姉、従兄→従弟、従弟→従兄、男性→彼女の娘 など

地縁関係：男性→近所(若い男性) など

他人関係：男性→初対面の人、男性→親しくない少年、男性→息子の友達 など

「職務関係」は話し手や聞き手の仕事、身分に関わる関係であり、「主客関係」は「職務関係」から派生された関係である。「事件関係」は警官と被疑者・犯人、被害者と加害者、事件に関係する人物などの関係を指す。「学校関係」は学生時代の関係で、「友人関係」は知り合い、親友などの関係で、「身内関係」は家族、親戚、恋人などの関係で、「地縁関係」は話し手に関わる地縁関係で、「他人関係」は前述した以外の関係である。話し手と聞き手との関係はバラエティーに富むが、身内・友人関係や仕事・学校などの所属グループに関わる関係が最も多い。それに、下位者や対等な人に対する男性の上位者である発話者が最も多い。この結果は、柏崎(1993：p. 72)が指摘している「ウチの世界の対等・対下位者における多用」「ソ

⁶⁶ 用例の下線部における話し手対聞き手である。

トの世界における対下位者の関係において多く使用されている」に大体同様である。したがって、「してくれ」は普通体や「俺」「お前」「あんた」などの人称代名詞と共起する例がよく見られる。

(421) 「氷をひとつ、俺の口に入れてくれ」

氷が滑りこんでくる。口の中が冷たくなった。不意に、ひどい渴きを覚えた。氷を噛み砕く。水をひと息に飲んだりすることは、やめた方がよさそうだ。

「もうひとつだ、明子」(約束：p. 141)

男性→クラブのママ

(422) 「真弓、黙って聞いてくれ、彼女が刺された」

「何ですって？」

「聞くんだ！Kデパートの八階、南側階段のベンチに、応急手当だけして置いておく。すぐ救急車をよこしてくれ」

「分かったわ」

「彼女は命を狙われているらしい。病院にはできればお前が付いていてくれ」

「了解」

「じゃ頼むぞ」(名探：p. 215)

夫→妻

(423) 「おい、英二。もう不貞腐れたりするのはやめておけよ。俺も、はじめたんだ。仲間とは、うまくやるもんだ。不愉快な時も、顔に出すな。やることが無駄だと、はずめから諦めたりもするな」

「じゃ、あんたも小僧と呼ぶのはやめてくれ」

「よほどいやらしいな」(約束：p. 224)

若い男性→年上の男性

(421)「氷をひとつ、俺の口に入れてくれ」は「してくれ」が「俺」と、(422)「病院にはできればお前が付いていてくれ」は「してくれ」が「お前」と、(423)「あんたも小僧と呼ぶのはやめてくれ」は「してくれ」が「あんた」と共起する例である。

4.3. 「してくれ」系の構造と機能

「してください」は「してくれ」の尊敬語である。したがって、「してくれ」において話し手や聞き手のなわばり意識からの影響も見られると考えられる。まず、「してくれ」は理由節との関連を検証する。「してくれ」「してください」により、聞き手に依頼する話し手の意図を表すため、通常理由節の「から」と接続する。「してくれ」は「ので」と接続する例が少ない。

(424) 梶昭介は窓際のベッドにいた。

枯れ木の職員がふっくらと見えた。それほどまでに梶昭介は痩せさらばえていた。職員が怒鳴りつけるように何度も耳元で声を掛け、白濁した目がうっすらと開くまで、植村は、目の前の老人が生きていることを半分疑っていた。

「プライバシーにかかわることなので席を外してくれ」

人払いをすると、植村は両手でメガホンを作り、暗紫色の耳に近づけた。

「梶昭介さんだね？」反応はなかった。(半落ち：p. 225-226)

男性弁護士→老人ホームの職員

(424)「プライバシーにかかわることなので席を外してくれ」は、話し手が第三者(梶昭介という老人)のことを客観的に述べている。客観性を強調する場合、「ので」を使用しても不自然ではない。

- (425) カツと呼ばれた男が、ガムをくちやくちやと噛みながら、ゆっくりと近づいてきた。百七十センチはありそうだ。ぶかぶかのズボンを引きずっている。
「まあ、そんなに怖がんな。おれらはやさしいんだ」二郎の肩をつついた。口の端だけで笑っている。「おお、そうだ。おまえらにジュース奢ってやるよ。サンプラザのロビーに自販機があるから、そこへ行って買ってきてくれ」
ほかの中学生たちがにやついていた。淳は顔色をなくしている。(サウス-上：p. 72)
不良の男子中学生→男子小学生
- (426) 「鍵はかかってないから、入ってくれ。ハンコが要るんだろ」無造作に言って、顔は引っ込んだ。
守はドアを開け、狭い玄関に立った。(魔術：p. 143)
男性→宅配便業者だと思われる少年

(425)「サンプラザのロビーに自販機がある」が客観的な事実であるが、「そこへ行って買ってきてくれ」によって話し手が聞き手を脅す意図が表れるので、「から」の方が自然であろう。また、(426)「鍵はかかってないから、入ってくれ」の「鍵はかかってない」は、話し手のなわばり意識に属するものなので、「から」を使用するのが適切であろう。

- (427) 「高梨さん、どうしてもだめなわけかい」
「ええ、あいすいません」
「じゃあ定期を解約するから、すぐに持ってきてくれ」
「あ、それなんですがね。どうでしょう。うちに預けておいてもらえませんか。今後のこともございますし」
「ふざけるなっ」とうとう信次郎は怒鳴っていた。「何が今後だ。不動産担保がないとおたくは貸せないだろう。だったらどうして次があるんだ」(最悪：p. 481-482)
男性客→銀行の男性職員
- (428) 「地図書いてやるから、パーッとひとつ飛ばして行ってきてくれ」
うしろで春江が作業服の裾を引っばっていた。
「なんだよ、おまえは。うるさいな」
「おとうさん……」
春江が心配そうな顔で立ちつくしていた。(最悪：p. 477-478)
男性社長→男性作業員

(427)「定期を解約する」、(428)「地図書いてやる」は、話し手のなわばり意識に基づく行為であり、「してくれ」により、話し手にとってあたりまえであることを聞き手に要請している。「指示・助言」の意味が感じられる。しかし、「指示・助言」の意味が感じられない場合もある。

- (429) 「なあ、黒木。カツに言ってみてくれないか」二郎は向井の助言を思い出した。「金を作るから坊主はなしにしてくれって」
「ふざけるな。おまえらは今日中に頭を丸めるんだよ」
「じゃあ、頭は丸めるから、金は半額にしてくれ」
「ロツテリアじゃねえんだ。そうはいくか。だいいち、おれに言ってもしょうがねえだろう。カツさんに言え、カツさんに」(サウス-上：p. 120)
男子小学生→隣のクラスの男子生徒
- (430) 「とにかく」黒木の手を放させた。「一人五千円っていうのはなんとかするから、それ以上のことはやめてくれ」
「おれに言ったって知るか。とにかくおまえらは頭を丸めるんだよ。今んところ、カツさんからの伝言はそれだけだ」
黒木はそう吐き捨てると、上履きを引きずって去って行った。(サウス-上：p. 114)
男子小学生→隣のクラスの男子生徒

(429)「頭は丸める」、(430)「一人五千円っていうのはなんとかする」動作主は話し手であるが、発話時点にその行為をまだ実行していないのである。そして、コンテキストから察せられるように、「頭は丸める」「一人五千円っていうのはなんとかする」は、聞き手からの脅迫で、聞き手との取引が成立しなければ実現できないであろう。聞き手との取引に頼るので、(429)「金は半額にしてくれ」、(430)「それ以上のことはやめてくれ」は「依頼」の意味が感じられる。

それから、「してくれ」による「勧め」の意味が感じられる例があるが、「してくれ」と理由節と接続する例が見つからない。しかし、

(431) クロロックは、あわてて咳払いをし、「まあ、ともかく遠慮しないで食べてくれ」
ここはまあ一流のうちに入る焼肉の店で、招待されているのは、みどりと千代子。そして有坂尚子と、石倉だった。(名探：p. 390)

社長→娘と社員たち

(432) まあ、いいから、食べてくれ。(作例)

(431)「まあ、ともかく遠慮しないで食べてくれ」は、(432)「まあ、いいから、食べてくれ」と意味が大体同様であるが、(431)「遠慮しないで」は、(432)「いいから」より依頼性が強い。聞き手に対する話し手の好意がより強く感じられる。

次に、「してくれ」と仮定節との関連である。

(433) 肉のだぶついた顎で頷きながら、伊予はテーブルにあった分厚いファイルを志木の眼前に押しやった。梶に関する警務課保管の資料だった。一枚目に略歴がある。四十九歳。勤続三十一年。交番と幾つかの所轄警務課を経て、警察学校の助教を四年。教官を五年。昨年春から教養課次席。賞罰なし。両親は既に他界。持ち家。同居者は妻の啓子のみ。

「時間がないんだ。ざっと目を通したら、中央署へ行って取り調べを始めてくれ」

ちょっと待て。そう言いたかった。自分は警務部の手駒ではない。

志木は伏目で岩村刑事部長を見た。目をつぶっている。

「ですが……」(半落ち：p. 18)

警官→部下

(434) 「俺は、おまえに仕事を譲ってもらうほど落ちてはいねえんだよ」

「まあ、仕事の内容と日にちが決まったら念のため連絡してくれ。俺は参加はしないが、忠告はできる」

「俺に忠告がいると思うか？」十歳以上の泥棒グループの管理職は、根拠のない自信を急に漲らせると、しっかりとそう言った。(ライフ：p. 118)

男性→同業 (男性)

(433)の仮定節「ざっと目を通したら」は、聞き手の今後の行動に関わる話し手の発話で、聞き手にとっては新情報である。「中央署へ行って取り調べを始めてくれ」は、話し手にとって部下のすべきであることなので、「指示」の意味が感じられる。(434)「仕事の内容と日にちが決まったら」は、聞き手にとって新情報である。「念のため連絡してくれ」は、対等な人に対して話し手が好意を込める発話であることから、「助言」の意味が感じられる。(434)「俺に忠告がいると思うか？」という聞き手の応答から察せられるように、聞き手は話し手の意図が分かる。したがって、仮定節が聞き手のなわばり意識による新情報であり、また『してくれ』による内容が話し手にとってあたりまえである場合、「指示・助言」の意味が感じられ

る。

- (435) 「新宿の歌舞伎町に行っていたという情報を掴んでいます」
志木はまた中尾を見た。今度は瞳に驚きの色があった。
「どこの情報だ」喉には、新宿署の「諸積」の名があった。志木にぶつけてみたいが、情報をくれた宮内に迷惑が掛かってはいけないと思い、未確認情報です、と答えた。
志木は真顔で言った。「本当にそういう情報があるのなら教えてくれ」
「ええ……。しかし、梶警部が歌舞伎町へ行っただとして、目的は何だったんでしょう？」
「そんなことはわからん」（半落ち：p. 183）

警察官→男性記者

- (436) 「俺はいい加減なことはしたくない。何か問題があるのなら、きっちりと教えてくれ。そのために相談しているんだ」
典子は頬をぱちんと叩かれたような気がした。彼女は座り直した。
「問題があるというほどではないの。あなたのいった方法でうまくいくかもしれない。でも下手をしたら、相手は死なないかもしれない」（白夜：p. 664-665）

男性→彼女

(435) 「本当にそういう情報があるのなら」は、聞き手のなわばり意識に基づく旧情報である。「教えてくれ」は、話し手からの強い要望と依頼性が感じられるので、「依頼」の機能がある。しかし、同じく「教えてくれ」であるが、(436) 「何か問題があるのなら、きっちりと教えてくれ」によって、「依頼」の意味が感じられない。地の文「典子は頬をぱちんと叩かれたような気がした」という感じさえある。これは「きっちりと」という副詞の働きであるからであろう。

また、仮定節の内容は新情報であるが、聞き手のなわばりに属さないで話し手のなわばりに属する例もある。

- (437) 「川谷さん、どうしたんですか」
「死ぬ気はないんだ。わたしが刺されたら救急車を呼んでくれ」
「何のことですか」
「だめだ。このオッサン、完全にいかれてるよ」
「いかれてなんかいない。わたしは真剣だ」（最悪：p. 606）

中年の男性→女子行員

このように「わたしが刺されたら」は話し手の予想や推測であり、必ずしも実行するものではない。しかし、万が一そういうことになる、話し手は聞き手に「救急車を呼んでくれ」と頼んでいる。また、「してくれ」を使用しても、実は聞き手にやってほしい例もある。

- (438) 「俺は、あんたが記憶を取り戻すまでここにいていいと言った。一度口にしたことは、守る。いる間は好きにしてい。だが、俺の家の窓から飛び降りていいとは言っていないからな。そんな馬鹿げた真似をするんなら、どこかよそでやってくれ」
「——」
「仕方がないな。同情はするがね」
「——」（花嫁：p. 69）

男性→記憶を失っている女性

- (439) 「こんなつらさはあなたには分からないわ。もしも、このまま一生何も思い出せなかったら——どこの誰かも分からないまま、捨てネコみたいに、ずっと暮らさなきゃならないとしたら——」
「また死のうとするか。だったら、俺の知らないところでやってくれ」
一行は平気な顔で料理を食べ続けている。千尋は知り合っていない人間をここまで憎んだことなど今までになかったらろうと考えた。（花嫁：p. 77）

男性→記憶を失っている女性

(438) (439) の話し手は、記憶を失って自殺しようとする聞き手に自殺を止めてほしい。正面から説教や助言をせず、アイロニー (irony) を使用している。アイロニーの原理について、Leech (1987 : p. 115) は次のように述べている。

もしどうしても相手の感情を傷つけなくてはならない時には、少なくとも、丁寧さの原理に明白な形でそむくのではないようなやり方で行なうこと。ただし、そのやり方は、聞き手の方が、あなたの述べたことで感情を害することになるようなポイントを含意を通じて理解することが可能であるようなものであること。

「そのやり方は、聞き手の方が、あなたの述べたことで感情を害することになるようなポイントを含意を通じて理解することが可能であるようなものであること」のように、(439) の聞き手は話し手のアイロニーを見破って話し手を憎んでいる。こういう場合、「してくれ」による発話は、話し手にとって迷惑であり、聞き手がやってはいけないことである。

最後に、「してくれ」は譲歩節⁶⁷に関連する例も見られる。

- (440) 「うむ。ほんとうは一日休暇を上げたいのだが、いそがしい時だから我慢してくれ」
「いえ、平気です」(点 : p. 123)

警察官→部下

- (441) 「時間がないから鎌倉には寄れないが、お祖父さんによろしく言ってくれ。アメリカからの帰りにまた寄るから」(剣 : p. 138)

父→息子

このように、話し手は「が」節により自身の考えや情報を聞き手に伝えている。(440) 「ほんとうは一日休暇を上げたいのだが」は、話し手が聞き手に自身の考えを説明し、「いそがしい時だから我慢してくれ」により、話し手は聞き手に対する謝りや励ましの気持ちを持ちながら、要望を表している。(441) 「時間がないから鎌倉には寄れないが」は、話し手が自身の行動に対する説明や弁解である。「お祖父さんによろしく言ってくれ」は、話し手からの強い要望と依頼性が感じられる。

以上まとめてみると、例外があるが、基本的には「してくれ」にも「してください」と同じ構造がある。それに譲歩節に関わる構造も見られる。

(VI) 「してくれ」においては、

a. 話し手のなわばり意識に属する場合

- ① 理由節 (話し手のなわばり) + 「してくれ」 (話し手にとってあたりまえ)
⇒指示・助言
- ② 理由節 (話し手のなわばり) + 「してくれ」 (聞き手にとって好ましい)
⇒勧め
- ③ 譲歩節 (話し手のなわばり) + 「してくれ」 (話し手からの依頼性)
⇒依頼

b. 聞き手のなわばり意識に属する場合

- ④ 仮定節 (聞き手のなわばり : 新情報) + 「してくれ」 (話し手にとってあたりまえ)
⇒指示・助言
- ⑤ 仮定節 (聞き手のなわばり : 旧情報) + 「してくれ」 (話し手からの強い依頼性)

⁶⁷ この用語は南 (1985) による。

⇒依頼

4.4. 利益と負担

「してくれ」によって、男性の発話者は親しい下位者や対等人に対して、「指示・助言」「依頼」「勧め」「励まし」などの意図を伝えている。

- (442) 「どこに行ったのか、きいてくれ」と言った。女の子はそのとおりに電話に言った。返事を聞いて、結城に、「仙台だそうでございますが」と伝えた。結城は、ちょっと目を上げて考えていたが、
「今朝の何時の汽車だったのか、きいてくれ」と命じた。
女の子はまたそれを電話に尋ねた。
「あの六時一分の上野発だそうです」
また、こちらに顔を向けて報告した。
「よろしい」結城は低い声で短く言った。(波-上：p. 343)

社長→女子社員

- (443) 「なんで学校なんか行きてえんだよ」
「今はそういう話じゃない。カツが死んだかどうか調べようって言ってんだ」
「無駄だ」
「おれには無駄じゃない。なあ、頼む。確かめてくれ」
二郎が懇願する。黒木は親指の爪を噛み、落ち着きなく瞬きしていた。
「どうせ電源なんか切ってあるさ。死んでんだから」
「切ってあるならそれでいい」(サウス-上：p. 150)

男子小学生→隣のクラスの男子生徒

- (444) 「さあ、食べてくれ」クロロックは言った。
「お父さん、これは必要経費で落とさないでよ」とエリカが釘をさす。
「わかっとる。私だって、涼子をもっと小遣いをくれれば、そんなに苦労しなくとも——」(名探：p. 389)

父→娘たち

- (445) 「では、明日から、また頑張ってくれ」クロロックが、石倉の肩をポンと叩く。
「ありがとうございます」と、有坂尚子と石倉のふたりは何度もクロロックに頭を下げて、歩いて行った。(名探：p. 392)

社長→社員たち

(442)「きいてくれ」は、命令の意味が響いている「指示・助言」である。(443)「確かめてくれ」は、「頼む」と共起することによって、その「依頼」の意味が更に強く感じられる。

(444)「食べてくれ」は、聞き手に対する話し手の好意が感じられる。(445)のように、聞き手の感謝の言葉から「頑張ってくれ」という話し手の「励まし」が聞き手に伝わるのが分かる。

このように、「指示・助言」「頼む」は話し手のためになるが「勧め」「励まし」は聞き手のためになる。話し手のためならば、依頼行為によって話し手の利益になり、聞き手の負担になる。逆に、聞き手のためならば、依頼行為によって聞き手の利益になり、話し手の負担になると推察できる。利益と負担について、Leech (1987 : p. 190) は協調の対人関係のため丁寧さの原理に属する「気配りの原則」「寛大性の原則」を提案している。

気配りの原則：a. 他者に対する負担を最小限にせよ。【b. 他者に対する利益を最大限にせよ。】
寛大性の原則：a. 自己に対する利益を最小限にせよ。【b. 自己に対する負担を最大限にせよ。】

利益と負担は尺度の両極であり、「気配りの原則」は他者中心的に対して、「寛大性の原則」

は自己中心的である。「してくれ」の例を挙げて考察する。

(446) 「どこへも勤めていないのか」

「時々どこかへフラリと出かけるほか、家でブラブラしている様子です」

「ご苦労だった。きみらはもう休んでくれ。後はわれわれでやる」

キャップは徹夜張込組の労をねぎらった。

「せっかくここまで来たんです。いっしょに行かせてください」

逮捕状は出ていないが、一行には犯人逮捕におもむくような緊張感がみなぎっていた。(凶：p. 92)

刑事→後輩

「きみらはもう休んでくれ」は、「気配りの原則」である「他者に対する利益を最大限にせよ」の実現だと見なされる。「後はわれわれでやる」は「寛大性の原則」である「自己に対する負担を最大限にせよ」の実践であろう。(446)は後輩に対する先輩の発話なので、自己に対する負担を最大限にしたいが、聞き手に対する心理的な負担⁶⁸を増やしたくないであろう。しかし、話し手のため、つまり自己の利益を中心とする依頼表現では、どのように依頼の目的を達成するかが最も重要である。そのため、「自己に対する負担を最大限にせよ」ではなく、「自己に対する負担を最小限に見せよ」であろう。「自己に対する負担を最小限に見せよ」は、話し手が聞き手を説得して自身の依頼を実行させる戦略の1つである。

(447) 「いや、いいよ。行かなくてもいいよ。それよりもタキのこといろいろ教えてくれよ。金なら払う」

「ほんと？」と少女は嬉しそうに言った。「ここの分も払ってくれる？朝までいると高いんだよ」

「構わないよ。だから、何でも知ってることを教えてくれ」

村野は札入れから千円札を一枚出して、テーブルの下で少女に手渡した。少女はそれを小さく折り畳んで口金のついた白いビニール製のバッグの中にしまい入れた。(灰：p. 209)

三十代の男性→親しくない少女 (事件の死者の知り合い)

話し手は聞き手に聞きたいことがあるので、店の高い料金を払っても構わないと言っている。即ち、聞き手に依頼行為を実行させるため、話し手は実際の負担を隠して最小限に見せるのである。

また、「指示・助言」の場合にも、上位者である話し手は依頼行為を実行しようとするため、聞き手にかける負担を考慮して感謝や謝りの気持ちを表す。

(448) 「社長のおっしゃる通りですわ」と有坂尚子は微笑んだ。

「そうだと。——ああ、すまんが、その手紙を清書してくれ」

「はい」(名探：p. 405)

社長→秘書

(449) 「こんなの、団長が許すはずないわ」

「団長の許可はとってあるよ」

「まさか……」

「嘘だと思うなら、確かめればいい」真田はマイクを手にした。スイッチを入れる前にいった。

「すまないが、愚痴に後にしてくれ。とにかく全ては決定済みだ」(嘘：p. 32-33)

男性の演出家→女性の演出家補佐

⁶⁸ 川村(1991：p. 57-58)の「相手の心の負担に対する配慮」からの示唆である。姫野(1992)はこのような心理的な負担を「負債」と呼んでいる。

(448) は秘書に対する社長の指示である。話し手は「その手紙を清書してくれ」と言う前に、「すまんが」を用いて丁寧に聞き手に依頼している。(449)「すまないが、愚痴に後してくれ」は、話し手が今聞き手の愚痴を聞かないことに「すまないが」と謝っている。

4.5. 終助詞と副詞による表現効果

4.5.1. 「してくれ」「しておくれ」につく終助詞

「してくれ」系につく終助詞の中で、主観性の強い「よ」が最も多い。用例を考察した結果を表にすれば、次の通りである。

表7 「してくれる」系につく終助詞

「してくれ」系	よ	よ な	な	や	ね
してくれ	○	○	○	○	×
してくれたまえ	×	×	×	×	×
しておくれ	○	△	○	△	○

注：○は適切、×は不適切、△は不明の意味を表す。

「してくれ」には「よ」「よな」「な」「や」がつく。「しておくれ」には「よ」「な」「ね」がつく。「しておくれ」にも「よな」「や」をつけるようであるが、用例が見付からないので「△」で表す。「してくれたまえ」には終助詞がつかない。

- (450) 「これは、夏休みになったら絶対に遊びに行かないとな」
「おう、来てくれよ。手紙書くから」
「海で泳ぎたいなあ。おれ、もう三年ぐらい海に行ってねえよ」と淳。(サウス-上：p. 341-342)
男の子→親友
- (451) 「仕事には慣れたかな」若手たちを見回して言った。「何かわからないことがあったら遠慮なく聞いてくれよな」
「ええ」「はい」答えが返ってくる。(空中：p. 34)
男性→後輩たち
- (452) 「お父さんはどこへ行ったか知ってる？」佳代が背後から声をかけると、義男はゴロンと仰向けになって、佳代の方を見た。
「ちょっと待ってくれな」受話器にそう呼びかけてから、義男は答えた。「知らねえよ。一緒に寝てたんじゃねえのか」(獲物)
少年→仲間
- (453) 「叔父さんはコーヒーが飲みたいってよ」
「階下に自動販売機があった」勲伯父はポケットの小銭を探り始めた。「一樹くん、人数分買ってきてくれや」
一樹は「オッケー」と言って出ていった。(雨：p. 147)
伯父→甥

(450) ~ (453) は、「してくれ」に「よ」「よな」「な」「や」がつく例である。「してくれよ」の例が最も多いことから、依頼性の強い「してくれ」に押し付けの強い⁶⁹「よ」が付きやすいことが分かる。「よな」「な」「や」の例も見られるが、いずれも少ない。このように、「してくれ」に「よ」「よな」「な」「や」がつくと、強い押し付けや依頼性を表すが、聞き手

⁶⁹ 佐治 (1991 : p. 21)、森山 (2000 : p. 143) などを参照。

に対する親近感も感じられる。これに対して、「しておくれ」は異なる表現効果がある。

- (454) 「ごみは、その後どうしましたか」
「吉井さんが仕分けをして出し直したよ。吉井さんによく謝っておくんだね」
「それ、いつごろのことだったでしょうか」
「そんなに前のことじゃないよ。三、四回前のごみだから、十日ぐらい前かな。ところでお宅も、これから気をつけておくれよ」そこで相手は一方的に電話を切った。(凶：p.173)

掃除婦→マンションの住人

- (455) 「だからさ、由美ちゃん」網川はソファから立ち上がると、由美子の傍らに来て、膝をついた。
「この手紙とスナップ写真のことは、忘れてしまえよ。ね？なかったことにしよう。どう転んだって、僕らはもう離れられない間柄なんだ。僕らも一種の共犯者なんだよ。だから僕を裏切ったり、僕から離れようとしなくて、ずっとそばにいておくれよ。僕も由美ちゃんに、けっして損はさせないからさ。僕らは同志、盟友なんだよ」
由美子は両手で手を覆った。網川を見たくなかったし、見られたくもなかった。(模倣-下)

男性→同級生の妹

- (456) 「僕は実際自分の家で飲む酒が一番不味いよ、あの女房が側でやかましい理窟ばかり言っているから酒が理について美味くない、こういう処へ来れば天下晴れて愉快地飲める、愉快地飲めば酒は身体の薬になるネ、その積りで一つ盃を交換しよう、丁度楼婢さんがお銚子を持って来た、その熱いのを注いでおくれ、それからネー僕の方が大分減ったからそのお銚子をつけかえておくれな、ナニ幾干つけると、面倒だから二合だけ」と次第に酒量が増して来る、楼婢が下へ往って二合の酒を持ち来り (酒：p.116)

男性客→楼婢

- (457) 「浩美、お花を買って届けに行っておくれね」と、彼に命じた。
起き抜けの顔で、浩美は母を見た。栗橋寿美子は五十三歳だが、外見は七十歳を過ぎているように見える。(模倣-上：p.395)

母→息子

(454)「これから気をつけておくれよ」、(455)「僕を裏切ったり、僕から離れようとしなくて、ずっとそばにいておくれよ」は、話し手が対等な人や下位者に用いる。「指示・助言」や「依頼」の意味が感じられる。(456)「そのお銚子をつけかえておくれな」も、「指示」の意味が伝わる。(457)「浩美、お花を買って届けに行っておくれね」は、年配の女性の言い方である。「しておくれ」に相手に同意を求める⁷⁰「ね」がつくと、相手に同意を促す機能⁷¹があると見られる。

4.5.2. 「してくれ」と共起する副詞

「してくれ」と共起する副詞は、命題内容のみに関わるものと「してくれ」文全体に関わるものが大別できると考えられる。まず、命題内容のみに関わる副詞を見る。「話し手のなわばり意識に属する、または話し手のためになる」と「話し手のなわばり意識に属さない、または聞き手のためになる」の2つに分類すれば、次の通りである。

- (VII) a. 話し手のなわばり意識に属する、または話し手のためになる

「とっとと (車を) 降りてくれ」「すぐ一緒に来てくれ」/「もう帰ってくれ」「今から瓜生さんの屋敷に行ってくれ」/「簡潔に答えてくれ」「はっきり申してくれ」/「諸君、しっかり見張ってくれ」/「何か問題があるのなら、きっちりと教えてくれ」/「もっととお酌をしてくれ」/「全部、丁寧に拭きとってくれ」「もう少し待ってくれ」/「こっ

⁷⁰ 陳 (1987 : p.100)、佐治 (1991 : p.21) を参照。

⁷¹ 森山 (2000 : p.143-144) を参照。

- そり教えてくれ」／「詳しく話してくれ」／「よく見てくれ」「うまくやってくれ」／「わしの代りにここの市政悪を徹底的に叩いてくれ」／「いいかげんにしてくれ」など
- b. 話し手のなわばり意識に属さない、または聞き手のためになる
「正気に戻ってくれ」「ゆっくり寝てくれ」「グレることなく真っすぐ育ってくれ」など

副詞の付加によって「してくれ」の意味・機能が変わる。動詞の意味に合わせて「指示・助言」「依頼」「勧め」「励まし」「叱責」などの意味がある。しかし、意味で分類すれば、コンテキストや聞き手（または読み手）の理解により各類型の境界線が明らかにされていない。例えば、(VII) a 「すぐ一緒に来てくれ」は「指示・助言」と「依頼」と両方の意味が感じられる。「わしの代りにここの市政悪を徹底的に叩いてくれ」は「指示・助言」と「励まし」と両方の意味があると言える。したがって、語用論から副詞を再整理する。

「話し手のなわばり意識に属する、または話し手のためになる」とは、依頼内容が話し手のなわばり意識に属するので、話し手は聞き手より上位である場合、話し手のためになる。「話し手のなわばり意識に属さない、または聞き手のためになる」とは、依頼内容が話し手のなわばり意識に属さないので、話し手は好意を込めて聞き手に何かを勧める場合、聞き手のためになる。

次に、「してくれ」に直接に影響を与える副詞である。

- (458) 「わたしも頼んでみる」
「いいよ。おれがやってやる。とにかくあんたらは早く帰ってくれ。駅まで乗せて行ってやるよ。すぐに警察に行かされると困るから、時間を決めておこう。五時でどうだ。犯人に銃を突きつけられて、あちこち引っぱりまわされてたって……。ああ、もう銃はないのか。もっと何かちゃんと口裏を合わせねえとな……」姉が思い詰めた表情で川谷を見ている。(最悪：p. 561)
やくざ→少女とその姉
- (459) 「人事は上原係長に引き継いで、ともかく、尾坂部さんの真意を探ってくれ」
同じ恫喝を聞いたのだろう。二渡に調査を命じた白田の目には、懇願にも似た色が浮かんでいた。(陰：p. 15)
警務課長→男性部下
- (460) 「それなら、こっちもそっちの要求をのむから」
「わかりました」
「必ず、約束は守ってくれ」
「ご安心ください。こちらの言う通りにして下さるのなら、二度とお宅様には近づきません」
(盗り：p. 303)
男性→脅迫者（男性）
- (461) 「今日の午後三時だ。場所は数寄屋橋の交差点。わかるね？」
「わかる」
「ぜひ来てくれ。そこが高木和子の最後の場所になる。私も君とそこで会おう。待っているよ」(魔術：p. 322-323)
男性→少年
- (462) 「デビューなんかできなくてもいいというのか。ほかの三人の気持ちはどうなる。寺尾を信じて今までついてきたんじゃないか。どうか三人のところに戻ってやってくれ。このとおりで」
直貴はその場で両膝をつき、頭を下げた。
「何やってんだよ」(手紙：p. 166)
男性→バンドの仲間
- (463) 「もう、そろそろ、退院できるだろうね」
「やっ和一週間だ。あと一週間だな」
「あと一週間？冗談じゃない、俺はもうここに一年も入っている気がする。長洲さん、頼むから出してくれ」

「判った。そのうちにな。縫子さんが着換えを持ってきてくれた。明日の朝入れてやるよ。もうすこしだな」(剣：p. 226-227)

男性→知り合いの医者

(464) 「おねがいだから家に帰ってくれ！」

「帰ってちょうだい。帰らないとここのお手伝いさんをお呼びわよ」(梅：p. 87-88)

夫→妻

(458) ～ (464) は、「とにかく」「ともかく」「必ず」「ぜひ」「どうか」「頼むから」「おねがいだから」の例である。「とにかく」「ともかく」によって、「してくれ」は結論のような機能が見られる。「必ず」「ぜひ」によって、聞き手に対する話し手の実現必要性が表われる。「どうか」「頼むから」「おねがいだから」によって、話し手の懇願の気持ちが伝わる。

5. 「してちょうだい」系の構造と機能

5.1. 「ちょうだい」「してちょうだい」の構造と機能

まず、「ちょうだい」の意味と用法を検討する。小学館の『日本国語大辞典』(2001：p. 77)によると、「ちょうだい」は名詞である。「ちょうだいする」は、「もらうことの謙譲語。賜わること。いただくこと」を示している。次例の通りである。

(465) 「今日明日にもね。で、アメリカ文学紹介のコラムは週に一回、分量は正味が六〇〇字、四百字詰原稿用紙で一枚半ですな。第一回目はもう早速来週にでも頂戴したいのですが、ま、その辺のことはちょっとあとまわしにしましょう。……」(教授：p. 112)

新聞社の人(男性)→大学教授

しかし、「ちょうだい」だけになると、話し手が聞き手に物事を「いただく」のではなく、聞き手が話し手に物事を「くださる」こととなる。

(466) 「それ、ちょうだい」テーブルの上のグラスを見てひとみは言った。グラスには、氷と安いウイスキーが入っている。

「だめよ、アルコールは」

煙草の煙を吐きだし、潤子は言った。(盗り：p. 213)

若い女性→看護師

(467) 「ママァ、クッキーもう一つちょうだい」

哲彦が鼻を鳴らした。

「駄目よ。お菓子ばかり食べると晩ご飯がはいらなくなるの。それより、飛行機の絵描いてよ。テッチン、とっても上手じゃない？」

こういふとき、航空機マニアは便利である。

「うん。描いてあげるね」(三日：p. 169)

息子→母

(466) (467) のように、「ちょうだい」は「ください」と置き換えられる。しかし、「ください」のように、上位者(例(468))に対して、改まった場面(例(469))で、職務に関わる物事(例(470))を依頼する場合、「ちょうだい」は用いられない。

(468) 「千ヶ寺様の様にいろんな物をぶら下げているが、どれが何だか忘れやしないか」

「大丈夫です、ええと、水を下さい」

「水は上げるけれど、それは水筒じゃないのか」(文献98)

男性→昔の先生

(469) 「村野先生からのご提案で、みなさんに話し合ってもらいたいということがありますので、も

うすこし時間をください。じゃ村野先生」

三年生の主任をしている村野康子先生はちょっと青い顔をして発言した。

「わたしの組に瀬沼浩二という子どもがいるのですが……」(兎 53)

教頭→教師たち

- (470) 「例の中瀬さんのお宅にかかってきた電話ですが」靴を履きながら加賀はいった。
「そういう中傷めいたことをいう人物に心当たりはありませんか。仮にここでお名前を出されても、決して口外はいたしません」
「そんなことをいわれる覚えは全くありません。そういう卑劣なことをする人にも心当たりはありません」
「そうですか」加賀は頷いた。「ではもし何かありましたら、連絡をください」(嘘 183)

刑事→女性

男性でも「ちょうだい」を用いる地域があるようである。工藤(1979 : p. 47)は、「してちょうだい」が「近代に入ってから盛んになった女性語」と述べている。話し手はウチの関係で上下を問わず、ソトの関係で下位者や対等な人に対して「してちょうだい」を使用する。「してちょうだい」は「してください」に相当するが、「してください」より積極的に聞き手に親近したい話し手の意図が感じられる。

- (471) 「ゆっくり、いつまでも好きなだけ寝てちょうだい。鍵は冷蔵庫の上です。出ていく時に郵便受けの中に入れておいてください」(星 : p. 39)

女性→友達(女性)

「ゆっくり、いつまでも好きなだけ寝てちょうだい」のように、「してちょうだい」は「勧め」に用いて、聞き手に対する好意を表す。「出ていく時に郵便受けの中に入れておいてください」の「してください」は「指示・助言」に用いて、聞き手に対する配慮の意を示す。

- (472) 「社長は？」
「さっきまでお部屋に灯が点いておりましたが、お休みのようでございます」
「そう。ここはもういいから、当直室へ引きとって寝んでちょうだい」(空 : p. 120)

女会長→当直の社員

- (473) 「キョウコ、今くじけてはなりません。ここをふんばるかふんばらないかで、勝負は決まるのです。わかってるわね。男の人は1人の女としか結婚できないのよ。早い者勝ちなのよ。ちゃんとやることはやってちょうだい」(OL : p. 29-30)

母→娘

- (474) 「声をあげるわよ！」
「なんで声をあげるのよ」とウイスキーをのんだ男がいきなり背中から亮子を羽交いじめにした。
「声をあげてみな、首をしめてやるから」
「声をあげないからはなしてちょうだい」亮子は小さな声で言った。(梅 : p. 154-155)

クラブのママ→犯人

- (475) 「ちょっと御相談があるの。これからお邪魔していいかな」
「来るなら、あの店のパイを買ってきてちょうだい。まだ、午前中だから、ある筈よ」
「マロンパイとアップルパイを二個ずつ、お願いね」(午後-上 : p. 103)

叔母→甥

- (476) 「あなた、どうしてこちらに泊まろうと思ったの。よかったら教えてちょうだい」
「いろいろありまして、一人で考えてみようかと思ったのはいいんですけど、こういうところに来てみると、世の中って全く変わってしまったんだなとびっくりして。まだ何も考えられない状況なんです」
我ながら、しどろもどろの説明だと恥ずかしくなった。話したい気持ちはあるのだが、見ず知らずの人間にどこまで話していいのか、加減がよくわからないのだった。(魂-上 : p. 131-132)

老女→初対面の女性 (やや年下)

(472)「ここはもういい」という理由節の内容は、話し手のなわばりに属するものである。「当直室へ引きとって寝んでちょうだい」という発話は話し手のなわばり意識に基づき、あたりまえの指示である。(473)「ちゃんとやることはやってちょうだい」も、「指示・助言」の意味が伝わる。(474)「声をあげてみな。首をしめてやるから」という聞き手の脅迫によって、話し手は「声をあげなかったら、首をしめられない」と推定 (presumption) できる。その推定に基づいて、話し手は聞き手に「声をあげない」という保証を提出して、「はなしてちょうだい」と要請している。(475)「来るなら、あの店のパイを買ってきてちょうだい」の動作主は聞き手であるが、「あの店のパイを買ってくる」ことが聞き手の (甥としての) 義務に属さないことから、依頼の意味が感じられる。(476)「よかったら教えてちょうだい」の「よかったら」は、丁寧な言い方である。「教えてちょうだい」によって、話し手は聞き手のなわばりに属する旧情報の提供を依頼している。

以上要約すれば、「してちょうだい」の構造は、次の通りである。

(Ⅷ)「してちょうだい」においては、

a. 話し手のなわばり意識に属する場合

- ① 理由節 (話し手のなわばり) + 「してちょうだい」 (話し手にとってあたりまえ)
⇒指示・助言
- ② 理由節 (話し手のなわばり: 今後の行動) + 「してちょうだい」 (話し手の推定による)
⇒依頼

b. 聞き手のなわばり意識に属する場合

- ③ 仮定節 (聞き手のなわばり: 新情報) + 「してちょうだい」 (聞き手の義務ではない)
⇒依頼
- ④ 仮定節 (聞き手のなわばり: 旧情報) + 「してちょうだい」 (話し手からの強い依頼性)
⇒依頼

5.2. 「してちょうだい」による修辭法

「してちょうだい」による修辭法には、アイロニーなどの様々な用法がある。「してちょうだい」による文の意味が話し手の依頼の意図と一致する場合、依頼表現に属する。「してちょうだい」による文の意味が話し手の依頼の意図とずれている場合、修辭法 (「レトリック」 rhetoric とも言える) に属すると考えられる。「してちょうだい」によって話し手が聞き手に懇願する場合、「お願い」と共起することができる。

(477) 厚子は、恐る恐る近寄って、女の背後から、両腕を抱きかかえた。

「お願い、離してちょうだい。あたしも自殺する」と、彼女はわめいていた。(宿: p. 48)

女性客→女将

(478) 頭がよくないのかどうかはわからなかったが、剛志が勉強をひどく苦手になっているのは事実らしかった。公立高校に進んだ彼だが、成績は芳しくなかった。息子の学力向上だけを望んでいる加津子にとって、それは苛立たしいことだった。

「おかあさんが何のためにがんばってると思うの? お願いだから、もっとしっかりしてちょうだい。勉強してちょうだい。 できるでしょう? やってくれるでしょう?」剛志を叱りながら、彼女は時には涙を浮かべた。(手紙: p. 34-35)

母→息子

(477)「お願い、離してちょうだい」は、話し手が聞き手に自分を離してほしい。(478)

「お願いだから、もっとしっかりしてちょうだい。勉強してちょうだい」は、話し手が息子にもっと勉強して真面目になってほしい。このように、話し手は自分のため「してちょうだい」によって、聞き手に何か依頼している。したがって、「私のため」という語句を入れて、(477)を(479)に、(478)を(480)になると、次の通りである。

(479) ?お願い、私のため、離してちょうだい。

(480) お願いだから、私のため、もっとしっかりしてちょうだい。

(479) は自然であるが、(480) はやや不自然である。(480) 「もっとしっかりする」は、副詞によって「能動詞で自動詞」のような働きがあるので、直接に「私のため」を入れると適切である。しかし、(479) 「離す」は「能動詞で他動詞」で、「してちょうだい」と接続すれば、「私のため」の意味を含むので、形態上で再び書く必要がないであろう。

(481) 「(中略) 私の悪夢というのは、あの事件以来、自分が自分じゃなくなったということなのでしょうね。どうしても取り戻せないの。取り戻せないうちは、何にも興味がない。何とか生きていこうと思うのも、有香のことがあるから死ねないと思っているだけ。私は死んでいるのかもしれない。そう、あんたより先に死んだ人間なんだと思ってちょうだい」カスミは内海の腕の肉を抓った。鼾をかいていた内海は小さな呻き声を上げた。カスミは抓った箇所を優しく撫でる。

「ごめんね、痛かった? あんた死んでいくの辛いわよね。きっとすごく怖いし、孤独なんだろうね。いい気味とは思わない。それほど知ってる人じゃないもの。さっきも言ったけど、羨ましくもあるのよ。石山さんは私を置いて先に行った。あんたも先に死んで行く。私はたった一人で悪夢の中で一生を終えるのかもしれない。そんなの嫌だわ、絶対に浜口カスミらしくない。それじゃ、あの灰色の海を見つめて暮らすのと同じじゃない。そうでしょう。私は何のために脱出してきたの」(頬-上: p. 333-334)

女性→元刑事

(481) 「あんたより先に死んだ人間なんだと思ってちょうだい」は、話し手が眠っている聞き手に本音を吐いている。話し手は長女(有香)が迷子になった以来、自分がまるで死んでいるようだと思っている。そして、独り言のように、聞き手に「あんたより先に死んだ人間なんだと思ってちょうだい」と言っている。ここでの「あんたより先に死んだ人間」は先に死んだ他の人間ではなく、話し手自身を指している。しかも、コンテキストから察せられるように、話し手は本当に死んでいるのではなく、生き甲斐が失って死んでいるようである。話し手は「思ってちょうだい」を使用して、聞き手に自分の考えを理解してほしい。こういう場合、「してちょうだい」は主に修辞法だと考えられる。(481) 「あんたより先に死んだ人間なんだと思ってちょうだい」は、文字どおりの意味が存在するが、話し手の意図がもっと複雑である。したがって、下線部に「私のため」を入れると、不適切である。

(482) ?私のため、あんたより先に死んだ人間なんだと思ってちょうだい。

続いて、次例も「してちょうだい」の基本的な用法ではない。

(483) 「はいはい。——じゃ、勝手に飲んで死んでちょうだい。でも、ちゃんと今月分を払ってからにしてね」

「何だと! 今まで俺が払わなかったことがあるか!」(殺人 181)

バーのママ→男性客

話し手は聞き手にお酒をやめることを勧めていたが断われたので、わざと「勝手に飲んで死んでちょうだい」と言っている。このような用法はアイロニーと呼ばれている。従来の修辞学ではアイロニーはその文字どおり言われたことの正反対のことを伝えるとされている。ところが、この考え方には反例も多くある⁷²。(483)も話し手の言われたことの正反対のこと、「勝手に飲まないで死んでちょうだい」または「勝手に飲んで死なないうでちょうだい」の意味ではないと考えられる。「勝手に飲まないで死なないうでちょうだい」も不自然である。そして、(483)の話し手の意図は、次の通りであろう。

- ①聞き手が自分の勧めを聞かないので、放任の態度でその発話をして諦める気持を表す。
- ②聞き手が自分の勧めを聞かないので、わざと聞き手の嫌味を買う発話をして聞き手にお酒を飲むのを止めさせる。

いずれも可能である。(483)「でも、ちゃんと今月分を払ってからにしてね」という話し手の発話によって、放任の態度が感じられる。しかし、話し手の意図は「聞き手が自分の店でお酒を飲んで死んで、死ぬ前にちゃんと酒代を払う」ではないと考えられる。そこで、「勝手に飲んで死んでちょうだい」と言う前に遡り、話し手の意図を見つける必要がある。恐らく「もう飲まないで」は、話し手の本当の意図であろう。(483)の下線部に「私のため」を入れると、不適切になる。

(484) ?私のため、勝手に飲んで死んでちょうだい。

また、「してちょうだい」によって、話し手の高圧的な態度が感じられる場合もある。

(485) 「乙也君、フローズンヨーグルトをとって来てちょうだい
小百合の命令じみた言い方は、乙也はむしろ、いそいそと従った。 (午後-上 : p. 307)
若い女性→ファン (やや年上の男性)

このように、聞き手が自分のことが好きなので、話し手は「してちょうだい」によって高慢な態度が見せられる。一方、話し手の好意が感じられる例もある。

(486) 「足立先生よろこんでちょうだい。署名が過半数をこえたのよ」
「ほんまかいな」(兎 : p. 327)
女性教師→同僚 (男性)

足立先生を支持する署名は過半数を超えたので、話し手は足立先生が喜ぶべきだと思っている。そこで話し手は「よろこんでちょうだい」を用いて、聞き手にいい情報を知らせている。話し手は、「してちょうだい」によって推測している聞き手の反応を表して、聞き手に喜ばせる効果を狙っている。これも修辞法に属する。したがって、(486)の下線部に「私のため」を入れると、不自然になる。

(487) ?足立先生、私のため、よろこんでちょうだい。

⁷² Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1992) "On Verbal Irony" *Lingua* 87 を参照。これは東森・吉村 (2003 : p. 159-160) からの再収録である。

以上まとめてみると、「してちょうだい」による修辞法は、アイロニーなどの様々な用法が見られる。「してちょうだい」による文の意味が話し手の依頼の意図と一致している場合、依頼表現に属する。その反面、話し手の依頼の意図とずれている場合、修辞法に属すると考えられる。また、依頼表現に属すると、「してちょうだい」文に「私のため」、つまり話し手のためという語句を入れると、自然である。しかし、修辞法の場合、(482) (484) (487) のように「私のため」を入れると、不適切になる。

6. 動詞テ形による依頼表現の構造と機能

依頼動詞「願って」や「頼んで」を除外すれば、柏崎 (1993) は動詞テ形による依頼表現(「して」系とも呼ぶ)が「してほしい」「してもらいたい」、または「してくれ」「してちょうだい」「してください」の下略する形に見なされていると指摘している。

- (488) 「おっさん、おっさん、金を出せよ」銃口を向けた男が、唾を飲み込んでから言った。隣のニキビ面がさらにやけた。「何でこんな持ってるんだよ。俺たちがもらっちゃうよ」「ちよ、ちよっと、待って」豊田は左手を前に突き出す。「待ってくれ」「撃ってみてえな」野球帽の男が言った。それは豊田への脅し文句と言うよりは、歪んだ欲望に興奮する独り言のようだった。「撃っちゃえ、撃っちゃえ」と無責任で無機質な声が出た。ガムを噛んでいた男が嘸し立てたのだ。(ライブ：p. 204)

中年の男性→若者

- (489) ところが、女は、急に私に向って、「兄さん、悪いけれど、あんた、先に行って頂戴」と言った。私は、びっくりした。啞然としていると、「わたし、あの人に用事があるからね。ひまがかかるかもしれないから、あんた先に行ってよ」と、重ねて言った。(画集：p. 150-151)

女性→親しくない若い男性

- (490) 新聞社からの電話を、女中が取りついだのだ。
「断わってください」頼子は、女中にそう言った。
「短い時間でいいそうでございます」女中は困った顔をして帰ってきた。
「とにかく、何もお話することはありませんと言って」
そのような電話は方々からあった。新聞社だけでなく、雑誌社の名前もあった。(波-下：p. 318)

奥さま→女中

(488)「待って」を「待ってくれ」に、(489)「先に行って頂戴」を「先に行って」に入れ換えてもよい例である。(490)の話し手は聞き手に「断わってください」「言って」を用いている。しかし、「してくれ」「してください」と比べると、「して」の話し手は女性の方が多い。「して」は会話的で普通体とも丁寧体とも接続することができるが、「してください」は丁寧体との接続を中心としている。

6.1. 話し手の対人関係

「して」における話し手の対人関係については、柏崎 (1993：p. 130) は「ウチの世界で満遍なく使用され、ソトの世界では対等・対下位者に使用されている」と述べている。更に、柏崎 (1993：p. 130) は、「して」の話し手の対人関係が「してください」の話し手の対人関係、つまり「ソトの世界では上下に関係なく使用され、ウチの世界では対上位者に使用されている」と正反対であると指摘している。用例を考察すると、「して」はウチの関係で確かに上下問わずに用いるが、ソトの関係において対等・対下位者のみではなく、子供や女性が上位者に

対しても用いる。

- (491) その次の家のベルを押すことにした。今度はもうちょっと若い、僕たちのおふくろさんくらいの年の女の人だった。「このネコ、捨てられてたんです。かわいそうだから飼って」
「あら、かわいいわね」女の方は僕の抱いていた縞ネコを受け取って、つくづく顔を見た。この分なら——と、僕とコーヒーはそっと顔を見合わせた。が、「かわいいネコだけど駄目だわ。うち、おばあちゃんがものすごく動物嫌いな。ごめんなさいね」(一匹：p. 11-12)

子供(男の子)→おばさん

- (492) 「彼は家に帰してあげて」
ほんの少し、武上に前屈みになって、一美との距離を詰めた。
「なぜだね？」
「関係ないもの」(R：p. 261)

若い女性→刑事

(491)「かわいそうだから飼って」は、猫を飼っている近所のおばさんに対する子供の依頼である。(492)「彼は家に帰してあげて」は、年上の刑事に対する若い女性の依頼である。

(491)(492)の聞き手がソトの関係の上位者であるが、話し手は「して」を使用している。ここでの上位者は、話し手と聞き手との力関係における上位者を指す。話し手と聞き手との力関係は絶対的な関係ではなく、依頼内容によって変化する相対的な関係である。例えば、通常、展示会を見に来る客が会場の係員より上位である。

- (493) 「並んで、並んで！はい、中へ入ったら、止まらずに歩いて下さい！立ち止まらないで！」と係員が声をからしている。(名探：p. 210)

男性係員→展示会場の客

このように、会場に大勢の客が入り、係員が「並んで、並んで！はい、中へ入ったら、止まらずに歩いて下さい！立ち止まらないで！」と言って客に指示している。こういう場合、会場の秩序を維持するという職務に基づいて、係員は客に指示することができると考えられる。

6.2. 文の意味と話し手の意図

「して」による依頼表現は、話し言葉によく使用される。短くて明確な発話が多い。

- (494) 点滴の針を持ち、潤子は言った。
「親指を握るようにして、力を入れて」
針が女の皮膚を刺す。女の眉間に皺が寄り、深く息を吐く音が続く。
「楽にしてて」(盗り：p. 188)
看護師(女性)→女性患者
- (495) 「せんせいたすけて」ふたたびミドリ子が言った。わかった、わかりましたから、もう少しくわしく聞かせてちょうだい、そう言って、私はミドリ子を職員室から連れ出した。(いとしい：p. 119)
女子高生→女性教師
- (496) 「座って、座って」篠崎と名乗った刑事はせかせかと椅子を引いて真一に勧め、自分はパソコンのそばに腰をおろした。(摸倣-下：p. 578)
若い刑事→少年

(494)～(496)のように「指示」「依頼」「勧め」などの意味が伝わる。依頼文の意味は

話し手の依頼の意図と一致する場合が多い。一方、

- (497) 「よくわからないけど、明日じゃないとだめらしいの。残念だけど、誰かほかの人を誘って」
「そう？じゃあ、また今度何かいいチケットが手に入ったら誘うよ。近いうちにきっと」(嘘：
p. 172)

女性→友人(女性)

文の意味は「誰かほかの人を誘って」であるが、話し手の意図は、相手が傷つかないように誘いを断わることである。この言い方が慣用的な表現なので、話し手の意図がすぐ察せられる。しかし、文の意味が分かっても話し手の意図は完全に理解できない例もある。

- (498) 「残念だったな、玉の輿に乗れなくて」
「冗談言わないで」
「なぜ」
千尋はコーヒーを飲み、ため息をついた。
「どうかしてたのよ。好きでも何でもなしの人だった——。会って、話しても、何も感じなかったわ。ひどく惨めなだけで」
「——」(花嫁：p. 155)

記憶を失った女性→男性

(498)「冗談言わないで」は、記憶を失った話し手がある金持ちの男性との婚約が駄目になったとき、「残念だったな、玉の輿に乗れなくて」という聞き手の発話に対する反論である。しかし、聞き手は話し手の意図が理解できない。つまり、聞き手は道理に合うようなこと(お金持ちの男性と結婚するのは玉の輿に乗ると思われている。結婚できないから、玉の輿に乗れなくて残念だったな)を言ったが、話し手はそう思わない。これは話し手と聞き手との間に共通の認識を持たないからである。

6.3. 「して」となわばり意識

「して」による依頼表現は話し手と聞き手とのなわばり意識にも深い関連を有する。例えば、

- (499) 「何してるの？」
「引っ越し。台所に朝御飯ができてるから、早く食べて手伝って」
母が言った。父は布団をビニールシートで包み、ロープで縛っている。
「もう行くの？この島でもいいんじゃない？」
「何言ってるの。早く食べなさい」(サウス-下：p. 24-25)

母→息子

- (500) 「ありがと、おじさん。じゃあこのかばんとお人形だけね。あ、この寄せ木の箱はいらないからこれも買って」
「そうかい。じゃ大まかで四百円にしとこう」(三日：p. 260)

十年代の女の子→古道具屋の主人

(499)「台所に朝御飯ができてる」、(500)「この寄せ木の箱はいらない」という「から」節の内容は、話し手のなわばり意識に基づく発話である。しかし、(499)「早く食べて手伝って」は、母が息子に対する指示である。(500)「これも買って」は、女の子が古道具屋に対する依頼である。

次に、「して」系は假定節との関連を見る。

(501) 「——彼女、今日は何を言ったの？」

水野久美の尋ね方が、いつもとは違って遠慮がちで、どこか怖がっているような感じだった。真一は、彼女が樋口めぐみの叫びをしっかりと耳に留めていたのだと悟った。あんたがそそのかしたんだ——という、あの告発を。

「あ、ごめん。言いたくないことなら、言わないで」

「いや、いいんだ。そのうち話さなくちゃと思ってたから。ただ、勇気が出なくて」(模倣-下：p. 130)

少女→親しい少年

「言いたくないこと」は聞き手の言いたくないことを指し、聞き手のなわばりに属する。そして、聞き手の「いや、いいんだ」という返答から察せられたように、話し手の「言わないで」の意味は「言わないでください」というより「言わなくてもいい」の方が適切である。即ち、話し手は聞き手の言いたくない気持ちを配慮して、聞き手のため「言わないで」と言っている。

(502) 「あたしのことなら心配しないで……あなたこそ、パリでいいお仕事をして下さいな。一人つきりなんですもの。健康にだって気をつけないと……」(午後-下 379)

女性→前の夫

「あたしのこと」は話し手のことを指し、話し手のなわばりに属する。「心配しないで」は話し手が聞き手に対する依頼であるが、自身のためではなく聞き手のためである。話し手は聞き手からの心配を感じて、その好意に感謝しながら聞き手を慰めている。

6.4. 性別による使い方の差異

「して」の話し手には性差が見られる。女性は年齢を問わずよく「して」を使用するが、男性の場合、男の子や若い男性が「して」を用いる。しかし、年配の男性が「して」を依頼表現として用いるのがやや少ない。因って、女性の話し手が用いる「して」は、「指示・助言」、「依頼」、「勧め」などの様々な機能を持つ。男性の話し手が用いる「して」はどの機能があるかを検討する。

(503) 「ね？いいね？」

〈……ああ。頼むわ、若先生〉

今度の「若先生」に棘はなかった。

「よし。社長、いつなら行ける？」

〈明日の午後なら〉

「わかった。じゃあ気を強く持って。こっちもいろいろ考えておくから」(真相：p. 13-14)

会計士(男性)→男性客

(504) 「じゃあ、そこに座って」眼鏡の刑事に指示される。よく見ると、アキラおじさんと同じくらいの歳のヤサ男だった。「まずは名前から聞こうか」正面に腰かけ、何かの書類を広げている。答えて当然という態度に、なぜか反抗したくなった。

二郎は口を固く結び、横を向いた。(サウス-上：p. 278)

刑事→男の子

(503)「気を強く持って」、(504)「そこに座って」のように、話し手の発話によって指示

の意味が感じられる。

- (505) 「ささ、よかったら手伝って」紅郎と私を、チダさんは台所に引っ張った。私には葱を、紅郎には生姜を持たせて、切ったりおろしたりするよう指示した。(いとしい：p. 190)

男性→元恋人の娘と彼氏

「よかったら」は聞き手に対する配慮を表すが、話し手は「手伝って」と言いながら、聞き手の返事を待たないで聞き手を台所に引っ張って色々指示している。このように、「よかったら手伝って」によって依頼の意味を表すが、発話した後の地の文（紅郎と私を、チダさんは台所に引っ張った。私には葱を、紅郎には生姜を持たせて、切ったりおろしたりするよう指示した）から、話し手は聞き手の応答を気にせず一方的に自身の希望の通り、聞き手に指示を与えることが分かる。

- (506) 「町工場をいじめてそんなに楽しいのかよ」

「いえ、けっしてそんな」

「あとから来ておいてふざけるんじゃないよ」

「あの、どうか、落ち着いて」

「もう帰ってくれっ。こっちは猫の手も借りたいほどの忙しさなんだよ！」

信次郎は踵を返すと、さっさと工場の中へと戻っていく。(最悪：p. 340)

市役所の男性職員→男性製造業者

「どうか」は懇願の気持ちを表すが、話し手は聞き手の発話（「あとから来ておいてふざけるんじゃないよ」）によって、聞き手が興奮していることが分かる。したがって、聞き手に落ち着いてほしいと頼んでいる。このように、依頼の意味も助言の意味も感じられる。

以上まとめてみると、子供や女性の話し手は聞き手がウチ・ソトの関係を問わず、くだけた場面で「して」を使用するが、男性の話し手は「してくれ」を中心として使用するが、ソトの関係の下位者や対等な人に対して、くだけた場面で聞き手のために、または指示・助言として「して」を用いる傾向が見られる。

6.5. 「おいで」「ごらん」の機能

「おいで」に「～になる」「くださる」「なさる」などを後接すると、「行く」「来る」「いる」の尊敬語になる。しかし、「～になる」「くださる」「なさる」はよく省略される。

- (507) その午後も、その夜も、わたしの頭の奥に、あの男の子の声が聞こえた。姿が見えた。

(せんせい、あそぼ。あそぼうよ。プールへおいで。いいものをみせてあげる)

夢のなかでその声を聞き、はっとして何度も目が覚めた。(残：p. 23)

男子生徒→先生

- (508) 手のひらにのるくらいの小さな子ネコだった。空地のまわりはバラ線が張ってあって、僕たちははいれない。

「おいでおいで。こっちだ」

バラ線の下から手を入れて、指を動かして見せたら、草の間をくぐるようにしてやって来た。

僕たちは一匹ずつつかまえた。(一匹：p. 10)

子供→子ネコ

- (507) 「おいで」は先生に対する生徒の発話で、尊敬語である。しかし、(508) 「おいで」

は男の子が子ネコに対しての発話で、尊敬語の意味が薄い。このように、「おいで」は話し手が親しみを込めて聞き手に来てほしい場合、「来る」の慣用語として日常生活の中で定着している。

次に、「ごらん」の例である。「ごらん」は「見る」の尊敬語である。

(509) 「わあ、おかしい。お尻のとこだけ真っ白。ベー公も最初はこんなにきれいだったのね」
わたしは吹きだした。が、史彦は真剣な顔でベー公のむき出しになったおなかのあたりを見つめている。

「ごらん。悦子」

「え？」(三日：p. 187)

夫→妻

しかし、(509)「ごらん」のように、話し手は親しい聞き手に何かを見てほしい場合に用いる。「おいで」と同じく、尊敬語というより慣用的な用法である。

7. その他

7.1. 「お+〈動詞の連用形〉」による依頼表現の機能

「お+〈動詞の連用形〉」による依頼表現は、親疎問わず下位者や対等人に対して使用される。常に普通体と接続するので、くだけた場面で用いる。「お+〈動詞の連用形〉」は、話し手のなわばり意識に属するものを聞き手に勧める場合によく用いる。

(510) 料理が来ると、吉武は守を促して箸を取った。

「どんどんお食べ。午後からはまだ忙しいんだろう？」

「昼間からこんなごちそうを食べて、うちみんなに恨まれるな」(魔術：p. 308)

中年の男性→少年

(511) 「あきのは亡くなりました。昨日葬式をすませたところです」

老婆は、いかにも気落ちした調子で、ぼそぼそとつぶやいた。それでも、

「まあ、どうぞお上り」と、絹子を部屋に入れた。(一匹：p. 239)

年配の女性→初対面の若い女性

(510) (511) のように、話し手は好意を込めて聞き手に「お食べ」「お上り」と勧めている。上位者からの親切が伝わる。「指示・助言」の機能を持つ。

(512) 「新聞社の者ですが」

「どこの？」

「陽道新報です」

太市は仕方なしにいった。昔は、大新聞の名を胸を張っていったものだ。

「陽道新報だと？そうか、じゃ、お待ち」

老人は二階の障子をしめた。かれは戸口から現れた。(張込み：p. 369)

老人→新聞記者(三十代の男性)

(512)「お待ち」は、老人が初対面の新聞記者に待つてほしいと頼んでいる。話者が男性なので、「お待ち」を「待ってくれ」に入れ換えてもいいが、「待ってくれ」より丁寧な感じがある。しかし、やや古風な言い方である。

(513) 「私だって、こんな山の中へ来ようなんて夢にも思ったことはありませんでしたわ。」

「それが来たのだからますます不思議だあね。だが、いやになったら、いつでもお帰り。その時にはおれの自転車を貸してやる。あれだと二時間で行けるからな。」

「自転車に乗れないから、まあ帰らないことにしておきましょう。」(野上：p. 65)

夫→妻

「いやになったら、いつでもお帰り」は、妻に対する夫の思いやりである。現代風になれば、「いつでも帰ってくれ」とも言えるであろう。そして、下位者や対等人に対して、「(動詞の連用形) + な (よ)」の用法も見られる。

- (514) 洋介に電話をして、折り返しかけ直してもらった。着信音が鳴り、ちゃんとつながった。
「まったくこの電話魔が」露骨に面倒臭がられたが、雄太は大きく安堵した。「ところでいつもの雀荘、改装中だから、テツの知ってる店にしたぞ。先に始めてるから、近くに來たら電話しな」最寄りの駅名を言われた。(プール：p. 211)

青少年→親友

- (515) 「牛山さん、また『あした』みたいな長編、書きなよ。あれは傑作だったよ、お世辞抜きで」「でも売れなかった」下を向き、低い声で言った。
「売れなかったって、それはあんたの基準でしょう。初版三万で贅沢言わないの」「こっちはベストセラーになると思った。人生が変わると思った」(空中：p. 254)

女性→親友

(514) 「近くに來たら電話しな」は、話し手が親友に歓迎の意を表している。(515) 「牛山さん、また『あした』みたいな長編、書きなよ」は、話し手が親友を励ましている。聞き手に対する敬意があまり感じられないが、指示に近い言い方によって話し手の善意が伝わる。

7.2. 尊敬語動詞の命令形による依頼表現の機能

「いらっしゃる」「めしあがる」「おっしゃる」などの移動動詞、感官動詞による依頼表現がよく見られる。丁寧体と共に使用する。尊敬語動詞の命令形は、吉井(2000：p. 23)が指摘しているように、「基本的に聞き手の意図(意志の志向する方向)を是認し、尊重した『勧め』に傾く様相が見てとれる」のである。要するに、話し手は好意を込めて聞き手に自身のなわばりに属する物事を勧めている。(516) 「ホントに今度是非いらっしゃい」、(517) 「先ず一つ召上れ」の通りである。

- (516) 「旅店へ十日泊まる入費があれば私の家に一月いたってまだ安く上りますよ、その代り泊まり賃も何にも戴きません、食べるものは実費で勘定します、その方がどんなに得だか知れませんが、ホントに今度是非いらっしゃい、私が宮の下だの芦の湯だの湖水だの宮城野だのって御案内申しますよ」(酒：p. 200)

芸者→男性客

- (517) 「今聞けば皆さんは御酒がいただけるのに近頃御禁酒をなすったそうで、この美味しいものを御禁酒とは心得ません、今の若い人は酒に害があるなぞと分らん小理屈を申しますけれども私は小供の時から酒を飲んで少しも害がない、私が好い手本です、先ず一つ召上れ」と禁酒家に酒を薦むるは好意と言わんか悪意と言わんか、二客も下地はお好きなり、飲みたくはあれども山住の手前を憚り「山住君どうしよう」と百川が振り返りて相談する(酒：p. 136)

年配の男性→婿の友人

これに対して、(518) 「なんとかおっしゃい」は、常連客に対する丁寧な依頼である。(519) 「断っていらっしゃい」は、大人の説教の意味が感じられる。

- (518) 「『ねエ、あなたがアねエ、どういふ……貴方みたいに、さッ、どなたと喧嘩を。さ、なんとかおっしゃい。黙ってちゃアわからないじゃありませんか』なッ」(文楽：p. 199)

花魁→若旦那

(519) 「僕も行っていい？」昇くんが聞く。

「いいわよ。だけど、黙って行くとお婆あちゃんが心配なさるから断っていらっしやい」(一匹：p.143)

女性→子どもの友達

また、(520)「よく耳の孔をほじって聞いていらっしやい」も、説教の意味が感じられる。

(520) 妻君「お黙りなさい、そんな訳に行きません、よく耳の孔をほじって聞いていらっしやい、その次にこういう事があります、一回あるいは二回多量のアルコールを飲用するは中毒を来さざるべしと考える人あるも仮令一回にてもその量多き時は急性中毒を来すと、サアどうです貴君方は今まで幾百回だか幾千回だかその中毒を起しているから積り積って大した者でしょう」

(酒：p.380)

女性→夫の親友

「よく耳の孔をほじって聞いていらっしやい」は、尊敬語を用いているが、発話の内容が聞き手を傷付けるという事実は変わらない。こういう場合、尊敬語によって聞き手と距離を保ちたいという話し手の意図が伝わる。

8. まとめ

命令的依頼表現において、依頼内容が①話し手のなわばり意識に属すれば、「話し手にとってあたりまえ」と思われる場合と、②話し手のなわばり意識に属さなければ、「話し手からの強い依頼性」が表われる場合とは、最も多く見られる。つまり、命令的依頼表現の形式機能は「話し手にとってあたりまえ」と「聞き手に対する強い依頼性」である。

以上「してください」「してくれ」「してちょうだい」、動詞テ形、尊敬語動詞の命令形、「お＋〈動詞連用形〉」による依頼表現など、命令的依頼表現の構造と機能を検討してきた。なわばり意識によって「してください」「してくれ」「してちょうだい」を考察すると、次のような結論がある。

(V) 「してください」においては、

a. 話し手のなわばり意識に属する場合

③ 理由節 (話し手のなわばり) + 「してください」 (話し手にとってあたりまえ)

⇒指示・助言

④ 理由節 (話し手のなわばり) + 「してください」 (聞き手にとって好ましい)

⇒勧め

b. 聞き手のなわばり意識に属する場合

③ 仮定節 (聞き手のなわばり：新情報) + 「してください」 (話し手にとってあたりまえ)

⇒指示・助言

④ 仮定節 (聞き手のなわばり：旧情報) + 「してください」 (話し手からの強い依頼性)

⇒依頼

(VI) 「してくれ」においては、

a. 話し手のなわばり意識に属する場合

⑥ 理由節 (話し手のなわばり) + 「してくれ」 (話し手にとってあたりまえ)

⇒指示・助言

⑦ 理由節 (話し手のなわばり) + 「してくれ」 (聞き手にとって好ましい)

⇒勧め

⑧ 譲歩節 (話し手のなわばり) + 「してくれ」 (話し手からの強い依頼性)

⇒依頼

b. 聞き手のなわばり意識に属する場合

⑨ 仮定節（聞き手のなわばり：新情報）＋「してくれ」（話し手にとってあたりまえ）
⇒指示・助言 t

⑩ 仮定節（聞き手のなわばり：旧情報）＋「してくれ」（話し手からの強い依頼性）
⇒依頼

(Ⅷ)「してちょうだい」においては、

a. 話し手のなわばり意識に属する場合

⑤ 理由節（話し手のなわばり）＋「してちょうだい」（話し手にとってあたりまえ）
⇒指示・助言

⑥ 理由節（話し手のなわばり：今後の行動）＋「してちょうだい」（話し手の推定による）
⇒依頼

b. 聞き手のなわばり意識に属する場合

⑦ 仮定節（聞き手のなわばり：新情報）＋「してちょうだい」（聞き手の義務ではない）
⇒依頼

⑧ 仮定節（聞き手のなわばり：旧情報）＋「してちょうだい」（話し手からの強い依頼性）
⇒依頼

研究の対象が主に会話文であることから、動詞テ形、尊敬語動詞の命令形、「お＋〈動詞連用形〉」による依頼表現は、用例が短くて上述のような従属節と主節との関連が明らかではない。しかし、コンテキストから考察すれば、上述の結論とほぼ同様とも言える。そこで、依頼内容が話し手のなわばり意識に属して、「話し手にとってあたりまえ」になる場合、「指示・助言」の意味が伝わる。「聞き手にとって好ましい」になる場合、「勧め」の意味がある。つまり、話し手のなわばり意識が聞き手のなわばり意識より強い場合、話し手は命令的依頼表現を用いて聞き手に指示・助言したり、勧めたりする。

一方、話し手は聞き手のなわばり意識に侵入し、聞き手のなわばり意識に属する物事を依頼する場合、話し手からの強い依頼性が感じられる。この強い依頼性は動詞の語彙的意味と組み合わせれば、「助けてください」「助けてくれ」「助けて」のように、話し手からの強い要望や発話場面に限られる緊急性も生み出される。

第5章 質問的依頼表現の意味・機能

1. 質問的依頼表現の範囲

本章で取り上げる「質問的依頼表現」は主に2つに分けられる。1つ目は聞き手の視点から描写している「してくれる(か)?」「して下さる?」である。2つ目は話し手の視点から描写している「してもらえる(か)?」「していただける(か)?」である。

まず、聞き手の視点から描写している例を検討する。

- (521) 「麗奈さんこそ、乗馬部やアメフト部のキャプテンがお好きね。それから美大の学生も」
「星山さんは美大だと苦学生になるわけですね。それで裕福な家庭の女子大生が惹かれていくってパターン」
「ねえ、そのパターンって言い方やめてくれる」真顔で言った。
「あ、う、ここで話を整理するとですね——」田中が割って入る。大汗をかいていた。(空中：p. 268)
女性作家→若手女性作家
- (522) 「ちょっとトイレ貸してくれるか? どちらだっけ」早口に言って、栗橋浩美は立ち上がった。こっちだよと、ピースが先に立って案内してくれる。(模倣-下：p. 30)
男性→親友
- (523) 「少なくとも、怜子さんは社長を憎んでいたと思うわ」
「どういう理由で?」女は挑むように冬木を見返した。
「今夜のこと、ほんとうに誰にもいわないと、約束して下さる?」
「うむ……」
「それなら教えてあげますわ」(蒸発：p. 260)
若い女性→初対面の男性
- (524) 「それから、昔のことには、こだわらないで下さるかしら」
「僕は、こだわったことは、一度もありませんよ」(剣：p. 216)
兄嫁→男性

(521)「してくれる」は男女とも使用するものである。(522)「してくれるか?」は「か」をつけることによって男性しか使用しないものである。(523)「して下さる?」、(524)「して下さるかしら」は主として女性が使用するものである。「して下さるか?」の例はあまり見られない。丁寧体には「してくれます(か)?」「して下さいます(か)?」などがある。否定の用法には「してくれない(か)?」「してくれません(か)?」「してくださらない(か)?」「して下さいません(か)」などの例も見られる。

- (525) 「とにかく着替えにだけは行きたいの。付き合ってもらえるかしら」
二人の部屋など見たくはなかった。いやでも昔のことを思い出してしまう。六年前の私の部屋は、枝里子を選んだ品々で占められていた。母を送った翌日、灰にしたものの一つ一つまで思い出してしまいそうだ。(連鎖：p. 70)
女性→元彼氏
- (526) 「そろそろ行くよ。この箱、どこへ置いておけばいいかな」
「いいわ、ここに置いといて。後であたしが運ぶから」
美佐子がいったので、勇作は足元に箱を下ろした。そして蓋を開ける。
「一応中身を確認してもらえるかな」
「いいわよ。人殺しに使われたものだと思うと、何となく怖いけれど」(宿命：p. 347)
刑事→昔の彼女
- (527) 「なるほど。文書ならいいわけですね?必ず答えていただける?」
すると、相手は自信をなくしたらしい。ちょっと視線を泳がせてまばたきしたあと、

「少しお待ちください」と言い置いて、受付カウンターを離れた。広いロビーを横切り、奥のドアを開けて姿を消した。

カウンターにもたれて、本間はため息をついた。(火車：p. 340)

中年の男性→研修センターの受付

(525)～(527)は話し手の視点から描写している「してもらえるかしら」「してもらえるかな」、「していただける」の例である。用例集では、口語でよく使用される「してもらえる？」の例はあまり見られない。その代わりに使用されるのは、疑いの「してもらえるかしら」「してもらえるかな」である。(527)は「していただける？」の例であるが、「していただけるか？」の例はあまり見られない。丁寧体には「してもらえます(か)？」「してもらえません(か)？」「していただけます(か)？」「していただけませんか(か)？」などの例が見られる。

1.1. 疑問文と質問的依頼文との関連

国立国語研究所(1960：p. 109-126)の分類の中での要求表現は、次のように要約する。

要求表現：相手に対して求めるところのある表現意図

1. 質問的表現

1.1. 肯否要求

1.1.1. 確認要求の表現：判叙表現の文末に「ネ」「ナ」などの終助詞をとともなうものと、意味的にも形式的にも、よく似たものがあるが、そのほか、「～ダロウ？」「～デショウ？」「～ジャナイ？」「～ジャナイカ？」という文末助辞をとともなう形式がある。

1.1.2. 判定要求の表現：判叙表現の形式のままの文末に、昇調をくわえるものと、文末に、終助詞「カ」「ノ」をとるものなどがある。

1.2. 選述要求

1.2.1. 選択要求の表現：「Aか、Aではないか？」の型が基本である。

1.2.2. 説明要求の表現：いわゆる「疑問詞」を含む質問の表現である。特定の時・所・人などをさだめえないことをあらわすのが、その意義であろうから、「不定詞」の名称がふさわしい。「一般不定詞」「数に関する不定詞」「副詞的不定詞」「連体詞的不定詞」が含まれている

2. 命令的表現

2.1. 消極的行為要求の表現：広義“命令”の表現のうち、いわゆる勧誘・勧奨などの“すすめ”の表現、および、希求・依頼などの表現が、この消極的行為要求の表現である。

2.2. 積極的行為要求の表現：いわゆる“命令”の表現である。動詞の命令形、それに準ずる形式をとるものが含まれている。

「相手に対して求めるところのある」という表現意図による要求表現は、更に質問的表現と命令的表現に分けられている。要するに、質問的表現と命令的表現との共通点は「相手に対して求めるところのある表現意図」である。これに対して、仁田(1991：p. 136)は、「疑問表現は、まず、〈疑い〉〈問いかけ〉を有している本来の疑問表現と、話し手が聞き手に自分の要求の実現を働きかけ・訴える、といった〈働きかけ〉に移行・派生した疑問表現とに、分かたれる」と述べ、モダリティの視点から疑問表現を分析している。つまり、本来の疑問表現と派生した疑問表現との差は「働きかけ」があるかどうかにある。

本章では、依頼表現に関する疑問文を「授受動詞の補助動詞による疑問文」とそれ以外の疑問文とに分ける。「授受動詞の補助動詞による疑問文」とは、聞き手の視点から描写している「してくれる」系、「してくださる」系と話し手の視点から描写している「してもらえる」系、「していただける」系に関する疑問文を指す。それぞれ話し手の対人関係や場面などの話

用論的条件によって普通体と丁寧体が分けられる。このような疑問文は、Austin (1962, 坂本訳 1978, p. 121) の「原初的な遂行的発言」(primary performative) に相当する。質問と依頼と2つの階層を持つことから、「質問的依頼表現」と呼ぶことにする。質問的依頼表現は命令的依頼表現と同じく依頼表現の表出段階に属する。

「授受動詞の補助動詞による疑問文」以外の疑問文は、Searle (1986) の適切性条件の中にある「H⁷³はAをする能力を持つ」という事前条件に対する問いかけ文である。例えば、動詞の可能形を使用して、相手に依頼できるかどうかの状況を確認することによって、迂回的に相手に依頼の意味を伝える。また、「したらどう？」などの勧めの形で依頼を切り出す場合もある。このような疑問文は、話し手と聞き手との共有知識に基づいて、推論(infer)という手続きを通して話し手の依頼の意図を表す。「婉曲的依頼表現」と呼ぶことにする。「質問的依頼表現」と区別して、第8章で論じる。

1.2. 擬似質問的依頼文

擬似質問的依頼文とは、質問的依頼文に似ているが、依頼の意味より確認の意味が感じられる疑問文である。例えば、下記のように「のだ」と接続する疑問文である。

(528) 「べつに、あんな古いハウスなんか、どっちでもええようなもんなんやけど」ふっと、クニ代は小さく笑った。

「哲也の手が離れたら、手伝わせてもらいます」

「え、ほんまに、あんた、やってくれるのか」

「はい」クニ代はうれしそうに頷き、茶を飲んだ。(盗り：p. 280)

義母→嫁

(529) 「今、君ができることで、もっとも正しいことは、僕の交換条件を受け入れることだと思うんだけどな」きいきい声は、辛抱強い説得の調子で言った。「僕の言葉に従わなかったら、君はきっと後悔するよ」

偏光ガラスの陰の田川が、座ったまま顔をあげた——ように見えた。マイクに向かって、彼は訊いた。「本当に、俺がカメラの前に出ていったら、あの右腕の女の人の遺体を返してくれるのか？」

スタジオのなかが静まり返った。相変わらず、電話だけがうるさく鳴り響いている。しかし出演者は皆無言で、息を呑んだようになって田川の方を見つめている。

「ああ、もちろん」と、きいきい声が答えた。

「約束は守るよ」(模倣-上：p. 294)

テレビの出演者(若い男性)→真相不明の犯人

(528)「ほんまに、あんた、やってくれるのか」は、「哲也の手が離れたら、手伝わせてもらいます」という嫁の発話に対する義母の確認である。(529)「本当に、俺がカメラの前に出ていったら、あの右腕の女の人の遺体を返してくれるのか」は、聞き手の言った交換条件に対する確認である。話し手の質問する前に何らかの前提が存在する。その前提の内容について話し手は聞き手に確認したいのである。「のだ」による問い返し文について、南(1985：p. 68-69)は次の2つの条件を満足させる必要があると述べている。

I. 問題の表現の直前に、相手のなんらかの発話があること。

II. 話し手(質問者)は、相手の、そのことばを、そのままか、それに近い形でくりかえすことに

⁷³ Hは聞き手、Sは話し手、Aは話し手の聞き手に対する依頼行為である。

よって、相手にそれを確めるものであること。

(528) (529) の下線部は南の2つの条件を満たすので、確める機能が感じられる。

(530) 「よし。それじゃ、また連絡するから。何も心配するなよ。うまくいって」

「次はいつごろ連絡してくれるの？」

叔父さんはちょっと沈黙してから、

「そうだな……二週間ぐらいみてくれればいいと思うよ」と答えた。「みんなの調子はどうだい？安眠してる？」(隣人：p. 50)

男の子→叔父

(531) 「あそこをでてから、あたし、お祖父ちゃんの葬式のときくらい、いちども訪ねなかったし。……昨日、源氏堂で、俊ちゃんの打った面をみたわ」

「それはありがとう。で、いつ訪ねてくれるんだね？」

「はっきりした日はお約束できないわ」(剣：p. 27)

従弟→従姉

(530) 「次はいつごろ連絡してくれるの？」は、「また連絡するから」に対する問い返しである。「相手が連絡してくれる」が既知の部分なので、質問の焦点が「いつごろ」にある。(531) 「いつ訪ねてくれるんだね？」も、コンテキストから察せられるように、相手の発話に対する問い返しで、依頼の意味が薄れている。これは、「のだ」による疑問文は、スコープを広げて事態の成立以外の部分を質問の焦点にする機能があるからである⁷⁴。

次に、「してもらえる」による擬似質問的依頼文である。

(532) 「理由は、教えてもらえるのかな」

「え？いえ、少し一人でゆっくり考えてみたいだけです」(四日：p. 289)

男性→医療機関の職員

(533) 男の声—必ず、首相に伝えて貰えるんだろうね？

秘書官—重要なご用件ならば、必ずお伝えすると約束します。(誘拐：p. 17)

テープ 脅迫犯(男性)→総理の秘書

(532) 「理由は、教えてもらえるのかな」のように、話し手が聞き手に理由を教えてもらえると信じているが、念のため「のだ」により聞き手に確認している。「かな」は通常「疑い」という機能であるが、聞き手と対話する場合、問い掛けの機能が派生される。更に、「え？いえ、少し一人でゆっくり考えてみたいだけです」という聞き手の応答から、話し手の発話する前に前提はないことが分かった。(533) 「必ず、首相に伝えて貰えるんだろうね」も同様に確認の意味が感じられる。話し手は「のだ」以外、推量の「だろう」も終助詞「ね」も使用して、聞き手に自身の推測を認めてほしい気持ちを表わしている。「重要なご用件ならば、必ずお伝えすると約束します」という聞き手の応答から、話し手の発話は聞き手と合意したことではないことが理解される。したがって、(533) は(532)と同様に、話し手の発話する前に前提は存在しない。しかし、コンテキストによって、話し手の聞き手に確認したい意味が読み取れる。このように、話し手の発話内容は依頼というより、確認の方が感じられるので、本当の質問的依頼文ではなく、擬似質問的依頼文に属すると考えられる。

「のだ」による疑問文以外、終助詞「ね」「よね」による疑問文も確認の意味が含まれる。

⁷⁴ 久野(1973)、寺村(1984)、野田(1995)などを参照。

例えば、

(534) 「さっきも言ったけど、交換条件の内容はこうだ。Tさんがテレビの前に登場すること。そしたら、僕はあの右腕の持ち主の遺体を返してあげるよ」

「必ず、その約束を守ってくださいますね？」

「守りますよ。こっちが言い出したことだから」(模倣-上：p. 290)

テレビのアナウンサー→犯人

(535) 「意味がなくはないぞ。彼女が自分の証言を警察に提供したがつているのなら、おまえが案内して墨東警察署に連れて行ってやってくれ」

「そこのところは彼女もはっきりしないのよ……。今さらこんなこと言い出しても、警察が相手にしてくれないんじゃないかって思ってるのかな。でも、真面目にとりあってくれるよね？」

「もちろんだ」(模倣-下：p. 484)

娘→父

(534)「必ず、その約束を守ってくださいますね？」は、話し手が「ね」を用いて聞き手に確認している。これも「Tさんがテレビの前に登場すること。そしたら、僕はあの右腕の持ち主の遺体を返してあげるよ」という前提がある。(535)「真面目にとりあってくれるよね？」は、話し手が「よね」によって聞き手に確認している。前提はないが、暗黙の了解のようなものが存在している。このように、前提や暗黙の了解がある場合、「ね」「よね」による「してくれる」「して下さる」文は、擬似質問的依頼文に属すると考えられる。

2. 「くれる」「してくれる」の意味 ・機能

2.1. 聞き手のなわばり意識に侵入する

「くれる」は二人称の聞き手が一人称の話し手に物事を与える。「くれる(か)？」は話し手が聞き手に自分に物事を与えるかどうか訊ねる。

(536) 「ねえ、おかあさん。こっちでもお小遣いくれる？」と桃子。

「労働の対価として支払います」

意味のわからない桃子に二郎が説明してやった。(サウス-下：p. 95)

女の子→母

(537) 村上 それはもちろん嬉しいですよ。だから、たとえば「フィンランド語に訳すんだけど、序文をくれないか」と言われたときに、なるべく忙しくても書くようにしているんですよね。

柴田 フィンランドの読者に向けてですね。(翻訳：p. 34)

翻訳者→作家

(536) (537) のように、話し手が聞き手のなわばり意識に属する具体的なもの、「お小遣い」「序文」を依頼している。

(538) 「じゃあ、こっちが、依頼人の名を教えたら、それと交換に、情報をくれるかい？」

「差上げるような情報はないわよ。あなた、どうせ調べてしまっているのでしょうか？」(宿：p. 25)

探偵→女将

(539) 「——頑張ったから、ご褒美をくれる？」

一行の首に腕を回しながら言うと、一行の瞳が輝いた。

「そんなことも、思い出したの」(花嫁)

若い女性→婚約者

(538) (539) のように、漢語名詞により「情報」「褒美」などの抽象的なことを依頼する場合にも使用する。

補助動詞「してくれる」は、二人称が一人称のために何かすることを示す。「してくれる(か)?」「してくれない(か)?」は、話し手が聞き手にその行為をするかどうかを質問することによって、その行為の実行を依頼している⁷⁵。「してくれる?」は男女とも用いるが、「か」を接続すると、主に男性が用いる形式となる。

(540) 「あら、どうしたの?」振り返った美佐子が、彼の顔を見ると不安そうにいった。
「いや、何でもない」辛うじて声が出た。「これで失礼するよ。時間もないから」
「ええ……また連絡してくれる」
「するよ」
門を出るまで、勇作は何かまともに歩いた。だが一歩外に出ると、まるで限界まで伸ばしたゴムを離したように走りだした。(宿命：p. 348)

主婦→刑事 (元の彼氏)

(541) 「なんだ、まだ毛が生えてるじゃねえか。さっさと丸めねえと、おれが安全カミソリでスキンヘッドにするぞ」窓の縁に足を乗せ、スリッパのまま外に出てきた。部屋の中にはもう一人、仲間の中学生がいた。細い目をしたその男も、窓を飛び越えカツに続く。
「坊主にしたら、全部なかったことにしてくれますか」硬直した体で二郎が言った。声がうわずっている。
「あ?なんの寝言だ。坊主はスタートラインだ。そこから話は始まるってことだぞ」黒木の数倍も鋭利な声だ。剣のように空気を切り裂き、二郎の耳に突き刺さってくる。(サウス-上：p. 127)

男子小学生→不良の男子中学生

(540) (541) のように、話し手は聞き手に具体的な行為（「連絡すること」）も抽象的な行為（「全部なかったこと」）も依頼できる。依頼内容はいずれも聞き手のなわばり意識に属するものである。話し手は聞き手に応答の余地を与えるところから見れば、質問的依頼表現は依頼表現の中で最も典型的な依頼表現とも言える。

「してくれる」文における話し手の対人関係について、親しくない上位者に対してはあまり使用しない以外、殆ど制限はない。更に、「してくれる」を使用する場合、依頼内容が話し手のなわばり意識に属さない。聞き手のなわばり意識に侵入することが多い。「依頼行為の実現に対する確信を持たない場合」と「依頼行為の実現に対する確信を持つ場合」とに分けて、「してくれる(か)?」「してくれない(か)?」を検討する。話し手が依頼行為の実現に対する確信を持たない場合、話し手は聞き手の言動を支配する力を持たない、または聞き手に自身の依頼を受けてもらう自信を持たないからである。

(542) 「自分でも意外だよ。内海さん。この人と話したいんですが外してくれますか」
「構いませんよ。自分は水島のオヤジにちょっと話を聞いてきますから」(頼-上：p. 348)

男性→元刑事

(543) みどりが腕時計を見る。もう九時だった。騒ぎはどんどん大きくなっているだろう。母はきつと娘の安否を気にかけているにちがいない。
「あのう」男に声をかけた。「携帯、貸してませんか」
「どうするんだよ」
「家に電話したいから」
「ふざけるな。そんなことさせるかよ」(最悪：p. 581-582)

⁷⁵ 日本語記述文法研究会編 (2003, p. 73) を参照。

女性→やくざ

(542)「この人と話したいんだが外してくれますか」は、話し手が聞き手に発話の現場を離れようと頼んでいる。そして、「現場から聞き手を外させる」ことは話し手のなわばり意識に属さない。「構いませんよ」という聞き手の応答から、話し手は聞き手と対等な立場に立ち、聞き手を支配する力を持たないことが分かる。(543)「携帯、貸してくれませんか」は、話し手が聞き手に携帯電話を借りたいと依頼している。「聞き手に携帯電話を貸してもらおう」ことは話し手のなわばり意識に属さない。話し手が聞き手に脅迫された人質なので、通常犯人の携帯電話を借り、人質の家に電話をして安否を報じるのはありえないことである。したがって、聞き手は「どうするんだよ」「ふざけるな。そんなことさせるかよ」と返答している。このような場合、話し手は聞き手に自身の依頼を受けてもらう自信を持たないと考えられる。

話し手が依頼行為の実現に対する確信を持つ場合、「してくれる(か)?」を使用することは、話し手が聞き手に対する押し付けがましさを避けたいか、協調的な人間関係を構築するためかと考えられる。

- (544) 「……悪かったわ、待たせて。お店、閉めるんでしょ」
「いいですよ、入って下さい。何か暖かいもの作りますから。そのあとは、僕、先に帰りますから暖房と灯りだけは必ず消して、鍵を扉の下に押し込んでいてくれますか」
「ごめんね」(霧：p. 177)

居酒屋のオーナー→女性客

- (545) 「あの、社長がこちらに着いたら、ぼくのところに報せてくれませんか」
「かしこまりました」(骨-上：p. 268)

男性客→ホテルの男性職員

(544)「暖房と灯りだけは必ず消して、鍵を扉の下に押し込んでいてくれますか」は、居酒屋の主人が店を閉めた後、店内にいる常連客に後片付けと鍵のことを頼んでいる。話し手は自身の店なので聞き手に断れる余地のない「してください」を使用してもよいが、常連客との関係を考えて「してくれますか」を使用している。聞き手は話し手にかかる負担のために「ごめんね」と謝っている。(545)「社長がこちらに着いたら、ぼくのところに報せてくれませんか」は、話し手がホテルの社員に社長が到着すれば知らせてほしいと頼んでいる。話し手がホテルの社長に誘われた客であることから、聞き手は「かしこまりました」と返答している。

このように、語用論的な条件により話し手は聞き手に命令的依頼表現（「してください」など）を使用してもよいが、協調的な人間関係を構築するため質問的依頼表現（「してくれる(か)?」）を使用するのである。Thomas (1998 : p. 171) は「うわべの言語形態とポライトネスと同一視することが危険である」と説いている。要するに、うわべの言語形態は話し手と聞き手との相対関係や場面に必ずしも関連するのではない。話し手の意図により、質問的依頼表現は命令的依頼表現に入れ替えられるような流動的な関係を持つことが可能であると推測される。

2.2. 片寄りという傾向

質問的依頼表現に、(546) のように埋め込み構造【あたしのこと、正気だと信じる】にお

ける動作主が、外側の構造〈あなたが私に【 】くれる〉における人物と一致する。

- (546) 「あたしのこと、正気だと信じてくれる？あたし、今まで嘘ばかりついてきたわ。それを信じてもらってきたわ。それなのに、今ようやく本当のことを話したら、誰も信じてくれないような気がするの」

彼女は話した。すべてを。(魔術：p. 303-304)

女性→知り合ったばかりの男性

したがって、問いかけの形によって、話し手が聞き手に依頼した内容を実行する可能性を聞く。しかし、質問的依頼文を発する前に、話し手は既にある片寄りを持つ傾向が見られる。聞き手の応答に対する話し手の持っている特定の見込みについて、Lakoff (1993 : p. 69) が「不均整な性質」、仁田 (1991 : p. 149)、安達 (1999 : p. 52) が「傾き」⁷⁶と呼んでいる。肯定疑問文と否定疑問文との「傾き」について、仁田 (1991 : p. 149) は次のように指摘している。

「肯定疑問と否定疑問が、同程度に傾きを有する疑問表現になるわけではない。傾きを有する疑問表現には、否定疑問が多い。肯定疑問は、傾きを有する疑問表現にならないこともないが、大多数が傾きを持たない中立的な疑問文である」

一方、日本記述文法研究会 (2003 : p. 74) は、質問文から依頼文への機能の移行という視点から、否定疑問文と肯定疑問文を考察している。

否定疑問文と肯定疑問文では、質問文から依頼文への機能の移行についても違うがある。否定疑問文は肯定疑問文よりも依頼の機能への移行が進んでいる。一方、肯定疑問文は、依頼文としても機能するが、質問文としての性質も残している

これは、否定疑問文は肯定疑問文より片寄りといった傾向が見られる理由の一つだと考えられる。実際に「してくれる(か)?」に関する用例を検討する。

- (547) 「おまえと結婚する女は得だよなあ。料理の心配をしなくていいんだからさ。その点俺は、おまえに結婚されるとやばいぜ」剛志はよくこんな冗談をいった。

「兄貴が先に結婚すりゃいいじゃん」

「そりゃそのつもりだけどさ、順番が狂うってことはよくあるだろ。それとも俺が嫁さんを見つけるまで、おまえ、待ってくれるか」

「わかんないよ、そんな先のこと」

「だろ?だからびびってるんだよ」(手紙：p. 27-28)

兄→弟

このように、話し手は「それとも俺が嫁さんを見つけるまで、おまえ、待ってくれるか」と聞いている。しかし、聞き手の応答に続いて「だろ?だからびびってるんだよ」の発話によって、話し手は「待ってくれないだろう」と思っていると推察される。聞き手が返答する前に既にある特定の見込みを持つことが分かる。しかし、話し手は密かに「聞き手が待ってくれるだろう」という希望を全く持たないと断定することもできない。

⁷⁶ 「傾き」について、安達 (1999 : p. 52) は「ある命題の真偽を聞き手に問いかけるとき、話し手にどちらかの値への見込みが存在することである」と定義している。

(548) 「ううん、そうじゃないの。でも、玄関で立ち話もしにくいわ。おばさんの部屋に通してくれない？」

彼女は、厚子の返事の終わらないうちに、ハイヒールを脱いでいた。(宿：p. 87)

若い女性→女将

(549) 「おい、今夜、吉村君が来るからね」と、彼は妻に言った。

「すぐに用意してくれないか。スキ焼きを約束しておいた」

「そうですか。吉村さんも久しぶりですね」(砂-下：p. 250)

夫→妻

(548) の話し手は「おばさんの部屋に通してくれない？」と訊ねているが、「おばさんの部屋に通してくれるだろう」と思ったので、聞き手の返事がないうちに靴を脱いでいる。(549) の夫は妻がスキ焼きを用意してくれるだろうと思い、「すぐに用意してくれないか」と訊いている。妻は「すぐにスキ焼きを用意してくれる」という夫の希望を読み取り、「そうですか」と応えて了解の兆しを見せる。このように、いずれも聞き手が断わらないだろうという話し手の判断により、「してくれない(か)？」を使用するのである。「してくれる(か)？」より、「してくれない(か)？」の方が片寄りといった傾向が見られる。

2.3. 遠慮表現

片寄り以外、否定疑問文は肯定疑問文より丁寧であるという研究も見られる⁷⁷。否定疑問文「してくれない(か)？」を使用して直接に聞き手に対する丁寧さを表す方法以外、疑い・推量形や謝罪・慰め・配慮の言葉などを用いて、聞き手に対する遠慮の気持ちを表しながら、間接に聞き手に依頼する意を伝える。水谷(1985：p. 196-201)は日本語と英語との待遇表現を比較する際、次のように「遠慮表現」を分析している。

- I. 直接表現回避 (a) 動作主を明示しない—自動詞、受身など
(b) 巾のある表現を用いる—例示表現など
- II. 断定回避 (a) 話者の判断を示す表現を弱める—文末など
(b) 可能性を低く評価する—仮定法

本節では水谷の「遠慮表現」を参考して、「してくれる」による質問的依頼表現における「遠慮表現」を考察する。

2.3.1. 直接表現回避

水谷(1985)の考察によると、日本語の待遇表現においては、直接表現回避の方法はIの通りである。しかし、質問的依頼表現においては、聞き手の個人情報を聞く場合、「してくれる」に独話の形式「かしら」「かな」を接続して、聞き手に対する直接表現を回避する傾向が見られる。次の対照組を見る。

(550) 「あなたの携帯電話の番号、教えてくれる?」

「持ってないんです」

「じゃ、持ってください。僕のために」

敏子は、自分の携帯電話を買おうとだけ思った。(魂-上：p. 257)

年配の男性→好きな女性

⁷⁷ 森田・松木(1989：p. 275)などを参照。

- (551) 由佳里はなかなか用件を言わない。敏子は質問したいのを我慢して聞いていた。
 「電話が来ないから心配していたのよ。良かったら、あなたの携帯番号を教えてくださいかしら」
 はい、と素直に言う番号をメモして、敏子は切り出した。
 「何かあったんじゃないの」
 「はあ、ちょっと」由佳里は言い淀んだ。躊躇いが伝わってくる。(魂-下：p. 15)
 義母→嫁

(550) の話し手は、「教えてください？」を用いて好意を寄せる聞き手に携帯電話の番号を聞いている。これに対して、(551)「教えてくださいかしら」は語尾の「かしら」により、嫁の個人情報を聞く姑の心理を微妙に表す。また、「してくれる」に「かな」を接続する例も見られる。「かな」は「かしら」と同じく、独話の機能がある。

- (552) お祖母ちゃんの訪問以来、桃子の様子が変わった。なにやら、はしゃいでいるのである。
 「ねえ、おにいちゃん。遊びに行ったら、浴衣、作ってくれるかなあ」
 お祖母ちゃんから孫一人一人に届いた葉書を眺めながら、そんなことを何度も言う。
 葉書の文面には「遊びに来てね」と書いてあった。ご丁寧に地図まで記されていた。
 「今度の土曜日に行こうかなあ。おにいちゃん、一緒に行かない？」
 畳に寝転がり、足をバタバタさせていた。(サウス-上：p. 212)
 小学四年生の妹→小学六年生の兄

話し手は、「かな」を用いてお祖母ちゃんが浴衣を作ってくれるかどうかを推測している。聞き手との対話で「かな」を用いる例は、次の通りである。

- (553) 撮影が終わると記者がやってきた。
 「名前と年齢、スリーサイズを教えてくださいかな」軽いノリで聞いてくる。
 広美は年齢を二つごまかし、スリーサイズは上下を多め、真ん中を少なめに答えた。(プール：p. 138)
 記者(男性)→コンパニオン
- (554) 男がため息をつく。「まあ、浮気調査でもないし、金銭がからんでいるわけでもないし、たいしたことにはならないと思いますけど……」そこまで言って二郎を見た。
 「あ、二郎君。二階へ行っててくれるかな」アキラおじさんが言った。
 逆らうのが面倒なので従う。ただし部屋には入らず、階段の上で聞き耳を立てた。(サウス-上：p. 200)
 若い男性→友人の息子

(553)「名前と年齢、スリーサイズを教えてくださいかな」は、話し手が聞き手の個人情報を知りたい。(554)「二階へ行っててくれるかな」は、話し手が相手に二階へ行ってほしいと頼んでいる。仁田(1991：p. 269)は「聞き手にしか正確には回答を与えることができないものである場合」と分析している。要するに、話し手のなわばり意識に属さない、聞き手のなわばり意識に侵入する場合である。「かな」を使用すると、話し手は突っ込まれることを避ける効果があると考えられる。

2.3.2. 断定回避

「してくれる」は推量形「だろう」「でしょう」と接続すれば、聞き手に対する遠慮の意を表す。

- (555) 「しようのないご仁だ。どうもお前は、仲間づきあいが悪くていけねえなあ。特に藤島が死ん

でからはな」

「じゃ、失礼」

「ちょっと待てよ。立ち話くらいいいだろう。君、この間の打ち合わせに来なかったけどなあ、十月末か、遅くも十一月の上旬ごろ、藤島の遺作展をすることに決まったんだよ。無論君も手伝ってくれるだろうなあ」

「ああ、できるだけねえ」(自我：p. 178)

男性→画家の仲間

(556) 管理人のおばさんが、小野木を出口に送った。

「長いことお世話になりました」小野木は頭をさげた。

「小野木さん」と、おばさんは言った。

「また東京にいらしたときには、寄ってくださるでしょ?」

おばさんは小野木に、つとめて明るい顔をしていた。

「ぜひ寄せてもらいます」小野木は玄関を出た。(波-下：p. 347)

管理人のおばさん→男性

(555)「無論君も手伝ってくれるだろうなあ」は、話し手の判断に基づく推測で、コンテキストにより依頼の意味も含まれる。したがって、聞き手は「ああ、できるだけねえ」と受諾している。(556)「また東京にいらしたときには、寄ってくださるでしょ?」は、話し手の判断というより聞き手に対して好意を込める期待が感じられる。直接に相手に訊ねることを避けるためである。

2.3.3. 謝罪・慰め・配慮の意志表明

直接表現回避、断定回避以外に、話し手は先に依頼行為が持たされた結果で聞き手に対する謝罪・慰め・配慮の気持ちを示して、聞き手に依頼する意を伝える。

(557) 「こことことに名前を書いて……印鑑は持っている?」

和子の前に座っている二人連れの若い娘は、そろって首を横に振った。一人は、血色が悪く、垂れ下がる脂気のない長い髪をしょっちゅう顔の前からはらいのけている。もう一人は肌に吹出物がひどい。和子は、自分自身のしみひとつない肌が効果的に見える角度を考えながら、二人に話しかけていた。

「そう。じゃ、指が汚れるので申し訳ないんだけど、拇印を押してくれる?」

二人は素直に言われたとおりにした。和子は、彼女たちが拇印を押し終えるのを待って、なめらかな手触りのティッシュ・ペーパーを渡す。(魔術：p. 157)

女性営業員→若い女性たち

(558) 「おじさん、座っていい?」若い女の声がした。はっとして目を開けると、黒いサングラスに真っ赤な口紅を塗った少女が横に立っていた。季節外れと感じられる木綿の青い夏のワンピースを着て、カルピスらしい白い飲み物の入ったグラスを手をしている。

「いいでしょ。座るとこないんだよ。悪いけど詰めてくれる」

狭い店はいつの間にか客で一杯で座席もほとんど埋まっていた。

「構わないが、そんな黒眼鏡をかけて見えるのかい」

村野が言うと、少女は「見えるわけじゃないじゃん」と笑いながらサングラスを外した。(灰：p. 207)

少女→初対面の三十代の男性

(559) 「すまないが、この一週間の彼らの暮らしぶりがどんなだったか教えてくれないか。なんせ僕はずっとベッドの中で世間と隔絶していたからね」

玲子は頷いて、ソファの上に置いてあったショルダーバッグから大きなファイルを取り出した。

「彼らの行動は八月一日以来、毎日細かくチェックしてるけど、それを全部知りたい?それともごく短かいつまんで話しましょうか」(獲物：p. 152)

心理学者のキャスター (男性) →ニュース番組のスタッフ (女性)

(557)「指が汚れるので申し訳ないんだけど、拇印を押してくれる？」のように、話し手は聞き手が依頼行為を実行すれば招かれる結果について先に謝っておく。(558)「悪いけど詰めてくれる」は、話し手が見ず知らずの男性に自分のために席を詰めてくれることを詫びている。(559)「すまないが、この一週間の彼らの暮らしぶりがどんなだったか教えてくれないか」は、話し手が聞き手にたくさんの仕事を指示したので、聞き手に謝罪しておく。そして、「してくれないか」「すまないが」は、話し手が主に男性である。性別上の片寄りが見られる。

(560) 「君がその地名を見つけたのだ。ご苦労だが、行ってくれるかね?
「よろしい。それから、もう一人、ついて行ってほしいが、それには吉村君がいいだろう」(砂-上 : p. 53)
男性主任→刑事

(560)「ご苦労だが、行ってくれるかね？」のように、謝罪の表現を用いなくて、相手を慰めながら依頼している例も見られる。

また、「たら」「ば」などの条件節と組み合わせて、依頼の成立条件を明示する傾向がある。最も多い例は(561)(562)のようである。前件と後件の因果関係がその特徴である。

(561) 「じゃあいったん電話を切る。ファクスが届いたら、そっちから電話してくれるかい
「わかりました」
「ではよろしく」電話が切れた。(白夜 : p. 707)
従兄→従弟

(562) 「カスミさん、有香ちゃんのこと何かわかったら教えてくれるかい
「ええ、連絡します。どこに電話すればいいの」(頬-下 : p. 78)
男性→元愛人

(561)「ファクスが届いたら、そっちから電話してくれるかい」の「ファクスが届いた」場合は、話し手が聞き手からの電話がほしいと頼んでいる。ファクスが届いていない場合、話し手の依頼は成立しない。(562)「カスミさん、有香ちゃんのこと何かわかったら教えてくれるかい」は、有香ちゃんのことを分からない場合、話し手に教える必要もないであろう。

(563) 「あの娘は——どういう診断なんだ？名字も違うようだが、俺は詳しいことは聞いてないんでな。差し支えなければ話してくれるか？
本当に興味を持っているのか、あるいはただ話題を変えたかっただけなのかは測りかねたけれど、問われるまま僕は、事件のことから始めて、千織と自分の関係や、白石医師の言葉などを話した。(四日 : p. 292-293)
医者→患者の保護者

(563)「差し支えなければ」は、前述した仮定節と異なり、実際の条件ではなくて、配慮の言葉である。このような語句は文字通りの意味を失って、丁寧さの標識と化しているので、Sweetser (2000 : p. 168-173) は「言語行為条件文」と称している。話し手は謝罪・慰め・配慮の言葉によって聞き手に対する遠慮の気持ちを表しながら、聞き手に依頼するのである。

2.3.4. 「少し」「ちょっと」の表現効果

「ちょっと」「少し」などの程度副詞が、聞き手に対する話し手の配慮の気持ちを表す。依頼

表現では、「少し」「ちょっと」の機能は、元の「属性（質）や状態が帯びている程度性」⁷⁸から拡張され、聞き手にかける負担の程度を減少してほしいという話し手の気持ちを表す。Leech (1987) の「気配りの原則：a. 他者に対する負担を最小限にせよ」が思い出される。

一方、場合によって、聞き手に対してその動作や状態の持続を依頼する機能も見られる。工藤 (1983 : p. 191-192) は、次のように「少し」の例を挙げて、「文脈的に『もうすこし』の意に解しうるもの」と指摘している。

- ◆ 少し急いでくれよ。
- ◆ 君、少し自重しろよ。

「してくれる」と共起する「少し」は、確かに「もう少し」の意味が含まれる。

(564) 「うむ。てんかん性の発作ではたぶんないと思うがな。長谷川君、悪いが彼女を病室に連れ帰って、少し様子を見ていてくれないか
「ですけど——」(四日 : p. 356)

医師→看護婦

(565) 「あっ、そう。少し離れて歩いてくれないか
「えっ？」

「ほら、流行の女子大生とおじさんのカップルみたいで、きまりが悪いから」

「フフ、そうは見えませんよ。先生は若く見えるから」(井戸 : p. 25)

男性教師→教え子

(564) 「少し様子を見てくれないか」は、「もう少し様子を見てくれないか」に、(565) 「少し離れて歩いてくれないか」は、「もう少し離れて歩いてくれないか」に入れ換えても意味が変わらないであろう。このような場合、話し手は聞き手の立場を配慮する意が感じられる。

また、「してくれない(か)？」は直接的に「もう少し」と共起する例も見られる。

(566) 「でも、あの老人はかつて百姓だったんです。力仕事ならどんと来いのはずですよ」
「だとしても、殴殺なんて重労働はいかにも老人にはしんどすぎる。やるならもっと負担の軽い方法がいくらでも考えられたはずだ。それに、心理面からみても、あの老人は自ら殺人を犯すようなタイプの人じゃない。どう考えても実行犯とは思えないね……。とにかく今後の番組作りに関してはもう少し考えさせてくれないか」(獲物 : p. 194)

心理学者のキャスター(男性)→ニュース番組のディレクター(やや年上の男性)

(567) 「それにうちのお金だってまだ何かあるんじゃないかな、かあさんに訊いてみよう。悪いけど沙生のとこのおとうさんにももう少しなんとか頼んでみてくれない?
沙生は親指の関節へ歯を当てながら聴いていた。(おと : p. 141)

夫→妻

(566) の話し手は依頼を申し出る前に、「どう考えても実行犯とは思えないね……」と言ったので、今後の番組作りについてまだ決めていないことを強調して、「もう少し」を使用して周りの人の理解を求めている。ここでの動作主は話し手である。(567) の話し手はずっと妻の実家に借金しているが、まだ足りないので、「もう少し」を使用して今後も借金したい気持ちを表している。このように、発話時の状況に対して欠如と感じていることを強調したい

⁷⁸ 仁田 (2002 : p. 181-182)

場合、「もう少し」を用いる。

一方、「もう少し」の意味ではなく、「少し」の基本的な意味を示す例も見られる。

- (568) 「少し化粧もしてやってくれないか。髪形が、より一層映えるように」
「わかりました」(白夜：p. 273)
男性客→美容院の助手
- (569) 「君、これから何か予定があるの？バイトとか」
「いえ、ありませんけど」
「じゃあ、少し付き合ってくれないかな」
「どこへ行くんですか」
「心配しなくても、いかがわしいところに連れていったりしないさ」(白夜：p. 272)
大学のダンス部長→女子部員

(568)「少し化粧もしてやってくれないか」は、話し手が第三者を美容院に連れてきて、聞き手に化粧もしてやってもらいたい意を示している。(569)「少し付き合ってくれないかな」は、話し手が聞き手にこれから一緒に来てほしいと頼んでいる。前提がなければ、「もう少し」を使用することができない。

「ちょっと」も似ている用法がある。

- (570) 「石岡君。ちょっとここへ来てくれないか」
「何だい？用事？」(猫：p. 75)
中年の男性→同病室の若い男性
- (571) 「死体を見つけたのは、アパートを貸してた不動産屋らしいんだ。ちょっとたしかめてくれないか」
「あ……それはかまいませんけど」
「頼むよ。もう少し詳しいことを知りたいんだ」(白夜：p. 231)
男子大生→後輩

(570)「ちょっとここへ来てくれないか」、(571)「ちょっとたしかめてくれないか」は、聞き手の立場を配慮する意が感じられる。

「もうちょっと」の意が含まれる「ちょっと」の例も見られる。

- (572) 哲也を抱きあげ、美津子は真理奈の腕に渡してやった。
「腕のところに、頭を載せるようにしてやってね。まだ、首がすわってへんから」
「うん」
眉根に皺を寄せ、真理奈は真剣な顔をして頷いた。手を添え、軀が安定するように直してやると、哲也はむずかりもせず、じっとしている。
「なんや、軽いんやなあ」ぎこちやく肩を張り、真理奈は笑った。
「ちょっと抱いてくれる？」
「ええよ」
台所に立ち、美津子はミルクの用意を始めた。(盗り：p. 114)
若い女性→姪

話し手が「ちょっと抱いてくれる？」と依頼する前に、相手が既に子供を抱いているという前提から、ここでの「ちょっと」は「もうちょっと」に等しいことが分かった。

3. 「してくださる」の意味・機能

「して下さる?」「して下さらない?」は、主に女性が使用する依頼形式である。「して下さる?」は、使用対象が対等な人や上位者を中心としているが、下位者に対して使用される例もある。普通体によって親しみを表す効果があるのに対して、丁寧体によって話し手の丁寧な態度を表す。男性も丁寧体を使用する。依頼内容は主に「依頼行為の実現に対する確信を持たない場合」、聞き手のなわばり意識に侵入する。

- (573) 「先生、わたくし、どこかにお勤めに出ようかと思っていますの。探して下さる?」
声に親しみがこめられた。そのとたん、石につまずいて美枝子がよろけた。慎一郎はハッとして手を貸しかけたが、その手をとどめた。美枝子はよろめいて道に片ひざをついた。
「大丈夫ですか」突っ立ったまま、慎一郎は声をかけた。(自我：p. 77)

女性→夫の同僚

- (574) 管理人のおばさんが、小野木を出口に送った。
「長いことお世話になりました」小野木は頭をさげた。
「小野木さん」と、おばさんは言った。
「また東京にいらしたときには、寄って下さるでしょ?」
おばさんは小野木に、つとめて明るい顔をしていた。
「ぜひ寄せてもらいます」小野木は玄関を出た。(波-下：p. 347)

管理人のおばさん→男性

(573)「探して下さる」は、「して下さる?」を使用して親しみを表す例である。(574)「また東京にいらしたときには、寄って下さるでしょ?」は、話し手が確認の疑問文を用いて聞き手の到来を歓迎する意を表している。

「して下さらない?」の使用範囲は「して下さる?」の使用範囲と多少重なっているが、基本的に「して下さる?」より丁寧な感じがあるので、親しい人に負担のある依頼を申し出る場合や、あまり親しくない人に依頼する場合には使用される。

- (575) 「何だか、お腹がとても痛くて」
「医者へ行ってみるよ」
「あなたも一緒に行って下さらない」妻の目に切実な色があった。高本の仕事第一主義をよく知っていて、こんなことはめったに言い出さないみさである。
「おいおい子供じゃあるまいし」いちいち女房が医者へ行くのにつきそって行けるか、まして今は、一日でも会社へ出なければ、合併した時の地位に影響するような油断もすきもならない雰囲気なのだ。
「ねえ、お願い——、少し出血するのよ、心配で心配で、何しろ初めてでしょう、ひとりじゃ心細って」(挫折：p. 19)

妻→夫

- (576) 病室に戻ると、芹川は、
「リンゴをむいて下さらんか」と言った。遠慮がちな、それでいてどこか甘えるような口ぶりだった。
「ええ。むいて差上げようと思って、ナイフも用意して来たんですよ」(一匹：p. 222)

年配の男性→娘の親友

- (577) 「あ、その包丁の包、開けて、出しておいて下さらない?今、レモンティーか何か持って来ますわ」
小さなはさみを手渡しておいて、キッチンに入って行った。
啓介は、言われたとおりに、包のひもを切り、長方形のボール紙の箱の中から、包丁を取り出した。(一匹：p. 174)

若い女性→親しくないやや年上の男性

(575)「あなたも一緒に行って下さらない」は、妻が自身の体を心配して夫と一緒に引っ

てほしいと頼んでいる。夫が忙しくて仕事第一主義ということも知っているので、妻は自身の依頼が夫に対する負担を感じることを「してくださらない？」を用いて示している。(576) 「リンゴをむいてくださらんか」は、何回も会ったことがある、娘の親友に対する年配の男性からの依頼である。地の文から話し手の遠慮がちな態度が分かった。(577)「その包丁の包、開けて、出しておいてくださらない」は、ナンパしたばかりの男性に対する依頼である。話し手は親しくない聞き手に「してくださらない？」を用いて、失礼にならないような態度が示される。

(578) 「わたし、泰子です」
「ああ、あなたか。益子に行ったのか」
「そうです。いま、上野駅におりますが……」
「帝国ホテルのロビーにいらしてくださいませんか。私もまっすぐここに来たので、これから行くところです」
これだけで電話がきれた。怒っている様子ではなかった。丁重な返答はそばに他人がいたからにちがいない。(夢：p. 43)

男性→不倫の相手

(579) 「どうか、最初から事情を話してくださいませんか。六月三日の晩、美那子さんはあなたを頼っていった。——彼女はあなたに、家出の理由を話したのでしょうか」
「伺いましたわ」(蒸発：p. 363)

男性→初対面の女性（妻の親友）

「してくださいませんか」による丁重なイメージは、(578)の地の文から感じられる。(579)の話し手の発話は改まった場面で聞き手に対する丁寧な依頼である。「どうか」と共起すれば、依頼の意が一層強く感じられる。

しかし、依頼の意が感じられない例もある。

(580) 「私もこちらの彼も、あの日は朝パン食、昼は会社の食堂ですませて、そちらではなんでもないので。だから原因はこの店しか考えられないのよ。どうしてくださるの!」(女：p. 224)

女性客→店の支配人

「どうしてくださるの!」は、女性客からの文句である。聞き手に対する話し手の感謝の気持ちが感じられないだけではなく、皮肉の意さえも感じられる。

4. 「してもらえる」の意味・機能

「してもらえる」の疑問形を使用する用いる話し手が問題にしているのは、「してくれる」の「自分に恩恵を与える意志が聞き手にあるかどうか」ではなく、「自分が恩恵を受けられるかどうか」である。また、井上（2002：p. 137）が指摘しているように、「聞き手の意志に直接言及しないことで、聞き手に対する遠慮の気持ちを表す」のである。したがって、依頼内容によって異なるが、「してくれる」は親疎問わずに対等な人や下位者に使用されるのに対して、「してもらえる」はソト関係の人によく使用される。「してもらえる」の依頼内容は「してくれる」の依頼内容と同様に、話し手のなわばり意識に属さない。聞き手のなわばり意識に侵入するものが多い。「してもらえる」を使用するのは、主に「依頼行為の実現に対する確信を持たない場合」である。丁寧体と併用すれば、丁重すぎもせず親し過ぎもしない感じがある。

- (581) 彼女は棚の上から少し埃をかぶった幼稚園の名簿を取り出して、片倉家の電話番号を探した。しっかりと落ち着いた声で名を名のり、もしまだよかったら、午後太郎をあずかってもらえないか、と丁重すぎもせず、親し過ぎもしない調子で訊いた。
「予定していた人が急に来ないと連絡があったものですから。いいかしら、お願いできるかしら？」
受話器の中に、広子の声が陽気に弾ける。
「もちろんですわ、ええ、ええ、喜んで」
相手が電話を切るのを待って、朝子はそっと受話器を置いた。(恋：p. 32)
女性→息子の同級生の母

また、話し手が一方的に自身の希望を述べて、遠慮がちな態度を取る場合にも使用される。

- (582) 内線電話が鳴った。出ると営業部の女子社員からだった。
「スズキ食品の消費者アンケート結果、上がってますか」
「あれ、来週じゃなかったっけ」
「えー、今日ですよ。わたしこれから先方に持っていこうと思ってたのに」
「いや、ちがうよ。来週だって」
「そんなはずありません」愛想のない物言いだった。「だったら田口さんの方から先方に断りの電話、入れておいてもらえますか。来週になるって」
「えっ、こっちが？」
「じゃあよろしくお願いします」言い返す間もなく電話を切られた。(プール：p. 91)
女性社員→男性同僚

「田口さんの方から先方に断りの電話、入れておいてもらえますか」は、女子社員が同僚を得意先に電話させている。愛想のない言い方なので、聞き手が自身に恩恵を与える意志があるかどうかは気にせず、ただ事務的に聞き手に電話してほしいと伝えている。この基本的な差異から、「してくれる」は「してほしいのだ」と、「してもらえる」は「したいのだ」と共起しやすい傾向が見られる。

- (583) 「叔父さんか叔母さん、いるかい？」
「……うん。いるよ」
「駅まで車に乗せてってほしいんだ。頼んでくれる？」
「……うん。いいよ」(真相 94)
男性→従弟
- (584) 「とにかく着替えにだけは行きたいの。付き合ってもらえるかしら」
二人の部屋など見たくはなかった。いやでも昔のことを思い出してしまう。六年前の私の部屋は、枝里子を選んだ品々で占められていた。母を送った翌日、灰にしたものの一つ一つまで思い出してしまいそうだ。(連鎖 70)
女性→元彼氏

(583) 「駅まで車に乗せてってほしいんだ」は話し手の視点から描写しているが、客観的に聞き手に対する希望を表す機能があるので、聞き手の視点から描写している「してくれる」と共起しうる。これに対して、(584) 「とにかく着替えにだけは行きたいの」は、話し手が一方的に自身の希望を述べるという主観的なイメージがあるので、同じく話し手の視点から描写している「してもらえる」と接続すれば、自然である。「したいのだ」は、徐(1998)が分析しているように、話し手が自身の意向を積極的に表現すると同時に、聞き手からの理解も求めようとする姿勢が感じられる。しかし、「お願いがあるのだ」のような前置きがある場合、「してくれる」「してもらえる」とも共起することができる。

- (585) 「お願いがあるのですが」と、ぼくは早口で言った。
「広島の稲本敦子さんの自宅ですが、家宅捜査をしてくれませんか」
「え？」と山嵐は驚いた。(坊っちゃん：p. 224)

探偵→刑事

- (586) 「お願いがあるんです。変なお願いなんですけど、聞いてもらえますか？」
頷きながら、不思議な感じに捕らわれていた。(四日：p. 270)

女性→少女の保護者

「お願いがあるのです(が)」は、話し手の希望のある事実を述べることによって、後接の依頼を予告するような機能がある。

- (587) 「コックリさんコックリさん、わたしたちの質問にこたえてもらえますか」
また、割り箸が震えながら「はい」と指し示す。
「さっきジャンケンで決めたわね。最初は理恵ちゃんよ」
綾子ちゃんが声を殺して命令し、理恵ちゃんが僕の手を固く握り締めながら、前ににじり出た。
割り箸の端に指を乗せる。
「コックリさん」喉を震わせながら、理恵ちゃんは呼びかけた。「あたしのママは、もうすぐ会いに来てくれますか？」
この質問は、僕に、ひかりの家の子供たちが置かれている立場を思い出させるものだった。不意に、ちくりと胸が痛んだ。
割り箸はすぐには動きださなかった。理恵ちゃんは、ためらいがちに、同じ質問を繰り返した。
(今夜：p. 196)

女の子→コックリさん

聞き手は目の前にいない。「コックリさん」は憑依による占いの中で一度も見たことのない霊であるのに対して、「あたしのママ」は親愛なる身内で見触ったことのある人物である。「コックリさんコックリさん、わたしたちの質問にこたえてもらえますか」「あたしのママは、もうすぐ会いに来てくれますか？」のように、抽象的な「コックリさん」に対して「してくれる」より「してもらえる」の方が使用しやすい。

5. 「していただける」の意味・機能

5.1. 遠慮表現

「していただける」は「してもらえる」の控え目なイメージを受け継いで更に発展する。使用対象は主に親しくない上位者や対等人である。したがって、遠慮表現がある。馬場・盧(1992)は、「ちょっと」「少し」などの程度副詞によって依頼内容を実際より減らして軽く表現する、と指摘している。

- (588) 「村野さん。今日いらしてくださってよかった。ちょっと見ていただけますか」と、小林は人目を憚るように机の下から書類袋を出した。何だ、と見ると『心炎』と墨痕鮮やかな表紙の薄い小冊子だった。三冊ある。
「これが、例の文芸誌か」
「そうです」と小林はにやっと笑った。「僕の友人の兄貴で秩父鋼管に勤めている人がいたんですよ。で、水曜に手に入ったので、村野さんに見せてあげようと楽しみにしていたのに」(灰：p. 220)

若い男性→会社の先輩

- (589) 「運転手さん、ここで少し待っていただけますか？」
昌子は眼を戻して言った。
「はあ、そりゃ待ちますけれど……。お降りになるんですか？」(山：p. 290)

女性客→タクシーの運転手

このように、話し手の控え目な態度を反映しながら、聞き手に対する負担を減少させることによって、聞き手に断わられにくくなる効果がある。依頼内容を軽減化とする手段は、程度副詞のみではなく、節による軽減化の例も見られる。

- (590) 努めて穏やかに、本間は言った。「私の説明が足りないので、ご不審に思われることは当然です。五分で結構ですから、もう少し詳しい事情を聞いてはいただけませんか」
受付嬢の耳に入るところで話せるようなことではないのだ、と、暗に匂わせたつもりだったのだが、相手は頑として動じる様子も見せない。
「申し訳ございませんが、できかねます。事前にアポイントメントをとっていただきませんと、社内の者に取り次ぐことはできないという規則がございますので、どうぞお引き取りください」(火車：p. 349)

中年の男性→通信販売会社の受付

「五分で結構ですから」は、依頼内容が聞き手にかける負担を軽く表現するという話し手の意図が感じられる。他には、「聞き手の都合を訊ねる」という方法がある。

- (591) 「今日、退院するのですか」
「明日でもかまいませんが、早いほうがよろしいでしょう」
「まだ、本院のほうには、なにも話していないのですが……」
「その点をご心配いりません。今日、移られることは、向こうに連絡済みですから。よろしかったら、これにサインしていただけますか」
看護婦がさしだした書類は、転院の手続き書と医療書の請求書のようなものである。
「でも、会計のほうは今日すぐには……」
「それは急ぎません。本院の分に含まれますから、ここにサインをしてくだされば結構です」
そういわれては断る理由もない。(麻醉：p. 104)

主任の看護婦→患者の夫

- (592) 「あの……お急ぎでなかったら、ちょっと、ちょっと待っていただけますか」
「は？」彼女はひとさし指で頬を軽く押さえ、歯痛のときのように眉を寄せている。
「その写真に写ってる制服ですね、見覚えがあるような気がするんです」
「間違いないですか？」(火車：p. 335-336)

建設会社の営業員(女性)→刑事

(591)「よろしかったら」、(592)「お急ぎでなかったら」は、聞き手の都合を聞いて話し手の遠慮の気持ちを表わしている。

また、「謝罪・恐縮の意を示す」ことによって、依頼を切りだす例もある。

- (593) 「今、宮里さん、目を開けたんですけど、本当に意識はないんですか」
看護婦はちらりと宮里を見遣っただけで、敏子の質問には答えなかった。
「すみませんが、帰りにナースステーションに寄っていただけますか」
物言いがはっきりしている上に大声、しかもにこりともしないから、怒られているように感じられる。(魂-上：p. 311)

看護婦→患者の女性友人

- (594) 「申し訳ありませんが、ここにお名前を書いていただけますか。空きましたら、順番にお呼びいたしますから」一方の従業員がしゃべっている。相手は、スポーツとはあまり縁がなさそうな太った中年男だった。傍らに、黒いキャディバッグを置いていた。
「なんだ、かなり混んでるの？」中年男が不機嫌そうに尋ねる。
「そうですねえ、二、三十分ほどお待ちいただいておりますが」
「ふうん、仕方ないなあ」不承不承といった感じで男は名前を書き始めた。(白夜：p. 478)

ゴルフ場の従業員→中年男

(595) 「家賃などいりません。でも、藤島の絵がたくさんありますわ。その絵を恐縮ですけど、預っていただけないでしょうか」

慎一郎はうすら笑いを浮かべた。

「なるほど、飛びつきたいような、いいお話ですねえ。広い画室はある。ぼくの家より、倍も間数はある。おまけに和風の大きな庭と、車庫がついている。それで家賃がただ。どうも話がうますぎますねえ」(自我：p. 116-117)

女性→夫の同僚

(593) 「すみませんけど」、(594) 「申し訳ありませんが」は話し手の謝る気持ち、(595) 「恐縮ですけど」は、話し手の恐れ入る気持ちを表わしている。

(596) 「図々しいお願いであることは承知してはるんですが、そこをなんとか、調べていただけませんか。顔写真を見てもらって、その女性が、一九八九年七月から十月のあいだに、こちらで研修を受けているかどうか、それだけ教えていただければいいんです」

「できません」

「失踪人の捜索にかかわることなんです。なんとかありませんか」(火車：p. 339)

中年の男性→研修センターの受付

「図々しいお願いであることは承知してはるんですが、そこをなんとか、調べていただけませんか」のように、話し手が聞き手にかける負担を明言することによって、依頼の必要性を強調している。更に、謝罪・恐縮のような消極的な表現のみではなく、積極的に感謝の気持ちを表したり、実際に謝礼のことを明言したりする例も見られる。

(597) 「ほう、話していただけますか。そりゃありがたい」

「待ってください、刑事さん」(砂-上：p. 350)

刑事→男性

(598) 「どこかで詳しいお話聞かせていただけないかしら。お礼はしますから」

「そんな、話すほどいろんなこと知ってるわけじゃないわ」と言いながら、絹子がそっと差出した紙幣をすばやく指先で取って、スラックスのポケットに突っ込んだ。そして、声を低めて、「警察は、透さんが旦那様の息の根を止めたんじゃないかと思ってたのよ。それで、ひところは、ずいぶんしつこく来てたのよ。——だけど、あの日は透さんは病院には行かなくて、家にいたの。それは確かだわ」(一匹：p. 247)

女性→容疑者の家政婦

(597) 「そりゃありがたい」、(598) 「お礼はしますから」によって、話し手は聞き手に自身の依頼を断わられにくくするという心理的な効果を狙っている。

以上をまとめると、「していただける」には話し手の遠慮がちな態度を表す機能があり、様々な遠慮表現が見られる。「ちょっと」「少し」などの程度副詞による依頼内容の軽減化というストラテジーの他に、「聞き手の都合を訊ねる」「謝罪・恐縮・感謝の意を示す」「実際に謝礼のことを明言する」などの遠慮表現もある。

5.2. 敬意と距離

「していただける」によって話し手の遠慮がちな態度が感じられるが、依頼性の弱い依頼表現とは言えない。次の例は少し長いが、話し手の遠慮がちな態度が感じられる反面、聞き手に懇願する気持ちも感じられる。

- (599) 「由梨を狙っている人物というのは、峰岸さんをご存じなのですね」
「いえ、詳しいことは知りません」
「教えていただけませんか、その人物の素性について」峰岸は何も答えなかった。
「お願いします」咳ばらいし、峰岸はテーブルに両手を置いた。
「非常に微妙なところでしてね。下手をすると、僕の友人が捕まってしまうというようなことにもなりかねないんです。偶然、和久井由梨ちゃんという名前に覚えがあったものだから、ついこの件に僕は興味を持ってしまった。それについて友人が情報を教えてくれて、こうしたことを知りえたのです。そして、由梨ちゃんの体操服を取り返すこともできたんです。その友人を裏切るようなことはできないんですよ」
「お金ならお支払いいたしますから、どうか、お教えいただけませんか」
「いや、そういうことじゃないんです。仮にその人物について調べるにしても、もちろん、僕がすべて責任を持ってやりますよ。ただ、これ以上、この件に深くかかわることで、友人に迷惑がかかるのが僕としては困るんです。友人もこういう裏稼業に手を染めているということは、家族や周囲に内緒にしているものですから、彼の名誉は守ってやらないと」
「お友達にご迷惑をおかけするようなことは決していたしません。ですから、どうかご存知のことを教えてください」
「僕はただ、体操服の件や、写真撮影の依頼についての事実を、辻村さんにお知らせしておこうと思ったまでです。危険な状態にお嬢さんが置かれているのだということを、認識していただくためです。これ以上のことは、僕にもわからないとしか言いようがないんです」
「せめて、どういう経緯でこのことをご存知になったかだけでも、もう少し具体的にお教えいただけませんかでしょうか」
峰岸は腕を組み、遠くを見据えるような目をして黙った。(盗り：p. 180-181)
看護師（女性）→プロパー（男性）

この例において由梨が話し手の娘で、話し手は聞き手の持ってきたストーカーに撮られた由梨の写真を見て、聞き手にストーカーのことを追及している。順番に沿って話し手が使用している依頼形式を見ると、①「教えていただけませんか、その人物の素性について」、②「お願いします」、③「お金ならお支払いいたしますから、どうか、お教えいただけませんか」、④「どうかご存知のことを教えてください」、⑤「せめて、どういう経緯でこのことをご存知になったかだけでも、もう少し具体的にお教えいただけませんかでしょうか」である。5つの依頼形式の中で、4つは「していただける」系に属することが分かった。

吉岡（2006）は、敬語を使用することによる効果について、「Ⅰ. 他者に敬意を表す。Ⅱ. 他者との心理的距離を保つ。Ⅲ. 話し手の礼儀正しさを表す。Ⅳ. 話し手の教養の高さを表す」と指摘している。前述したように、「していただける」によって話し手の遠慮がちな態度が感じられるのは、謙譲語による「他者との心理的距離を保つ」といった効果があるからであろう。そして、「教えていただけませんか」→「どうか、お教えいただけませんか」→「どうか、教えてください」→「お教えいただけませんかでしょうか」の順番に従って、話し手は聞き手に敬意を表しながら、依頼の目的を達成しようとしている。「敬意を表す」は、Brown & Levinson (1987) が説いている聞き手のネガティブ・ポライトネスを脅かす場合に取ったストラテジーの一つである。

6. まとめ

「してくれる」による依頼内容は、話し手のなわばり意識に属さない。聞き手のなわばり意識に侵入する行為が多い。「依頼行為の実現に対する確信を持たない場合」と「依頼行為の実現に対する確信を持つ場合」とに分けられる。話し手が依頼行為の実現に対する確信を持

たない場合、話し手が聞き手の言動を支配する力を持たない、または聞き手に自身の依頼を受けてもらう自信を持たないからである。一方、話し手が依頼行為の実現に対する確信を持つ場合、話し手が聞き手に対する押し付けがましさを避けたいか、協調な人間関係を構築するためかと考えられる。そして、否定疑問文は肯定疑問文より片寄りといった傾向や、より丁寧であるという研究も見られる。「して下さる」の依頼内容は、聞き手のなわばり意識に侵入することが多い。主に話し手が依頼行為の実現に対する確信を持たない場合に使用する。

「してもらえる？」を用いる話し手は、「してくれる？」の「自分に恩恵を与える意志が聞き手にあるかどうか」と異なって、「自分が恩恵を受けられるかどうか」を焦点にしている。したがって、依頼行為の実現に対する確信を持たない場合が多い。そして、丁寧体と接続すれば、丁重すぎもせず親し過ぎもしない感じがある。「していただける」には話し手の遠慮がちな態度を表す機能があるので、様々な遠慮表現が見られる。

第6章 意志的依頼表現の意味・機能

本章で取りあげる「意志的依頼表現」は、次の通りである。

- (600) 「その電話がかかったと称するころ、丹野氏はすでに殺されていたのか」
「そうだったと思います……」
「君たちの犯行計画を、もう一度、できるだけ詳しく話してもらおう」
「はい……」ユリ枝はもう淡々とした口調になっていた。(蒸発：p. 330)
刑事→女性犯人
- (601) 「これを分解したり複合したりして調子を整えました。うまくいったかどうか、一つ聞いていただきましょうか」
和賀はテープをまわした。
一種異様な音が出はじめた。(砂-下：p. 49)
男性→婚約者
- (602) 「君、所属と氏名は？」
佐瀬の鋭い視線に刺され、人形顔に生身の緊張が走った。
「栗田と申します。所属は本部警務課です」
「警務課のどこだ？留置管理係か」
「いえ……人事係です」
「だったら退席願おう。君が立ち会うべき場所ではない」
梶の監視役であると最初からわかっていた。(半落ち：p. 88)
検事→若い警官
- (603) 「みごとです。これからは山中さんにすべてお願いしようかな」
「こつちはちつとも構ひませんよ。今のところはブラブラしてをりますから」
「それはありがたい。ではガリ版と鉄筆はお預けしておきます」(東京：p. 31)
隣組長→隣の住民
- (604) 嬉しきまぎれに、ついうっかりおふくろに「松山みやげは何がいいですか」と訊くと「タルトがいいわ。タルトにもいろいろあるけれど、一六タルトにかぎるわよ」と、一六タルトの社長が喜びそうなことを言った。
タルトといっても、おふくろの言うのはいま風のフランス菓子ではなく、ずっと昔から四国松山で生まれ育まれた、カステラであんこを巻いたような、和洋折衷の名物菓子のことである。
「それに内子のローソクも頼もうかしら。須美ちゃんには、そうね、伊予緋のお財布なんかがいいわよ」
「とんでもございません」と須美子はびっくりして手を振った。「私は坊っちゃんまがご無事でお帰りになれば、それで十分です」(坊っちゃん：p. 9-10)
母→息子

(600) は「してもらおう」系、(601) は「していただく」系、(602) は「願おう」系、(603) は「お願いしよう」系、(604) は「頼もう」系（以下「系」を省略する）の例である。また、それぞれ「か」や「かな」「かしら」のつく形も含まれる。これらの依頼表現は、意志表明という一次機能と依頼という二次機能を持つことから、「意志的依頼表現」と呼ぶことにする。

1. 勧誘文と意志的依頼文

「してもらおう」「していただく」に関する先行研究は、「勧誘文」と繋がるものが多い。樋口（1992：p. 173）は動作主の観点から、「しよう」「しましょう」を述語にもつ文を次のように分類している。

- | | | |
|-----|---------|-----------|
| | 動作の主体 | 文のモーダルな意味 |
| (a) | 話し手 | 決心 |
| (b) | 話し手と聞き手 | 勧誘 |
| (c) | 聞き手 | とおまわしの命令 |

用例の中で (a) 「決心」、(b) 「勧誘」に関わる文が確かにある。

- (605) 「あら、尻尾もございますの」
「これも絶妙な味です。豚はどこがいちばんおいしいかという、こういう部品の部分です。ちょっと待ってください。あそこにいるのは、どこかでお目にかかったことのある御婦人だな。はて、誰だったかな……。そうだ、おもいだした。別居中の妻だ。いっしょにいる男は同じ劇団の二枚目だな。むこうから声をかけられる前に敬意を表してこよう。ちょっと失礼」風間は席を起って行った。(梅：p. 55-56)
男性→知り合った間もなくの女性
- (606) 「風間先生、今夜僕とここで出会ったことは、校長には、ひとつ、だまっていますか」
「奢るか」
「おごります」
「ブランデーを一本、千枝夫人のところに届けておいてくれ。さきに感謝しておこう。では、どうぞ御無事で」(梅：p. 59-60)
男性→知り合いの若い男性
- (607) 「おう、今すぐに行こう。早い方がいい。あのお婆さんは自殺とかするタマじゃないけどちょっと心配だからな。」
ありえない可能性でも、その言葉にはどきりとした。
「じゃ、行こう。いっしょに行こう。」私が言うと、哲生は黙ってうなずいた。(予感：p. 84)
姉→弟
- (608) 「哲ちゃん、遊ぼう」と、外で声がした。
「ほらほら、昇くんだわ。暑いから、帽子をかぶるの忘れないで」(猫：p. 145)
男の子→仲間

(605) 「むこうから声をかけられる前に敬意を表してこよう」は、話し手がある女性と豚足を食べている時、妻が他の男性とも同席しているのに気がついて、「敬意を表してこよう」と言っている。(606) は、話し手が相手にブランデーを要求し、脅している。ブランデーのため「さきに感謝しておこう」と言っている。(605) (606) の動作主は話し手である。(607) (608) は話し手が相手に一緒に行動しようと誘っている。動作主は話し手と聞き手である。動作主が聞き手になる場合の例も見られる。意向形と依頼動詞「願う」「お願いする」「頼む」との接続によって、依頼主が話し手であるが、動作者が聞き手である。例えば、(602) 「退席願おう」、(603) 「これからは山中さんにすべてをお願いしようかな」、(604) 「内子のローソクも頼もうかしら」などである。こういう場合、話し手は聞き手に対して依頼の意志を表す文になる。

また、樋口 (1992) が挙げている (c) 「とおまわしの命令」に関する例を見てみる。

- (609) 「光枝さん、暑くても上着はきていきましょうね」
酒匂先生がさりげなく注意すると、娘はうなずいてからじろりと万里子の方をみて、急にこそそと道をよこぎって姿をかくした。(樋口 1992 : p. 183)
- (610) 「あら、マイさんというの。かわいらしいのね。——つぎは香川マスノさん」
「へい」
おもわずふきだしそうになるのをこらえ、先生はおさえたような声で、
「へいは、すこしおかしいわ。はいっていいましようね。マスノさん」(樋口 1992 : p. 183)

(609)「光枝さん、暑くても上着はきていきましょうね」も、(610)「はいっていきましょうね」も、学生に対する先生の注意である。例文によって、樋口の「とおまわしの命令」は話し手の対人関係、つまり聞き手との力関係を前提にしていることが分かる。Searle (1986 : p. 124) は、「命令においては、Hに対してSの権威が優越するということによって、HにAを行なわせるということ」と分析している。話し手が聞き手より上位で、意向形を用いる場合、「とおまわしの命令」が感じられる。

依頼文・命令文は動作主が二人称であるのに対して、勧誘文は動作主が一人称と二人称の場合に分けられる。このことから、動作の実現に一人称、つまり話し手が参加するかどうかにより、勧誘文と依頼文・命令文との区別になる⁷⁹。しかし、動作主が聞き手であっても「とおまわしの命令」にならない例も見られる。

(611) 「あたしに相談がなかったから、あの時は頭にきちゃったけど、結ばれようとしてる二人が赤ちゃんを作るってこと自体は、絶対に悪いことじゃないよね。それに両親を説き伏せることだって――」

「もうやめよう」直貴は彼女の言葉を遮った。(手紙 : p. 270)

男性→彼女

(612) 「もう、やめよう」石黒達也は泣き出した。両手をミラーにつけたまま、頭を垂れて泣き出した。

「もう、いけないよ。一美、な? もうやめよう。もう終わりだよ。終わりにしよう」(R : p. 257)

若い男性→彼女

(611) は彼女の両親が二人の結婚を反対しているが、彼女は妊娠すれば両親に結婚を認めてもらえると思っている。話し手は「もうやめよう」と言って、その話を遮って反対の意を表している。(612)「もう、やめよう」「終わりにしよう」は、話し手が聞き手の犯行に対する隠蔽や言い訳を止めている。(611) (612) の動作主が聞き手であるが、話し手は聞き手と対等な立場に立ち、コンテキストから「聞き手のため」という含意が伝わる。特に、(612) のような発話は、「とおまわしの命令」に属するかどうかは断定できない。話し手が聞き手に働きかける「しよう」「しましよう」を持つ文では、自分のためではなく聞き手のためになれば、「勧め」の意味が強く感じられる⁸⁰。

これに対して、「してもらおう」「していただく」を述語にする文で、樋口 (1992 : p. 175) は「話し手は自分に利益をもたらす動作を聞き手に働きかけて、実現させようとしている」と述べている。村上 (2006 : p. 249) は「一人称文」⁸¹の視点から、『～してもらおうか ・～してしていただくかしら・～してもらおうじゃないか・～していただけないでしょうか』のように、さまざまなタイプのたずねのかたちでもおこなわれ、そのさそいかけ方やうながし方に微妙なニュアンスのちがいをくりだしながら、たずねる文のさまざまなかたちの使用と連続をなしている」と述べている。

「しよう」による意志的依頼表現には、強い依頼（とおまわしの命令）や勧めの機能がある。「してもらおう」「していただく」による意志的依頼表現には、強い依頼の機能がある。

⁷⁹ 樋口 (1992 : p. 175)

⁸⁰ 小泉 (1990)、姫野 (1998) などを参照。

⁸¹ 「一人称文」とは、「主語が、すなわち、動作や変化や状態のにない手はなし手自身である文」を指す。村上 (2006 : p. 237) を参照。

2. 「もらおう」「してもらおう」の機能

意志的依頼表現は、話し手が聞き手に対する要請を明示することによって、命令的依頼表現、質問的依頼表現、要望的依頼表現と同じく、依頼表現の表出段階の下位分類に属する。

2.1. 相手を特定する話者中心の意志伝達

「もらおう」の意志形「もらおう」は〈物の移動〉のみでなく、話し手の聞き手に対する依頼の意志も伝わる。

- (613) 「何かお飲みになりますか？」
「うん？——じゃ、コーヒーをもらおう」
「ミルクと砂糖も入れてくれ」
「はい」(怪談：p. 115)
男性→秘書
- (614) 「ビールをもらおうか」
「かしこまりました」(砂-上：p. 155)
男性客→女将

(613)「コーヒーをもらおう」、(614)「ビールをもらおうか」は、具体物(コーヒーやビール)の移動を伴う所有権も聞き手から話し手に移転するようになる。この移転は話し手の意志に従った結果であるが、聞き手の協力がなければ実現できない。由井(1997)は、話し手に対する聞き手からの〈恩恵〉が感じられると指摘している。しかし、(613)(614)のコンテキストによって話し手が受益者というより、聞き手を特定しながら、話し手の立場を中心として、「話者中心」という視点が強く感じられる。即ち、話し手はあまり聞き手の立場を配慮しないで、自身の強い意志を聞き手に伝えようとするため、「もらおう」を選んだのである。(614)「もらおうか」は「か」をつけることによって、(613)「もらおう」より聞き手に対する強い意志の伝達がやや柔らかくなる効果がある。

補助動詞の「してもらおう」では、具体物・所有権の移転に対する要請から行為の授受に対する要請に変わるようになる。話し手は聞き手に対して強い意志によって、依頼の意図を伝えることは変わらない。「してもらおう」の構造について、山岡(1990：p. 22)は、「受益者は直接本動詞が示す行為を実行することはできず、動作主の意志に働きかけることしかできないため、行為の実行に至るまでに二重の意志を必要とし、構文的にも典型的な二重構造をなしている」と指摘している。「してもらおう」は「してもらおう」の意志形で、次のように、話者中心の意志伝達が感じられる。

- (615) 「いや、帰ってもらったほうがいいんだ」女は冗談と思っていた。まだ笑っている。
「意地悪ばかり言うのね、何か気に入らないことを思い出したの？いやね、あたしにそんな八ツ当たりして」
「八ツ当たりじゃないよ。きみに言ってるのだ」結城は、体を起こした。くわえた煙草を、灰皿に捨てた。
「すまないが帰ってもらおう」今度は強い声だった。
「まだ、あんなことを言って」女は初めて顔色を少し変えた。だが、まだ半分笑いを残していた。
「結城さんて、ずいぶん、意地悪いのね。そんなことを言わないで、早くお寝みになったら、お留守に、あちらに女中にお支度をさせてありますわ」結城が突然立ったのは、それを聞いてからである。

「ぼくは、本気で言っているんだよ」結城は顔を女に初めて向けた。微塵も微笑のない、かたい顔だった。まっすぐに向けている目の表情も真剣なのである。

「悪いが帰ってもらおう」女の顔から血の気が引いた。

「冗談？」と、それでもやっとなど踏みとどまってきいた。

「冗談ではない。とにかく、おれは一人で今夜は寝たいんだ」(波-下：p. 142-143)

男性→友人の愛人

- (616) 「いいんだ。とにかく降ろしてもらおう。降ろさなければ、どんなことになったって知らんぞ」
「ええ？」運転手は鼻白んだらしく、振り返った。しかし、まともに喧嘩する相手ではないと思っただのか、ちょうど、次に車が停まったとき、
「じゃあ、気をつけて降りて下さいよ」と、ドアを開けた。(影：p. 245-246)

男性客→タクシーの運転手

(615)「帰ってもらおう」は謝りの言葉「すまないが」「悪いが」と共起しても、話し手が聞き手に帰らせる強い意志は変えられないことが、地の文「強い声」や「(聞き手である)女の顔から血の気が引いた」などによって伝わる。(616)「とにかく降ろしてもらおう」は、話し手の喧嘩腰になりそうな態度での発話である。「とにかく」は「なんにしても」「いずれにしても」の意味合いが含まれ、「降ろしてもらおう」による強い意志表現を強調する効果がある。タクシーを降りる人は話し手自身であるが、聞き手の協力がなければ、実行できないであろう。そして、話し手が「止めて下さい」「止めてくれ」などの命令的依頼表現を使用しないで「してもらおう」を使用する理由は、自分の強い意志を聞き手に伝達しようとする意図に基づくからである。

森田・松木(1989：p. 276)は、「してもらおう」は相手に対する押し付けがましさが強く、イントネーションによっては命令調に響くこともある、と分析している。山岡(1990)は「習慣的に話し手のより強い立場が行使されており、厳密には『威圧的な依頼』とも言うべきものである」と指摘している。また、「してもらおう」の「より強い立場」といった性質から、懇願の意に関する語句(例：「どうか」などの副詞)と共起しにくい。依頼の対象は、主に対等な人や下位者である。

次に、まとめて結論を下すような機能がある例である。

- (617) 「土曜日だろ。講義は午前中だけ？」
「あ、あの、あたし、土曜の講義は選択していないんです」
「それはちょうどよかった。何か予定は入ってるの？友達と会う約束とか」
「いいえ、特にありませんけど」
「じゃあ決まった。僕に付き合ってもらおう。君を連れていきたいところがいくつかあるんだ」
「えっ、どこですか」(白夜：p. 277)

男子大生→女子大生

- (618) 「君は、倉橋満男と愛人関係にあり、彼と共謀して丹野氏の殺害を企てた。この事実を認めるかね」
息詰まるような雰囲気の中、
「はい」とユリ枝は思いのほか素直に頷いた。一瞬顔を歪めたが、唇をかみしめ、そのまままたジッと目を伏せている。
「よし。それでは、八月四日に君が井尻の鉄工所から姿をくらましたときの事情から、話してもらおう」
「はい……」ユリ枝は頷いてから、少し黙っていた。(蒸発：p. 318)

刑事→女性犯人

(617) は話し手が相手の都合を訊き、「僕に付き合ってもらおう」と一方的に結論を出し

ている。(618)も同じく、話し手は犯人に犯罪事実を訊いた後、発話時点までの情報をまとめて「八月四日に君が井尻の鉄工所から姿をくらましたときの事情から、話してもらおう」と聞き手に指示している。このように、「してもらおう」は、話し手の発話時点までの情報をまとめて結論を出すような機能を有する。これは「しよう」「しましょう」による一人称の意志文から拡張してきた機能だと考えられる。

2.2. メタファーとアドホック

話し手は聞き手に対する依頼内容が具体的な行為ではない例も見られる。

(619) 「おれが臆病かどうか、見ててもらおう。その代り、君も手伝うか？」

「いいわよ」(影：p. 467)

男性→仲間

(620) 「トンカツ——いえ、内子署の刑事さんは来てないのですか？」

「ああ、まだや。いまさっき電話したから、おっつけ来るやろが、それまではおとなしくして
いてもらおう」(坊っちゃん：p. 179)

副署長→探偵

(619)「臆病かどうか見ててもらおう」は、話し手が聞き手に具体的に物を見せるのではなく、自身が臆病ではないことを見せたいのである。これは話者中心の意志伝達といった形式機能から拡大してきて、メタファー (metaphor)⁸²という手段によって聞き手に「意地を見せろ」としている。(620)「おとなしくしててもらおう」の「おとなしい」も辞書に載せられた「おとなしい」の意味ではなく、その場に限られる特定の意味が感じられる。この「おとなしい」はCarston (2008) が述べている「アドホック概念」(ad hoc concept)によって、発話時点で話し手と聞き手と理解し合う「おとなしい」だけを指している。

2.3. 強い意志を和らげる手段

依頼の意図を達成するため、話し手は強い意志を表す「してもらおう」に「か」「かな」「かしら」などをつけることにより、聞き手の反発が避けられるようになる。「してもらおうか」は「してもらおう」より語気が柔らかいこと以外、他の機能も見られる。

(621) 「それでも、少しは落ち着いたみたいだな。じゃあ、俺の方の話を少し聞いてもらおうか」

男は少しざらついた感触の、特徴のある声を出した。千尋はゆっくりとうなずいて上体を起こした。身体を動かすたびに感じる節々の痛みだけが、今となっては千尋のものだという気がする。

「俺の名前は前田一行。昨日の夜、この近くの道路で倒れている君を発見した。怪我もなさそうだったし、急に具合でも悪くなって気絶しているんだと思ってここへ運んだ」(花嫁：p. 28)

男性→若い女性

(622) 「検事連中のほうはどうなんです？」結城は目を土井の上に戻した。

「うん、そのことだ。なかなか強硬らしい。それで、あんたに来てもらったわけだが、まず、これを見てもらおうか」土井は、ふくれたふところから紙を出した。それはリストになっていた。(波-下：p. 95)

⁸² メタファーとは、ただ単に類似した2つのものを拾い上げ、一方を他方で喩えるのではなく、「既知のもの、具体的なもの」を通して「未知のもの、抽象的なもの」を理解するという機能を持つのである。谷口 (2003：p. 16) を参照。

斡旋役をしている男性→目下の男性

(621)「俺の方の話を少し聞いてもらおうか」は、話し手が聞き手に自身の話を少し聞いてほしいと依頼している。「してもらおう」に「か」のつくことによって、聞き手に許可を求めるようなニュアンスも伝わる。(622)「これを見てもらおうか」は、話し手が聞き手に用意してあるリストを見てほしいと頼んでいる。ただし、(621)と異なって、話し手は聞き手の返事をあまり待たず、すぐ聞き手に見せたいリストを出した。これらの「してもらおうか」は前述した結論の用法と異なり、提案の意味が感じられる。「してもらおう」に「か」がつくことによって、姫野(1998)が説いているように、肯否疑問ではなく選択疑問になるので、話し手は聞き手に選択肢をもう一つ提案するのである。提案とするならば、当然聞き手はその提案を拒否する権利を有する。

- (623) 「その手にはかからないぞ。おれはテグレートールなんてもっていないし、室沢真知子とやらにも会っていない。みんな“邪推”だ」
「邪推か邪推でないか、ひとつあなたの部屋を見せてもらおうか」
「そんな、人の部屋を勝手に覗いていいのか」(凶：p. 223)

刑事→男性

「邪推か邪推でないか、ひとつあなたの部屋を見せてもらおうか」によって、話し手は聞き手に部屋を見せてほしいと頼んでいるが、聞き手は「そんな、人の部屋を勝手に覗いていいのか」と断わっている。「そんな、人の部屋を勝手に覗いていいのか」は相手に対する質問ではなく、問い返す形によって断る意が伝わる。

- (624) 「オレも紹介してもらおうかな」
「オレもお願いしますよ。お人形さんみたいに飾っておきたいんですよ。絶対幸せにしますから、いい子紹介して下さいよ」(井戸：p. 14)

男性たち→同僚の親友

- (625) 「電子音楽というのは、わたしにはよくわからないが、今度、一つ、君の職場を見学させてもらおうかな」
「お待ちしております」(砂-下 56)

年配の男性→娘の婚約者

(624)「オレも紹介してもらおうかな」は、対等な人に対して彼女の紹介を要請している。「かな」は「かしら」と同じく、独り言のニュアンスが感じられる。「かな」「かしら」は「してもらおう」につきやすいのは、一人称文の「しよう」「しましよう」による意志文の基本的な機能に基づくからだと考えられる。(625)「今度、一つ、君の職場を見学させてもらおうかな」の「かな」によって、話し手の強い意志の伝達を和らげる効果がある。「見学させてもらおう」の謙虚な言い方によって、話し手は上位者からの好意が感じられる。また、「電子音楽というのは、わたしにはよくわからないが」という「が」節での発話によって、話し手は電子音楽が分からないことを告白して謙虚な姿勢が見せられる。話し手は「話者中心」の強い意志として「見学させてもらおう」を用いて、聞き手に勉強したい意志を伝えている。このように、聞き手のため、または受益者が聞き手である場合、話し手は「してもらおう」における話者中心の意志伝達による強い依頼性を生かして、聞き手に最大の敬意を表す。

3. 「していただく」による話者中心と心的距離

「していただく」は「してもらおう」における話者中心の意志伝達といった形式機能も見られる。「していただく」は仕事などの改まった場面で、または親しくない上位者や対等な人に対して使用するので、「していただく」の例よりも丁寧体「していただきましょう」の例の方が多い。

- (626) 「で、それとは別に、今度夕刊の文化欄で米英仏独ラテンその他各国の新作小説を紹介するコラムが新設されることになりましたね。で、唯野先生にはひとつ、アメリカの新作を紹介していただくと」(教授：p. 110)

新聞社の編集者(男性)→大学助教授

- (627) 「どれ、ではぼつぼつ遭難現場にご案内していただきましょうか」

榎田二郎は江田に言いながら、リュックの雪を払い肩に担いだ。そのときも、彼は花束を指でちょっと手入れするのを忘れなかった。江田は岩瀬真佐子の白い指を幻覚した。

江田は牛首山への尾根を先に立たされた。立たされたといっけい、彼は後ろからしたがってくる榎田二郎に命令を感じていた。彼は背中にたえず榎田二郎の刺すような目を意識せねばならなかった。(画集：p. 92)

男性→従弟の先輩

(626)「唯野先生にはひとつ、アメリカの新作を紹介していただく」とは、話し手が文末を省略した複合述語の形で聞き手に依頼の意図を感じさせる。「していただく」における話者中心の意志伝達の形式機能により、直接に聞き手のなわばりに侵入することを控えている話し手の意図が伝わる。(627)「ではぼつぼつ遭難現場にご案内していただきましょうか」は、話し手が遭難にあった従弟のため、事故当時現場にいた先輩に頼んで遭難現場に連れてほしいと依頼している。「していただく」によって、話し手は聞き手と親しくない関係、つまり心的距離を保ちたい態度が感じられる。

また、「してもらおう」と同様に、発話時点までの情報をまとめて結論を下すような機能がある。

- (628) 「やあ、お待たせしました」事務官は言った。

「これから、山本検事がお話ししたいそうですから、すぐ検事の部屋に行っていただきましょうか」

結城は時計を見た。もう十時に近かった。朝、検事一行と、ここに着いたのが八時前である。二時間も待たされたわけだった。

「では、お供します」結城は言った。(波-下：p. 234)

検察庁の事務官→容疑者(男性)

- (629) 佐々木「あ、それから、このことはまだ誰にも話さないで頂きましょうか」

小林「わかりました」(悪霊：p. 259)

刑事→鉦山主任

(628)「すぐ検事の部屋に行っていただきましょうか」は、容疑者に対して「していただきましょうか」を使用する例である。「山本検事がお話ししたいそうですから」の内容は話し手しか分からない情報なので、話し手のなわばり意識に入っている。また、「すぐ検事の部屋に行っていただきましょうか」によって、話者中心の視点と聞き手に勧めるような機能がある。(629)「このことはまだ誰にも話さないで頂きましょうか」といった依頼内容が話し手のなわばりに属するので、文末の「か」によって、聞き手に意向を訊ねることになって丁寧な

言い方になる。

- (630) 「まあ、そうおっしゃらず、どうぞ、こちらへ、もっとも、席の順番など別にきめておりませんが、東先生は、この席の最年長でいられますから、ともかく、こちらへ——」
「じゃあ、遅れて来て失敬な話だが、お言葉に甘えさせて戴こう」(巨塔-1 : p. 180-181)

医者→同業

「お言葉に甘えさせていただく」は、慣用的な言い方である。「させていただく」による聞き手に許可を求めるという機能から拡張してきた。聞き手の提案を積極的に受け入れる話し手の意図が察せられる。

4. 「頼もう」「願おう」「お願いしよう」の機能

4.1. 相手を特定しない話者中心の意志伝達

「頼もう」「願おう」「お願いしよう」による依頼表現は、「頼む」「願う」「お願いする」の依頼動詞に基づく依頼の機能と、意志形「う・よう」による意志を表明する機能が含まれる。したがって、意志的依頼表現に属する。「してもらおう」「していただく」と同様に、「頼もう」「願おう」「お願いしよう」には問いかけの「か」や疑いの「かしら」「かな」がつきやすい。しかし、「頼もう」「願おう」「お願いしよう」は「してもらおう」「していただく」における聞き手を特定する機能と、聞き手から恩恵を受けるような機能が見られない。そのため、相手に対する依頼性も「してもらおう」ほど強くない。話し手の希望を意志伝達の形によって、聞き手に依頼の意味が伝わる。例 (602) (603) (604) を再掲して検討する。

- (631) 「君、所属と氏名は？」
佐瀬の鋭い視線に刺され、人形顔に生身の緊張が走った。
「栗田と申します。所属は本部警務課です」
「警務課のどこだ？留置管理係か」
「いえ……人事係です」
「だったら退席願おう。君が立ち会うべき場所ではない」
梶の監視役であると最初からわかっていた。(半落ち : p. 88)

検事→若い警官

【再掲】

- (632) 「みごとです。これからは山中さんにすべて願ひしようかな」
「こつちはちつとも構ひませんよ。今のところはブラブラしてをりますから」
「それはありがたい。ではガリ版と鉄筆はお預けしておきます」(東京 : p. 31)

隣組長→隣の住民

【再掲】

- (633) 嬉しさまぎれに、ついうっかりおふくろに「松山みやげは何がいいですか」と訊くと「タルトがいいわ。タルトにもいろいろあるけれど、一六タルトにかぎるわよ」と、一六タルトの社長が喜びそうなことを言った。
タルトといっても、おふくろの言うのはいま風のフランス菓子ではなく、ずっと昔から四国松山で生まれ育まれた、カステラであんこを巻いたような、和洋折衷の名物菓子のことである。
「それに内子のローソクも頼もうかしら。須美ちゃんには、そうね、伊予緋のお財布なんかがいいわよ」
「とんでもございません」と須美子はびっくりして手を振った。「私は坊っちゃんまがご無事でお帰りになれば、それで十分です」(坊っちゃん : p. 9-10)

母→息子

【再掲】

(631) 「だったら退席願おう」は、話し手が事件に関係しない聞き手に退席を要請している。「君が立ち会うべき場所ではない」によって話し手の強い意志が伝わる。(632) 「これか

らは山中さんにすべてお願いしようかな」は、話し手がこれからの仕事を聞き手に頼んでいる。「お願いしよう」に疑いの形式「かな」のつくことによって、話し手は聞き手に不快さを引き起こそうような強い意志の伝達を避ける。(633)「それに内子のローソクも頼もうかしら」は、息子に対する母からの依頼である。「かしら」は「かな」と同じ効果がある。

そして、受益者の視点から考察すれば、(631)の聞き手の退席が話し手にとって望んでいることで、受益者は話し手である。(632)は仕事の依頼である。雇主にとっては仕事の出来る人が見つかってありがたいことであるが、雇われる人にとっても悪くないことである。受益者が双方である。しかし、地の文によって話し手の受益（「それはありがたい」）が明示されているので、受益者は話し手である。(633)は第三者（内子）のためにローソクを頼んでいるので、受益者は第三者である。このように、依頼動詞による「しよう」「しましよう」では「依頼内容が話し手の望んでいること」を示すが、受益者は話し手とは限らない。

4.2. 依頼性の位置付け

位置付けについて、「願おう」は「願いたい」と「願う」との間に、「お願いしよう」は「お願いしたい」と「お願いする」との間に、「頼もう」は「頼みたい」と「頼む」との間にあり、と考えられる。下記のように「願いたい」「願おう」「願う」の対照組を考察し、依頼性を検討する。

- (634) 「村野だ。ちょっと調べてもらいたいことがある」
「ああ、いいとも。何だ」
「報道協定とやらになりそうなので、オフレコに願いたい」
「わかってるさ」と答える中田の声が弾み始めた。他人のスキャンダルが嬉しいのではない。事件が好きなのだ。事件が起きて、それをどう追いかけて、記事でどう料理するかが。
「実は吉永小百合が草加次郎に脅迫されているらしいんだ」
「ほう！」(灰：p. 61)

男性編集者→情報交換の仲間

- (635) 「君、所属と氏名は？」
佐瀬の鋭い視線に刺され、人形顔に生身の緊張が走った。
「栗田と申します。所属は本部警務課です」
「警務課のどこだ？留置管理係か」
「いえ……人事係です」
「だったら退席願おう。君が立ち会うべき場所ではない」
梶の監視役であると最初からわかっていた。(半落ち：p. 88)

検事→若い警官

【再掲】

- (636) 「それは全容を解明してみないとわかりません。事件と事件後に、相互に呼応し合う密接な関係があるかもしれません。東京行きの非違の大きさによっては量刑も左右されます」
言えることはすべて言う。検事正を落とさねば、この戦いに勝ち目はない。
「許可を願います。実体的真実の発見は公益の代表者たる検察官の義務です」
「だが、脅しのためのガサとは穏やかでない。邪道もいいとこだ」(半落ち：p. 112)

検察官→上司

普通体・丁寧体のことを棚上げれば、(634)「願いたい」は対等な相手に対する依頼で、(635)「退席願おう」はやや目下の警官に対する指示である。意志形の「未定の性格」⁸³という機能

⁸³ 南（1993：p. 203）は「命令とか意志（ウ・ヨウの形）の言い方の場合は、認定構造の内容が未定の性格を持つことを必要とする」と指摘している。

に基づいて「願おう」を用いるのであろう。直属上司からの命令ではないので、聞き手はその要請を拒否できないとは言えない。これに対して、(636)「許可を願います」は、話し手が聞き手に決めたことの許可を求めている。「願います」によって、依頼の気持ちが強く伝わる。したがって、依頼性の尺度は次の通りである。

(I) 願いたい<願おう<願う

(I) の依頼性は順番に沿って増えていく。この尺度の正確性を確かめるため、もう1つの対照組「お願いしたい」「お願いしよう」「お願いする」を検討する。

- (637) 「いつ頃妊娠したか、自分で見当つかないの」
「たぶん、夏くらいかな」
「春よ。三月くらいが最終月経だったんじゃないの」
「あ、そうかも」ひとみは他人事のように頷いた。
「今日お願いしたいねん。終わったら、今日中に帰れるねんやろ」
「無理ね。言ったでしょう」(盗り：p. 193)

若い女性→看護師(女性)

- (638) 「お義兄さん？」ユカリはあまり言い慣れていない言葉で呼びかけた。
「何？」
「一昨日、ひょっこり空知さんに梅田で会ったんです。もし、まだ連絡なさってないんやったら、私からお電話をしてもかまいませんか？」
柚木は短い間考えてから「お願いしようか」と言った。
彦根に着いてからユカリは電話をかけた。(ミラー：p. 71)

三十代の男性→妻の妹

- (639) 「事情は伺いました。騒ぎにならないように気をつけて連絡をとります。我々も、鞠子さんのお母さんがこういう状態になってしまった以上、お父さんからいろいろな伺わなければなりませんね。有馬さんにも重ねてご協力をお願いします」
「私はほとんど役に立たないと思いますが」義男はゆっくりと言った。ひどく疲れていた。
「それじゃ、古川のことはお願いします」承知しましたと言って、坂木にうなずきかけると、秋津は待合室の方に出ていった。(模倣-上：p. 108)

刑事→年配の男性

(637)「お願いしたいねん」は方言的な言い方である。話し手が「お願いしたい」を使用して自身の希望を述べているが、相手に即座に拒否されている。(638)は話し手がその場で短い間考えてから「お願いしようか」を使用して聞き手に依頼している。話し手が迷いながら依頼する感じが伝わる。(639)の話し手は「重ねて」と併用して「お願いします」の依頼性を強調するのである。このように、「お願いしたい」、「お願いしよう」、「お願いする」の依頼性の尺度は、次の通りである。

(II) お願いしたい<お願いしよう<お願いする

(II) は (I) と同じような尺度が見られる。「お願いしたい」、「お願いしよう」は、依頼動詞「お願いする」に基づくものであるが、3つの依頼形式による依頼性は明らかに異なる。

Horn (1972) は英語の副詞、連結詞を検討した時、「ホーンの尺度」(Horn's Scale) を提案している⁸⁴。

⁸⁴ これは東森・吉村 (2003 : p. 64) による。Horn, Laurence R. (1972) On the Semantic Properties of

- a. 〈some, most, all〉
- b. 〈sometimes, often, usually, always〉
- c. 〈1, 2, 3, 4, 5, 6, …〉
- d. 〈possible, necessary〉
- e. 〈warm, hot, boiling〉
- f. 〈cool, cold, freezing〉
- g. 〈like, love, adore〉
- h. 〈OK, good, excellent〉
- i. 〈or, and〉

a. 〈some, most, all〉を例にして説明する。Hornによれば、all, most, someは同一の尺度上にあり、allがもっとも上位で、その下にmost, someが位置しているのである。そして、一般に文脈に関わらず p が成立する（真である）ならば必ず q も成立する（真である）とき、「p は q を伴立する」と言う。したがって、allはmostを、mostはsomeを一方向的に伴立すると言える⁸⁵。

- i. All people are happy.
- ii. Most people are happy.
- iii. Some people are happy.

「ホーンの尺度」に触れて、再び（Ⅰ）「願いたい・願おう・願う」、（Ⅱ）「お願いしたい・お願いしよう・お願いする」の関係を検討する。依頼性の強さから考えれば、「許可を願います」は「許可を願おう」「許可を願いたい」の意味を含んでいるが、待遇関係や場面を考えるならば、ニュアンスや発話の意図が曖昧になって入れ換えられない場合もある。したがって、「願いたい・願おう・願う」、「お願いしたい・お願いしよう・お願いする」は、〈some, most, all〉のような包括的な関係は見られないと考えられる。

5. 「してもらおう」と「してもらいたい」との比較

「してもらおう」は話し手の強い意志を表すので、「頼む」などの依頼動詞との共起はあまり見られない。これに対して、「してもらいたい」は、(640)のように「頼む」と共起しうるし、(641)のように「頼む」の内容になる例も見られる。

(640) 「もう半年くらいずっと」夫は眼を伏せた。再びそれを上げると「朝子、頼む、離婚してもらいたい」と唐突に言った。それは滑稽なほど理不尽に朝子の耳に響いた。だめだ、違う、今じゃない。胸の中で立て続けに否定する。あまりにも突然過ぎる。正に青天の霹靂だ。しかし、離婚話を切りだすのに青天の霹靂のように言葉が響かない、そんなタイミングなどあるわけもない。一気にぬきさしならない状態に追いこまれ彼女は気が転倒した。(一種 25)

夫→妻

(641) 周二は縫子に電話して、明日来てもらいたい、と頼んだ。それから、長洲につれられて二階の書齋にあがった。(剣：p. 213)

それから、

(642) 「そんな気の弱いことを言わないでください」

Logical Operators in English, Doctoral dissertation, University of California, Los Angeles.

⁸⁵ これは東森・吉村 (2003 : p. 64) による。

「いや、なんとう、わかる。それでサ、最後のときにはぜひ、立ち会ってもらいたい」(老人：p. 183)

患者(年配の女性)→訪問看護婦

- (643) しかし彼は断念するつもりもないようだった。座布団から尻をずらすと、突然両手を畳につけ、頭を深々と垂れた。「このとおりだよ。どうか私たちの希望を聞き入れてもらいたい」威厳の固まりのような態度を見せつけられてきた直貴にとって、中条の行動は予想外のものだった。(手紙：p. 260)

年配の男性→娘の彼氏

このように、「してもらいたい」は副詞「ぜひ」「どうか」と共起する例も見られる。しかし、「してもらおう」は「ぜひ」とも共起しうるが、「どうか」とは共起しえない。「ぜひ」は、工藤(2000：p. 201)が説いている「文の〈話し手性〉〈発話時性〉といった基本的叙法性の面には、直接は関わらない」という性質があり、依頼や勧誘や決意、或いは願望や意図を表す文に用いられる。しかし、「どうか」は、「どうかして」の縮約形で、聞き手の立場に立ち、「求心的な欲求と呼応する」⁸⁶文しか用いられないからであろう。そこで、(642)は(644)に入れ換えられるが、(643)は(645)に入れ換えられない。

(644) 最後のときにはぜひ、立ち会ってもらおう。

(645) *どうか私たちの希望を聞き入れてもらおう⁸⁷。

また、「してもらおう」には疑いの「かしら」「かな」がつきやすいのに対して、「してもらいたい」には終助詞「な」「ね」がつきやすい。

- (646) 「それで、どっちが色っぽいと思います、高尾さん」熊ちゃんは、しつこく迫及した。

「勿論、こっちですよ」

手が伸びてきて、八重の首を掴んだ。

「じゃあ、希代子を呼んで、較べてもらおうかしら」

「いや結構。息子と母親と、一日に両方デートする気はない。いまごろ光夫君、家で希代子さんを詰問しているんじゃないかな」(霧：p. 93)

ママ→親しい女性客

【再掲】

- (647) 「オレも紹介してもらおうかな」

「オレもお願いしますよ。お人形さんみたいに飾っておきたいんですよ。絶対幸せにしますから、いい子紹介して下さいよ」(井戸：p. 14)

男性たち→同僚の親友

- (648) 「胸部の断層撮影をすりゃあ、君のいう医者 of 勤めを果せるってわけだな、よし、解ったよ、僕はまだこのあと、午後の総回診が残っているから、これで話がすめば、帰って貰いたいな」
「そうか、それは失礼した、じゃあ、断層撮影の件は、よろしく頼む」(巨塔-2：p. 306)

教授→同期生

- (649) 「ねえ、信子」と、母親が横から言った。

「おまえにもいろいろと不満や言い分もあるだろうが、なんとか落ち着いてもらいたいね。そのうち弘治さんだつて、きっと考え直すよ」(水：p. 234-235)

母→娘

(646)は再掲した「してもらおうかしら」の例であり、(647)は「してもらおうかな」の例である。(648)(649)は「してもらいたい」に「な」「ね」がつく例である。依頼性の強い

⁸⁶ 佐伯(1970：p. 206)

⁸⁷ 「*」は不適切な文を指す。

「してもらおう」に疑いの「かしら」「かな」がつくと、相手に押し付けがましさを緩和する効果がある。これに対して、希望形「してもらいたい」に終助詞「な」「ね」がつくと、相手に促したり説得したりするようになり、話し手の希望を強調する効果がある。

そして、「してもらおう」は話し手の意志を表明するが、「してもらいたい」は話し手の内心にある希望をそのままに述べる。そこで、「してもらおう」は「のだ」と接続できないが、「してもらいたい」は「のだ」と接続して、話し手の聞き手に依頼する動機を説明することができる。

(650) 「別にむずかしいことじゃない。一か二か三と指で合図するから、それを、ちゃんと見ててもらいたいんだ」(老人：p. 183)

患者(年配の女性)→訪問看護婦

(651) 「ご用事でございますか」

「財前君が部屋へ帰っていたら、ちょっと来てもらいたいんだ」(巨塔-1：p. 18)

教授→医局の局員

このように、「してもらおう」と「してもらいたい」は、同じく一人称の話し手志向に属するが、意志形「う・よう」と助動詞「たい」のモーダルな意味の影響で、機能も異なる。

6. まとめ

以上、「してもらおう」「していただく」と「頼もう」「願おう」「お願いしよう」といった意志的依頼表現の機能・構造と依頼性を検討してきた。意志的依頼文は一人称の意志文のモーダルな意味を受け継ぎ、未定の性格を持つものである。しかしながら、話者中心の意志伝達の形式機能によって聞き手に依頼の意図が伝わる。「してもらおう」「していただく」は、授受動詞の働きで相手を特定する機能がある。これに対して、「頼もう」「願おう」「お願いしよう」は相手を特定できない。文末の「か」によって、聞き手に勧めたり、提案するような機能が見られる。依頼性の強い「してもらおう」に疑いの「かしら」「かな」がつくと、相手に押し付けがましさを和らげる効果があるのに対して、希望形「してもらいたい」に終助詞「な」「ね」がつくと、相手に促したり説得したりするようになって、話し手の希望を強化する効果があると見られる。「してもらおう」は話し手の意志を表明するが、「してもらいたい」は話し手の内心にある希望をそのままに述べる。したがって、「してもらおう」は「のだ」と接続できないが、「してもらいたい」は「のだ」と接続して話し手の聞き手に依頼する動機を説明することができる。

「頼もう」「願おう」「お願いしよう」の依頼性は、「頼みたい」「願いたい」「お願いしたい」と「頼む」「願う」「お願いする」との間に位置付けされるが、「ホーンの尺度」のような包括的な関係は見られない。語用論的条件などの影響は無視できないからである。

第7章 要望的依頼表現の意味・機能

1. 要望的依頼表現の範疇

要望的依頼表現には、①希望の助動詞による「したい」「してほしい」、②授受動詞「もらう」の補助動詞による「してもらいたい」「していただきたい」、③依頼動詞「願う」による「お～願う」「お願いする」「～願いたい」「お願いしたい」「お願い」、④依頼動詞「頼む」による「頼む」「頼みたい」が含まれる。第3章で述べた依頼表現の発想モデルを再掲して、要望的依頼表現の位置付けと機能を説明する。

(I) 依頼表現の発想モデル：

- d. 話し手が何か不足を感じている。
- e. 話し手は自身の不足を聞き手の力によって解決できていると思っている。
- f. 話し手は自身の不足の解決が聞き手にかける負担を考えて、聞き手に依頼したいことを予告する。
- d-1. 話し手は自身の希望・意志を述べて、聞き手に協力してほしい気持ちを伝える。
- d-2. 話し手は聞き手の協力を依頼する。
- e. 依頼の目的を達成するため、話し手は聞き手に粘り強く依頼する。

依頼表現の発想モデルによって、図4を作成する。

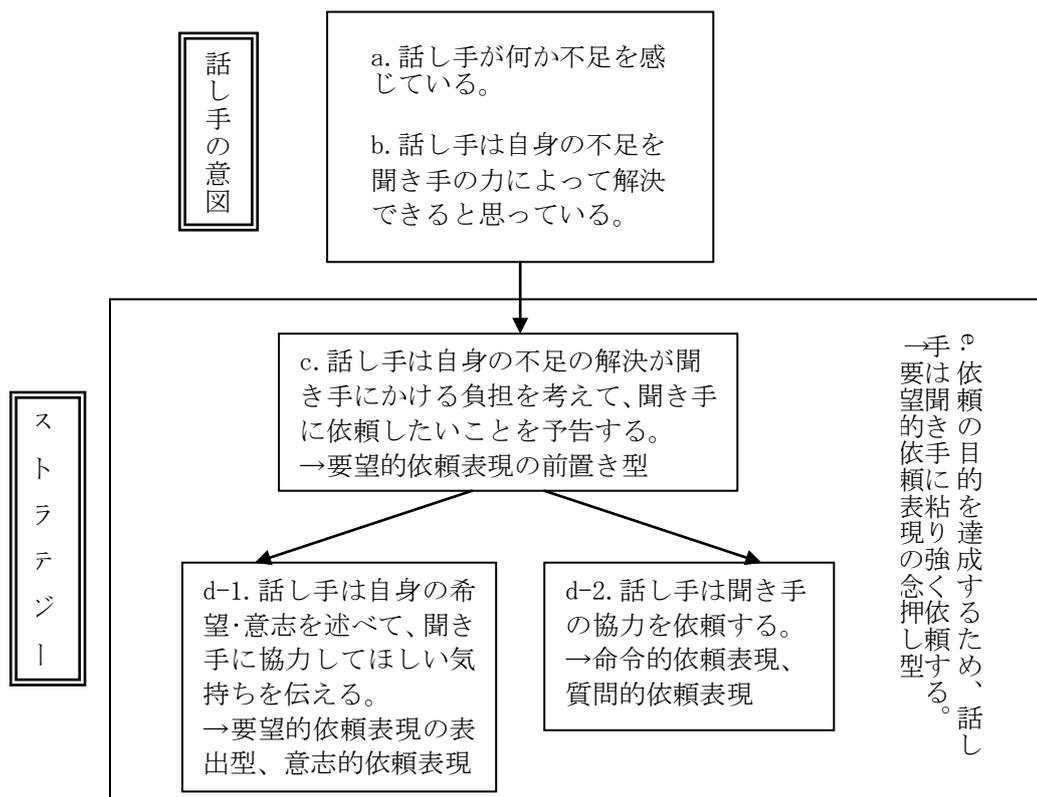


図4 依頼表現の発想モデルと依頼表現

依頼表現の発想モデルによって、d-1に基づく要望的依頼表現の表出型、cに基づく要望的依頼表現の前置き型、eに基づく要望的依頼表現の念押し型が発展される。図4における話し手の意図は依頼の動機であり、全ての依頼表現に存在する。これに対して、戦略は様々な組み合わせがある。実例が最も多いのは、d-2による命令的依頼表現である。次に

d-1 による要望的依頼表現の表出型である。やや依頼しにくいと思われる場合や非常に依頼しにくい場合には、要望的依頼表現の前置き型や念押し型を用いる。

2. 表出型の意味・機能

2.1. 「したい」の機能

2.1.1. コンテキストによる相手の特定

「したい」には、井上優（1997：p. 87）が説いているように、話し手が自分自身の動作・状態に関する願望を表す機能がある。

(652) 「他のこと、話したい」

「聞きたいな」

「背が高いつてことに、どうしても話がしぼられて行くの。私だって、いろいろなのに、でかい女って要約されちゃうの」(君：p. 82)

女性⇔好きな男性⁸⁸

「他のこと、話したい」は女性の希望で、「聞きたいな」は男性の希望である。同質性を有する複数の話し手も「したい」を使用する。

(653) 男の声—そうだ。今、日本の防衛費は年間約五千億円だと聞いている。今、日本人一億二千万人の安全は、われわれ蒼き獅子たちの手中にある以上、何の役にも立たぬ防衛費五千億円を、われわれが要求するのは当然ではないかね。すぐ、このことを首相に伝え給え。われわれは、二十三日までに、首相の返事を得たい。さもないと、われわれは止むなく人質を殺すことになる。

秘書官—馬鹿馬鹿しい（ガチャンと電話を切る音）（誘拐：p. 20）

犯人たち→首相の秘書

ここでの同質性を有する複数の話し手は、日本人一億二千万人の安全を脅かす犯人たちを指し、「われわれ」によって表われる。この点で同質性を有する複数の聞き手に対して使用される「してください」と正反対になる。また、宮地（1980：p. 205）は「同じく特定の相手に対することなく、自己の欲求を表明するもの」と主張している。しかし、(653)「われわれは、二十三日までに、首相の返事を得たい」という発話から、「したい」はコンテキストによって相手を特定することができることが分かった。

(654) 生け贄はフリーカメラマンのウッチーにした。女とやることしか考えていない最低の男だ。これなら万が一のことがあっても良心が痛まない。

ウッチーがストーカーたちの標的になる。うしろから刺される。ストーカーグループまとめて検挙。尾行から解放される——。広美はそんなシナリオまで思い描いていた。

「たまには会いたいよ」電話で鼻声を出したら、尻尾を振って駆けつけてきた。

「うれしいよなあ。広美がおれのこと、誘ってくれるなんて」

愚か者め。何も知らないで。（プール：p. 158）

若い女性→親しいカメラマン（男性）

地の文（生け贄はフリーカメラマンのウッチーにした）によって、話し手は聞き手を特定

⁸⁸ 女性⇔好きな男性は、最初の下線部において女性が好きな男性に対する発話で、2番目の下線部において好きな男性が女性に対する発話を表す。

してから、「たまには会いたい」と自身の希望を述べている。聞き手は話し手の意図を認識して「うれしいよなあ。広美がおれのこと、誘ってくれるなんて」と応答している。このように、話し手が聞き手を特定する場合にも「したい」を用いる。

しかし、「日本語の教師になりたい」のように、「したい」の基本的な機能は話し手自身の願望を表すことである。会話文における「したい」は、形態上で聞き手の存在を前提とする「してほしい」「してもらいたい」と異なる。話し手は聞き手が自身の「したい」を使用する意図を探るだろうと察して、意識的に聞き手を特定しない「したい」を用いて、依頼の目的を達成しようとする。したがって、「したい」による依頼表現は、依頼表現の発想モデルの d-1「話し手は自身の希望・意志を述べて、聞き手に協力してほしい気持ちを伝える」の前半の「話し手は自身の希望・意志を述べ」ることに相当すると考えられる。「思う」と共起すれば、話し手の希望の表明は更に明らかになる。

- (655) 質問者 I 二人の先生に一つずつ質問させていただきたいんですけども、まず柴田先生は他人の翻訳のチェックもなさっているということなんですが、それこそ逐次チェックをなさることが、実際に翻訳してしまうのに近いものであるのか、それともチェックというのは、全く別個の作業であるのか、それをお聞きしたいと思います。

それから村上先生には、その趣味であることを重ねることで、たとえば、水泳をやればやるほどタイムがあがるように、その、伸びていくという感じが実感としておありになるのでしょうか。それとも、最初の頃からあまり変わらないのか、そういうところをおうかがいしたいんですが。

柴田 僕からでいいですか。(翻訳：p. 94-95)

大学生→柴田・村上

【再掲】

- (656) 校長室に残った三人がふと沈黙した瞬間をとらえて、校長が切り出した。

「ところで朝の十分間読書ですが、今度、教科が三割削減されることもあり、これをとりやめ、授業にまわすことにしたいと思いますが

「いや、校長先生、これだけは続けさせてください。お願いします」(炎：p. 139)

校長→教師達

(655) の話し手は聞き手に翻訳のチェックについて聞いている。「お聞きしたいと思います」によって、話し手は大学の先生に対する敬意を表わしている。(656)「授業にまわすことにしたいと思いますが」によって、話し手の考えを表明するばかりではなく、「いや、校長先生、これだけは続けさせてください」という聞き手の協力しない態度から推論すれば、発想モデルの d-1 の後半の「聞き手に協力してほしい」という話し手の気持ちも察せられる。ただし、依頼表現は聞き手の未来の行動に対する要請なので、(655) (656) のように、「したい」による話し手の希望に関わる行動(例：質問すること、朝の読書時間の変更)は、発話時点において未成立でなければならない。

- (657) 「昨日は随分と探してくれたみたいじゃないか」

「聞きたいことがあってな」

「甘えるなよ。俺は県警の人間だ」(半落ち：p. 127)

検察官→警察官

このように、「聞きたいことがあってな」は話し手の発話時点の前日の行動についての説明になる。このような場合、「聞きたいことがあってな」における依頼の意が薄れている。

2.1.2. 依頼の動機と理由

「したいのだ」によって、依頼の動機と理由を説明する機能がある。まず、他の依頼形式と共起する「したい」の例を考察する。

- (658) 「どう思う？この事件」
「私なんか言えることは何も……」
「言ってくれ。聞きたいんだ」
澄子は俯いた。視線を畳の一点に落としている。
「介護で苦労してるのはお前だからな。俺には本当のところはわからない。どうしても意見を聞きたいんだ」
「わかりました」澄子は座り直し、背筋を伸ばした。
「その梶さんという人、とっても優しいんだと思います」(半落ち：p. 301-302)
夫→妻
- (659) 「死体を見つけたのは、アパートを貸してた不動産屋らしいんだ。ちょっとたしかめてくれないか」
「あ……それはかまいませんけど」
「頼むよ。もう少し詳しいことを知りたいんだ」
「はあ」(白夜：p. 231)
大学生 先輩→後輩

(658) は夫がある事件について妻に意見を聞いている。「言ってくれ」の表現は聞き手に対する話し手の依頼の意図が明示される。「聞きたいんだ」「どうしても意見を聞きたいんだ」は依頼ではないが、話し手の依頼の動機を説明する機能がある。(659) も同じく、「ちょっとたしかめてくれないか」は話し手の依頼の意図が明示され、「もう少し詳しいことを知りたいんだ」はその理由になる。酒井(1996：p. 23)が分析しているように、「話し手が自分の行動への意志や希望をのべたり、聞き手の行動への要求をさしだしたりする場合、話し手は、さらに、『～のだ』文によって、なぜ自分がその行動をするのか、あるいは相手(聞き手)になぜそのような要求をするのかという〈動機〉や〈理由〉をさしだし、相手(聞き手)の納得をうながすことがある」のである。しかしながら、次の例のように、「したいのだけど」は依頼の動機ではなく、「許可求め」の内容になる場合がある。

- (660) 「何だね、どこへ行く？」
「すみません、吐きそうなんです」真一は短く言った。「外の風に当たってきたいんだけど、いいですか」いいですかと言いながら、立ち止まることなく階段の方へ向かった。大柄な刑事が急いで真一の腕を取った。
「ちょっと待った」
「すぐ戻りますから。お願いします」(模倣-上：p. 33)
少年→刑事
- (661) 「——あの、どうしても報道局のスタッフの人と話をしたいんだけど、駄目ですか？」
「いえ、できますよ。だから私が伺ってもいいし、それとも誰か特定の者でない？」
「いえ、誰でもいいんだけど。じゃあ、あなたでもいいです」(模倣-上：p. 94)
犯人(男性)→報道局のスタッフ

(660) 「外の風に当たってきたいんだけど」は、話し手が聞き手に「いいですか」と訊ねる理由である。つまり質問の命題内容を明らかにすれば、「外の風に当たってきたいんだけど、外の風に当たってきていいですか」になる。話し手はこれから自身の行動に関して聞き手に許可を求めている。(661) 「どうしても報道局のスタッフの人と話をしたいんだけど」は、話

し手が聞き手に「駄目ですか」と訊ねる理由である。つまり、話し手は「どうしても」を使用し、自身の希望を強く述べ、聞き手に「報道局のスタッフの人と話して駄目ですか」と許可を求めている。このような場合、話し手がやりたいことは聞き手のなわばり意識に属することが多いのである。「けど」の働きについて、白川（1996：p. 16）は、「話し手は、『ケド』を使用して積極的に相手に何らかの行為を求めることはできない。あくまでも、条件を提示することによって、結果的にその条件下での帰結を相手に考えさせるといふ、消極的な働きかけに留まる」と分析している。(658)～(661)の依頼主と動作主は、次の通りである。

(658') 私は聞きたいんだ。あなたは言ってくれ。

(659') 私はもう少し詳しいことを知りたいんだ。あなたはちょっとたしかめてくれないか。

(660') 私は外の風に当たってきたいんだけど。私を出かけさせてください。いいですか。

(661') 私はどうしても報道局のスタッフの人と話したいんだけど。私を報道局のスタッフの人に会わせてくれ。駄目ですか。

このように、(658') (659')の「したいんだ」の依頼主は話し手（私）で、動作主は聞き手（あなた）である。(660') (661')の「したいのだけど」の依頼主は話し手（私）で、動作主はヲ格による使役の対象、つまり話し手（私）である。要するに、(658') (659')のように、動作主が聞き手である「依頼」の場合、「したいのだ」は話し手が聞き手に何かを依頼する動機や理由を表す。これに対して、(660') (661')のように、動作主が話し手である「許可求め」の場合、「したいのだ」は話し手が聞き手に自身の行動について許可を求める動機や理由を表す。

(662) 「ちょっと質問。その家の構造はどんなふうになっていたか知りたいんだけど」

植物学者が、軽く手を上げて言った。

バンビは、誰かの差出した紙きれに簡単な図面をかいた。(猫：p. 113)

男性→同じ民宿の女性客

「その家の構造はどんなふうになっていたか知りたいんだけど」は、「ちょっと質問」という話し手の発話の理由である。質問の内容は「その家の構造はどんなふうになっていたか」である。このような場合、「行為要請」というより、「情報要請」である。このように、「したいのですけど／が」には、「依頼」や「許可求め」の動機や理由を表す機能がある。そして、聞き手の応答によって、話し手の意図が理解されるかどうか分かる。

(663) 「志木さんはどちらに行かれたんですか」

〈それはお答えできません〉

「M刑務所の者です。至急連絡を取りたいのですが。携帯電話はお持ちでしょう？」

〈相手が誰であっても、捜査関係者の行き先、連絡先はお教えできません〉

まるで立場が逆転していた。(半落ち：p. 342)

刑務官→警察官

(664) 「すみませんが、これからちょっと早川さんの部屋まで行きたいのですが」

「彼女の部屋へ？何のために？」

「確認したいことがあるんです。すぐに終わります」

「これは……」

「それはお持ちになっててください」

いい終えると加賀は歩きだした。仕方なく美千代は若い刑事と共に、彼の後を追った。(嘘：p. 43)

刑事→女性

(663) 「至急連絡を取りたいのですが」は、話し手が聞き手に「携帯電話はお持ちでしょうか?」と問いかける動機である。「相手が誰であっても、捜査関係者の行き先、連絡先はお教えできません」という聞き手の応答によって、「志木さんの携帯電話の番号を教えてください」という話し手の意図が理解されたことが分かる。これに対して、(664) 「これからちょっと早川さんの部屋まで行きたいのですが」によって、話し手は今後の行動を説明している。しかし、どうしてその行動を取るのかという話し手の意図が不明である。したがって、「彼女の部屋へ? 何のために?」と聞き手が話し手に問いかけている。このような場合、「したいのですが」は、話し手の希望を表すが、話し手の意図や動機を表さない。「依頼動詞+たい」という用法もあるが、本章の2.4節で論じる。

2.2. 「してほしい」による消極性

「してほしい」は「してもらいたい」に見られない客観性や消極性がある。「したい」は話し手のしたいことを述べることによって、聞き手に依頼の意が伝わる。これに対して、「してほしい」は話し手が聞き手にやらせたいことをはっきり表している。阪田・倉持 (1980 : p. 40) は、『～てもらいたい』が一般に特定の相手に対して向けられる表現であることが多いのに対し、『～してほしい』は『早く春が来てほしい。』『もっと住みよい社会になってほしい。』のように、心のうちに抱いている願望を表すのにも用いられるというようなちがいがあると指摘している。そこで、「してほしい」は「してもらいたい」ほど特定の人に対する積極的な感じはない。場合によって、消極的な感じから冷たい感じまで生み出される。

(665) 「残酷なようだけど、自分を大事にして欲しいとしか言えない。それに僕は自分を今地獄のように感じている女は抱けない。あなたが優ちゃんと二人で道をみつけ——道は必ずみつかると思うし——あなたなりの心の平和を取り戻したら、もう一度僕を訪ねてほしい。きっと訪ねてほしい」

「冷たいのね」

「承知しているよ。僕はあなたの夫じゃない。優ちゃんの父親でもないからね」(一種 : p. 175)

男性→愛人

「あなたなりの心の平和を取り戻したら、もう一度僕を訪ねてほしい」は、話し手が聞き手の提案を断わった時の発話である。コンテキストから話し手の態度全体が冷たい様子が伝わって、「してほしい」による消極性が感じられる。宮地 (1995) は「してほしい」を「消極的な命令あるいは丁寧な要求という、依頼表現である」と述べている。この消極性があるからこそ、下位者が親しい上位者に対して自身の希望や考えを表明することができる。

(666) 「お父ちゃんも、こんなこと言うあたしのこと、嫌いやる? これ以上、一緒に暮らしたかて、うまいこといくはずないねん。お父ちゃんはお父ちゃん、このとうふ屋を誇り高く守っててください。それはそれで立派やと思うし、尊敬もする。けど、何べんも言うけど、お父ちゃんの価値観で、あたしを縛らんというほしいねん。お母ちゃんもお願い、あたしを自由にして。お父ちゃんお母ちゃんを傷つけること、申し訳ないと思うけど、好きにさしてほしいねん、お願いします」(子-上 : p. 131)

娘→両親

(667) 「森山くん、よかったな。弟子には冷たい師匠であるべきやと思て、やってきましたし、今後

もその考えは変わらへんとは思いますが、わがも門下からプロ棋士が誕生したこと、わたしも誇りに思ってます。よう、四段になったときが初めてタイトルを取ったときよりもうれしかったと言うプロ棋士がいますけど、わたしはそうは思いませんな。すべてはこれから。あんたは今、盤の前に座って、初手を指すところや。初手を、第一手を、どうか誤らずに指してほしい。わたしは今、そのことを願ってます。そして、きみには将来、最善の初手は何かと言えるようなところまで、究極の将棋道を究めてもらいたい。わたしは、森山くんに負けて、死にたいと思ってるのや。わたしの息のあるうちに、そこまで上がってきなさい、森山くん。以上」(子-上：p. 415)

師匠→弟子

(666) は、娘が両親に対する反抗である。娘は「お父ちゃんの価値観で、あたしを縛らんといてほしいねん」「好きにさしてほしいねん」と言い、自身の考えや不満を表す。下位者が上位者に対して「してほしい」を使用する傾向が見られる。(667)「どうか誤らずに指してほしい」「究極の将棋道を究めてもらいたい」のように、上位者が下位者に対しても「してほしい」「してもらいたい」を用いる。

(668) 「どうだね、この梅谷利一という男は、絶えずあんたのことを調べつづけてきているらしいことはこれでわかるだろう。何のためかわからん。が、われわれはこの男の正体が知りたい。石岡さん、だからぜひ京都に行ってほしいよ」田村さんは一気にそう言った。おれは聞いていると、少し気味が悪くなったので、承知した。(張込み：p. 85)

刑事部長→犯人の目撃者 (男性)

(668) は刑事部長が証人を事件に関わる男性に会わせたいが、証人を指示する権利はないので、「ぜひ京都に行ってほしいよ」と頼んでいる。「よ」の機能について、陳 (1987 : p. 95) は、「話し手と聞き手の間に認識のギャップがあって、話し手は、そのギャップをうめるために発言している」と分析している。即ち、話し手は自分が言わなければ聞き手に分からないだろうと思っている。そこで、「よ」は「ぜひ」と接続することにより、「してほしい」による消極性を和らげて話し手の希望を強調する効果があると見られる。

「してほしいのだ」にもこの消極性があると見られる。

(669) 「坊主、一緒に唄うか」声をかけてみた。返事がない。落ち着きのない不安そうな眼差しでこちらを見つめるばかりだ。江本はかまわず唄い出した。少年が入りやすいようにできるだけゆっくり唄ったつもりだったが、相手は乗ってこなかった。口元を固く閉ざして、じっとこちらに見入っている。変なガキだ、と江本は思ったが、一方でひどくその少年が気にかかった。

「おい、坊主」江本は再度少年に呼びかけた。「俺の唄を熱心に聴いてくれるのはいいけどな、お前、少しノリが悪すぎるんじゃないか。一緒に唄えとは言わんけど、せめて唄い終わったら拍手のひとつもしてほしいもんだがな」(獲物：p. 166-167)

男性→少年

(669)「せめて唄い終わったら拍手のひとつもしてほしいもんだがな」の「してほしい」は、副詞「せめて」と共起すれば、その消極性が更に伝わる。宮地 (1995) が指摘しているように、「してほしいのだ」「してほしいわけだ」など形式名詞述語の形をとっても消極的な性質があると見られる。一方、酒井 (1996 : p. 27) は「まちのぞみの気持をストレートにさしだす『～してほしい』の文より、『～してほしいんです』のほうが《はたらきかけ》性が色こく表わされることになる」と主張している。

(670) 「篠塚さん、その写真の顔と、この名前を、どうか頭に叩き込んでいてください。そうして、もしもどこかで見かけることがあったら、どういう時であっても、すぐに私に連絡してほしいんです」

「そうおっしゃられても、一体どこにいるんですか、この男は。それがわからなければ、単なる指名手配と同じですよ」一成は小さく両手を広げた。(白夜：p. 686)

刑事→男性

(671) 「僕にはもう関係ない」

「それはあなたの判断することじゃない。私としては、どんなくだらぬ話でも、喬子さんの生活の一端につながるのなら教えてほしいんですよ」

倉田は鋭く顔をあげた。「どうしてですか？喬子は、あなたの甥ごさんを放って逃げたんでしょ？もういいじゃないですか。どうして探すんです？」

「気になるからですよ」(火車：p. 433)

青年→初対面の男性

(670) は刑事が事件の犯人を探すため関係者に協力を求めている。「私に連絡してほしいのです」は、「どういう時であっても」「すぐに」と接続することによって聞き手に働きかける話し手の意図が明らかである。(671) も同様に、「どんなくだらぬ話でも」によって話し手が「喬子さんの生活」を全部知りたい意図を明らかにしている。「よ」の付加によって、「してほしいのです」の依頼性が更に強調される。

2.3. 「してもらいたい」「していただきたい」の機能

2.3.1. 話者中心の希望伝達

「してもらいたい」は、話し手が配慮の要らない聞き手に対してよく使用される。希望の助動詞「たい」によって、一人称の希望が表われる。「してもらいたい」は、話し手が聞き手に自身の希望を表明して依頼したい意を伝える。この点について、阪田・倉持(1980：p. 39)は、次のように分析している。

「～てもらいたい／いただきたい」は、相手に対し、ある事柄の実現を希望する表現形式である。「たい」を用いることによって形式的には自分の意を汲んでくれることを相手に期待する意を表すものであるが、特に、文末の述語として用いられる場合には、実質的には相手に対する要求であり、また、時には命令になる。

したがって、「してもらいたい」は平叙文に使用されると、客観的に話し手の希望を述べる機能があると見られる。

(672) 「なるほどね。まあ、君がどのように思おうと、それは君の自由だよ。ただ覚えておいてもらいたいのは、サラリーマンにとって配置転換は避けて通れない道だということだ。不本意な人事をされたと不満を持つ人間は多い。それは君だけじゃない」

「不満とかそういうことじゃなく、理由を知りたいだけです」(手紙：p. 311)

人事部長→店員

「ただ覚えておいてもらいたいのは、サラリーマンにとって配置転換は避けて通れない道だということだ」のように、話し手は聞き手に覚えさせたいこと、つまり、理解してほしい道理が明示されている。

(673) 「君は絵を描くだろ」

え、と河原崎は相手の顔を見返した。

「君は絵を描く。これはとても幸運なことだ。俺は、高橋さんが神であるかを証明するために解体をする。ただ、どうせなら君にそれを描き残してもらいたい。そうだろう？天才の身体を証拠として残したいと思わないか。河原崎くん、君は写生をすることはできる？」

「描くことならば」正確には、描くことだけは、だ。(ライフ：p.128)

男性→男性部下

「どうせなら君にそれを描き残してもらいたい」のように、二格によって聞き手を特定した上で、話し手は自身の希望を述べて、聞き手に対する期待を表す機能がある。

「してもらいたい」が依頼表現として使用される場合、「本当に」「正直に言えば」と共起しうる。

(674) 「信一は二月に受験があるじゃないか」

「失敗したときのことなんです。こんどはなんとかしてくれると思うんですけど、でもわかりませんからね。あの子も追い詰められた気持ちでいると思うんです」

「受験に失敗したときのことか」

「そうなんです。あなたの会社で働けるようにしてやってもらえれば、とりあえずはまごつかなくてすむんじゃないでしょうか」

「精神的にゆとりが持てるということも、あるかもしれないな」

「こんどだめだったときは、本当にそうしてやってもらいたいし……」

「それを信一に言うのか」

「いま言っておいてやった方が、受験にもいい結果が出ると思うんですけど」(人事：p.31-33)

妻→夫

(675) 「そんなこといわれちゃ、休めないじゃないの」

「正直に言えば休んでももらいたくはないね。ここで一日だけ休みたいたなんていいですんだから、おまえさんもまだ素人なんだねえ。」(おと：p.31)

夫→妻

(674) は妻が夫に息子のことを相談している例である。「本当にそうしてやってもらいたいし……」は話し手が聞き手に第三者(二人の息子)を聞き手の会社で働けるようにしてやってほしいと願っている文である。「本当に」と共起する「してもらいたい」は話し手の本音を述べる機能がある。そして、聞き手のみに聞いてほしい本音である。(675) は夫が妻に料理の作り方を教えている。しかし、妻は休みたいと言っている。そこで、話し手は「正直に言えば休んでももらいたくはないね」と聞き手に自身の気持ちを伝える。このように、「してもらいたい」には、「してくれ」「して」「してちょうだい」のように直接に聞き手に要請するという直接性はないが、特定の聞き手に話し手の希望を伝える、つまり話者中心の希望伝達という機能がある。

「していただきたい」は「してもらいたい」より丁寧である。しかし、「してもらいたい」と同じく、特定の聞き手に希望を伝達する機能を有する。

(676) 「断をはじめからお客さんに帰られると断がしにくいから、御用のある方は今のうちに帰っていただいて、お聞きになる人だけ残っていただきたい。あたしでおしまいですから……」
と、高座でタバコをすったりして、しばらく知らん顔をしているんですよ。(なめくじ：p.204)

断家→客

(677) 「息子さんのことで坂本先生もクラス全体に目がとどかないのはわかります。しかし、女は女らしく、男は男らしく、二度とこういう騒ぎは起こさないように、担任としてしっかり監督していただきたい」

「申しわけございません」(炎 : p. 105)

校長→担任先生

(676) のように、話し手は「お聞きになる人だけ」を指定している。このような人がいれば残っていただきたいと頼んでいる。(677)「担任として」は、聞き手が担任先生でなければならない。それに、「しっかり監督していただきたい」も担任先生のみに対する期待である。しかし、「していただきたい」が「してください」のような直接性がないので、話し手は謙譲語によるへりくだった態度で聞き手に依頼する。

2.3.2. 丁寧さの表現

「してもらいたい」「していただきたい」は、話者中心の希望伝達で、つまり聞き手のなわばり意識に侵入しないことによって丁寧さを表す。親しくない上位者や対等人に対して用いられる。

(678) 「印鑑があればいいのですか？」

「そうですね、印鑑証明書をとってもらいたいのですが」

「明日の昼すぎにとってきますよ。明日は午後から授業がないし、それに市役所の支所が学校の近くですから」(剣 : p. 254)

男性→友達

(679) 「工事中にもお台所は使えるわけですね？」

「一時的にはちょっと不便なこともあるかもしれませんが、まあなるべくご迷惑をかけないようにしますから。——それと、あとは奥さんに、タイルと壁紙を選んでもらいたいんですが」
兄貴分という感じの三十すぎの大工が、玄関に置いてあった分厚いサンプルを、リビングのテーブルへ運んできた。

「急ぎませんから、ゆっくり見てください」(悲劇 : p. 105-106)

大工→奥さん

(678)「印鑑証明書をとってもらいたいのですが」は、話し手が対等な友達に対する要請である。(679)「あとは奥さんに、タイルと壁紙を選んでもらいたいんですが」は、客に対する大工の要請である。(678)(679)の依頼内容は、話し手のなわばり意識に属する。しかし、「してもらいたいのですが」によって、話者中心の希望伝達の形で聞き手に断わる余地を与える。丁寧さが感じられる。このように、「してもらいたい」「してほしい」は、由井(1995)が指摘しているように、「してください」より丁寧である。

(680) 運転席の横に今日の行楽の主催者、筑紫文化人連盟会長、元大学教授が、そのうすい白髪がよく似合う赧ら顔をほほ笑ませて、小さなマイクを口にあてて立っていた。

「みなさん。そろそろ午どきですから、昼食をかねて、この風光明媚な場所で休憩したいと思います。どうかバスを降りて、山の草の上なり、海の岩の上なりにお坐りになって弁当をつかってください。弁当は仕出し屋にたのみまして、酒の二合瓶が付いております。これは、われわれの友人下坂一夫君が『文芸界』の権威ある同人雑誌評で、『海峡文学』に載ったその作品が激賞を受けた心祝いのつもりであります。美しい海を前にして各自が祝杯を傾けられ、下坂君の文学的前途を激励していただきたいと思います」マイクに拡大された会長の声のあと、車内に拍手が起った。(場面 : p. 80)

主催者→文化人

「どうかバスを降りて、山の草の上なり、海の岩の上なりにお坐りになって弁当をつかつ

てください」は、話し手が聞き手に対する「勧め」である。聞き手への善意を最大限にするのは丁寧さの原則に合うので、話し手は「してください」を使用して聞き手に自身の善意を強く表している。これに対して、「美しい海を前にして各自が祝杯を傾けられ、下坂君の文学的前途を激励していただきたいと思います」は、話し手が現場にいる複数の聞き手に第三者（下坂君）のため祝杯を依頼している。話し手は聞き手を指示する権利がなく集合のような改まった場面なので、「していただきたいと思います」を使用して聞き手を強迫しない状況の下で第三者に自身の好意を表している。

- (681) 「君こそ、言葉を慎み給え、僕の処置が誤っていたか、どうかは、今後の裁判で決められることで、君にとやかく云われる筋合いはない、第一、今度の問題は、一枚の엑クス線写真の検索がどうの、こうのというようなことではないのだ、以後、この件に関しては、君の勝手な発言は絶対、慎んで貰いたい!」(巨塔-3 : p. 160)

医者→同期生

- (682) 「何が悪かったのか知らないけど、まったくひどいですよ。ぼくも三日も会社を休んだのは今度のはじめてですよ」彼だけは心底からの憤慨である。

「何らかの形で責任を取ってほしいですね」

スポーツマンタイプの瀬戸口はなかなかの迫力だ。(女 : p. 224)

男性客→店の支配者

(681) 「以後、この件に関しては、君の勝手な発言は絶対、慎んで貰いたい!」という話し手の発話は、「以後、この件に関しては、君の勝手な発言は絶対、慎んでください」より丁寧とは言えない。(682) は食中毒の男性客が店の支配者に抗議をしている。「何らかの形で責任を取ってほしいですね」は客の立場からの発話であるが、「何らかの形で責任を取ってくださいね」に入れ換えると、支配者に対する客の迫力が減るような感じがある。このように、「してほしい」は必ずしも「してください」より丁寧な表現と言えない。

また、終助詞「な」と接続する例もある。

- (683) 「胸部の断層撮影をすりゃあ、君のいう医者の勤めを果せるってわけだな、よし、解ったよ、僕はまだこのあと、午後の総回診が残っているから、これで話がすめば、帰って貰いたいな」
「そうか、それは失礼した、じゃあ、断層撮影の件は、よろしく頼む」(巨塔-2 : p. 306)

教授→同期生

- (684) 「もっとまじめに発言してほしいな」

「まじめにいうとる。ぼくのいいたいことは保健教育に名をかりて、子どもの心をふみつけていないか、それぞれの教師が自問自答してくれということなんだ」(兎 : p. 57)

教頭→教師

(683) 「帰って貰いたいな」、(684) 「もっとまじめに発言してほしいな」のように、聞き手の言動に対する率直な発話と指摘である。「な」によって話し手の希望が強調される。また、聞き手は(683)のように話し手の発話に賛成して謝る場合がある。(684)のように異議を唱える場合もある。

2.3.3. 不確定の希望伝達

話し手は条件節の内容に基づいて、「してほしい」を使用し、聞き手のこれからの行動について指示したり、依頼したりする場合がある。

- (685) 「鞠子さんのことも他人事とは思えないとおっしゃった。それならば、今これから、古川家の人たちに取材をするのは控えてもらいたい。とてもじゃないが、あの人たちは今、それどころじゃないんですよ」
滋子は目を伏せ、空になったコーヒーカップを見つめていた。坂木の言うことはよくわかった。
(模倣-上 : p. 113)
刑事→女性ルポ

「今これから、古川家の人たちに取材をするのは控えてもらいたい」という話し手の依頼は、「鞠子さんのことも他人事とは思えない」という聞き手の発話に基づいたのである。前提は聞き手の発話なので、聞き手のなわばり意識に属する。

- (686) 「君たちは、遊軍として、ここに残って、緊急の事態に備えて欲しい。というのは、犯人が、午後二時の電話で、要求を入れられない以上、新たに人質を殺すと言って来たからだ。今度の事件に関する殺人事件が起き次第、現地に飛んで貰いたい」(誘拐 : p. 54)
警部→部下たち
- (687) 「もし見つからず村へも降りていないとなったら、事務所で捜索隊を編成して元山に向わせるそう。そうしたら、きみたちは捜索隊にひきついで降りてきてもらいたい。ん？いや、それは降りてきてから話すよ」(悪霊 : p. 155-156)
刑事→鉦山長の息子

(686)「現地に飛んで貰いたい」は、「今度の事件に関する殺人事件が起きる」場合に限りて成立している。「してもらいたい」には、手元に入った情報に基づいて下した判断や部下に対する指示の意味が含まれる。(687)も同じく、第三者からの情報に基づいて「きみたちは捜査隊にひきついで降りてきてもらいたい」という指示を下している。ただし、情報が第三者からであるが、「してもらいたい」の依頼内容は話し手のなわばり意識に属する。そして、第三者からの情報が必ずしも正確とは限らない。

- (688) 「もしそういうことなら、早めに連絡してもらわないとね。それから、万一そうだった時だけ、お兄さんを今の社宅に呼び寄せるようなことは遠慮してもらいたい。社宅の規則でも、両親、配偶者、子供以外は同居できないと決まっているから」
そんな予定はないし、今後もそのつもりはないと直貴ははっきりと答えたが、相手はあまり納得している様子ではなかった。(手紙 : p. 366-367)
男性→同僚

このように、地の文「そんな予定はないし、今後もそのつもりはないと直貴ははっきりと答えた」によって、話し手の情報が間違っていることが分かる。そこで、聞き手に対して、「お兄さんを今の社宅に呼び寄せるようなことは遠慮してもらいたい」という依頼は、元々必要ではないことが分かる。

2.3.4. 依頼性の補強

副詞「どうか」「ぜひ」によって、「してもらいたい」の依頼性を強調する効果がある。

- (689) しかし彼は断念するつもりもないようだった。座布団から尻をずらすと、突然両手を畳につけ、頭を深く垂れた。「このとおりだよ。どうか私たちの希望を聞き入れてもらいたい」
威厳の固まりのような態度を見せつけられてきた直貴にとって、中条の行動は予想外のものだった。(手紙 : p. 260)
年配の男性→娘の彼氏

- (690) 「ぜひあたしのところへ来てもらいたい。どんなことがあっても、あたしに出来るだけのことはさせてもらいますから……」 こういってやりますと、向うでは、
「とんでもないことです。あたしは内地に引き揚げてから、あなたには大へんなお世話になりました。どうしてそのご恩返しをしたらよいかと思っているくらいです……」(なめくじ：p. 285)

漸家→お世話になった人の息子

(689) 「どうか」は、第4章で述べたように、「どうかして」の意味が含まれる。これによって、目の前にいる聞き手に懇願するという話し手の意図が伝わる。(690) 「ぜひ」は、話し手が自身の希望を強調して、依頼性を強調している。

副詞以外、「どうしても」によって、「してもらいたい」の依頼性を強調する効果もあると見られる。

- (691) 「自信があるんだ。どうしても、明子にきいてもらいたい」(午後-下：p. 181)

男性→婚約者

「どうしても、明子にきいてもらいたい」のように、聞き手に話者中心の強い希望を伝えている。

2.4. 依頼動詞による表出型

2.4.1. 「願う」「願います」「頼む」の構造と機能

まず、「願う」「願います」「頼む」による依頼表現を分析する。森田(1977：p. 382)は、「願う」が元々「神仏など、人智を超える対象に祈念して、加護を求める行為」であった、と述べている。現代日本語においても、そのような用法が見られる。

- (692) 「大神宮様、どうぞこの富が当りますように、どうぞお願いいたします。大神宮様の前ですけど、あたくしはねエ…エエ、突き留め千両なんてそんな凶々しいことは申しません、へえ、エエ二番富の五百両であたくしは結構でござんす」(文楽：p. 124)

男性→大神宮様

時代の推移に従って、「願う」は、森山(1991)が考察しているように、「特に神仏を対象としないで、自分の要求が実現することを心の中で強く念ずるという場合にも用いられる」ようになる。

- (693) どうか身体に気をつけて、立派に更生されることを願います。これは弟としての、最後の願いです。(手紙：p. 389)

手紙 弟→兄

「どうか身体に気をつけて、立派に更生されることを願います」によって、話し手は間もなく牢ごくを出る聞き手に更生するよう、祈っている。対話の場面で、森山(1991)は、「願う」が「上向きの待遇を配慮した場面でしか使われない語である」と主張している。

- (694) 車掌がはいってきた。入口に立って、お早うございますと乗客に挨拶した。
「まもなく終着駅青森でございます。長途の御旅行お疲れさまでした。なお青函連絡船で函館にお渡りの方は、旅客名簿にご記入を願います。ただいま、お手もとに用紙を持ってまいります」

車掌は、手をあげた乗客に用紙をくばりはじめた。北海道に渡るのは、三原ははじめての経験だった。三原もその用紙を一枚もらった。(点：p. 156)

車掌→乗客

(695) 扉の開閉にご注意下さい。お子様をお連れの保護者様は特にご注意願います。(ほっともつとの掲示)

(696) 「関口先生にお目にかかりたいのですが、大阪綿布協同組合の顧問弁護士の八木先生からの紹介状を戴いて参った佐々木よし江と信平と、お伝え願います」(巨塔-3：p. 108)

客→事務員

(694) 「青函連絡船で函館にお渡りの方は、旅客名簿にご記入を願います」は、話し手が自身の職務によって乗客に対する発話である。(695) 「お子様をお連れの保護者様は特にご注意願います」は、この掲示を見る保護者たちに善意を込めて依頼するものである。(696) 「大阪綿布協同組合の顧問弁護士の八木先生からの紹介状を戴いて参った佐々木よし江と信平と、お伝え願います」は、事務員に対する来客の依頼であるが、第三者(関口弁護士)に願いたいことがあるので、丁寧な言い方を用いている。したがって、(694) (695) は聞き手に対する依頼内容が話し手の職務に属する物事なので、「指示・助言」の意味が伝わる。これに対して、(696) は聞き手のなわばり意識に属するものを頼んでいるので、「依頼」の意味が感じられる。(694) 「ご記入を願います」は「ご記名ください」に、(695) 「ご注意願います」は「ご注意ください」に置き換えられる。

(697) 「お連れさまは……」

「もう少し休んでいきたいというから……。あ、これが料金だ。もし余ったら、彼女があとで帰るときにでも渡しておいてください。ちょっと急ぐから、靴を願います」(宿：p. 161)

男性客→女将

(698) 「裁判長！只今の原告代理人の尋問は、誘導尋問でありますから、取消しを願います、また被告を法廷において非難するような発言は好ましくありません！裁判長からご注意を願いたい」(巨塔-3：p. 186)

弁護士→裁判長

(697) 「ちょっと急ぐから」は、話し手が「靴を願います」と依頼する理由である。(698) 「只今の原告代理人の尋問は、誘導尋問でありますから」は、話し手が「取消しを願います」といった理由である。

日本語の理由節で使用される「から」は、よく英語の「because」に翻訳されている。「because」の用法について、Sweetser (2000：p. 108) は、次の例を挙げて分析している。

- a. John came back because he loved her.
(ジョンは、彼女を愛していたので帰ってきた。)
- b. John loved her, because he came back.
(ジョンは彼女を愛していたのだ。というのは、彼は帰ってきたからだ。)
- c. What are you doing tonight, because there's a good movie on.
(今夜何か予定ある？というのは、いい映画をやっているから。)

a 「John came back because he loved her.」の2つの節をつないでいるのは、現実世界の因果性である。b 「John loved her, because he came back.」は、一見すると、因果関係が逆転しただけのように見える。しかし、b は、ジョンが帰ってきたと話し手の知ったこと(前提)から、ジョンが彼女を愛していたという結論が導き出されたのである。そして、c 「What

are you doing tonight, because there's a good movie on.」の「because」節は、主節が表している言語行為の原因を説明する機能がある。「私はあなたに今夜の予定を尋ねるが、それは面白い映画を見に行こうと提案したいためなんだ」のである。Sweetserの研究を要約すると、最初の「because」は内容領域（ジョンは帰ってきた理由）、2番目の「because」は認識領域（そう判断する根拠）、最後の「because」は言語行為領域（そう提案する理由）に関わるものである。

再び(697)(698)を検討する。「から」節は、確かに「願います」による依頼という言語行為領域の理由になる。しかし、その理由の根拠は同じではない。(697)「ちょっと急ぐから」は話し手が個人事情に基づいた判断である。(698)「只今の原告代理人の尋問は、誘導尋問でありますから」は話し手が現場の状況、または自分の職務に基づいた判断とも言えるであろう。ただし、理由節で述べられたことは、話し手の判断によるものである。「願います」による依頼内容は、話し手のなわばり意識に属さず、時には聞き手のなわばり意識に侵入することもある。したがって、次のような構造がある。



更に丁寧である「願います」の例も見られる。

(699) 「今津君は、一ヵ月先の第二回選考委員会では、菊川君をうんとクローズアップさせるように持って行って貰いたい、その場合でも私が、自分の手もとにいる財前君をさしおいて、積極的に菊川君を推すわけにはいかないから、君に推して貰うしか術がない、そして大河内教授の鑑識にかなうような推し方を願います」

「そんなにおっしゃられると、恐縮です」(巨塔-1 : p. 400)

教授→やや若い教授

(700) 「相続人みんなの合意があれば、遺産の分与ができるとも聞きました。ですから、奥様がご子息と話し合われて、私のお腹の中の胎児に相応の分与をしてくださるよう、願います。」(女 : p. 256)

女性→不倫の相手の未亡人

(701) 二三日すると、甲信新聞社の販売部から、「前金切れとなりました。つづいてご購読くださるようお願い申し上げます」とのはがきが来た。たいそう商売熱心な新聞社である。

芳子は返事を書いた。「小説がつまらなくなりました。つづいて購読の意思はありません」そのはがきは、店に出勤する途中に出した。(張込み : p. 187)

新聞社→購読者(女性)

(699)「大河内教授の鑑識にかなうような推し方を願います」は、「願います」の例である。話し手はやや目下の聞き手に自身の好きな人を推薦してもらいたい。(700)「私のお腹の中の胎児に相応の分与をしてくださるよう、願います」は、不倫の相手が亡くなった後、話し手がその妻に自身のお腹の子供のため遺産を分けてもらいたい。「～よう願います」は「してください」のような直接の依頼が避けられる。(701)「つづいてご購読くださるようお願い申し上げます」は、新聞社からの勧誘で、葉書による文章である。そのため、改まった感じがある「願います」を使用している。

また、「から」節と接続する例も見られる。

- (702) そして豚の部品をひと通り食べおわったとき、風間と雄二郎がたちあがった。
 「社長、ここは安いですから勘定をおねがいします。われわれはこれから翻訳の打ちあわせをしなければならので、これで失礼します」風間はこう言って店を出ると、あれで火がついたな、と空を見あげてわらった。(梅：p. 142)
 男性→親しくない男性
- (703) 「ああ、財前だ——」
 「中央手術室からでございますが、患者は間もなく手術可能な麻酔状態に入りますので、教授のご用意をお願い致します」(巨塔-4：p. 347)
 婦長→教授

(702)「社長、ここは安いですから勘定をおねがいします」によって、話し手はやや強引に親しくない聞き手に食事の勘定を払ってもらいたいと頼んでいる。一方、(703)「患者は間もなく手術可能な麻酔状態に入りますので」は、経験による判断である。「教授のご用意をお願い致します」という話し手の発話は、職務に基づいている。ここでも(Ⅱ)の構造が見られる。

- (704) 「だからね、本当の本当は、あたしが如月さん見たくて呼んでもらったようなもんなんです。でも藤本さんには内緒ですから、そこんそこお願いしますね。未来ちゃんとかは知ってますけど、あと、萩原君も。ほら、ここ娯楽がないから、つまらないことで結構盛り上がれるんですよ。でも—うん、気づいてもらえなくてがっかりしましたけど、予想よりお元気そうで安心しました。それにあたしだってね、あの記事見るまで如月さんのことなんですっかり忘れてましたから、おあいこなんです」(四日：p. 158)

- 女性→昔の高校先輩
- (705) 「美佳さん、私これからちょっと出かけますけど、お留守番お願いしますね」
 「鍵はかけていってくれるんでしょ」
 「ええ、それはもちろん」
 「だったらいいよ。誰が来ても出ていかないから」ベッドで寝そべって雑誌を読みながら、美佳は答えた。(白夜：p. 797)
 家政婦→お嬢さん

(704)「藤本さんには内緒ですから」は、話し手の個人情報に関する依頼の理由になる。
 (705)「私これからちょっと出かけますけど」は、話し手の個人行動に関する説明になる。
 このように、「から」節も「けど」節も従属節であるが、「から」節は依頼の理由として使用する。「けど」節は現況の説明として使用する傾向が見られる。

最後は「頼む」による依頼表現である。

- (706) 「兄弟、書状を頼む」
 「お、おう」気圧された水谷が書状を前に差し出す。誠司は血にまみれた親指を名前の下に押し付けた。(空中：p. 100)
 男性→やくざの仲間
- (707) 「ただのひきつけだろう。長谷川君、この娘に鎮静剤を頼む。急いでな」
 「はい、わかりました」(四日：p. 355)
 医者→看護師
- (708) 「これはまだ隠密捜査の段階じゃから、いまの話は口外せんように頼みますよ」
 「承知しました」(悪霊：p. 73)
 刑事→村医

(706) (707) は「頼む」の例である。(706)「兄弟、書状を頼む」は、話し手が仲間に書状

を依頼する。(707)「長谷川君、この娘に鎮静剤を頼む」は、医者が看護師に対する発話である。話し手は「頼む」を使用するが、語用論的条件によって「指示」の意味が伝わる。(708)「これはまだ隠密捜査の段階じゃから、いまの話は口外せんように頼みますよ」は、「～ように頼みます」の例で、「～を頼む」より婉曲である。「から」節は話し手のなわばり意識に基づく主観の判断で、話し手は聞き手を命令するような力がないが、刑事なので「依頼」の意味が感じられる。そこで、次のような構造がある。



しかし、「から」節の内容は、話し手が聞き手に頼む理由にならない例がある。

- (709) 「教室のことだけではなく、もちろん診療面における怠慢や事故も、一切、僕の責任になるから、さっき云った分担保で留守中の管理を頼みたい、万一、事故が起きた場合は、はっきり責任を取って貰うから、そのつもりで頼む、いいかね」(巨塔-2 : p. 353-354)
教授→医局員

話し手は聞き手に留守中の管理を頼み、万一事故が起きた場合、聞き手に責任を取ってもらおうと宣言している。このように、「から」節によって話し手の主張を表す。

対等な人や上位者に「願う」を使用するのに対し、対等な人や下位者に「頼む」を使用する傾向が見られる。また、「頼む」には「お／ご～願う」のような文法的な用法はない。更に、依頼の相手が第三者であるような場合には「頼む」の方が自然である。したがって、客観的に叙述する場合、森山(1991 : p. 51)は必ず「頼む」を用いると主張している。用例の分析から、「願う」「お願いする」「頼む」による依頼表現は、主に「依頼」「指示・助言」として使用されることが分かる。

2.4.2. 「依頼動詞+たい」の構造

「願いたい」「お願いしたい」「頼みたい」による依頼表現を考察する。まず、「願いたい」「お～願いたい」の例を見る。

- (710) 「まあ奥さんとしちゃこんなどこ見られては、われわれがどんなひどいことをしたと思われましようが、自分一人で騒ぎだされたんですから、誤解のないように願いたいです。実際われわれも迷惑してます。」(おと : p. 123)

医局員→患者の妻

- (711) 「うちの社の観測では、おそらく、すれすれのところだろう、というのです。先ず、今回は極印つきの方をリストにのせているだけで、依然として先生はマークされている、という見方をしています」

かれは玖村の名誉をいよいよ重んじた。

「それで、そういう事情ですから、今度の新しい教科書執筆には、お休み願いたいのですが」
 玖村は、その夜、睡ることが苦しかった。(張込み : p. 419)

教科書出版社の編集者→大学教授

- (710) 「自分一人で騒ぎだされたんですから」によって、話し手が聞き手に自身の判断を

述べている。「自分一人で騒ぎだされたんです」は、「聞き手の誤解」と必ずしも現実世界の因果性が存在するのではない。また、聞き手の誤解については、「まあ奥さんとしちゃこんなところ見られては、われわれがどんなひどいことをしたと思われましょうが」に基づいた話し手の推測に過ぎない。そこで、(710)は、話し手が自身の推測に基づき、聞き手に誤解されていると判断し、その誤解をやめるように聞き手に依頼するのである。これに対して、(711)は話し手が実際の状況(執筆の聞き手がマークされていること)によって、今度の仕事が無くなることを聞き手に連絡している。聞き手が大学の教授なので、話し手は「お休み願いたいのですが」という丁寧な依頼表現を使用して出版社の決定を知らせている。

- (712) 「あの、富士の樹海を見たいのですが」
「樹海？」頼子の言葉に、事務員は、「樹海といいますと、ずっと西湖のほうですか？」とききかえした。
「あの、わたくし、よくわかりませんの。こちらは初めてですから、案内をお願いしたいんです」
「かしこまりました。すぐ出させます」(波-下：p. 359)

女性客→タクシーの事務員

- (713) 「教室のことだけではなく、もちろん診療面における怠慢や事故も、一切、僕の責任になるから、さっき云った分担で留守中の管理を頼みたい、万一、事故が起った場合は、はっきり責任を取って貰うから、そのつもりで頼む、いいかね」(巨塔-2：p. 353-354)

教授→医局員

【再掲】

(712)「初めてですから」は「案内をお願いしたいんです」という依頼内容と、現実世界の因果性があると考えられる。(713)は再掲例である。「教室のことだけではなく、もちろん診療面における怠慢や事故も、一切、僕の責任になるから」は、「さっき云った分担で留守中の管理を頼みたい」という依頼内容との間に、現実世界の因果性は明らかではない。しかし、「から」節を「頼みたい」による依頼文と倒置して再び考察する。まず「さっき云った分担で留守中の管理を頼みたい」と聞き手に依頼する。次に「教室のことだけではなく、もちろん診療面における怠慢や事故も、一切、僕の責任になるから」と追加して説明する。このようになって、話し手の話の筋が分かる。そこで、2つの節は、主節と従属節の関係ではなくて独立の節だと考えられる。「から」節は話し手の認知を表し、「頼みたい」による依頼文は聞き手に対する「依頼」を表す。即ち、(712)の「から」節と「お願いしたいのです」との間に、現実世界の因果性がある。これに対し、(713)の「から」節と「頼みたい」との間にそのような因果性はない。話し手の認知や依頼の意図に基づいた独立節である。

このように、語尾の接続の影響で、「願う」「願います」「頼む」は依頼の意志を強く表すのに対して、「願いたい」「お願いしたい」「頼みたい」は依頼の希望を表して、依頼性はそれほど強くない。

3. 前置き型の意味・機能

3.1. 予告の機能

前置き型は、依頼表現の発想モデル「話し手は自身の不足の解決が聞き手にかける負担を考えて、聞き手に依頼したいことを予告する」というステップに関する実践である。「聞き手にかける負担」が2つある。1つ目は依頼内容が聞き手にとって実行しにくいものである。

2つ目は親しくない話し手からの要請である。前置き型には、「したい」「してほしい」「依頼動詞+たい」とそれぞれ名詞の用法が含まれる。

まず、「したい」「してほしい」に関する例を考察する。

- (714) 「ちょっとお話をしたいんですが、今よろしいですか」
何の用だと義男は訊いた。「金の話なら聞いたよ。振り込んだそうじゃないか」
古川は電話だというのに密談でもしているみたいに声を潜めた。
「その件なんです。金のことで、ちょっと」
やっぱり払えないとでもいうのか。それならそれで結構だ。
「実は、今日振り込んだのは百万円だけなんです。当座は、それでもかなりの足しになるでしょう？」
義男は黙っていた。(摸倣-下：p. 249-250)
男性→義父
- (715) 「実は池田一郎のことで、少しお話を聞きたいんですが、どこか部屋は」
「あ、それなら、どうぞこの中で」と受付の娘が、「もうここはしめ切りで、カーテンをひきますから」(悪霊：p. 176)
刑事→病院の受付

このように、情報伝達に関する依頼文が多く見られる。(714)の話し手は、「ちょっとお話をしたいんですが」によって聞き手に依頼の意味を伝えて、「今よろしいですか」によって聞き手の都合を訊ねている。しかし、この時点に話し手の意図、つまり何を話したいかはまだ分からない。そして、聞き手は「金の話なら聞いたよ」と当てている。これに対して、(715)「少しお話を聞きたいんですが」は(716)と伝達の方向が逆になり、話し手が話をしたいのではなく、聞きたいのである。しかしながら、同じく情報要請に属している。「実は池田一郎のことで」という前提に基づき、話し手の意図がはっきり分かるので、(715)「少しお話を聞きたいんですが」は依頼の予告ではなく、依頼そのものである。そこで、要請的依頼表現の表出型に分類する。

また、(714)(715)「したいんですが」の「が」は、聞き手に都合や対話のできる場所を聞く前、話し手の希望を聞き手に伝達する効果があると見られる。「から」節と同じく順接の接続であるが、「から」節のような因果関係はない。つまり、「ちょっとお話をしたいんですが」が「今よろしいですか」との接続は、話し手の意図による結果である。情報伝達の場合、相手の都合や適切な談話の場所を確認するのは、礼儀が正しいやり方とされている。そのため、因果関係のない2つの節は慣用的に繋がっている。

また、「したいことがある」「したいことがあるのだ」など名詞の用法も見られる。

- (716) 「君に打ち明けたいことがある」彼がいうと、千都留は顔を上げた。その目は少し潤んで見えた。
「三年ほど前、僕は結婚した。けどどじつは結婚式の前日、僕はある重大な決心をして、ある場所に行ったんだ」千都留は首を傾げた。その顔からは笑みが消えていた。
「その内容について、君に打ち明けたい」
「はい」(白夜：p. 503)
男性→好きな女性
- (717) 「福寿庵に勤めている小橋一郎というのは君だね」さっと青くなって一郎はうなずいた。
「ちょっと聞きたいことがある。署まで来てもらいたい」
「だって……だって、おれ……なんにも……」一郎が、あえぎあえぎ言いかけた。が、警官はとりあおうとはせず、いつのまにかすぐうしろに来ていたパトカーのドアをあけた。(三日：

(716)「君に打ち明けたいことがある」は、「聞いてください」に置き換えても意味が変わらない。次の発話を予告する機能がある。このような場合、話し手の説明に従って聞き手は徐々に話し手の伝えたいことを理解している。(717)「ちょっと聞きたいことがある」は、「言ってください」に置き換えられないであろう。というのは、後文「署まで来てもらいたい」は話し手の伝えたいことであるからである。そこで、「ちょっと聞きたいことがある」は、「署まで来てもらいたい」という依頼の理由になる。「ちょっと聞きたいことがある」は話し手の希望を述べているが、「署まで来てもらいたい」は、話し手が聞き手を特定して強く働きかけている。

このように、「したい」による前置き型は、情報伝達についての依頼に使用される傾向がある。そして、依頼表現の発想モデル「話し手はその不足が聞き手に対する負担を考慮して、先に依頼を切り出した方がいいと思っている」という話し手の配慮は、依頼内容が聞き手にとって難しいからである。また、話し手は聞き手と親しい関係ではないからである。

「してほしい」が情報伝達に用いられる例もある。

(718) 「ちょっと相談にのってほしいんだけど、私が十億円チャリティの寄贈対象者に選ばれたのは知ってるでしょ。で、昨日の晩、いえ、正確には今日の午前零時、寄贈対象者のうちの一人が事故で死亡したの。これも知ってるわよね

「ああ」返事が少しまともになっている。(獲物：p. 115-116)

女性→元の亭主

(719) 「では、一つ教えてほしいことがあります

「何ですか」

「名前です。その男の名前を教えてください。それから最後に住んでいた場所の住所も」(白夜：p. 618)

探偵→刑事

(718)「ちょっと相談にのってほしいんだけど」は、次の発話とのつながりはあまり明らかではない。話し手は「ちょっと相談にのってほしいんだけど」を用いて聞き手に依頼したが、聞き手の返事を待たないで相談したい内容を持ち出している。(719)は(718)と異なり、「一つ教えてほしいことがあります」は、「その男の名前を教えてください」の前置きだと考えられる。「何ですか」という聞き手の問い返しは、聞き手が話し手の依頼の意図を理解して依頼内容を訊ねることを示している。したがって、「一つ教えてほしいことがあります」は、依頼の前置きだけではなく、聞き手の聞き入れを求める機能もある、と考えられる。また、「一つ教えてほしいことがあります」は話し手の希望を述べているが、「その男の名前を教えてください」は聞き手目当ての直接性と命令的依頼表現の強い依頼性を表している。

(720) 「それで、僕の推定が合っているかどうか、調べてみたいのだから。一つ協力して欲しいが

太市がいうと、新六はうなずいた。

「ええとも。是非やらせてくれ。わしの方が手が空いている」

「有難う」と太市は礼をいった。

「それじゃ、君は十日の夜、あの岸壁の沖にいた貨物船と汽船は何処の船で、誰にチャーターされたか調べてくれ。汽船といっても、小さなランチ程度だ」(張込み：p. 367-368)

男性社員→先輩

- (721) 「ただ、大森さんにひとつだけ協力してほしいことがあってさ」伊良部が身を乗りだす。和雄も背中を曲げ、耳を傾けた。「あの区民体育館って裏にトイレの窓があるわけ。最初はその窓を割って入れればいいだろうと思ってたんだけど、できることなら器物破損は避けたいじゃない」
「ええ」
「今夜、大森さんはプールに行くわけでしょ。そのとき、トイレの窓の鍵をドライバーを使って外しておいてくれないかなあ」(プール：p. 55-56)
医師 (四十代前半の男性) → 患者 (三十代の男性)

(720) のように「してほしい」によって予告の機能はない場合もある。「僕の推定が合っているかどうか、調べてみたいのだ」は、話し手の依頼の理由が明らかになり、「一つ協力して欲しいが」は聞き手に対する依頼の意を表している。依頼内容は情報要請ではなく、行為要請に属する。(721)「ひとつだけ協力してほしいことがあってさ」は、同じく行為要請に属するが、話し手の意図や動機を説明するような前提はないので、依頼の表出ではなく依頼の前置きに分類する。前置きならば、通常、話し手の詳しい説明が後接することがあるが、(721)のように「そのとき、トイレの窓の鍵をドライバーを使用して外しておいてくれないかなあ」などの質問的依頼表現と共起する場合もある。このような場合、話し手は聞き手が受諾するかどうかに対して、自信を持たないからである。

「してもらいたいことがある」にも予告の機能がある。

- (722) 「村野だ。ちょっと調べてもらいたいことがある」
「ああ、いいとも。何だ」
「報道協定とやらになりそうなので、オフレコに願いたい」
「わかってるさ」と答える中田の声が弾み始めた。他人のスキャンダルが嬉しいのではない。事件が好きなのだ。事件が起きて、それをどう追いかけて、記事でどう料理するかが。
「実は吉永小百合が草加次郎に脅迫されているらしいんだ」(灰：p. 61)
男性編集者 → 情報交換の仲間
- (723) 「なにかあったんですか工場長」
「ちょっと君に教えてもらいたいことがあるんだよ」
「株の上場問題じゃないんですか」
「どうして？」
「だってこの時期に、工場長が深刻な顔をしてぼくに教えてもらいたいことがあるというくらいの問題といえば、ほかには考えられませんからね」(人事：p. 58-59)
工場長 → 部下

(722)「ちょっと調べてもらいたいことがある」という話し手の発話に対して、聞き手は「ああ、いいとも。何だ」と問い返している。聞き手の問い返しは、話し手の発話を聞き入れたと裏付ける。(723)「ちょっと君に教えてもらいたいことがあるんだよ」という話し手の発話に対して、聞き手は、「株の上場問題じゃないんですか」と問い返している。聞き手の問い返しから、聞き手は話し手の依頼の意図が分かると考えられる。したがって、「してもらいたいことがある (のだ)」には予告と承諾求めという機能がある。

3.2. 前置き型のストラテジー

前置き型は、前述した「したい」「してほしい」の他に、依頼動詞に関する前置き型も見られる。依頼動詞による前置き型には、①「お願いする」系、例えば「お願いがある」、「お願いがあるのだ」とそれに対応する丁寧体、「お願いしたい」「お願いしたいことがある」「お願い

いしたいことがあるのだ」とそれに対応する丁寧体、「お願いします」など、②「頼む」系、例えば「頼みがある」「頼みがあるのだ」とそれに対応する丁寧体、「頼みたい」「頼みたいことがある」とそれに対応する丁寧体などが含まれる。「したい」「してほしい」と同様に依頼表現の前置き段階に属するので、他の依頼表現と共起する例が多い。

まず、「お願い」に関する用法を見る。

- (724) 「でも、私にもお願いがあるの……いいかしら」
八重は、和歌子の声を聞いているうちに心に萌し、いまは胸の内に広がる平野のように、確かなものになりつつある感情について、話してみたくなくなった。
「お願いというのは、和歌子さん、あなたにも、私を見送って欲しいの……勝手なことですけど」
和歌子は、傍らに寄り、ベッドの端に手を置いた。(霧：p. 267-268)
女性→愛人の妻
- (725) 「お願いがあるんです。変なお願いなんですけど、聞いてもらえますか？」
頷きながら、不思議な感じに捕らわれていた。(略)
「あのですね、——あたしが寝つくまで、千織ちゃんにするみたいに、手、繋いでてもらえませんか？ソファを横に持って来ていただけると、如月さんもそんなに辛い姿勢にならなくて済むと思うんですけど」(四日：p. 270)
女性→少女の保護者

(724) のように、「お願いがあるのだ」などの名詞の用法は、一人称（私）に二格がつく。「したい」「してほしい」は一人称にガ格がつくのと異なるが、意味上で一人称の希望なので、視点は話し手にある。「私にもお願いがあるの」の「のだ」は、伝達の機能がある。したがって、「私にもお願いがあるの」は、話し手が希望のあることを伝えている。しかし、希望の内容は言っていない。話し手は「いいかしら」を用いて、聞き手に自身の希望を聞いてもいいのかを訊ねている。「お願いというのは、和歌子さん、あなたにも、私を見送ってほしいの」によって、話し手の希望を明らかにしている。(725)「お願いがあるんです」は、話し手が希望を伝えている。「変なお願いなんですけど、聞いてもらえますか？」は、話し手が聞き手に希望を聞いてほしいと依頼している。聞き手の承諾をもらった後、話し手は「あたしが寝つくまで、千織ちゃんにするみたいに、手、繋いでてもらえませんか」と頼んでいる。要するに、要望的依頼表現の前置き型は、次のようなストラテジーが見られる。

- (IV) 要望的依頼表現の前置き型のストラテジー：
- 話し手は希望のあることを伝えるが、内容を言っていない。
 - 聞き手にその希望を聞いてほしいと依頼している。
 - 聞き手の承諾をもらえば、話し手は依頼内容を言う。

「お願いがある」に「のだ」を後接すれば、(724) (725) のように伝達の機能がある。「のだ」がなければ、次のように平叙文になる。

- (726) 「じゃあ如月さん、一つお願いがあります」
「なんだろう？」
「もし——その、真理子さんが目を覚ましたら、すぐにあたしを呼んで下さい」
僕はゆっくりと首を縦に振った。(四日：p. 389)
看護婦→患者の保護者
- (727) 「あなたが呼んでください。それと和泉さん、一つお願いがあります」

「うむ？」

「彼を、両親の目の前で手錠をかけてしょっぴくことだけは、して欲しくないのです」(猫：p. 282)

記者→刑事

(726)「如月さん、一つお願いがあります」は、(IV) a「話し手は希望のあることを伝えるが、内容を言っていない」だけではなく、b「聞き手にその希望を聞いてほしいと依頼している」という含意もある。「なんだろう？」という聞き手の問い返しによって、証明できる。しかし、最も直接の問い返しは、(727)「うむ？」である。そこで、c「聞き手の承諾」とは、依頼を聞いてくれる承諾であり、依頼を実行する承諾ではない。「聞き手の承諾をもらえば、話し手は依頼内容を言う」は、「聞き手の承諾をもらえなければ、話し手は依頼内容を言わない」ことも含意する。ちなみに、「一つ」は、「ちょっと」「少し」より名詞系の依頼表現と共起しやすい。(726) (727) のように具体的に一つの頼み事を指す場合が多い。「一つ」を言わないで「お願いがある」だけでも、意味があまり変わらない。「一つ」は「一つだけ」の意味を含意して、聞き手に話し手の依頼を受入れやすい効果を狙っている。

(728) 「ただ、ひとつだけお願いがあるんですけど」

「なんだい？」

真剣だった。「新城喬子を見つけだすんでしょう？」

「そうしたいと思ってる」

「俺たちで見つけだすんでしょう？警察で手配するわけじゃないでしょう？」

「できたら、そうしたいね」

「じゃ、その時——新城喬子に会いに行くとき、頼みます、最初に、俺に声かけさせてください。俺、最初に彼女の声を聞いてみたいんです。お願いします。俺に声をかけさせてください」

(火車：p. 481)

若い男性→刑事

最初、話し手は控え目な態度で「ただ、ひとつだけお願いがあるんですけど」と自身の希望を述べている。聞き手の意向を確認した後、話し手は「その時——新城喬子に会いに行くとき、頼みます、最初に、俺に声かけさせてください。俺、最初に彼女の声を聞いてみたいんです。お願いします。俺に声をかけさせてください」と依頼している。しかし、話し手は「ひとつだけお願いがあるんですけど」と言っていた。したがって、ここでの「ひとつだけ」は、1つの依頼表現ではなく、一貫性のある依頼表現を指している。

(729) 「一つ皆さんにお願いしたいんですが、このところ捜査本部によせられる封書などに、【パッドマン】を巧妙に騙った内容のものが増えてきております。これは捜査の妨げになりますので、ぜひやめて頂きたい。早津さんへの脅迫状にも見られるように、本物の【パッドマン】なら本人しか知り得ない話を入れてくるでしょうから、本物か偽物かはすぐに分かります。非常識な行為はどうかご遠慮下さい」(犯人：p. 190)

刑事→テレビの視聴者

「一つ皆さんにお願いしたいんですが」の「一つ」には、「これは捜査の妨げになりますので、ぜひやめて頂きたい」と「非常識な行為はどうかご遠慮下さい」を含む。(77)と同じく、一貫性のある依頼表現を指している。

次に、「お願いします」による前置き型も見られる。

(730) 突然お便りします。ごめんなさい。いきなり大きな荷物を送りつけられて、きつとびっくりしているでしょうね。率直にお願いしますが、しばらくのあいだ、わたしのこの卒業アルバムを預かってくださいませませんか。(火車：p. 468)

女性→昔のクラスメート

(731) 「最後にひとつだけお願いします。そのパンフレットをいただけませんか?」
口元の険しいしわを消さないまま、受付の女性は機械的な仕草でパンフレットを一部抜き出し、カウンターの上に滑らせた。

「ありがとう」(火車：p. 343)

中年の男性→研修センターの受付

(730) 「率直にお願いしますが」は、続いてくる「しばらくのあいだ、わたしのこの卒業アルバムを預かってくださいませませんか」という依頼を予告している。(731) 「最後にひとつだけお願いします」も同じ機能がある。「そのパンフレットをいただけませんか」という依頼を予告している。

「一つ頼みがある」「一つ頼みがあるのだが」の例も見られる。

(732) 「千織、一つ頼みがある——弾いてほしい曲があるんだ」こくん、と千織が頷いた。

「僕の代わりに、真理子の——お姉ちゃんのために」(四日：p. 478)

保護者→少女

(733) 「それでも、ガミさんが俺に感謝してくれるなら、ひとつ頼みがあるのだが」
先回りして、武上は言った。「搜索が終了したら、網川の“山荘”を見せてくれ、だろ？」

「そうだ」

「いいよ。いつになるか約束はできんが、必ず連れてゆく。隅から隅まで見せてやるよ」

「ありがとう」(摸倣-下：p. 691)

刑事→昔の同僚

(732) 「一つ頼みがある」は、「弾いてほしい曲があるから、弾いてくれ」という依頼の予告である。「弾いてほしい曲があるんだ」の「のだ」は、説明の機能がある。(733) 「ガミさんが俺に感謝してくれるなら、ひとつ頼みがあるのだが」の「ひとつ頼み」は、「搜索が終了したら、網川の“山荘”を見せてくれ」である。これに対して、

(734) 「お舅さんに、ちょっと頼みたいことがあるんだがな」

「何かしら？どんなことですか」

「いや、仕事の話だから、僕がお舅さんにお目にかかって直接、お話するけど、杏子からも、ちょっと電話をしておいてくれよ」(巨塔-1：p. 57)

夫→妻

(735) 「ところで、枝理子。少し君に頼みたいことがあるんだがな」

「なあに？」

「君と結婚すると言ったな」

「そうよ。あら、ひとごとみたいね。そんなに熱意がないのかしら？」

「熱意があるから、君にも協力してもらいたいんだ」

「なんだか知らないけれど、いいわ」(水：p. 88-89)

男性→不倫の相手

(734) 「ちょっと頼みたいことがあるんだがな」の「ちょっと」、(735) 「少し君に頼みたいことがあるんだがな」の「少し」は、聞き手にかかる負担を軽減化する効果を狙っている。「頼みたいことがあるんだがな」によって、話し手の依頼の意図が分かるが、依頼の内容が不明である。

4. 念押し型の意味・機能

念押し型は、主に依頼動詞「願います」「頼む」、名詞「お願い」による依頼表現を指す。依頼表現の発想モデルは「依頼の目的を達成するため、話し手は聞き手に粘り強く依頼する」によって、念押し型と命名されたのである。「願う」系と「頼む」系による依頼形式は、機能に基づいて表出型、前置き型、念押し型に分類される。表にすれば、次の通りである。

表7 「願う」系と「頼む」系の分類

要請的依頼表現	機能	依頼形式	類型
「願う」系	本動詞	願う	表出型
		願います	前置き型、表出型、念押し型
	名詞系	お願い	念押し型
		お願いがある	前置き型
		お願いがあるのだ(が/けど)	前置き型
		お願いしたいことがある	前置き型
		お願いしたいことがあるのだ(が/けど)	前置き型
	希望形	願いたい	表出型
		願いたいのだ(が/けど)	表出型
		お願いしたい	表出型、前置き型
お願いしたいのだ(が/けど)		表出型、前置き型	
「頼む」系	本動詞	頼む	表出型、念押し型
		頼みがある	前置き型
	名詞系	頼みがあるのだ	前置き型
		頼みたいことがある	前置き型
		頼みたいことがあるのだ(が/けど)	前置き型

4.1. 「願います」系による念押し型

「願います」系は、「表出型」にも「念押し型」にも属する。念押し型の「願います」は、話し手の依頼の意図を表したり強調したりする効果があると見られる。本章の2.4.1節に述べたように、聞き手に依頼する内容が明示されている場合、「願います」は表出型に属する。これに対して、念押し型における「願います」は、前置き型と同じく、聞き手に依頼する内容が明示されていない。丁寧体「願います」は、念押し型の中で最も頻繁に用いる依頼形式である。

- (736) 「叔父さんの似顔絵、描いてもらえませんか」
「えっ……？」思いも寄らない申し出だった。
「叔父さんも事件の犯人ですよ」
「でも、写真がちゃんとあるから……」
「願います。描いて欲しいんです」瑞穂は戸惑った。(顔：p.70)

二十歳前後の女性→やや年上の婦警

- (737) 丹野怜子は、目を伏せて聞いていたが、やがて促されると、カメラに向かって顔をあげた。ひたむきな眼差しをいつとき宙に凝らし、心を落ち着けてから口を開いた。
「お兄さん。どんな事情があるのか知りませんが、一日も早く居場所を知らせてください。――もし、会社の方には都合の悪いことがあるのでしたら、せめて私にだけ、連絡をとってください。ご無事でいらっしゃるのなら、必ず連絡してください。願います」
丹野怜子の呼びかけは、先に東京や札幌から放送された家族たちのとは、かなり印象がちがっていた。(蒸発：p.110)

妹→兄(テレビ放送)

【再掲】

- (738) 「ああいう記事が出て騒ぎになると、高井さんはいろいろ責められて、話しにくくなるでしょう。その前に、私はあの人に会いたいです。ぜひ話を聞きたいです。高井さんは前畑さんと親

しいようですが、上役の編集長さんから、前畑さんに言って、高井さんが私と会えるようにしてもらえませんか、お願いします」(摸倣-下 : p. 368)

年配の男性→雑誌の編集長 (年下の男性)

(736)「叔父さんの似顔絵、描いてもらえませんか」という話し手の提案が聞き手に断われたので、話し手は「お願いします」を用いて再び聞き手に依頼している。(737)は再掲例であるが、妹がテレビ放送を通じて行方不明の兄に呼びかけている。公共な場所での発話なので、「してください」「お願いします」などの丁寧な言葉遣いをしている。話し手が使っている依頼表現は3つある。1つ目は「どんな事情があるのか知りませんが、一日も早く居場所を知らせてください」。2つ目は「もし、会社の方には都合の悪いことがあったら、せめて私にだけ、連絡をとってください」。3つ目は「ご無事でいらっしゃるのなら、必ず連絡してください」。話し手は3つの依頼表現を用いて1つの依頼の目的、つまり「私に連絡してください」を表わしている。

また、(738)のように、話し手は聞き手に自身の依頼を受け入れる自信を持たない場合にも「お願いします」を使用する。したがって、念押し型の「お願いします」は話し手の懇願の気持ちを表している。

聞き手の発話に対する返答でも「お願いします」を使用する。まず賛同の意見を表す場合を分析する。

(739)「これで一応、解決ということにさせていただきますが、もちろん奥さまのことは、これからもずっと面倒を見させていただきます」

「お願いします」高伸が頭を下げると、院長は軽く上体を近付けた。

「ご承知かと思いますが、今回のことは、わたし達とあなたとのあいだだけのこととして、内々に……」

そのことは野中医師からもよくきいている。高伸がうなずくと、院長は安心したのか、ゆっくりと席を立つ。(麻醉 : p. 331)

患者の夫→病院の男性院長

【再掲】

(740)「何日のお調べになりたいのですか？」公安官はきいた。

「一月二十一日です。ええと、函館に十四時二十分に着いた連絡船です」

「そりゃ17便です。あなたが行かれるのでしたら函館に電話をかけて、その便の名簿を出してもらうように言っておきましょうか？」

「そうしていただければありがたいですね。ぜひ、お願いします」

三原は、今晚の夜行に乗るから、明日の朝早く函館駅に出向く旨の伝言を頼んで公安官室を出た。(点 : p. 166-167)

刑事→公安官

(739)は再掲例であるが、「もちろん奥さまのことは、これからもずっと面倒を見させていただきます」という聞き手の発話に、話し手は「お願いします」と応えている。医療過誤を犯した病院の院長が話し手の妻の世話を見るのは、道理に合うことである。したがって、このような場合、「お願いします」には、姫野(1992)が主張している「他者の負債を最小限にせよ」という思いやりを含むと考えられる。(740)の話し手は聞き手の提案「あなたが行かれるのでしたら函館に電話をかけて、その便の名簿を出してもらうように言っておきましょうか？」に対して、「そうしていただければありがたいですね」と感謝の意を表しながら、「ぜひ、お願いします」と念押ししている。

次に、聞き手の主張に反対の意見を表す場合である。

- (741) 「公演が終わってからにしてくださいかしら」
「お願いします」加賀は頭を下げた。「もしきいていただけないとなると、我々は令状を取る
ことになります。そういう大げさなことはしたくないのです」(嘘：p. 36)

刑事→女性

- (742) 「ねえ、お願いします。時間と場所を指定して下さい、あたくしの方から出て参りますから
……」
「そうですねえ……。じゃあ、これから三十分後、渋谷の……。そうだなあ、T文化会館の前
あたりはどうです」(影：p. 333)

女性→昔の友達

(741) の話し手は聞き手に捜査をお願いしたが、公演が終わってからのしたいと聞き手に断
われている。話し手は「お願いします」と懇願しながら、「もしきいていただけないとなると、
我々は令状を取るようになります。そういう大げさなことはしたくないのです」と主張を維
持している。(742) 「お願いします」も、懇願する意味が伝わる。形態から見れば、「お願い
します」は聞き手を特定することができない。しかし、聞き手に対する話し手の強い依頼性
が感じられる。

- (743) 「さあ、じゃあわたしはそろそろロビーにすることにします」
「お願いします。彼女は一人で来るんですか？」
「いえ、母親と一緒にです。ただお母さんには、署内で待っていていただきます」(R：p. 58)

刑事→婦警

- (744) 「金は惜しくありません、用意しますよ」
「明日までに？」
「できると思います。銀行の幹部に頼みましょう」
「では私もお同行します。事情を説明して極秘にしてもらえれば好都合です」
「お願いします」(名探：p. 25)

被害者の父→刑事(警部)

(743) 「お願いします」は、話し手が聞き手の行動(「わたしはそろそろロビーにすること
にします」)に賛成している。(744) も同じく、話し手は聞き手からの提案(「私もお同行し
ます」)に賛成しているだけでなく、依頼主の立場に立って聞き手に「お願いします」と依
頼している。要するに、「お願いする」は「懇願」「念押し」の機能が見られる。

「お願い」も念押し型に属する。

- (745) 「シゲちゃんはいいいよ」昭二はムツとしたようだった。「自分のことだからさ。だけど俺はよ
くわかんないまんま巻き込まれてるんだぜ。疲れて帰ってきてるのにさ」
「そのことはホントに悪いと思ってる。けど、今は勘弁して。ね、お願い。あとで埋め合わせ
するから。絶対するから」
昭二は顔はむくれたままだったが、ふふんと笑った。「この卵、どうすんの？」(模倣-上：
p. 198-199)

妻→夫

「今は勘弁して。ね、お願い」のように、話し手は依頼の意図を強調している。名詞の普
通体「お願い」は、「お願いです」や「お願いします」より、聞き手に対する依頼性が強く伝
わる。主に女性の話し手が親しい相手に対して用いる。

- (746) 「小野木さん、お願い。ごいっしょにいきましょうよ」
「そうですか。ぼくはかまいませんが」
小野木は、輪香子をちらりと見た。かぼっているような瞳だったのが、輪香子に小さな反発を起こさせた。
「小野木さん、ちょっとだけ見せてくださいませんか？」輪香子が、すすんで言った。
二十分の後、三人はタクシーを赤坂のナイト・クラブの前にとめていた。(波-上：p.136)
女性→知り合ったばかりの男性

「お願い。ごいっしょにいきましょうよ」も同じく、強い依頼性が伝わる。

- (747) 「お願いだから、そこに座って……いまミルクを暖めるわ」玄関先に仁王立ちしている光夫に、八重は哀願した。心臓が咽元まで鼓動をつきあげ、こめかみのあたりが、それに合わせて痛む。下腹部が、氷をあてられたように重苦しかった。
「お願い」再度促し、光夫はようやくソファに腰を据えた。(霧：p.159)
女性→親友の息子
- (748) 「お願いだからさー。おじさんの頼みを聞いて」今度は手を合わせた。「やってくれたら、二郎君の頼み、なんでも聞いてあげる」
「聞いてくれなくていい」(サウス-上：p.189)
男性→友人の息子

「お願いだから」には陳述副詞のような働きがあると見られる。(747)「お願いだから、そこに座って」は、話し手の哀願の意が伝わる。(748)「お願いだからさー。おじさんの頼みを聞いて」は、地の文(今度は手を合わせた)から話し手の懇願の意が感じられる。

「よろしくお願いします」「よろしくお願いいたします」などの慣用的な用法もある。

- (749) 「諸岡先生にいわれて、僕が受持医になることになりました。よろしくお願いします」
「こちらこそ、我儘な患者ですから、本当によろしくお願いします」(氷：p.187)
若い医者⇔助教授夫人
- (750) 「突然申し訳ございません」男はその場で頭を下げた。奇麗に整髪された頭だった。「あの、おかあさまのほうから話は聞いておられますか」
「はい、聞いております」
「そうですか」男は安堵したような笑みを浮かべ、名刺を出してきた。「こういう者です。よろしくお願いいたします」
その名刺には、『ハート結婚相談センター調査員 前田和郎』とあった。(白夜：p.566)
結婚相談センター調査員→調査している人物の女友達
- (751) 「若林先生をすぐ呼びましたほうが？」
「はい、その先生がいらして、申しわけないのですが、すぐきてほしいと、それでタクシーをそちらへ回しましたので、よろしくお願いします」(老人：p.187)
介護人→訪問看護婦
- (752) 「鵜飼先生が一般質問でウチの関係をやるって小耳に挟んだんですけど」
「ああ。やるようなことを言ってたよ」
「聞いてます？中身」
「きついらしいよ。内容は知らないけど」やはり、鵜飼が『爆弾』を隠し持っていることは確からしい。
「会ったら聞いてみるよ。心配だもんな、柘植さんも」
「よろしくお願いします」柘植は、本気で頭を下げ、夜に電話を入れると告げて、また深々と頭を下げた。(陰：p.201)
県警→県議(男性同士)

- (749) (750)「よろしくお願いします」のように、初めて挨拶する場合によく使用して、今

後世話になるという意が含まれる。(751)の話し手は聞き手に「すぐきてほしいと、それでタクシーをそちらへ回しましたので、よろしくお願ひします」と言っている。そこで、話し手が「よろしくお願ひします」と依頼する内容は、「すぐきてほしい」と「タクシーをそちらへ回しましたので、それに乗ってください」を指す。(752)「よろしくお願ひします」は、聞き手に頼んだことがあって用いているのである。

森山(1991:p.50)は、「依頼の内容にははっきり言及しないで、漠然と全般的な援助を委託したり、あるいは、今までの話の中ですでに依頼したことを、依頼の部分だけ取り出して、もう一度念押ししたりする用法である」と指摘している。しかし、話し手は積極的に聞き手の提案に賛同する場合にも、「よろしくお願ひします」を用いる。

- (753) 「とにかく、もう一度検討して出直して来ます」
「いずれきちんとした計算書を郵送いたしますよ」
「はっ、よろしくお願ひします」(井戸:p.9)

男性→税理士

- (754) 「転出届ね、おねえさんが送ってくるのは」おねえさんが言った。「こっちは知らせようがないから、二郎君が頃合いを見計らって取りに来てね」
「よろしくお願ひします」二郎はしおらしく頭を下げた。(サウス-下:p.100)

男の子→売店のおばさん

(753)「よろしくお願ひします」によって、話し手が聞き手の提案「いずれきちんとした計算書を郵送いたしますよ」に賛同を表している。(754)「よろしくお願ひします」は、話し手が聞き手の依頼「転出届ね、おねえさんが送ってくるのは、こっちは知らせようがないから、二郎君が頃合いを見計らって取りに来てね」を受け入れている。また、聞き手の住所を借りることに念押しをしている。

「よろしくお願ひいたします」は、手紙にも現われる。「どうぞ」と共起すると、もっと丁寧になる。

- (755) カスミさんとの結婚に関して、ご両親様からお許しいただいたと受け取りました。私たちは十月に挙式致します。これで義理の息子となりますので、どうぞ末永くよろしくお願ひ致します。
(頬-下:p.197)

婿→義理の両親 手紙

「お願ひします」や「お願ひいたします」を省略して「よろしく」しか使用しない場合もある。

- (756) 「田沢輪香子と申します。よろしくお願ひします」
頭をさげると、青年も、すこしあわてたように返した。
「小野木喬夫と言います。よろしく」(波-上:p.119)

男性→面識のある若い女性

- (757) 「先日のご協力をいただき有難うございました。本日もよろしく」刑事は低姿勢に出た。
「殺人の疑いが強くなったそうですね。私たちも仲間を殺されたのです。一日も早く犯人を捕まえてもらうためにできるかぎりのご協力をいたします」(凶:p.43)

刑事→男性

- (758) やがて彼はいった。「では、ひとつよろしく」
「ええ、がんばってみます」そういつて今枝は電話を切った。(白夜:p.554)

依頼人→探偵

(759) 「ありがとう。後で連絡するから、叔母さんによろしくね」
早く行ってくれと彼女の目は懇願していた。(手紙 : p. 286)
女性→親戚

(756) 「よろしく」は「よろしくお願ひします」のように丁寧ではないが、初対面のあいさつとよく用いられる。(757) 「本日もよろしく」、(758) 「ひとつよろしく」、(759) 「叔母さんによろしくね」も、慣用的なあいさつ語である。

4.2. 「頼む」系による念押し型

女性の話し手は、「お願ひする」を使用する傾向が見られるが、男性の話し手は「頼む」を使用する傾向が見られる。

(760) 「ところで、奥さんはいかがですか」
「手術は終わったんだが、まだ麻酔が効いているよんでね……」
「それじゃ、ひと安心ですね」
「そんなわけで、もう少し帰りが遅れるかもしれないが、頼む」(麻酔 : p. 30)
男性上司→男性部下

(761) 「機が熟したってことだろ。えーと、浩ちゃん、実家を覗いていくんだっけ?」
津川がハンドルを回しながら訊いた。
「うん、頼む。どれぐらい荒れてるか見ときたいんだ」
独り暮らしをしていた母が死んで七年になる。しばらくは遺品整理などで休みのたびに通ったが、次第に足が遠のき、ここ三年ほどは一度も家の戸を開けていない。
「住むんなら、相当手を入れなくちゃだぞ」
「そんなにひどいか」(真相 : p. 83)
男性→昔の同級生(同年配の男性)

(762) 「酒は」
「頼む」
「ですが、金がなくなりましたので、ダルマはない。トリスですが」
「構わない。いつも俺は二級酒だ」(灰 : p. 419)
刑事→週刊誌の男性記者

(760) 「そんなわけで、もう少し帰りが遅れるかもしれないが、頼む」の「頼む」によって、話し手は漠然に聞き手に仕事のことを依頼している。(761) 「頼む」は、話し手が発話時点の前に依頼したことを念押ししている。(762) 「頼む」は、話し手が積極的に聞き手の提案に賛同する意を表している。「頼む」は文の中での位置が決まっていない。(760) のように文末に置かれることもあり、(761) (762) のように単独の文として用いられることもある。文頭に置く場合、副詞のような機能がある。

(763) 「だから、返す、いうてるやないの、約束やぶったんやから、お金返すわ」
と美々はいい、隆之は今はもう、なりふりかまわぬという調子で、
「なあ、たのむからとっついて。この十万円!」と手を合わせて美々を掴んでみせた。
「あら、ヘンなことしないでよ、タアちゃん……タアちゃんを困らす気はこれっぽっちもないわ」(言 : p. 47)
男性→元彼女

「頼むから」は文頭に置くと、「懇願」の意味があり、念押し型に属すると考えられる。

「よろしく頼む」「よろしく頼みます」は、「よろしくお願ひします」の用法と同様に、(764)

(765) のように漠然に依頼する場合と、(766) のように前述した依頼をもう一度念押しする場合が見られる。男性の話し手は対等な人や下位者に対して使用する。

(764) 「この仕事には慣れたかい」

直貴は男性を見た。相手は微笑んだままだった。ええまあ、と直貴は答えた。

「そうか。うちは流通システムが生命線だからね、倉庫の仕事は重要なんだ。よろしく頼むよ」
はあ、と頷いてから、直貴は改めて男性の笑顔を見た。(手紙：p. 314)

社長→初対面の社員

(765) 「岩田君、このわしの前に坐っとるのが、わしの女婿で、浪速大学病院の第一外科の助教授をしとる財前五郎や、今後、何かとよろしく頼みます」神妙な云い方をすると、岩田は始めて、「ああ、あんたが財前助教授でしたか、お噂はかねがね、なかなか、派手にやっつけられますな、ところで、鵜飼君、どうしてますかな」(巨塔-1：p. 91)

産婦人科医者→医師会長

(766) 「胸部の断層撮影をすりゃあ、君のいう医者の勤めを果せるってわけだな、よし、解ったよ、僕はまだこのあと、午後の総回診が残っているから、これで話がすめば、帰って貰いたいな」
「そうか、それは失礼した、じゃあ、断層撮影の件は、よろしく頼む」(巨塔-2：p. 306)

教授→同期生

(764) は話し手が下位者に、(765) はソト関係の対等な人に、(766) は親しい同期に対する依頼である。

5. まとめ

要望的依頼表現の表出型の形式機能は「話者中心の希望伝達」である。前置き型の形式機能は「依頼行為の予告」で、念押し型の形式機能は「聞き手に粘り強く依頼する」ことである。念押し型は聞き手を特定する機能がなく、直接に依頼内容を言及しない。要望的依頼表現の表出型は、聞き手に依頼する内容を具体的に言う。しかし、命令的依頼表現や質問的依頼表現と異なり、話し手の視点に立って希望・意志を述べることによって、聞き手に依頼の意図を認識させる。

第8章 婉曲的依頼表現の機能とストラテジー

1. 婉曲的依頼表現とは

命令的依頼表現・質問的依頼表現・意志的依頼表現・要望的依頼表現以外には、婉曲的依頼表現⁸⁹がある。次の通りである。

- (767) 「どうですか、これから」
「ハイヤーが呼べますか」
「運がよければね。時によると一時間くらい待たされるけど、来ることはきます。それよか、僕が、車のある所まで送ってあげますよ。……そこでタクシーに乗り換えてもいいし、時間が合えば、バスで岩屋までも出られます。江井から明石までの船もありますが、よく欠航するんでねえ……」(言：p. 108)
女性→近所の男性
- (768) 「おい、洋子。暇ならおれの小説を読まないか」父が御飯を頬張ったまま言った。
「いや」姉が素っ気なく答える。
「文学舎の編集者に読ませたら好評でな。グラにするってよ」
「グラって？」桃子が聞いた。
「活字にするってことだ。おとうさんの小説、いよいよ本になるぞ」(サウス-上：p. 65)
男性→娘
- (769) 「おい、顔でも洗って来たらどうだ。おふくろの方でも驚いてるぞ」
「そんなこと言わないでよお兄さん」(恍惚：p. 51)
兄→妹
- (770) 「まあ、普通のことかもしれませんが、刺激のない田舎では、その男の行動が妙に人目に映っていたことは事実です。電話で詳しくは言えませんが……」
先方の声はこちらへ捜査員を派遣しては、というように聞こえた。
「どうもありがとうございます。都合によっては、こちらからだれかを差し向けるかもわかりません。その節はよろしくお願いします」(砂-上：p. 51)
警官→他署の警官

(767)「ハイヤーが呼べますか」は、話し手は可能動詞を使用し、聞き手に自身の依頼を実行する能力を訊ねている。(768)「暇ならおれの小説を読まないか」は、話し手が動詞の否定疑問文を使用し、聞き手に自身の依頼を実行する意志を訊ねている。(769)「顔でも洗って来たらどうだ」は、話し手が勧めの形で聞き手に依頼している。(770)「電話で詳しくは言えませんが……」は、「先方の声はこちらへ捜査員を派遣しては……」という意味を示している。

「してくれる」系と「してもらおう」系を使用する婉曲的依頼表現もある。複合述語文のかたちで聞き手に自分の依頼を認識させる。

- (771) 「そうそう、これからうちは忙しくなるのよ。イモとか柿とかどどん入荷するし。手伝ってくれると助かるわあ」(OL：p. 166)
女性→中学校時代のクラスメート
- (772) 「……犯歴者リストでパクってやろうか」花村が唸るように言った。
「あれはもう処分しましたよ。だいいちこの前ガサが入ってるんですよ。そんなやばいもん誰が残しますか。それより花村さん、いつまで刑事のつもりでいるんですか。せいぜいあと一週間の命でしょう」
花村は返す言葉がないのか、拳を握りしめ、顔全体を赤くしていた。
「それから、今後は口の効き方にも注意していただかないと。さん付けで呼べとは言いません

⁸⁹ 婉曲的依頼表現は、柴谷他(1982)の婉曲語法(euphemism)を参照して作った用語である。

がね、せめてわたしのことは社長とか呼んでくださいよ」
「……用がなくなりゃあ態度が変わるんだな」(邪魔-下 : p. 213)
やくざ→親しい刑事

(771)「手伝ってくれると助かる」によって、話し手は聞き手に「手伝ってください」の意味を伝えている。(772)「今後は口の効き方にも注意していただかないと」は、文末の「困る」など話し手の気持ちを表す言葉が省略されている。

このように、婉曲的依頼表現は、可能動詞や動詞の否定疑問文、勧め、言いさしなどのかたち、複合述語文による依頼表現、迂言的依頼表現などを指す。婉曲的依頼表現は、命令的依頼表現・質問的依頼表現・意志的依頼表現・要望的依頼表現と発想モデルが異なる。話し手は聞き手との共有知識に基づいて、推論を通じて聞き手に自分の意図を理解させる。

2. 間接的言語行為に関わる分析

Searle (2006 : p. 61) は、婉曲語法を「間接的言語行為」と呼んでいる。更に、「間接的言語行為の分野では、指令型の領域が研究に最も有用」で、「指令型においては、ていねいさは間接性への主要な動機である」と指摘している。Searle (2006 : p. 62-67) が挙げている間接的な命令・依頼文が多いので、本章では日本語の訳文を参考し、一部の命令・依頼文を代表として挙げる。

1. HのAを遂行する能力についての文

Can you reach the salt? (塩を取れますか?)
Could you be a little more quiet? (もう少し静かにできますか?)
You could be a little more quiet. (もう少し静かにできるでしょう。)
Are you able to reach the book on the top shelf? (一番上の棚の本を取れますか?)
Have you got change for a dollar? (1ドル札をくずせますか?)

2. HがAをすることへのSの願望や欲求についての文

I would like you to go now. (私はきみに今行ってもらいたいのです。)
I want you to do this for me, Henry. (私のためにそれをやってほしいの、ヘンリー)
I would/should appreciate it if you would/could do it for me. (私のためにそれをやってくださるなら感謝します。)
I'd rather you didn't do that any more. (そんなことはもうしないでくれる方がいい。)
I hope you'll do it. (きみがそれをするを希望します。)
I wish you wouldn't do that. (きみがそれをしないことを望みます。)

3. HがAをすることについての文

Will you quit making that awful racket? (そのひどい騒音、止めてくれる?)
Would you kindly get off my foot? (親切に私の足の上からどいてくれますか?)
Won't you stop making that noise soon? (その騒音、すぐにやめない?)
Aren't you going to eat you cereal? (あなたはシリアルを食べないの?)

4. AをすることへのHの欲求ややる気についての文

Would you be willing to write a letter of recommendation for me? (私の推薦書を書いてくださるお気持ちはおありでしょうか?)
Do you want to hand me that hammer over there on the table? (向こうのテーブルの上のハンマーを取ってほしいですか?)
Would you mind not making so much noise? (そう大きな音を立てないことはいやですか?)
Would it be convenient for you to come on Wednesday? (水曜日にいらっしゃるのはご都合がよろしいでしょうか?)
Would it be too much (trouble) for you to pay me the money next Wednesday? (そのお金を次の水曜日に私に支払うというのは、大変すぎるでしょうか?)

5. Aをする理由についての文

You had better go now? (今行った方がいいんじゃない?)

Why don't you try it just once? (何でそれをもう一回やってみないの?)

It wouldn't hurt if you left now. (あなたが今立ち去っても困らないでしょう。)

It might help if you shut up. (きみが黙ってくれると助かるかもしれない。)

It would be better if you gave me the money now. (その金は今私に渡した方がいいでしょう。)

We'd all be better off if you'd just pipe down a bit. (きみが少し口をつぐんでくれれば、私たちは皆もっとゆったりできるんだが。)

How many times have I told you (must I tell you) not to eat with your fingers? (手づかみで物を食べちゃだめって何回言ったかしら(言えばいいの)?)

6. これらの要素の一つを別の要素のなかに埋め込んでいる文、また明示的な指令型発語内行為動詞をこれらの文脈の一つに埋め込んでいる文

Would you mind awfully if I asked you if you could write me a letter of recommendation?

(推薦状を書いてくださることがおできかお尋ねしたら、とんでもなくお嫌ですか?)

Would it be too much if I suggested that you could possibly make a little less noise?

(もう少し音を静かにできるかもしれないと示唆したら、でしゃばりすぎになるでしょうか?)

Might I ask you to take off your hat? (お帽子をお取りいただくようお願いしてもよろしいでしょうか?)

I hope you won't mind if I ask you if you could leave us alone. (私たちだけにしておいてくださるかどうかお尋ねしてもお気になさらないと存じます。)

I would appreciate it if you could make less noise. (もっと静かにしてくださるようだと感謝します。)

このように、Searle は、間接的な命令・依頼文を6つのグループに分けて詳しく分析している。Searle (2006 : p. 76) は間接的依頼文を指令型の適切性条件、つまり事前条件(HはAを遂行できる)、誠実性条件(SはHにAをしてほしい)、命題内容条件(SはHに未来の行為Aを述語づける)、本質条件(HにAをさせようとするSの企てとして適用する)に照らしながら、次のように指摘している。

Aを遂行するHの能力(グループ1)は事前条件であり、HがAを遂行することへのSの欲求(グループ2)は誠実性条件であり、HにAを述語づけること(グループ3)は命題内容条件であるから、グループ1から3はすべて、指令型の発語内行為の適切性条件に関係している。何かをしたいと思うことはそれをするためのとりわけ立派な理由であるから、グループ4はグループ5と一緒にいる。両者ともAをする理由に関係するからである。グループ6は、形式上特別なクラスであるに過ぎない。というのも、その要素は遂行動詞であるか、適切性条件と理由という他の二つのカテゴリーにすでに含まれているかのいずれだからである。

Searleにとって、遂行依頼文(つまり直接的依頼文)も間接的依頼文も主に依頼の適切性条件に従っている。しかし、この分類によれば、2つのグループにわたる間接的依頼文がある。例えば、グループ2「HがAをすることへのSの願望や欲求についての文」に属する「I would/should appreciate it if you would/could do it for me.」は、グループ6「これらの要素の一つを別の要素のなかに埋め込んでいる文、また明示的な指令型発語内行為動詞をこれらの文脈の一つに埋め込んでいる文」に属する「I would appreciate it if you could make less noise.」と似ている。また、グループ3「HがAをすることについての文」に属する「Would you kindly get off my foot?」は、グループ4「AをすることへのHの欲求ややる気についての文」に属する「Would you mind not making so much noise?」と似ている。したがっ

て、依頼の適切性条件に基づくと、形態上の類似性によって、はっきり区別できない間接依頼表現があると考えられる。

3. 婉曲的依頼表現の分類とストラテジー

婉曲的依頼表現は、依頼形式のない婉曲的依頼表現と、依頼形式のある婉曲的依頼表現に大別される。前者には可能動詞による婉曲的依頼表現、動詞疑問文による婉曲的依頼表現、提案の形による婉曲的依頼表現、許可求めの形による婉曲的依頼表現が含まれる。後者は複合述語文による婉曲的依頼表現、迂言的依頼表現に分けられる。表にすれば次の通りである。

表8 婉曲的依頼表現の分類

婉曲的依頼表現	依頼形式のない婉曲的依頼表現	①可能動詞による婉曲的依頼表現
		②動詞疑問文による婉曲的依頼表現
		③提案の形による婉曲的依頼表現
		④許可求めの形による婉曲的依頼表現
	依頼形式のある婉曲的依頼表現	⑤複合述語文による婉曲的依頼表現
		⑥迂言的依頼表現

3.1. 可能動詞による婉曲的依頼表現

可能動詞による婉曲的依頼表現は、Searle (2006) の分類の中でグループ1「HのAを遂行する能力についての文」に属する。しかし、「HのAを遂行する能力についての文」だけではなく、「HのAを遂行する可能性についての文」も見られる。婉曲的依頼表現を用いる場合は、依頼しにくい場合が多い。否定疑問文が肯定疑問文より間接であることから、否定疑問文の例が多く見られる。

(773) 「ちょっと外に出られないか」
「頼んできます」(井戸：p. 205)

男性→元の教え子

(774) 彰子はさり気なく提案した。

「お母さん、考えておいてほしいんだけど、この家に一緒に住めないかな」

敏子は驚いて、反射的に遺影に目を遣った。あれだけ彰之に会いたがっていた隆之が死んだ途端に、同居話が出るのが皮肉に思えたのだ。彰之が真面目な面持ちでノートパソコンを閉じた。

「急に言われても困るだろうから、少し考えておいてよ。実は、俺たち、アメリカの商売畳んで、渋谷に店を出そうかと思ってるんでね。そうなる、最初は苦しいじゃない。家賃払うどころじゃないかもしれない。逆に言えば、お母さんだって、いつまでも一人じゃ無理なんだから、いつかは誰かと一緒に住まなきゃなんないと思ってさ。ここで初めて、互いの利害が一致する訳だよ」

「なるほどね。考えておくわ」(魂：p. 28)

息子→母

(773) の話し手は聞き手がアルバイトしている間に、「ちょっと外に出られないか」と聞き手を誘っている。可能動詞「出られないか」によって、聞き手の遂行する能力を聞くように見えるが、「頼んできます」という聞き手の応答から、聞き手の遂行する可能性、つまり出る可能性を聞くことが分かった。(774)「お母さん、考えておいてほしいんだけど、この家に一緒に住めないかな」は、話し手が聞き手に一緒に住んでほしいと依頼している。「この家に一緒に住めないかな」は、「この家に一緒に住む可能性はないかな」という意味である。「実

は、俺たち、アメリカの商売豊んで、渋谷に店を出そうかと思ってるんでね。そうになると、最初は苦しいじゃない。家賃払うどころじゃないかもしれない。逆に言えば、お母さんだって、いつまでも一人じゃ無理なんだから、いつかは誰かと一緒に住まなきゃなんないと思っ
てさ。ここで初めて、互いの利害が一致する訳だよ」は、話し手の依頼の動機である。

可能動詞による婉曲的依頼表現は、すべて Searle の分類の中でグループ 1 「H の A を遂行する能力についての文」に属するものには限定されない。可能動詞によって、話し手の視点に立って描写している「話し手 (S) の依頼行為 (A) を遂行する能力についての文」も見られる。

- (775) 向井が教室にいたハッセに向かって聞いた。「おい、長谷川。おまえのおにいさん、柔道部のキャプテンか」
ハッセが振り返り、「そうだけど」と言う。
「ちょっと借りれないか」消しゴム貸してくれ、そんな向井の口調だった。
「なによ、それ」
「会ってみたいんだけどな。いろいろあつて」
「いろいろってなによ」
「とにかく、早急に紹介してくれないか。二郎を助けると思って。おにいさんには『彼氏を紹介したい』とか言ってくれ」
「げーっ。それ、上原君のこと」ハッセが顔をしかめる。(サウス-上 : p. 90)

男子→同じクラスの女子

- (776) 電話を叩き切った。と、すぐさまその電話が鳴り出した。
古賀は受話器を上げた。
〈志木です〉
予感があった。だが――。
〈M 駅にきています。これからお会いできませんか〉
頭が真っ白になった。
「もうこっちに？ だって取り調べは明日でしょう？」
〈その前に、古賀さんと折入って話したいことがあります。来られますね？〉
志木は強引だった。普通の役所のように昼休みに外へ抜け出すというわけにはいかない。退庁時間の午後五時を待って、古賀は車で M 刑務所を出た。(半落ち : p. 342-343)

警察官→刑務官

(775) 「ちょっと借りれないか」の動作主は話し手である。しかし、聞き手の協力がなければ、依頼行為が完成できない。聞き手が話し手の発話の意味が分からないので、話し手は「(お兄さんに) 会ってみたいんだけどな」と説明して、再び聞き手に「とにかく、早急に(おにいさんを) 紹介してくれないか」と依頼している。(776) 「これからお会いできませんか」の動作主は話し手である。「取り調べは明日でしょう？」という聞き手の質問に対して、話し手は「その前に、古賀さんと折入って話したいことがあります」と依頼の動機や理由を説明しながら、再び聞き手に「来られますね？」と依頼している。

このように、可能動詞による婉曲的依頼表現は、以下のようなストラテジーが見られる。

- I. 可能動詞による婉曲的依頼表現のストラテジー :
- 話し手は聞き手に依頼の動機や理由を説明する。
 - 話し手は聞き手に依頼を実行する能力や可能性を訊ねる。

ただし、可能動詞によって、動作主が聞き手である場合、話し手は聞き手の依頼行為を実

行する能力や可能性を聞く。動作主が話し手である場合、聞き手の協力に基づいて話し手自身の依頼行為を実行する能力や可能性を聞く。

3.2. 動詞疑問文による婉曲的依頼表現

動詞疑問文による婉曲的依頼表現は、話し手が聞き手に依頼を実行する意志を訊ねることによって、聞き手に依頼の意図を理解させる。話し手が聞き手に依頼を実行する意志を訊ねることから、動作主は聞き手である。否定疑問文は肯定疑問文より丁寧で相手の意向を尊重する。したがって、依頼の場合、よく否定疑問文を用いる。

(777) 「俺なんかこんなこと言っても、シゲちゃんには迷惑なだけかもしれないってずっと不安で、なかなか言い出せなかったんだけどさ」

「なあに……？」

「結婚しない？」

滋子は泣き笑いだ。「いつ言い出してくれるかなあって、ずっと思ってたよ——」

こうして、結婚話はとんとんと進んだ。(模倣-上：p. 77)

男性→彼女

(778) 「あなた方が小沼玄司を殺した。そしてそのなんらかの証拠を彼女につかまれたんだ」

「いいかげんなことを言わないでください。あなたこそ、田原春久を殺したんでしょう」

「何を証拠に、そんなことを」

「二人とも止めないか。いまここでそんな議論をしてもなんにもならない」

サングラスの男が二人の間に割って入った。(凶：p. 211)

男性→女性と男性

(777) 「結婚しない？」は、「結婚してくれ」「結婚してください」より依頼性が弱い、聞き手の意向を尊重している。しかし、(778) 「二人とも止めないか」は、イントネーションが下がることによって、「しろ」などの命令形に近い用法となる。

また、動詞の語彙の意味に依存することによって、動詞疑問文による婉曲的依頼表現には誘いの機能も見られる。

(779) 「なあ、武島、俺たちと一緒にやらねえか」寺尾が直貴に訊いてきた。「一緒に勝負をかけないか」

「俺にバンドに入れっていうのか」

「あぁ。絶対にいけるぜ。俺たちは完璧なツイン・ボーカルだ」

「無理だよ」直貴は笑いながら首を振った。(手紙：p. 131)

男性→クラスメート

(780) 昨日、藤島壮吉が自分をドライブに誘った時の言葉を、慎一郎は思い出した。

「天人峡の紅葉がすばらしいそうだ。絵を描きに行かないか」

その時の藤島は、ふしぎなほど上機嫌だったのだ。(自我：p. 6)

男性→同僚

(779) のように、話し手は聞き手に「俺たちと一緒にやらねえか」「一緒に勝負をかけないか」と誘っている。「俺にバンドに入れっていうのか」という聞き手の反応によって、聞き手は話し手の依頼の意図が分かる。(780) 「絵を描きに行かないか」も、誘いの意味が伝わる。

(781) 「どうした。いやに感心しているじゃないか」

小西蒼竜は、細い目をいっそう細めて、満足そうに笑った。

「ところで、君にちょっと話があるんだ。うちに寄っていかないか」

「はあ」うわの空で返事をした。返事をしてから慎一郎は、自分が今、蒼竜の家に誘われたことに気がついた。(自我：p. 196)

画家→弟子の弟子

- (782) 「ちょっと乗りませんか。是非お連れしたいところがあるんです」
「どこですか」(嘘：p. 87)

刑事→被害者の夫

(781) 「うちに寄っていかないか」という依頼の前に、話し手は「君にちょっと話があるんだ」と依頼の動機や理由を説明している。(782) は、話し手が聞き手に「ちょっと乗りませんか」と聞いた後、「是非お連れしたいところがあるんです」と依頼の動機や理由を説明している。したがって、動詞疑問文による婉曲的依頼表現は、次のようなストラテジーがある。

II. 動詞疑問文による婉曲的依頼表現のストラテジー：

- a. 話し手は聞き手に依頼の動機や理由を説明する。
- b. 話し手は聞き手に依頼を実行する意志を訊ねる。

ただし、動詞疑問文による婉曲的依頼表現において、「話し手は聞き手に依頼の動機や理由を説明する」というストラテジーは、必ずしも「話し手は聞き手に依頼を実行する意志を訊ねる」というストラテジーより後に用いるのではない。

- (783) 「あたしのこと、つけてたんですか」奈央子が訊くと、加賀は少しばつの悪そうな顔をした。「まあ、ちょっと歩きながら話しませんか。お時間はとらせませんから」そういうと駅に向かって歩きだした。(嘘：p. 194)

刑事→女性

話し手は聞き手に「ちょっと歩きながら話しませんか」と依頼した後、「お時間はとらせませんから」と言っている。「お時間はとらせませんから」は、依頼の動機を説明するものではなく、聞き手にかける負担を軽減するためのストラテジーだと考えられる。

3.3. 提案の形による婉曲的依頼表現

提案の形には「どう」「いかがですか」「いいじゃない」などが含まれる。話し手の意図は依頼であるが、文の意味は提案、つまり勧めの機能が見られる。

- (784) 「九時五時が神経科の特権よ。ま、我らこそが病院で唯一のホワイトカラーと言えるかな」「ほざいてろ」肩をどやしつけられる。「ちょっとお茶でもどうだ。話したいところがあるし」一瞬、硬い表情をした。少し考え、承諾した。あとをついて隣のキャンパスに入り、学生用のカフェで向かい合った。(空中：p. 158)

男性医者→同僚

- (785) 「それについてはこれから事情を訊く」手嶋もぴしゃりと跳ね返した。「これでいかがでしょうか、有馬さん」暗に、今日はお引き取りくださいと促されているのだ。義男は椅子から腰をあげると、頭を下げた。「よくわかりました。いろいろお世話になります」「いえ、これは当然のことです。頭を上げて下さい。お詫びするのはこちらの方です。ご迷惑をおかけして、たいへん申し訳ありませんでした」(模倣-下：p. 374)

雑誌の男性編集者→年配の男性

- (786) 「それが嫌だったら、ここを出ていけばいいじゃない」ステラはいつものとおり落ち着いていた。「わかったよ」(星：p. 85)

女性→友達

(784) の話し手は、聞き手に「ちょっとお茶でもどうだ」と勧める前に、「話したいことがあるし」と依頼の動機や理由を説明している。お茶を飲もうという提案は、二人の談話の時間と場所を確保するための戦略だと考えられる。(785)「これでいかがでしょうか」には、「暗に、今日はこれでお引き取りくださいと促されているのだ」という意味が含まれる。

(786)「ここを出ていけばいいじゃない」は、「ここを出て行って」より話し手の語気が柔らかい。したがって、提案の形による婉曲的依頼表現は、次のような戦略がある。

Ⅲ. 提案の形による婉曲的依頼表現の戦略：

- a. 話し手は聞き手に依頼を実行する方法を提案する。
- b. 話し手は聞き手に依頼の動機や理由を説明する。

提案、つまり勧めによる受益者は、話し手とは限らない。受益者が聞き手になる場合もある。

(787) 「たいていの夫婦が大なり小なりそういう関係にある。ただ、それを必要以上に大きく考えるのと、あまり気にしないでのとの違いだ。結婚後五年という、とかく、そんなことを深く考えるころだからな。もう少し楽な気持ちになったらどうだ。世間の夫婦ってみんなそういう時期があって、それを、さりげなく通り越してきているのだ。それでいいのだ。それで夫婦というものが老年までつづくわけだ」父親は常識的なことを言った。(理由：p. 233-234)

父→娘

(788) 「母は、殺されるすこし前に、いつもと変わった様子なんかなかったでしょうか？でなければ、笹岡さんに何か話すとか」
「全然記憶がないわ。わたしも昼間は学校だったしね。親しいお友だちにでもお聞きになってみたら？」
そう言われても、多佳子には、母がどういう友人をもっていたが、見当もつかないのだ。(猫：p. 35-36)

中年の女性→若い女性（昔の知り合い）

(787) 「もう少し楽な気持ちになったらどうだ」は、娘に対する父の忠告である。話し手が聞き手と親しい間柄であるが、娘夫婦のことなので、依頼性の強い指示より提案の方が適切であろう。(788) 「親しいお友だちにでもお聞きになってみたら？」は、話し手が聞き手への提案である。受益者は聞き手である。このように、受益者が聞き手である場合、Ⅲのような戦略が見つからない。話し手のためではないからである。

3.4. 許可求めの形による婉曲的依頼表現

許可求めの形には、「いいですか」「よろしいですか」「いけませんか」「だめですか」「かまいませんか」などが含まれる。話し手は自身のため、聞き手に許可・協力を求める。

(789) 「もう帰るのか。晩飯でも食っていったらどうだ」
「いえ、まだ家庭訪問の続きがありますので」懸命に手を振っていた。
「なんだ、残念だな」父がギョロ目を剥く。「じゃあ、おれからひとつだけ聞いていいかい？」
「はい……なんでしょう」
「うちの息子が、君が代を唄わないって言ったら、先生、どうする」
「はい？」浮かしかけた腰を止めた。(サウス-上：p. 43-44)

男性保護者→息子の担任先生（若い女性）

- (790) すると三原は係長の方に、
 「これから現場を見たいと思います。おいそがしいところを恐縮ですが、鳥飼さんにご案内を願っていいでしょうか?」と申し出た。
 係長は、仕方のないような顔で承知した。(点 : p. 83)
 警視庁の警察官→所轄の係長
- (791) 「電話だとちょっと……うかがったらいけませんか。僕、日下守といいます。学生で、怪しいものじゃありません。あの一」
 「いいわよ。いらっしゃいな。場所はわかる?うちは『ラブラブ』って喫茶店なの。ちょっとメモして。道順を教えるから」(魔術 : p. 137)
 十代の男の子→喫茶店の経営者(女性)

(789) 「おれからひとつだけ聞いていいかい?」は、話し手が依頼の意図を表しながら、聞き手に同意を求めている。(790) の話し手は、「おいそがしいところを恐縮ですが」と謝りながら、「鳥飼さんにご案内を願っていいでしょうか?」と依頼している。(791) 「うかがったらいけませんか」は、話し手が聞き手を訪ねたい意を表して、聞き手に許可を求めている。許可求めの形による依頼表現にも、話し手の依頼の動機や理由が見られる。

- (792) 「高畑さん、あなたにも話を聞きたいんだ。あとで社に伺ってもいいですか」
 高畑の会社は『ガールズクラブ』の版元だ。すると、高畑は外国人のように両手を上げる仕草をした。
 「構わないが、俺はなんにも知らないよ」(灰 : p. 230)
 週刊誌の男性記者→男性社長
- (793) 「あの、これから少しお会いできませんか。お茶でも」
 「申しわけないですけど、今日は予定があるものですから」
 「少しだけでいいんです。どうしてもお話しておきたいことがあるんです。三十分だけでもだめですか」(白夜 : p. 748-749)
 男性→好きな女性
- (794) 「ちょっとお尋ねしたいことがあるんですが、今よろしいですか」男は警察手帳を出してきた。
 「何ですか」ホースの水を止め、絹恵は訊いた。(嘘 : p. 190-191)
 刑事→女の子

(792) 「高畑さん、あなたにも話を聞きたいんだ」は、話し手の依頼の動機や理由である。「あとで社に伺ってもいいですか」は、話し手が聞き手の都合を聞いている。(793) 「どうしてもお話しておきたいことがあるんです」は、話し手の依頼の意図である。「三十分だけでもだめですか」は、話し手が会う時間を三十分に減少してから、聞き手に許可を求めている。(794) 「ちょっとお尋ねしたいことがあるんですが」は、話し手の依頼の動機や理由である。「今よろしいですか」は、聞き手の都合を聞いている。したがって、次のような戦略がある。

IV. 許可求めの形による婉曲的依頼表現の戦略 :

- a. 話し手は聞き手に依頼の動機や理由を説明する。
- b. 話し手は聞き手に依頼を実行するための許可を求める。

また、使役動詞と「してもらおう」に接続すれば、許可求めの機能が更に明らかになる。

- (795) 「あのう、すみませんけど、ちょっと休ませてもらってもいいですか。何か、座っているものしんどいです」
 「ああ、すみません。どうぞお休みになってください」(白夜 : p. 23)

被害者の奥さん→刑事

(796) 「何者なんです、被害者は」

「よくわかりません。本人は保険会社のエージェントだと名乗ったそうです。今日初めて事務所を訪れたと言っていました……。少し部屋の中を見せてもらってかまいませんか」

川西は「いいでしょう」と答え、藪田と一緒に室内を歩き出した。(獲物：p. 256)

警官→違う警察の刑事

(795) 「ちょっと休ませてもらってもいいですか」という話し手の発話に対して、聞き手は「ああ、すみません。どうぞお休みになってください」と自分の失礼を謝りながら積極的に話し手の依頼に応じている。(796) 「少し部屋の中を見せてもらってかまいませんか」という話し手の依頼に対して、聞き手は「いいでしょう」と受諾している。

以上、I 「可能動詞による婉曲的依頼表現のストラテジー」、II 「動詞疑問文による婉曲的依頼表現のストラテジー」、III 「提案の形による婉曲的依頼表現のストラテジー」、IV 「許可求めの形による婉曲的依頼表現のストラテジー」には、すべて「話し手は聞き手に依頼の動機や理由を説明する」というストラテジーが見られる。各婉曲的依頼表現におけるストラテジーは、依頼表現の発想モデルにおけるストラテジーと異なる。したがって、推論を通じなければ、話し手の依頼の意図が誤解される可能性もある。話し手の意図と各類型の関係を図にすれば、次の通りである。

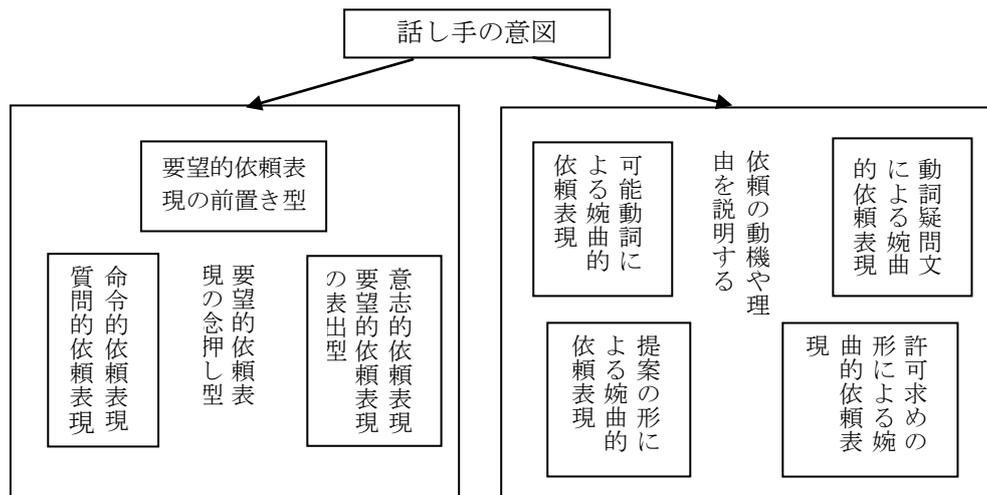


図5 話し手の意図と各類型の関係

3.5. 複合述語文による婉曲的依頼表現

複合述語文による婉曲的依頼表現は、次の通りである。

(797) 「正直何とも言えないんだ。ある程度メドはついているが、確証が持てない。だから、もう少し自分一人で調べてみたいんだ。勝手なことを言うようだが、この事件に関しちゃあまり他人の干渉を受けたくないんでね。友だちのよしみで独断捜査を見逃してくれるとありがたいんだがね」

「勝手にするさ。俺はお前の上司じゃないからな。あれこれ指図はせんよ」(獲物：p. 200)

警部補→同僚の警官

(798) 「わたしは失礼しますわ」千枝が言った。

「どうして？」

「だって、他人がいるんですもの」

「そこまでは気づかなかった」
「帰りに、たちよってくださると嬉しいんだけど」
「しかし、時間がおそいでしょう」（梅：p. 109）

女性→愛人

- (799) 「瑞穂、ちょっとまずいんじゃない」
「えっ？何が？」
「若い娘が相談してきてるでしょ」
「あっ、うん……」
「ちゃんと名乗ってるらしいじゃない。そういう時はこっちで対処するから話を通してくれないと困るのよ」

瑞穂は押し黙った。確かに電話相談員の職務をはみ出している。そんなことはわかっていた。だが、なつきにしおりを託すことなどできない。そもそも、この被害者支援対策室になつきがいること自体が間違ってる。

「相手の人、名乗ってないから」口からぼろっと言葉が出た。（顔：p. 83-84）

婦警→同僚（婦警）

- (800) 東京から流れて来て、この女には、おれだけが頼りだと思えば、一層愛しくなった。
「頼子。身体だけは丈夫にしろよ」というと、
「あなたこそ、いつまでも元気でいて下さらないと、わたし困るわ。あなたが南さんのように万一のことがあれば、わたしも死んじゃうわ」といった。
「大丈夫だよ。安心しろ」（張込み：p. 353）

妻→夫

(797) 「友だちのよしみで独断捜査を見逃してくれるとありがたいんだがね」は、話し手が婉曲に聞き手に独断捜査を見逃してほしいと依頼している。(799) 「そういう時はこっちで対処するから話を通してくれないと困るのよ」は、話し手が仕事のことで聞き手を指摘している。(798) 「帰りに、たちよってくださると嬉しいんだけど」は、話し手が聞き手に誘いの意を表している。(800) 「いつまでも元気でいて下さらないと、わたし困るわ」は、話し手が親しい聞き手の身体を心配する意を表している。「してくれるとありがたい」「して下さると嬉しい」などによって、聞き手に対する話し手の感謝の気持ちや嬉しい気持ちを表す。一方、「してくれないと困る」「して下さらないと困る」などによって、話し手の困惑の気持ちを表す。しかし、同じく困惑の気持ちであっても、(799) は同僚に対する文句であるが、(800) は夫に対する妻の愛情の表現である。

次に、「してもらおう」「していただく」の複合述語文による婉曲的依頼表現の例である。

- (801) 「それと……悪いけど電話を貸してもらえると有り難いんだけども。うちにかけたいんだ」
遠慮がちなカズの申し出に、ピースは本当に残念そうな顔をした。
「ごめんよ、今、電話使えないんだ。なにしろ古い家だから、屋内の配線に問題があるらしくてさ。僕も困るから修理を頼んでるんだけど、ホラ、NTTはサービス悪いからね。来るのは明後日だって」（模倣-下：p. 30-31）

男性→親友

- (802) だからむしろ単純に、「なんだ、こいつらはずいぶん楽しく翻訳をやっているみたいだな。翻訳ってそんなに楽しいのかねえ」と感心したりあきれたりしながらこの本を読んでいただけると、僕としてはとても嬉しい。（翻訳：p. 6）

村上→読者

- (803) 「専門誌であろうとなかろうと、要は第一外科の助教授である君が、たとえ手術をしているポーズを取るだけにしても、手術衣を着ている写真を撮影するからには、教授である僕のOKを取ってもらわなくては困る、それが大学病院における古くからある教室のしきたりだ、しきたりというものは守って貰わなくては困る」
「どうも申し訳ありません、つい、うっかりと行き届かず……」（巨塔-1：p. 20, 21）

教授→助教授

- (804) 「お仕中、申し訳ないんですけど……」太田夫人は軽く会釈して切りだした。最初から喧嘩腰でなかったのはさいわいだったが、その目は少しも笑っておらず、なにやら強い意志を放っていた。女にしては背が高く、踵のあるサンダルをつっかけていたので、中肉中背の信次郎は見下ろされる形になった。続けて「日曜日の騒音はやっぱりなんとかしていただかないと」と太田夫人が言い、二人の女が腕を組んで迷惑そうにならずいた。
「うーん。一応、シャッター閉めてやってるんだけどねえ」信次郎はつとめて明るく振る舞うのだが、女たちの固い表情はいささかも崩れることはなく、逆に頬が軽くひきつるはめになった。太田夫人は懇懇な態度で苦情を申し立てた。(最悪：p.56-57)

女性→近所の男性業者

(801)「悪いけど電話を貸してもらえると有り難いんだけども」は、話し手が聞き手に電話を借りたいと頼んでいる。親友からの依頼なので、「してもらえると有り難いんだけども」を用いると、地の文で述べられているように「遠慮がち」な感じがある。(802)『「なんだ、こいつらはずいぶん楽しく翻訳をやっているみたいだな。翻訳ってそんなに楽しいのかねえ』と感心したりあきれたりしながらこの本を読んでいただけると、僕としてはとても嬉しい」は、作家の村上春樹が読者に好きな考え方を提案している。(803)「教授である僕の OK を取ってもらわなくては困る」「しきたりというものは守って貰わなくては困る」は、助教授に対する教授の訓示である。(804)「日曜日の騒音はやっぱりなんとかしていただかないと」は、文末が省略される言い方である。地の文「二人の女が腕を組んで迷惑そうにならずいた」によって、話し手が迷惑と思っていることを示している。

このように、「してもらえる」「していただける」による婉曲的依頼表現は、「してくれる」「して下さる」による婉曲的依頼表現と同様に、主に話し手が依頼行為を実行する聞き手に対して喜びや感謝の感情を表すことによって、聞き手に依頼の意図を察させる。一方、「してもらわない」「していただかない」による婉曲的依頼表現は、「してくれない」「して下さらない」による婉曲的依頼表現と同様に、話し手が依頼行為を実行しない聞き手に対して困惑や迷惑な感情を表すことによって、聞き手に依頼の意図を察させる。したがって、「複合述語文による婉曲的依頼表現」は、依頼表現の発想モデル d-1「話し手は自身の希望・意志を述べて、聞き手に協力してほしい気持ちを伝える」からの拡張だと考えられる。

3.6. 迂言的依頼表現

迂言的な依頼表現とは、話し手が依頼表現を用いるが、本当の依頼の目的を隠して、遠回しに聞き手に依頼の目的を察させる表現を指す。

- (805) 「一昨年の五月に、会長にお借りした金です。どうぞ納めてください」
「君に金を貸した覚えはないぞ」
「いえ。わたしが社内預金を三百万円下ろそうとしたとき、金があるのかと言って会長が五百万円貸してくださいました。もっとも二年半の金利をどうするのかということでしたら、その分は社内預金でお払います」
「金利なんて一言も言っとらん」
「では長いことありがとうございました。おかげさまで助かりました。この金をどうぞ納めて下さい」
「いまさらなにを言うんだ」
「お借りしたものはお借りしたものです。お返ししなければなりません」
「貸した覚えはないと言ってるんだ」

「それはどういうことでしょうか」
「どうもこうもない。こんな金、持って帰れ」
「それでは困ります。その節お預けしましたわたし名義の会社の株を、お返しいただかなければならないんです」
「預けただと？」
「あるとき会長は、担保が足らんので出してくれ、預かっておくとはっきりおっしゃいました」
「いまさらなにを言うんだ。そんなことを言った覚えはない」
「ではわたしの十万株はどういうことになったのでしょうか」
「買い取ってやったんじゃないか」
「お売りした覚えはありません。もしお売りしたものだとしたら、譲渡の裏印を押さなければ通用しませんが、判を押していませんから」
「そんなことは問題にならん」
「いえ大問題だと思います。裏印の押してない株券は流通しないはずですよ」
「ちゃんとなっているから、余計な心配をするな」
「どうしてちゃんとなるんでしょう。わたしの実印を偽造するか、登録印鑑の変更を勝手にするか、その二つしか方法はないと思います。いずれの場合も犯罪になります」
「もう処分してしまったものを、いまになってぐずぐず言ってもはじまらないだろう」
「わたしは処分をお委せするなんて、一言も言っていません。会長は追加担保に使うので預かるとおっしゃったんですから、ともかく十万株お返し頂きたいのです」(人事：p.70-72)

工場長→会長

話し手は「この金をどうぞ納めて下さい」と言って、聞き手に借りたお金を返している。しかし、本当の目的は「十万株お返し頂きたい」ことである。このように、話し手は最初から本当の依頼の目的を隠して、遠回しに聞き手に依頼の目的を伝える。

第9章 話し手の意図と言語表現

1. 発語内行為の伝達プロセス

Searle (1986 : p. 76) は、Griceの「話し手SがXによってなにごとかを意味すると述べることは、Xを発することが聞き手Hにおいて一定の効果を生じさせるという意図の認知によってまさにこの効果が生じるということを意図するということである」といった仮説⁹⁰を批判して、次のような見方を提出している。

私は、言語を使用するとき、あることがらを相手に伝えたいという私の意図を相手に認知させることによってそのことがらを相手に伝達しようと試みている。そして、相手の側においてこの意図された効果を実現させるために、私は、その効果を実現しようという私の意図を相手に認知させようとする。かくして、私が実現を意図したことがいかなるであるかということが聞き手によって認知されるや否や、その効果は実現することになる。要するに、聞き手は、私があることがらを述べようと意図して口にしたことを発する際の私の意図を認知するや否や、私が述べていることを理解するのである。(下線は本研究による)

ある事柄を伝えたい私の意図、つまり話し手は、選んだ発話タイプXによって聞き手に自身の意図を認識させる。依頼表現では、話し手の意図は「聞き手に自分の希望を実現してほしい」ということを指す。そして話し手は自分の意図に合わせるため、様々な依頼形式を選択する。

Searle (2006 : p. 21-22) は、「発語内の目標」「適合方向」「誠実性条件」「命題内容」の4つの角度から、依頼表現が含まれる「指令型発語内行為」(directives illocution) を分析している。その結果は次の通りである。

発語内の目標：話し手が当の行為によって聞き手に何かを行わせようと試みるという事実のうちにある。

適合方向：《世界を言葉へ》である。

誠実性条件：欲求 (want, desire) や願望 (wish) である。

命題内容：どの場合においても、聞き手HがAという或る未来の行為を行うということである。

要するに、話し手は言葉によって聞き手に自分の欲求や願望を行わせようと試みる。そして、聞き手は話し手の言葉、つまり言語表現により、話し手の依頼の意図を解読しようと試みる。「話し手の意図」と「言語表現」と「聞き手の認識」の3つの関係を図示すれば、次の通りである。

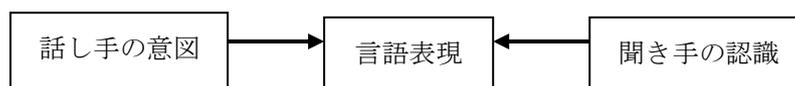


図6 発語内行為の伝達プロセス

2. 話し手の意図と依頼表現

2.1. 依頼表現の発想モデルと5分類

⁹⁰ その後、GriceはSearleの反論に対して修正を提出している。Grice (1998) を参照。

本研究では、話し手の依頼の意図が生じた時から、聞き手に依頼行為を行わせる各段階における一連の心的動きと実行のストラテジーを、依頼表現の発想モデルと呼ぶことにする。依頼表現の発想モデルは、第3章で論じたが、再掲して次の通りである。

(I) 依頼表現の発想モデル：

- g. 話し手が何か不足を感じている。
- h. 話し手は自身の不足を聞き手の力によって解決できていると思っている。
- i. 話し手は自身の不足の解決が聞き手にかける負担を考えて、聞き手に依頼したいことを予告する。
- d-1. 話し手は自身の希望・意志を述べて、聞き手に協力してほしい気持ちを伝える。
 - 2. 話し手は聞き手の協力を依頼する。
- e. 依頼の目的を達成するため、話し手は聞き手に粘り強く依頼する。

発想モデル a・b は、話し手の意図である。c～e は実行のストラテジーである。話し手は聞き手に依頼行為をさせる場合、必ずしも c から出発するのには限らない。発想モデルによって、依頼表現を「命令的依頼表現」「質問的依頼表現」「要望的依頼表現」「意志的依頼表現」の4つに分類する。4分類に話し手の意図は変わらないが、ストラテジーが異なる「婉曲的依頼表現」を加えれば、5分類になる。話し手の意図と各類型の関係は、第8章で論じたが、再掲して次の通りである。

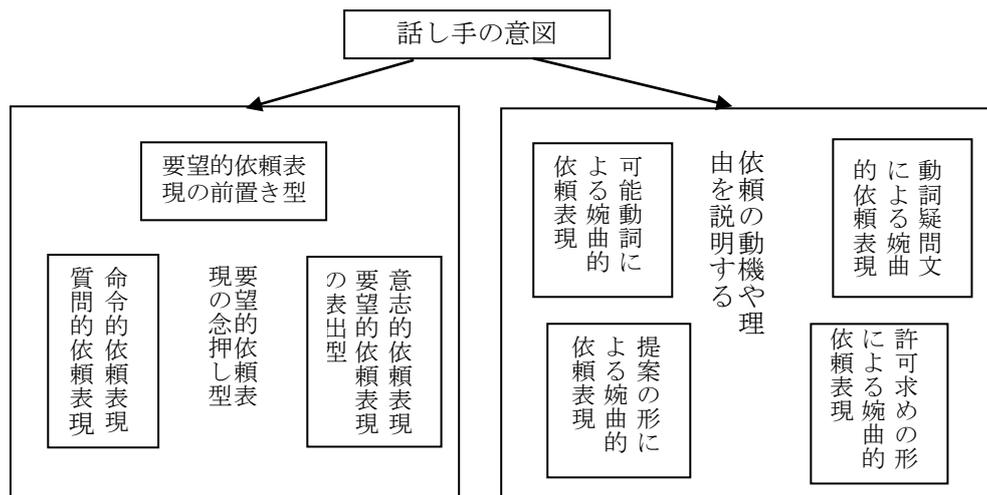


図5 話し手の意図と各類型の関係

左側は、依頼表現の発想モデルに基づいた4分類であり、右側はストラテジーが異なる婉曲的依頼表現である。

- ①左側にある要望的依頼表現の前置き型、命令的依頼表現、質問的依頼表現、意志的依頼表現、及び要望的依頼表現の表出型は、単独に用いられるし、他の依頼表現と共起することもできる。
- ②大きい四角の枠内にある要望的依頼表現の念押し型は、位置が定まらない。最も先に使われると、要望的依頼表現の前置き型のように、予告の機能がある。
- ③右側にある婉曲的依頼表現は、依頼形式のない婉曲的依頼表現のみである。
- ④依頼形式のある婉曲的依頼表現には「複合述語文による婉曲的依頼表現」と「迂言的依頼表現」を含める。「複合述語文による婉曲的依頼表現」は、依頼表現の発想モデル d-1「話

し手は自身の希望・意志を述べて、聞き手に協力してほしい気持ちを伝える」からの拡張だと考えられる。「迂言的依頼表現」は、遠回しの依頼表現とも言える。依頼形式があることから、左側の図に位置づけられるが、聞き手の推論が必要であることから、右側の図に位置づけられる。したがって、「複合述語文による婉曲的依頼表現」と「迂言的依頼表現」は、図5の対象外にする。

2.2. 各類型の形式機能とストラテジー

2.2.1. 命令的依頼表現の構造と形式機能

命令的依頼表現には「してください」「してくれ」「してちょうだい」「して」、動詞の尊敬語の命令形、「お+〈動詞の連用形〉」が含まれる。

命令的依頼表現は、相手との今後の関係や待遇表現を重要視するという点で命令表現と異なるが、聞き手の意志の如何を視野の外に置くということが多い。しかし、これは聞き手を無視することではなく話し手の意図を中心にすると考えられる。因って、神尾(1990)の「情報のなわ張り理論」を踏まえ、「なわばり意識」と主張する。なわばり意識とは、話し手の依頼内容が自身と聞き手とどちらのなわばりに属するかに対する認知を指す。なわばり意識の視点から命令的依頼文における従属節と主節を分析すれば、次のような構造がある。

(Ⅱ)「してください」においては、

a. 話し手のなわばり意識に属する場合

- ⑤ 理由節(話し手のなわばり) + 「してください」(話し手にとってあたりまえ)
⇒指示・助言
- ⑥ 理由節(話し手のなわばり) + 「してください」(聞き手にとって好ましい)
⇒勧め

b. 聞き手のなわばり意識に属する場合

- ⑤ 仮定節(聞き手のなわばり:新情報) + 「してください」(話し手にとってあたりまえ)
⇒指示・助言
- ⑥ 仮定節(聞き手のなわばり:旧情報) + 「してください」(話し手からの強い依頼性)
⇒依頼

(Ⅲ)「してくれ」においては、

a. 話し手のなわばり意識に属する場合

- ⑪ 理由節(話し手のなわばり) + 「してくれ」(話し手にとってあたりまえ)
⇒指示・助言
- ⑫ 理由節(話し手のなわばり) + 「してくれ」(聞き手にとって好ましい)
⇒勧め
- ⑬ 譲歩節(話し手のなわばり) + 「してくれ」(話し手からの強い依頼性)
⇒依頼

b. 聞き手のなわばり意識に属する場合

- ⑭ 仮定節(聞き手のなわばり:新情報) + 「してくれ」(話し手にとってあたりまえ)
⇒指示・助言
- ⑮ 仮定節(聞き手のなわばり:旧情報) + 「してくれ」(話し手からの強い依頼性)
⇒依頼

(Ⅳ)「してちょうだい」においては、

a. 話し手のなわばり意識に属する場合

- ⑨ 理由節(話し手のなわばり) + 「してちょうだい」(話し手にとってあたりまえ)
⇒指示・助言
- ⑩ 理由節(話し手のなわばり:今後の行動) + 「してちょうだい」(話し手の推定による)
⇒依頼

b. 聞き手のなわばり意識に属する場合

- ⑪ 仮定節（聞き手のなわばり：新情報）＋「してちょうだい」（聞き手の義務ではない）
⇒依頼
- ⑫ 仮定節（聞き手のなわばり：旧情報）＋「してちょうだい」（話し手からの強い依頼性）
⇒依頼

研究の対象が主に会話文であることから、動詞テ形、尊敬語の命令形、「お＋〈動詞連用形〉」による依頼表現は、実例が短く従属節と主節との関連が明らかになっていない。しかし、コンテキストから考察すれば、以上の結論とはあまり変わらない。

（Ⅱ）～（Ⅳ）の構造によれば、依頼内容が話し手のなわばり意識に属して「話し手にとってあたりまえ」である場合、「指示・助言」の意味が読み取られる。一方、依頼内容が聞き手のなわばり意識に属して、話し手からの強い依頼性が感じられる場合、「依頼」の意味が伝わる。命令的依頼表現における強い依頼性は、動詞と組み合わせれば、「助けてください」「助けてくれ」「助けて」のように、話し手からの強い要望や発話場面に限られる緊急性も生み出される。したがって、命令的依頼表現の形式機能は「話し手にとってあたりまえ」「話し手からの強い依頼性」である。

命令的依頼表現に属する各依頼表現は、場合によって共起したり、相互に置き換えたりすることができる。

- (806) 「うしろ向いてください」チダさんに言われ、姉はぎくしゃくと椅子ごとうしろ向きになった。
「椅子の背にもたれないで」
「もっとぐったりして」
「足揺らさないで」
チダさんの低い声が響くたびに姉の頬は紅潮した。（いとしい：p. 35）
若い男性画家→恋人の娘
- (807) 「ところでよ」角田の本題は別にあるようだった。「煙草買いたいんだけどさあ、二千元札、自販機で使えないんだよな」
角田が取り出した紙幣を右京が受け取り、鼻先に近づけて、まじまじと観察する。そして、財布を取り出した。
「ぼくでよければ両替しますが、その代わり、あとで返してくれと言いませんね？」
「言わない、言わない」
千円札を二枚渡した右京は、二千元札を眺めながら、「思わぬお小遣いができました」
「どういう意味ですか？」薫が興味を示すと、右京は二千元札の番号を指し示した。
「A 4 4 4 4 4 A、これは珍番紙幣と言って、非常に珍しいものなんですよ。古銭商に持っていけば、十万元以上で売れます」
「え、二千元が十万！返して、返してくれよ！」
角田は懇願したが、あとの祭りだった。（相棒-2 上 334-335）
男性警官→同僚
- (808) 「今日は私がお酒もお料理も奢りますから腹一杯飲んで頂戴、私はこう見えたって銭が欲しいの、御祝儀を貰おうのとケチな量見はありません、ただモーお酒さえ飲んでいりゃ慾も徳も何にも要らないのです、その代りいつでもピーピーでさあ、借金は山ほどあっても平気なものさ、貧乏人があれば羽織を脱いでも着せて遣ります、ナー二銭なんぞの事を御心配なさるな、旅費も足りなけりゃ立換えて進めますよ、今日は一昨日の御返礼だ、飲めるだけ飲んで食えるだけ食って下さい、サア遠慮なしにモー一杯」と大層な勢いで頻りに酒を薦める、酒山も御馳走と聞いて安心し「実に君は気前が面白いよ」といつの間にか腰を据えたり（酒：p. 165）
芸者→男性客

(806) は「してください」が「して」「しないで」と共起する例である。画家が絵のモデルに対する依頼である。「うしろ向いてください」「椅子の背にもたれないで」「もっとぐった

りして」「足揺らさないで」などは、「話し手にとってあたりまえ」なので、「指示」の意味が伝わる。(807)は「返して」が「返してくれ」との共起する例である。(808)は「飲んで頂戴」、が「飲んでください」と置き換えられる例である。

- (809) 「彼を捕まえてください。由美子さんを助けるのには間に合わなかった。でも、真実は、どんなに遅くなっても明らかにするべきです。彼を捕まえてください。あの男の、どんな調子のいい言い逃れも、それらしい言い訳も、理屈だらけの弁解も、木っ端みじんに紛砕できるだけの証拠を集めてください。そして、彼を捕まえてください」

お願いします。それだけ言って身体を折り、頭を下げた。そのまま、身を起こすことができなかった。

しばらくして、秋津の手が、ほとほとと滋子の背中を叩いた。

「帰りましょう」車は動き出した。(摸倣-下 : p. 649-650)

女性ルポライター男性刑事

- (810) 「あんたさ、のんきなこと言ってる場合じゃないだろ？」薫が本気で忠告する。「殺されるかもしれないんだぞ。名探偵なんて小説の中だけ。悪いこと言わないから、捜査は俺たちに任せろ。な？」

そして探偵はあきらめが悪かった。

「そんなこと言わないでお願いします。もう少し一緒に捜査させてください。このとおり！」

矢木が帽子を脱いで、深々と礼をした。(相棒-5 上 456-457)

男性探偵→男性刑事

(809)「彼を捕まえてください」「証拠を集めてください」は、話し手が聞き手に聞き手のなわばり意識に属する物事(例: 犯人の逮捕、証拠の収集)を頼んでいる。このように、「してください」による話し手からの強い依頼性、または強い要望が伝わる。また、「させてください」は、佐藤(1992 : p. 168)は「/話し手=依頼人=動作主体が、聞き手=使役主体に、その動作への許可をおねがいする/こと」を表すと分析している。しかし、(810)「もう少し一緒に捜査させてください」は、話し手が聞き手に許可を求めているのみではなく、聞き手に対する話し手からの強い依頼性も感じられる。

2.2.2. 質問的依頼表現の構造と形式機能

質問的依頼表現は、主に2つのグループに分けられる。①聞き手の視点から描写している「してくれる」「してくださる」である。②話し手の視点から描写している「してもらえる」「していただける」である。「してくれる」の疑問形を用いる話し手が問題にしているのは、「自分に恩恵を与える意志が聞き手にあるかどうか」のに対して、「してもらえる」の焦点は、「自分が恩恵を受けられるかどうか」にある。また、話し手は聞き手のなわばり意識に侵入する物事を依頼したり、聞き手に応答の余地を与えたりするところから見れば、質問的依頼表現は依頼表現の中で最も典型的な依頼表現とも言える。

「してくれる」による依頼表現は、「依頼行為の実現に対する確信を持たない場合」と「依頼行為の実現に対する確信を持つ場合」とに分けられる。話し手が依頼行為の実現に対する確信を持たない場合、話し手は聞き手の言動を支配する力を持たない、または聞き手に自身の依頼を受けてもらう自信を持たないからである。一方、話し手が依頼行為の実現に対する確信を持つ場合、「してくれる」を使用するのは、話し手が聞き手に対する押し付けがましさを避けたいか、協調な人間関係を構築するためかと考えられる。すなわち、話し手の意図に

より、質問的依頼表現は命令的依頼表現に置き換えられるような流動的な関係を持つことが可能である。

これに対して、「してもらえる」を使用するのは、主に「依頼行為の実現に対する確信を持たない場合」である。丁寧体と併用すれば、丁重すぎもせず、親し過ぎもしない感じがある。したがって、質問的依頼表現の形式機能は、「依頼行為の実現に対する確信を持たないこと」である。

次に、「してくれる」は「してもらえる」と共起する例である。

(811) 「急に、きみに連絡したいことがある。電話ではちょっと言えないことでね。悪いが、すぐに来てくれないだろうか?」

「どちらです?」土井は、ここで築地のある待合の名前をあげた。

「分かりました」

「すぐ来てもらえるかね?」土井は急いでいた。結城が知っている土井としては、珍しいことだった。

「すぐうかがいます」(波-下)

斡旋役をしている男性→目下の男性

「悪いが、すぐに来てくれないだろうか」は、聞き手に対して話し手の遠慮がちな言い方である。「すぐ来てもらえるかね?」により、話し手は聞き手に来ることを確認する意も感じられる。通常、「してもらえる」が「してくれる」より一歩下がるような感じがあるが、(811)のように、「してもらえる」が「してくれる」と同じ場面で用いられる例もある。

2.2.3. 意志的依頼表現の構造と形式機能

意志的依頼表現には「してもらおう」「していただく」「願おう」「お願いしよう」「頼もう」が含まれる。

「してもらおう」「していただく」を述語とする文では、樋口(1992:p.175)は「話し手は自分に利益をもたらす動作を聞き手に働きかけて、実現させようとしている」と述べている。山岡(1990)は「習慣的に話し手のより強い立場が行使されており、厳密には『威圧的な依頼』とも言うべきものである」と指摘している。したがって、「してもらおう」は話し手の強い意志の伝達によって聞き手の協力を求めており、主に下位者や対等人に対して使用する。「していただく」によって話し手と聞き手との親しくない関係、つまり心的距離を保ちたい話し手の態度が感じられる。

「頼もう」「願おう」「お願いしよう」には、「してもらおう」「していただく」における聞き手を特定する機能と、聞き手からの恩恵に対する感謝を表す機能がない。そのため、相手に対する依頼性も「してもらおう」ほど強くない。「頼もう」「願おう」「お願いしよう」は、意志伝達の形によって、聞き手に話し手の希望を伝える。したがって、「頼もう」「願おう」「お願いしよう」は、「してもらおう」「していただく」のように相手を特定することができないが、「話者中心の意志伝達」という機能がある。要するに、意志的依頼表現の形式機能は「話者中心の意志伝達」である。

(812) 「そうか。あくまでシラを切るんなら仕方がない。あなたが、高崎の吉井京子さんからテグレットルを入手したことはわかっているんだ。あれはわれわれの貴重な捜査資料だ。そいつを返

してもらおうか」

係官は攻め口を変えてみた。これは、遠野に効果をあたえた様子である。

「そんなクスリは知らないぞ」と言い返した言葉が揺れていた。(凶：p. 219)

刑事→男性容疑者

(813) 「お義兄さん？」ユカリはあまり言い慣れていない言葉で呼びかけた。

「何？」

「一昨日、ひょっこり空知さんに梅田で会ったんです。もし、まだ連絡なさってないんやったら、私からお電話をしてもかまいませんか？」

柚木は短い間考えてから「お願いしようか」と言った。

彦根に着いてからユカリは電話をかけた。(ミラー：p. 71)

三十代の男性→妻の妹

(814) 「そうですか？じゃあ、うん。あたしもね、何かしてないといたたまれない気分で、だけど病院離れるのも嫌だったから、彼女の下着でも替えようかしらって思って来たの。生理のこともあるから、気持ち悪いんじゃないかと思って。だから少し、表に出ててもらえると、嬉しいです」

「そうか、じゃあ頼もうかな。——煙草もずいぶん吸っていないんだ」(四日：p. 380)

患者の保護者→看護婦

(812) 「そいつを返してもらおうか」は、刑事が容疑者に殺人事件で使われていたテグレトール(薬の名前)を返してほしいと頼んでいる。「係官は攻め口を変えてみた」という地の文によって、「してもらおうか」には相手を特定にして強い意志を伝達する効果があると見られる。(813) 「お願いしようか」、(814) 「頼もうかな」には、形態上で相手を特定することができないが、コンテキストによって相手を特定する機能が見られる。しかし、「お願いしようか」「頼もうかな」は「してもらおうか」より聞き手に対する話し手の遠慮が感じられる。

2.2.4. 要望的依頼表現の構造と形式機能

要望的依頼表現には、①希望の助動詞による「したい」「してほしい」、②授受動詞「もらう」の補助動詞による「してもらいたい」「していただきたい」、③依頼動詞「願う」による「お～願う」「お願いする」「～願いたい」「お願いしたい」「お願い」、及び④依頼動詞「頼む」による「頼む」「頼みたい」が含まれる。依頼表現の発想モデル d-1 に基づく要望的依頼表現の表出型、c に基づく要望的依頼表現の前置き型、e に基づく要望的依頼表現の念押し型が発展される。

「日本語の教師になりたい」のように、「したい」の基本的な機能が話し手自身の願望を表すことなので、会話文における「したい」は、形式上で相手の存在を前提とする「してほしい」「してもらいたい」と異なる。話し手は相手が自身の「したい」を使用する意図を探るだろうと察して、意識的に相手を特定しない「したい」を使用することにより、依頼の目的を達成しようとする。「してほしい」は「してもらいたい」のない客観性や消極性が見られる。「してもらいたい」には「してくれ」「して」「してちょうだい」のように、聞き手に依頼するという直接性がないが、特定の聞き手に話し手の希望を伝える機能、つまり話者中心の希望伝達という機能が見られる。

「願う」「お願いする」「頼む」は話し手の依頼の意志を強く表すが、「願いたい」「お願いしたい」「頼みたい」は希望を述べる形によって、聞き手に話し手の依頼を感じさせる。形態上で「お願いします」は聞き手を特定することができないが、コンテキストによって聞き手に対する話し手の強い依頼性が感じられる。念押し型の「お願いします」は他の依頼表現と

共起して、聞き手に粘り強く依頼する話し手の気持ちを表す。「お願い」によって、話し手と聞き手との親しい関係が感じられる。「お願い」は名詞で普通体ということから、「お願いです」「お願いします」より相手に対する強い依頼性が感じられる。

したがって、要望的依頼表現の表出型の形式機能は「話者中心の希望伝達」である。前置き型の形式機能は「依頼行為の予告」で、念押し型の形式機能は「聞き手に粘り強く依頼すること」である。念押し型は聞き手を特定する機能がなく、直接に依頼内容を言及しない。表出型のみは聞き手に対する依頼内容を言及するものであるが、命令的依頼表現や質問的依頼表現と異なり、話し手は「自身の希望・意志」を述べることによって、聞き手に協力してほしい気持ちを伝える。

(815) (816) は表出型の例で、(817) (818) は前置き型の例で、(819) (820) は念押し型の例である。

(815) 「【パッドマン】に告ぐ。また私に手紙を出してほしい。君の考えがもっと知りたい。なぜ事件を起こしたのか、もっと具体的に話を聞かせてほしい。子供を舎弟にして理想国家云々という話を私は信じていない。一人の人間が越えてはならない一線を越えてしまった……どうしてもそうしたかった理由があるはずだ。それを教えてほしい。人間同士、本音をさらけ出した話したい。次の手紙には符丁としてももう一度、スナック菓子の銘柄を記してほしい。それから今後、このやり取りを円滑に続けるために、暗号を一つ添えてもらいたい。これからはそれが君の手紙だという印になる。以上」(犯人：p. 215)

刑事→テレビの視聴者

(816) 三日後というのも、明日とあさっては児童館の世話役の当番だと恭子が言ったからで、向こうは一刻も早く会いたがっている様子だった。恭子は念のために連絡先を聞こうと思ったが、それより先に自分から電話番号を明かした。常識はあるのだな、と少しだけ安堵した。女は最後に、「店側にだけはご内密にお願いします」と言った。たぶん、パート仲間に話してしまうのは仕方がないと思ったのだろう。(邪魔-上：p. 128)

女性活動家→パートの女性

(817) 「そこで、ちょっとおたずねしたいのですが、その近所に住んでいる、杉山孝三さんという人をご存じでしょうか？」

石野貞一郎は、おや、と思った。が、先夜のことがあるので、安心はできなかった。

「顔だけは知っています。交際はありません」

警部補は、それにも深くうなずいた。(画集：p. 128)

警官→男性

(818) 「善兄さん。頼みがあるんだ」

「何だ」

「あの子ども送ってやってくれないか」

卓也が手招きすると、様子を窺っていたらしい少女がゆっくりと木戸の陰から出てきた。腕を剥き出しにした黒いセーターに、白のだらんとしたロングスカート。安物の白い靴を履いて流行のビーズバッグを持っていた。目がぼんやりしているので、さっきのサーフボードの上に乗っていた娘だということに気づいた。

「タキっていうんだよ。この子ども帰りたいんだってさ」

「構わないが、乗るところがないぜ」村野はMGを指さした。座席が二つしかない。(灰：

p. 95-96)

男子高校生→叔父

(819) 「叔父さんの似顔絵、描いてもらえませんか」

「えっ……？」思いも寄らない申し出だった。

「叔父さんも事件の犯人ですよ」

「でも、写真がちゃんとあるから……」

「お願いします。描いて欲しいんです」瑞穂は戸惑った。(顔：p. 70)

二十歳前後の女性→やや年上の婦警

(820) その目的のためには、栗橋浩美を刺激して暴走させ、取り逃がしたりしてはいけない。運転したいというのなら、ここは譲ってやった方がいいかもしれない。

「判ったよ、じゃ、頼む」ゆっくりと穏やかに言って、高井和明はうなずき、微笑んだ。

「だけど、慎重に頼むよ。ヒロミだって、こんなところで事故って、オレと心中するなんて嫌だろ？」

「当たり前じゃないか」(模倣-下：p. 80)

男性→親友

(815) 「また私に手紙を出してほしい」「もっと具体的に話を聞かせてほしい」「それを教えてほしい」「スナック菓子の銘柄を記してほしい」「暗号を一つ添えてもらいたい」は、刑事がテレビを通して犯人であるバッドマンに依頼している。「してほしい」が「してもらいたい」と共起する例である。最後の「暗号を一つ添えてもらいたい」は、聞き手を特定する機能から「してほしい」文より依頼性が強いと考えられる。(816) 「店側にだけはお内密にお願いします」は「お願いします」による要望的依頼表現の表出型である。文の意味が話し手の意図と一致して、話し手からの強い要望が感じられる。(817) は「ちょっとおたずねしたいのですが」、(818) は「頼みがあるんだ」により、後接する依頼文についての予告である。(819) 「お願いします」は、最初の依頼が聞き手に断われたので、再び聞き手に強く依頼している。(820) 「頼む」は、聞き手に対する依頼行為を強調する効果が見られる。

2.2.5. 婉曲的依頼表現のストラテジー

婉曲的依頼表現は、依頼形式のない婉曲的依頼表現と依頼形式のある婉曲的依頼表現に大別される。表にすれば以下のような構成になる。

表8 婉曲的依頼表現の分類

婉曲的依頼表現	依頼形式のない婉曲的依頼表現	①可能動詞による婉曲的依頼表現
		②動詞疑問文による婉曲的依頼表現
		③提案の形による婉曲的依頼表現
		④許可求めの形による婉曲的依頼表現
	依頼形式のある婉曲的依頼表現	⑤複合述語文による婉曲的依頼表現
		⑥迂言的依頼表現

可能動詞による婉曲的依頼表現には、Searle (2006) の「HのAを遂行する能力についての文」のみではなく、「HのAを遂行する可能性についての文」や「SのAを遂行する能力と可能性についての文」も見られる。動詞疑問文による婉曲的依頼表現は、話し手が聞き手に自身の依頼を実行する意志を訊ねることによって、依頼の意図を伝える。提案の形による婉曲的依頼表現は、話し手が「どう」「いかがですか」「いいじゃない」などを用いて、聞き手に依頼行為を実行する方法を提案する。話し手の意図が依頼であるが、文の形が提案、つまり勧めの機能が見られる。許可求めの形による婉曲的依頼表現は、話し手が「いいですか」「よろしいですか」「いけませんか」「だめですか」「かまいませんか」などを用いて、聞き手に依頼行為を実行する許可を求めている。

依頼形式のない婉曲的依頼表現によるストラテジーは、次の通りである。

(V) 可能動詞による婉曲的依頼表現のストラテジー：

- a. 話し手は聞き手に依頼の動機や理由を説明する。
 - b. 話し手は聞き手に依頼を実行する能力や可能性を訊ねる。
- (VI) 動詞疑問文による婉曲的依頼表現のストラテジー：
- a. 話し手は聞き手に依頼を実行する意志を訊ねる。
 - b. 話し手は聞き手に依頼の動機や理由を説明する。
- (VII) 提案の形による婉曲的依頼表現のストラテジー：
- a. 話し手は聞き手に依頼を実行する方法を提案する。
 - b. 話し手は聞き手に依頼の動機や理由を説明する。
- (VIII) 許可求めの形による婉曲的依頼表現のストラテジー：
- a. 話し手は聞き手に依頼の動機や理由を説明する。
 - b. 話し手は聞き手に依頼を実行するための許可を求める。

このように、「話し手は聞き手に依頼の動機や理由を説明する」というストラテジーは、一貫性のある依頼行為に用いられる順序が決まっていないが、話し手の依頼の意図を表す。依頼形式のない婉曲的依頼表現に依頼という二次機能がある以外、「可能動詞による婉曲的依頼表現」に依頼を実行する能力・可能性を訊ねるといった一次機能、「動詞疑問文による婉曲的依頼表現」に依頼を実行する意志を訊ねるといった一次機能、「提案の形による婉曲的依頼表現」に依頼を実行する方法を提案するといった一次機能、「許可求めの形による婉曲的依頼表現」に依頼を実行する許可を求めるといった一次機能が見られる。したがって、話し手が聞き手とのコミュニケーションが重要である。話し手の依頼の意図が聞き手に理解されない場合、話が誤解されたり、話し手と聞き手との意見が食い違ったりすることもある。

依頼形式のある婉曲的依頼表現には、授受動詞の複合述語文による依頼表現と迂言的依頼表現がある。授受動詞の複合述語文は、話し手は聞き手に対する感謝や困惑の気持ちを表すことによって聞き手に依頼の意を伝えるものである。迂言的依頼表現は、話し手が最初から本当の依頼の目的を隠して、遠回しに聞き手に依頼の目的を察させるものである。

3. 依頼表現の流動性と連続性

話し手・聞き手の視点から、依頼表現を命令的依頼表現、質問的依頼表現、意志的依頼表現、要望的依頼表現、婉曲的依頼表現の5つに分類したものが、図7である。各類型がどのような位置付けになるか分かりやすく説明するため、次のような番号を付ける。

- ①命令的依頼表現
- ②質問的依頼表現
- ③要望的依頼表現の念押し型
- ④意志的依頼表現
- ⑤要望的依頼表現の前置き型・表出型
- ⑥婉曲的依頼表現

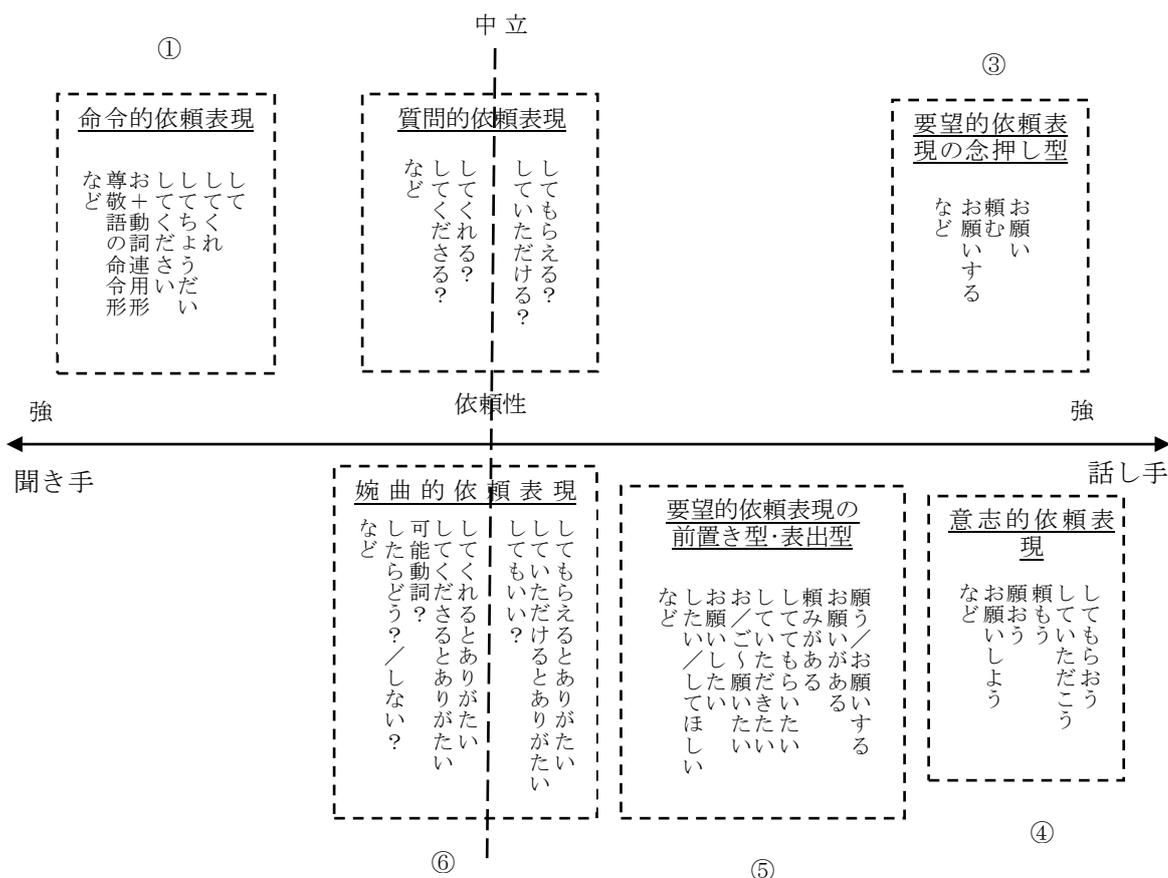


図7 話し手・聞き手の視点から見た5分類

左側は聞き手の視点から、つまり聞き手に直接に依頼するものであるが、右側は話し手の視点から、つまり話し手の希望・意志を表すことによって聞き手に依頼の意を伝えるものである。尺度の両側では依頼性が最も強く、中立の点線に近付いていくと客観性が見られる。尺度の上側は命令的依頼表現、質問的依頼表現、要望的依頼表現といった、依頼の意図が明示的 (explicit) なものである。尺度の下側は意志的依頼表現、要望的依頼表現の表出・前置き型、及び婉曲的依頼表現といった暗示的 (implicit) なものである。

3.1. 流動性

図7によって、話し手がどのように依頼表現を用いて聞き手に自身の意図を表現するかを明らかにする。

- (821) 「あなた」雪穂がいった。「もう少しテレビの音を小さくして。ナツミちゃんが眠れないから」
「あっちの部屋までは聞こえないだろう」(白夜：p. 498)

妻→夫

- (822) 「静かにしろ！」と淳一は遮って、「今説明する」
「ええ、説明していただきませんか！」
「大きな声出すなよ。軽い脳震盪を起こしてるんだ」
淳一はガウンをはおって居間へ来ると、「いいか、話してやるから驚くなよ」
「覚悟を決めて話してちょうだい」(名探：p. 206)

妻→夫

【再掲】

(821) も (822) も夫に対する妻の発話である。(821)「もう少しテレビの音を小さくして」は日常的な妻の言い方である。これに対して、(822)「説明していただきましょうか」「覚悟を決めて話してちょうだい」は夫婦喧嘩の時、妻が夫と心的距離を保ちたいという効果を狙ってわざと用いるものである。図7によると、以下の通りになる。

<u>(821) の依頼文</u>		<u>図7における位置</u>
「もう少しテレビの音を <u>小さくして</u> 」	→	①
<u>(822) の依頼文</u>		
a. 「説明していただきましょうか」	→	④
b. 「覚悟を決めて話してちょうだい」	→	①

(821)「もう少しテレビの音を小さくして」の「して」、(822) b「覚悟を決めて話してちょうだい」の「してちょうだい」は、同じく①命令的依頼表現に属する依頼形式である。命令的依頼表現の形式機能は「話し手にとってあたりまえ」と「話し手からの強い依頼性」である。(821) (822) の話し手と聞き手との親しい対等な関係やコンテキストによって、「してちょうだい」は「して」より強く、相手を見下すように感じられる。(822)「説明していただきましょうか」の「していただく」は、話し手の視点に立つ④意志的依頼表現に属する。意志的依頼表現の形式機能は「話者中心の意志伝達」である。視点が異なるが、意志的依頼表現は命令的依頼表現と同じく強い依頼性が感じられる。このように、話し手は同じ類型に属する依頼形式が相互に置き換えたり、異なる種類の依頼形式に置き換えたりすることによって、聞き手に自身の意図を認識させる。各類型内にある各依頼形式の置き換えや、異なる類型にある依頼形式との置き換えを、依頼表現の「流動性」と呼ぶことにする。

もう1つの対照組を分析する。

(823) 「はい注目」これが南先生の口癖だ。パンパンと手も叩く。
「都合の悪い家は遠慮なく言ってね。調整をつけます。それから、おかあさんも仕事を持っている家は、希望する日時を二つ書いて提出してください。夜でも土日でも構いません。先生、いつでもうかがいます」

今日は家庭訪問の連絡だった。ホームルームのとき、「お知らせ」が個別に配られた。

「飲み物は出さなくていいから、家の人に言うておいてね。いちいち飲んでたら、おなかがタプタブになっちゃうし、トイレも近くなるから」(サウス-上：p. 21)

小学校の女性教師→生徒たち

【再掲】

(824) そのとき、車のエンジン音がした。誰だろうと思って砂浜から丘に駆け上がると、コブ山の二つほど向こうの狭い道で、軽自動車が立ち往生していた。

「おい、おまえの先生だぞ」七恵に教えてやる。

「自分の先生になるかもしれないのに」七恵が口をとがらせ丘を登ってきた。

「ねえ、みんな。押してくれない？行けると思った先生が甘かった」

二郎たち三人で駆け寄る。フロントを押して、バックでなんとか元の道に戻れた。(サウス-下：p. 93)

小学校の女性教師→生徒たち

【再掲】

(823) も (824) も生徒たちに対する小学校の女性教師の発話である。(823) の下線部に示される「してね」「してください」などは、小学校の女性教師の日常的な言葉遣いである。これに対して、(824) の女性教師は、生徒たちに自身の軽自動車を押してほしいと頼んでいる。先生の軽自動車を押すのが生徒の義務に属さないことから、話し手は「押してくれない？」

を用いて、生徒の意向を訊ねている。図7によると、次のような結果になる。

<u>(823) の依頼文</u>		<u>図7における位置</u>
a. 「都合の悪い家は遠慮なく <u>言ってね</u> 」	→	①
b. 「希望する日時を二つ書いて <u>提出してください</u> 」	→	①
c. 「家の人に <u>言っておいてね</u> 」	→	①
<u>(824) の依頼文</u>		
「 <u>押してくれない?</u> 」	→	②

通常、①「して」「してください」を使用する女性教師は、②「してくれない」を使用することになる。話し手のなわばり意識に属さない行為を頼んでいることから、話し手は質問的依頼表現の形式機能「依頼行為の実現に対する確信を持たないこと」と考えて、「してくれない」を用いるのである。このように、依頼内容が話し手のなわばり意識に属するものから、聞き手のなわばり意識に侵入するものに変えること、つまり語用論的条件の変化によって、異なる類型に属する依頼表現の流動性（命令的依頼表現から質問的依頼表現への流動）が見られる。

3.2. 連続性

一貫性のある依頼行為において、話し手が連続的に異なる依頼形式を用いることがよく見られる。

- (825) 「ただ、ひとつだけお願いがあるんですけど」
「なんだい？」
真剣だった。「新城喬子を見つけだすんでしょう？」
「そうしたいと思ってる」
「俺たちで見つけだすんでしょう？警察で手配するわけじゃないでしょう？」
「できたら、そうしたいね」
「じゃ、その時——新城喬子に会いに行くとき、頼みます、最初に、俺に声かけさせてください。俺、最初に彼女の声を聞いてみたいんです。お願いします。俺に声をかけさせてください」
（火車：p. 481）

若い男性→刑事

- (826) 「五一一号室なんですが、患者の在室を確認させていただけますか」
「それは……」看護婦が言葉に詰まる。
「起こしません。のぞくだけです」
「でも、ナースコールがあったのならともかく……」
「じゃあ、看護婦さんがそっとドアを開けて在室を確認してください。重要なことなんです。お願いします」看護婦は口を真一文字にしてうつむいていたが、しばらく間をおいてから「わかりました」とうなずいた。（邪魔-上：p. 232）

刑事→看護婦

【再掲】

(825) の話し手は聞き手に犯人（新城喬子）を見つけた後、自分に声をかけさせようと依頼している。(826) の話し手は聞き手に第三者（患者）の在室を確認してほしいと頼んでいる。それぞれ話し手の用いる依頼表現をまとめると、次の通りである。

<u>(825) の依頼文</u>		<u>図7における位置</u>
a. 「ひとつだけ <u>お願いがあるんですけど</u> 」	→	⑤
b. 「新城喬子に会いに行くとき、 <u>頼みます</u> 」	→	③
c. 「最初に、俺に <u>声かけさせてください</u> 」	→	①

- d. 「お願いです」 → ③
 e. 「俺に声かけさせてください」 → ①
(826) の依頼文
 a. 「患者の在室を確認させていただきますか」 → ②
 b. 「在室を確認してください」 → ①
 c. 「お願いします」 → ③

(825) a「ひとつだけお願いがあるんですけど」の「お願いがある」は、要望的依頼表現の前置き型の形式機能「依頼行為の予告」があると認識して、⑤に位置付けする。b「頼みます」と d「お願いです」は、要望的依頼表現の念押し型の形式機能「聞き手に粘り強く依頼すること」があると認識して、③に位置付けする。c・e「させてください」の動作主が話し手であるが、聞き手の許可がなければ依頼行為は実行できない。したがって、命令的依頼表現の形式機能「話し手からの強い依頼性」が感じられて、①に位置付けする。このように、aから e までの依頼文を分析すれば、話し手の意図を理解することができる。更に、図7の尺度の両側にある依頼性の強い依頼形式（①や③）が多く用いられることによって、どうしても依頼の目的を達成したい話し手の気持ちも判明した。再掲例（826）も同様である。a「させていただきますか」によって、話し手の「依頼行為の実現に対する確信を持たないこと」が伝わる。しかし、話し手は依頼の目的を達成したい意図が強いことから、聞き手の視点からの b「してください」、話し手の視点からの c「お願いします」によって、聞き手に対する強い依頼性を表す。

このように、一貫性を持つ依頼行為において、話し手は連続的に異なる依頼表現を用いて、聞き手に自身の意図を認識させる。異なる依頼表現が連続的に用いられる機能は、依頼表現の「連続性」と呼ぶことにする。(825)のように、話し手は連続的に聞き手の視点にある①と話し手の視点にある③を使用して、聞き手に対する強い依頼性を表現している。或いは(826)のように、最初図7の中立線の近くにある②を使用して、後で尺度の両側に移動し、聞き手の視点にある①と話し手の視点にある③を使用することによって、依頼性を徐々に増加していくような効果を狙っている。

(827) 「その、もしも警察が来た場合にはですね」間があく。むずかしい顔でなにやら言葉を探していた。「差し障りのない話でお茶を濁していただきたいのですが」
 恭子が返答に詰まる。何のことだかわからなかった。刑事に話して都合の悪いことでもあるのだろうか。

「たとえば……」戸田は話を続けた。「警察がご主人の、その、なんて言いますか、毎日の帰宅時間について聞いてきたとしますよね。そのときは、週のうち三日は家で夕食を共にすると、そう答えていただけますか」

ますます困惑した。夫は家で食べることの方が少ないのだ。恭子は黙って戸田を見た。

「それから」目をそらし、また間があいた。「警察は、ご主人の趣味についても聞いてくるかもしれません。それは、その、競馬などについてですが」

「はあ……」

「その場合も、たまに馬券を買う程度だと答えてくださいますか」

「あの、夫は競馬をしますが、実際、小遣いの範囲なんですけど」

「ああ、そうですか。だったらその通りに答えていただければ結構です」

本社の人間がどうしても夫の趣味のことなど知っているのだろう。そんな考えを巡らせていると、戸田は見透かしように「今しがた病院へ行ってご主人に聞いたものですから」と、軽くその方角へと顎をしゃくった。

「つまり、警察に付け入られないようにご注意願いたいわけです」

「……あの、どういうことなんですか」
「とにかく、そうしていただきたいのです」
 「でも、理由ぐらいは」
「どうかお願いします」

戸田にはとりつくしもないもう一人の若い男を見上げる。(邪魔-上 : p. 261-263)

男性→部下の妻

話し手の部下は自分の横領を隠すため、会社で放火した。話し手は、部下の放火の事実がばれると、会社の株に影響を与えるだろうと思っていることから、何も知らない部下の妻に警察に事実を隠蔽してほしい意を示している。実線で示される依頼文を図7によると、次のように要約する。

<u>(827) の依頼文</u>	→	<u>図7における位置</u>
a. 「差し障りのない話でお茶を濁していただきたいのですが」	→	⑤
b. 「そう答えていただけますか」	→	②
c. 「たまに馬券を買う程度だと答えてくださいますか」	→	②
d. 「警察に付け入られないようにご注意くださいいわけです」	→	⑤
e. 「とにかく、 <u>そうしていただきたいのです</u> 」	→	⑤
f. 「どうか <u>お願いします</u> 」	→	③

話し手は b 「していただけますか」と c 「して下さいますか」によって、「依頼行為の実現に対する確信を持たないこと」を表す。a e 「していただきたい」、d 「願いたい」によって、「話者中心の希望伝達」を表す。このように、話し手が選んだ依頼表現は f 「お願いします」以外、図7の中立の点線に近く位置付けするようになる。図7における位置から、依頼内容が聞き手にとって負担が大きいことや、話し手の改まった態度などが感じられる。

以上、まとめると、話し手は図7の尺度の両側にある依頼表現を使用する場合、話し手が聞き手に対する強い依頼性、依頼の目的を達成させたい強い意図を表す。また、連続的に中立の点線に近い依頼表現を使用する場合、聞き手に対する遠慮がちな態度や依頼しにくい行為を示す。

宇佐美 (2001 : p. 28) は「実質的に、語用論的ポライトネスの効果を生み出すのは、『言語形式』それ自体の丁寧度ではなく、特定の状況や場面における無標ポライトネスとしての『ディスコース・ポライトネス』の『基本状態』(default) からの離脱や回帰という、言語使用の『動き』であると捉えられるのである」と指摘している。この指摘は、依頼表現の使用現象にも示唆を与えていると考えられる。すなわち、依頼表現において、話し手は自身と聞き手の属性・関係、依頼内容、場面などの語用論的条件と各類型の形式機能を参照して、各類型の使用範囲を決める。そして、各類型の使用範囲からの離脱・回帰により、話し手の意図を表現したり、聞き手との調和のとれた人間関係を構築したりする。ただし、ダイナミックな言語表現は基本状態からの離脱・回帰のみではない。一貫性のある依頼行為における話し手と聞き手との相互作用の中で、話し手は依頼表現の流動性と連続性を用いて、聞き手に自身の意図を認識させる。

4. 今後の課題

依頼表現の5分類によって、話し手がどのように依頼表現を用いて聞き手に自身の意図を

認識させるかを明らかにした。依頼表現の発想モデルによると、聞き手は一貫性のある依頼行為の最初の段階から話し手の依頼の意図を察して、適切に対応することができると考えられる。

今後の課題は次の2点である。

- ①話し手の意図が言語表現の関係を語用論の方法でポライトネスの側面からさらに探究する。
- ②言語表現と聞き手の認識との関係を解明する。

参考文献：

- 浅松絢子 (2003) 「日本語の現在を読む」『朝倉日本語講座 8 敬語』朝倉書店
- 安達太郎 (1989) 「日本語の問い返し疑問について」『日本語学』第 8 巻第 8 号 明治書院
- (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- (2002) 「命令・依頼のモダリティ」『モダリティ』くろしお出版
- 飯野勝己 (2007) 『言語行為と発話解釈 コミュニケーションの哲学に向けて』勁草書房
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘著 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』
- 庵 功雄 (2007) 『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 井出祥子 (1992) 「日本人のウチ・ソト認知とわきまへの言語使用」『言語』第 21 巻第 12 号 大修館書店
- (2006) 『わきまへの語用論』大修館書店
- 井上 優 (1993) 「発話における『タイミング考慮』と『矛盾考慮』—命令文・依頼文を例に—」『国立国語研究所報告 105 研究報告集 14』秀英出版
- (1997) 「願望表現」『日本語学キーワード事典』朝倉書店
- (2002) 『日本語文法のしくみ』研究社
- 上野田鶴子 (1983) 「命令と依頼」『講座 日本語の表現 3 話しことばの表現』筑摩書房
- 宇佐美まゆみ (1999) 「『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- (2001) 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『談話のポライトネス』国立国語研究所
- (2002) 「『ポライトネス』という概念」『言語』第 31 巻第 1 号 大修館書店
- 大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究—主観性をめぐって』南雲堂
- 尾形佳助 (1996) 「『て』ください」の文法」『神戸松蔭女子学院大学 文林』30
- 岡本真一郎 (1989) 「依頼表現の使い分けの規定因」『愛知学院大学文学部紀要』18 巻
- 沖 裕子 (1995) 「勧め依頼表現について」『日本語学』14 巻 11 号 明治書院
- 奥田靖雄 (1996) 「日本語における主語」『ことばの研究・序説』むぎ書房
- (2001) 「説明 (その 4) —話しあいのなかでの『のだ』—」『ことばの科学』10 むぎ書房
- 奥津敬一郎 (1982) 「『～てもらう』とそれに対応する中国語表現—“请”を中心に—」『日本語教育』46 号
- 柏崎雅世 (1993) 『日本語における行為指示型表現の機能—「お～／～てください」「～てくれ」「～て」およびその疑問・否定疑問形について—』くろしお出版
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) 『敬語表現』大修館書店
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』大修館書店
- (1998) 「情報のなわ張り理論：基礎から最近の発展まで」『談話と情報構造』研究社
- 河上誓作編著 (1996) 『認知言語学の基礎』研究社
- 川成美香 (1996) 「依頼表現のモダリティー—終助詞『ね』と『と』に関する認知語用論的考察—」『日本女子大学紀要 (文学部)』45 巻
- 川村よし子 (1991) 「日本人の言語行動の特性」『日本語学』第 10 巻第 5 号 明治書院
- キイ・ティダー (2004) 「依頼しにくい場合の『依頼表現』」『早稲田大学日本語研究教育センター 紀要』17
- 菊地康人 (1997a) 『敬語』講談社
- (1997b) 「変わりゆく『させていただく』」『言語』26 巻 6 号 大修館書店
- 金水敏・今仁生美 (2000) 『現代言語学入門 4 意味と文脈』岩波書店
- 金田一京助・山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄編 (1997) 『新明解国語辞典』第五版 (小型版) 三省堂
- 金田一春彦・池田弥三郎編 (1980) 『学研国語大辞典』第二版 (机上版) 学習研究社
- 工藤 浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『国立国語研究所報告 71 研究報告集』3 秀英出版社

- (1983) 「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』明治書院
- (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」『モダリティ』岩波書店
- 工藤真由美 (1979) 「依頼表現の発達」『国語と国文学』56 巻 1 号
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- (1978) 『談話の文法』大修館書店
- 窪田富男 (1990, 1992) 『敬語教育の基本問題』(上)(下) 国立国語研究所
- 熊谷智子 (1995) 「依頼の仕方—国研岡崎調査のデータから—」『日本語学』14 巻 11 号 明治書院
- 小泉 保 (1990) 『言外の言語学—日本語語用論—』三省堂
- 国際文化振興会編 (1944 初版, 復刻版 1996) 『日本語教授法基本文献Ⅱ 日本語表現文典』冬至書房
- 国立国語研究所編 (1960) 『国立国語研究所報告 18 話しことばの文型 (I) —対話資料による研究—』秀英出版
- (1991) 『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』国立国語研究所
- (2004 増補改訂版) 『分類語彙表—増補改訂版』大日本図書
- 児玉徳美 (2004) 『意味分析の新展開—ことばのひろがりに応える—』開拓社
- 小林美恵子 (2003) 「職場における命令・依頼表現—ジェンダー的視点から見る—」『ことば』24 巻
- 酒井悠美 (1996) 「会話文における『~のだ』」『横浜国立大学留学生センター紀要』3
- 阪田雪子・倉持保男 (1980) 『教師用日本語教育ハンドブック④文法Ⅱ』国際交流基金
- 阪田雪子 (1987) 「依頼・要求・命令・禁止の表現」『国文法講座』第六巻 明治書院
- 佐伯哲夫 (1970) 『『どうか』と『どうぞ』』『講座正しい日本語第四巻 語彙編』明治書院
- 佐久間鼎 (1952) 『現代日本語法の研究』恒星社厚生閣
- (1966) 『現代日本語の表現と語法』恒星社厚生閣
- 佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』ひつじ書房
- 佐藤里美 (1992) 「依頼文—してくれ、してください—」『ことばの科学 5』むぎ書房
- 柴谷方良・影山太郎・田守育啓 (1982) 『言語の構造—理論と分析— 意味・統語篇』くろしお出版
- 徐 愛紅 (1998) 「日本語の談話における『希望』の表明—『~シタイ』と『~シタイノダ』を中心に—」『広島大学教育学部紀要』第二部第 47 号
- 白川博之 (1993) 『『働きかけ』『問いかけ』の文と終助詞『よ』』『日本語教育学科紀要』3 広島大学教育学部
- (1996) 『『ケド』で言い終わる文』『広島大学日本語教育学科紀要』第 6 号 広島大学教育学部
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 鈴木 睦 (1987) 「日本語における依頼行為」『同志社大学 AKP 紀要』創刊号
- (1989) 「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧さは如何にして成り立つか—」『日本語学』第 8 巻第 2 号 明治書院
- (1997a) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』くろしお出版
- (1997b) 「女性語の本質—丁寧さ、発話行為の視点から—」『女性語の世界』明治書院
- 高橋太郎・金子尚一・金田章宏・齋美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰文 (2005) 『日本語の文法』ひつじ書房
- 高原脩・林宅男・林礼子 (2002) 『プラグマティックスの展開』勁草書房
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社
- 田中廣明 (1998) 『語法と語用論の接点』開拓社
- 谷口一春 (2003) 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』研究社
- 築島謙三 (1973) 「敬語と社会心理」『敬語講座 7 行動の中の敬語』明治書院
- 陳 常好 (1987) 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップを埋めるための文接辞」『日本語学』6-10 明治書院
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

- 中島悦子 (1999) 「疑問表現の様相」『女性のことば・職場編』ひつじ書房・
- 中右 実 (1979) 「モダリティと命題」『英語と日本語と 林栄一教授還暦記念論文集』くろしお出版
- (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店
- 仁田義雄・益岡隆志編 (1989) 『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- (2002) 『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2001) 『日本国語大辞典』第二版第九巻小学館
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 野田春美 (1995) 「～ノカ?、～ノ?、～カ?、～Ø? —質問文の文末の形—」『日本語類義表現の文法』(上) くろしお出版
- 野田尚史 (2006) 「語の順序・成分の順序・文の順序—順序の自由度と順序の動機—」『日本語文法の新地平1 形態・叙述内容編』くろしお出版
- 畠 弘巳 (1993) 「文章・談話」『日本語要説』ひつじ書房
- 服部四郎 (1968) 「コレ、ソレ、アレと this, that」『英語基礎語彙の研究』三省堂
- 馬場俊臣・盧春蓮 (1992) 「日中依頼表現の比較対照」『北海道教育大学紀要』(第1部A) 第43巻第1号
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開 認知とコミュニケーション』研究者
- 樋口文彦 (1992) 「勧誘文—しよう、しましよう—」『ことばの科学』5 むぎ書房
- 姫野伴子 (1992) 「負担と利益」『埼玉大学紀要 人文科学篇』第41巻
- (1998) 「勧誘表現の位置—『しよう』『しようか』『しないか』—」『日本語教育』96号
- 廣瀬幸生・加賀信広 (1997) 『日英語比較選書4 指示と照応と否定』研究社
- 文化庁 (1971) 『日本語教育指導参考書2 待遇表現』大蔵省印刷局
- 堀川直義・林四郎編著 (1969) 『敬語〔用例中心〕ガイド』明治書院
- 前田直子 (1995) 「バ、ト、ナラ、タラ」『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版
- 前田広幸 (1990) 「『～て下さい』と『お～下さい』」『日本語学』9巻5号 明治書院
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) 『基礎日本語文法』くろしお出版
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- (2001) 「日本語における授受動詞と恩恵性」『言語』30巻5号 大修館書店
- 松下大三郎 (1930 初版, 1978 訂正再版) 『改撰標準日本文法』勉誠社
- 松本泰丈 (2006) 『連語論と統語論』志文堂
- 三上 章 (1963) 『日本語の論理』くろしお出版
- (1970) 「コソアド抄」『文法小論集』くろしお出版
- (1972) 『現代語法序説』くろしお出版
- (1975) 『三上章論文集』くろしお出版
- 水谷信子 (1985) 『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
- 南不二男 (1985) 「質問文の構造」『朝倉日本語新講座4 文法と意味Ⅱ』朝倉書店
- (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 宮地 裕 (1980) 「願望表現」『国語学大辞典』東京堂出版
- (1995) 「依頼表現の位置」『日本語学』14巻11号 明治書院
- 宮本勝・李志華 (1989) 「希望を表わす助動詞『たい』の用法について」『北海道教育大学紀要A』39-2
- 村上三寿 (1993) 「命令文—しろ、しなさい」『ことばの科学』6 むぎ書房
- (2006) 「文の人称性について」『ことばの科学』11 むぎ書房
- 毛利可信 (1980) 『英語の語用論』大修館書店
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語1—意味と使い方』角川書店
- (1980) 『基礎日本語2—意味と使い方』角川書店
- (1985) 『誤用文の分析と研究—日本語学への提言—』明治書院
- (1996) 『意味分析の方法—理論と実践—』ひつじ書房
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『NAFL 選書5 日本語表現文型—用例中心・複合辞の意味と用法』アル

ク

- 森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』 くろしお出版
- 森山卓郎 (1999) 「命令表現とそのイントネーション—京都市方言を中心に—」 『文法と音声Ⅱ』
くろしお出版
- (2000) 『ここからはじまる日本語文法』 ひつじ書房
- 森山由紀子 (1991) 「依頼を表す動詞の用法史試論—『頼む』と『願う』をめぐって—」 同志社女子大学学術研究年報 42-4
- 山岡政紀 (1990) 「授受補助動詞と依頼行為」 『文芸言語研究 言語篇』 17
- (2000) 『日本語の述語と文機能』 くろしお出版
- (2008) 『発話機能論』 くろしお出版
- 山田敏弘 (2000a) 「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 第1回 ベネファクティブの視点の位置と方向性」 『日本語学』 19巻 13号
- (2000b) 「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 第2回 方向性と動詞の分類」 『日本語学』 19巻 14号 明治書院
- 楊 慧芳 (2008) 「依頼表現のプロトタイプと語用論的な制約」 『別府大学国語国文学』 第50号
- (2009) 「命令的依頼文の構造・機能—『してください』を中心に—」 『西日本国語国文学会会報』
- 由井紀久子 (1995) 「シテクダサイとシテモライタイとシテホシイ—依頼を表す用法—」 『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』 くろしお出版
- (1997) 「日本語動詞における意味の抽象化過程の研究—補助動詞用法を持つ動詞の意味分析—」 『大阪大学 文学部紀要』 37
- 吉岡泰夫 (1995) 「敬語行動と規範意識—肥筑方言域における言語行動調査から—」 『国立国語研究所報告 110 研究報告集』 16
- (2006) 「敬語について」 朝日新聞東京本社での講演概要
- (2008) 『対人コミュニケーションの社会言語学的研究』 大阪大学大学院文学研究科博士論文
- 吉井 健 (2000) 「『～してください』の用法—『命令・依頼・勧め』の関係—」 『神戸松蔭女子学院大学 文林』 34
- Austin, J. L. (1962) *How to Do Things with Words*. Oxford University Press. 坂本百大訳 (1978) 『言語と行為』 大修館書店
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press.
- Carston, Robyn (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Blackwell Publishing Ltd. 内田聖二・西山佑司・武内道子・山崎英一・松井智子訳 (2008) 『思考と発話—明示的伝達の語用論—』 研究社
- Grice, P. (1989) *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press. 清塚邦彦訳 (1998) 『論理と会話』 勁草書店
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press. 池上嘉彦・河上誓作・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎・梅原大輔・大森文子・岡田禎之訳 (1993) 『認知意味論 言語から見た人間の心』 紀伊国屋書店
- Leech, G. N. (1980) *Explorations in Semantics and Pragmatics*. Holland: John Benjamins B. V. 内田種臣・木下裕昭訳 (1986) 『意味論と語用論の現在』 理想社
- (1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman Group Limited. 池上嘉彦・河上誓作訳 (1987) 『語用論』 紀伊国屋書店
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge University Press. 安井稔・奥田夏子訳 (1990) 『英語語用論』 研究社
- (2000) *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Massachusetts Institute of Technology. 田中廣明・五十嵐海理 (2007) 『意味の推定—新グ

ライス学派の語用論—』研究社

Saussure, Ferdinand de. (1916) *Cours de linguistique Generale*. Paris : Pauot. 小林英夫訳

(1972) 『一般言語学講義』岩波書店

Searle, J. R. (1969) *Speech Acts: an Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge

University Press. 坂本百大・土屋俊訳 (1986) 『言語行為 言語哲学への試論』勁草書房

—— (1979) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge

University Press. 山田友幸監訳 (2006) 『表現と意味—言語行為論研究』誠信書房

Sperber, Dan and Wilson, Deirdre (1995) *Relevance: Communication and Cognition*. 2nd Edition.

内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子訳 (1999) 『関連性理論—伝達と認知— 第2版』研究

社

Sweetser, Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects*

of Semantic Structure. Cambridge University Press. 澤田治美訳 (2000) 『認知意味論の

展開 語源学から語用論まで』研究社

Thomas, Jenny (1995) *Meaning in Interaction—An Introduction to Pragmatics*. London : Addison

Wesley Longman Limited. 浅羽亮一監修、田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理訳 (1998)

『語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』研究社